

旭 町 1 遺 跡

— 道道富沢・日高三石(停)線特改第一種工事

用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和56・57年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

正 誤 表

ページ	行	誤	正
2	21 行	実例 図 中	実測 図 中
2	23 行	Aga・瑪瑠	Aga・瑪瑠
6	34 行	埋没されて	没設されて
35	12 行	もの 2 個 他は	もの 2 個 の 他は
36	12~13行	砥石 (14, 15)	砥石 (14, 16)
	13~14行	有孔石製品 (16)	有孔石製品 (15)
51	6 行	5・8・14 褐色土 (粘土 ～)	5・8・14 褐色土 (粘性 ～)
55		図 70 の土器拓影 図の番号の変行	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> 1 → 2 → 3 → 4 → 5 → </div> <div> 5 6 7 8 9 </div> </div>
75	12 行	文葉帯	文様帯
86	3 行	壺内とは	壺内には
88	21 行	内傾ながら	内傾しながら
91	5 行	上 壤	土 壤
94	7 行	2 暗茶褐色	2 暗茶褐色土
		4 暗灰褐色	4 暗灰褐色土
97	10 行	封入土の同類	封入土と同類
122	4 行	123 個のうい	123 個のうち
158	11 行	碗 曲	湾 曲
165	11 行	ナイフとして機能	ナイフとしての機能
170	2 行	晩期末なら	晩期末から
196	下段写真	N地区円形土壌	N地区円形土壌

目 次

例 言

第1章 調査の概要	3
1 調査要項	4
2 調査体制	4
3 調査経過	4
4 調査結果の概要	5
第2章 遺 構	11
1 分布の傾向	11
2 住 居 跡	12
3 土 墳 墓	29
4 埋 壺	70
5 Tピット	122
6 円形土墳	138
第3章 包含層出土の遺物	155
1 分布の傾向	155
2 土 器	155
3 剥片石器	165
4 礫 石 器	170
5 自然遺物	175
小 括	176

例 言

1. 本書は、三石郡三石町字旭町で昭和 56、57 年度の二か年にわたって実施した発掘調査の結果を収録したものである。
2. 発掘区の単位を 5×5 m とし、南から北へ 1～50、東から西へ A～E を付し「A-25」のように表示する。

3. 本書の執筆分担は以下のとおり

種 市 幸 生 第 3 章 2

矢 吹 俊 男 第 1 章、第 2 章 3、4、5、第 3 章 1、小括

田 口 尚 第 2 章 2、第 3 章 4、5

立 川 トマス 第 2 章 1、6

小山田 真 弓 第 3 章 3

4. 本書に使用した遺構・遺物の写真は立川トマス、伊野正之による。また、遺構図は立川トマス、土器実測図は千葉美智子、石器実測図は小山田真弓が作成した。

5. 各種実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構配置図 150 分の 1、住居跡 60 分の 1、土墳墓 40 分の 1、埋壺 20 分の 1、T ビット・円形土墳 60 分の 1

土器実測図 4 分の 1、ただし大型の壺は 6 分の 1、土器拓影図 3 分の 1、剝片石器実測図 2 分の 1、礫石実測図 3 分の 1、これ以外の縮尺についてはその都度、図及び文中に示した。

6. 本書中、昭和 56 年度調査分の住居跡には H、T ビット・円形土墳には P を、昭和 57 年度調査においては、発掘区を S 地区、N 地区に二分したため住居跡には SH、NH、土墳墓・埋壺・T ビット・円形土墳には SP、NP の略号をもってそれぞれ示してある。

7. T ビットのトーンは崩落土を、礫石器のうち、砥石の実例図中のトーンは使用痕を示す。

8. 岩石名の略号は以下のとおり。

Aga. 瑪瑙 Gr-Mud. 緑色泥岩 Mud. 泥岩 Pum. 軽石 Tu. 凝灰岩 And.
安山岩 Gran. 花こう岩 obs. 黒曜石 Sa. 砂岩 Che. けい岩 Gni. 片麻岩
Per. かんらん岩 Sh. 頁岩

第1章 調査の概要

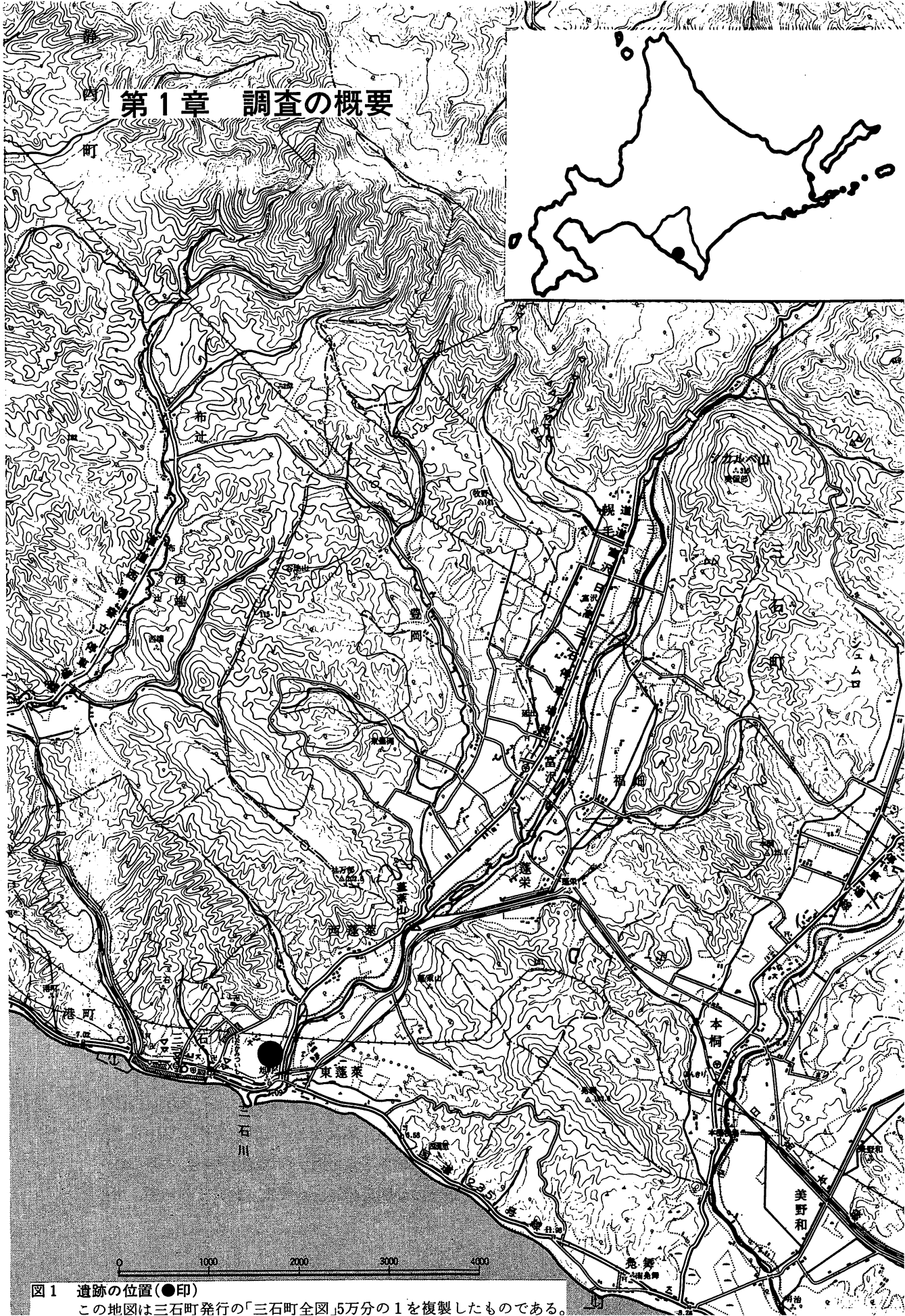


図1 遺跡の位置(●印)

この地図は三石町発行の「三石町全図」5万分の1を複製したものである。

第1章 調査の概要

1 調査要項

事業名 道道富沢・日高三石（停）線特改第1種工事用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 北海道室蘭土木現業所

事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査期間 昭和56年7月23日～昭和57年2月28日、昭和57年4月12日～昭和58年
3月26日

遺跡名 ^{あさひまち}旭町1遺跡（道教委登載番号K-06-8）

遺跡の所在地 ^{みつし}北海道三石郡三石町字旭町85番地の113ほか

調査面積 昭和56年度880m²、昭和57年度2,590m²、合計3,470m²。

2 調査体制

（財）北海道埋蔵文化財センター

理事長	浅井理一郎
業務部長	馬場 治夫（昭和56年度）
同	皆川 富三（昭和57年度）
調査部長	藤本 英夫
調査部 調査第一班長	森田 知忠（昭和57年度発掘担当者）
同 文化財保護主事	種市 幸生
同	矢吹 俊男（昭和56年度発掘担当者）
同	増川 栄一
同	田口 尚
調査補助員	立川トマス
同	大橋 秀規
同	伊野 正之

なお、調査にあたって、下記の機関およびひとびとのご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

北海道教育委員会、三石町、三石町教育委員会、浦河町教育委員会、浦河町立郷土博物館、
静内高校文化人類学研究部、黒崎康雄、郷内 満、谷岡康孝、古原敏弘、乾 芳宏、西本豊弘
（敬称略・順不同）

3 調査経過

道道富沢・日高三石停車場線の、国道235号線との分岐点から北東へおよそ1kmの区間は、崖がせまり、大雨の度に崩落の危険があった。災害防止のための改良工事が道路の管理者である北海道によって実施され、昭和55年度末には国道との分岐点から北東へおよそ350mの区間の工事が終了した。工事用地内には周知の埋蔵文化財包蔵地はなかったが、この工事中に大型の壺形土器が出土したとの情報があり、さらに新たにできた崖面で住居跡と思われる落ち込みが確認されたため、北海道教育委員会による遺跡の範囲確認調査が実施され、その結果、用

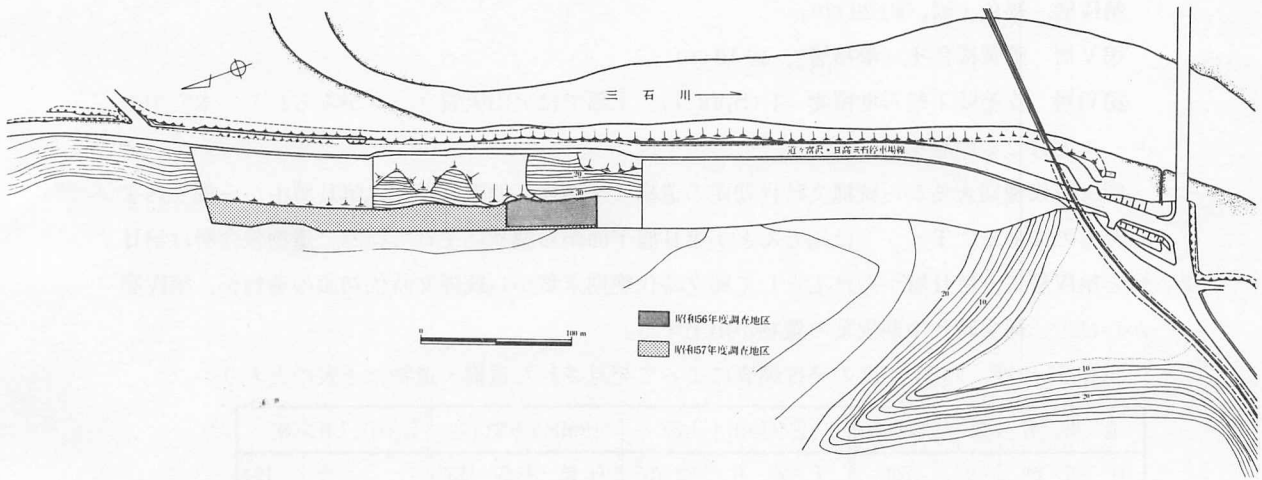


図2 調査地区図

地内全域にわたって包蔵地の存在することが明らかになり、北海道室蘭土木現業所と北海道教育委員会とによる協議の結果、記録保存のための発掘調査が行なわれることになった。発掘調査は、当センターが北海道室蘭土木現業所の委託を受け、昭和56年7月23日から実施した。昭和56年度には施工済側から北東へ長さ60m、最大幅16mの範囲について、57年度には、さらに北東へ延長200m、最大幅20mの範囲について調査を行い、用地内の発掘調査はすべて終了した。

4 調査結果の概要

三石町は、日高支庁の中央部にあって、東は浦河町^{うらかわ}に、西は静内町に接している。市街地の東側を流れる三石川は日高山脈の支脈、ピリガイ山系のひとつであるセタウン山(859.7m)付近に水源をもち、太平洋に注ぐこの地域の川のなかでは長流のひとつである。

旭町1遺跡は、三石川の河口に近い右岸の段丘上にあり、北東方向には日高山脈が、南西方向には太平洋が眺望できる。段丘は南東方向に緩かに傾斜しているが、遺跡のある地点は比較的平坦である。標高は38～40mで、東側崖下を流れる三石川の現河床との比高は約35mである。発掘調査地区はこの段丘の縁辺にある。本遺跡と同一段丘上で、中央部の浅い沢をへだてた南西へおよそ500mの距離、太平洋に面したところには、縄文時代前期の尖底土器を出土したショップ遺跡と、ショップチャシがある。これらの遺跡については、古く松浦武四郎の「東蝦夷日誌」にも記録されている。

本遺跡の層序は以下のとおり。

第Ⅰ層 耕作土、約20cm。部分的にはあるが、直下に樽前b降下軽石(Ta-b)のレンズ状の堆積がみられる。

第Ⅱ層 黒褐色土層、15～30cm。

第Ⅲ層 火山灰質赤褐色土層、最大厚約20cm。S地区では部分的にみられる。N地区では耕作のため、欠如している。

第1章 調査の概要

第Ⅳ層 褐色土層、約 20 cm。

第Ⅴ層 暗黄褐色土（漸移層）、約 10 cm。

第Ⅵ層 支笏降下軽石堆積物-1 (Spfa-1)、上部では火山灰質ロームがみられる。本文中のロームとはこの層を指す。

縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭の遺構（土墳墓、埋壺など）は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。Tピットはほとんどが第Ⅱ層下面から掘り込まれている。遺物包含層は第Ⅱ層と第Ⅳ層で、第Ⅱ層からは主として縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭の遺物が、第Ⅳ層からは主に縄文時代中期後葉の遺物が出土する。

昭和 56 年度、同 57 年度の発掘調査によって発見された遺構・遺物は下表のとおり

遺 構 名	数	土器片数	包含層出土土器		包含層出土石器(剥片)		包含層出土石器(礫)		総 計
住 居 跡	9	608	土 器 片	82,757	石 鏃 (有茎)	152	石 斧	124	
土 墳 墓	33	720	(口 縁 部)	2,704	石 鏃 (無茎)	239	砥 石	1,558	
埋 壺	47	5,373	(底 部)	1,012	ナ イ フ	134	砥石(軽石)	6	
T ピ ッ ト	123	292	(縄 文 中 期)	975	スクレイパー	391	たたき石	109	
円 形 土 墳	141	1,436	(縄文晩期末 統縄文初頭)	78,066	ド リ ル	24	す り 石	39	総 計
計	353	8,429			や り 先	24	石皿・台石	71	

土器片は出土地点不明を加えると 92,297 点。石器については上記の他、石鏃の破損品 85 点、つまみ付ナイフ 4 点、加工痕・使用痕のあるフレイク 243 点、形状不明 282 点、くぼみ石 143 点、形状不明礫石器 481 点、フレイク・チップ 11,874 点の計 15,983 点。フレイクチップを材質別にみると、黒曜石 9,354 点（うち、熱を受けた黒曜石 594 点）、頁岩 2,124 点、石英 318 点、硅岩 39 点、メノウ 27 点、硅化木 12 点となる。なお、埋壺については、埋設された壺の破片、および壺内の別個体の土器片、埋壺検出地点付近の包含層の土器片をも含んだ数値である。

以下に各種遺構・遺物についての概略を記す。

1 住居跡 1～10 ラインの間(昭和 56 年度調査地区)に 3 軒、22～23 ラインの間(S 地区)に 3 軒、40～49 ラインの間(N 地区)に 3 軒が分布している。規模、形状、内部施設等が不揃いである。伴出した遺物から所属時期が推定できたものがある。SH-1 は縄文時代中期後葉、H-2・3、SH-3 は縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭である。相当数の土墳墓、埋壺、円形土墳、そして遺物などから、集落はあまり遠くないところに別にあったものと思われる。

2 土墳墓 12～15 ラインの間と 23～33 ラインの間の 2 地区にそれぞれ分布する。大半が微高地につくられている。埋壺との分布とは重複しない。これら土墳墓は、規模、形状、内部施設等からすくなくとも 3 つの群をなしているものと思われる。

3 埋 壺 13～29 ラインの間にいくつかのまとまりをもちながら分布する。土墳墓の立地と同様、大半が微高地にある。土墳墓の分布とは一致しない。すべて大型の壺で、これは正立した状態にて胴中部から肩部まで埋没されていた。壺の中には、土器細片、フレイク・チップ、焼獣骨片、木炭片、小砂利等を混入した土砂が封入されていた。人骨は検出されなかった。

土器型式からの差は顕著でないが、器形的には四つのタイプに分けられる。

4 Tピット 調査地区の全域に分布している。切り合い・配列・形状の違いなどから、ある程度の時間の幅が認められる。Tピットは溝状を呈するものが多い。また、長円形プランで、底に2～5個の小ピットをもつものが2個だけ発見された。これは道央地方に普遍的にあるタイプで、この地方では新知見である。

5 円形土壙 調査地区の全域に分布する。大半が径1m未満のものである。用途について不明なものが多いが、なかには埋土の性質が埋壺の封入土と同じ性質をもつものがある。これらは土壙墓、埋壺などと直接的な関係があるのかもしれない。

6 遺物 12～36ラインの間に集中する。とくに縄文時代中期後葉の土器片は17～36ラインの間、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭にかけての土器片は12～30ラインの間に濃密に分布する。

以上のことから、本遺跡は、①縄文時代中期後葉（～後期初頭）の時期には小規模な居住地であった。②縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭にかけては埋葬の場あるいは葬送儀礼の場として利用された。③縄文時代中期後葉から晩期末葉のころまでの間のある時期には、多数のTピットが作られた。Tピットが獣の陥し穴だとすれば、この時期には狩猟の場としても利用されたことになる。

（周辺の遺跡——とくに縄文時代晩期末～続縄文初頭のもの——）

日高地方は北海道の南部にあり、北は北海道の脊梁日高山脈で区切られ、南西は太平洋に面している。この地方の海岸一帯には海岸段丘が、内陸には日高山脈に源を発する沙流川、新冠川、静内川、三石川、元浦川および、その他中小河川による河岸段丘が発達している。

日高地方には、縄文時代晩期末から続縄文時代初頭にかけての墳墓遺跡が多く存在する（図3）が、これら墳墓遺跡のうちいくつか代表的な遺跡を概観する。

門別町富仁家遺跡 沙流川の下流域（現海岸線から約2km内陸）、左岸の標高15mの舌状に張り出す段丘上にある。特定の地域に墓域を形成している。出土土器には変形工字文・曲線文・縄線文などの文様のものが多い。大洞A、A'式類似の土器が伴う。コハク製玉3,000余点出土。

新冠町大狩部遺跡 厚賀川河口近くの左岸、標高50～80mの段丘上。墳墓遺跡。出土土器には、変形工字文、曲線文、縄線文などの文様のものが多い。大洞A、A'式類似の土器を伴う。

新冠町氷川遺跡 新冠町市街の東端、標高40～45mの段丘上。墳墓遺跡。出土土器には変形工字文、平行線文、曲線文、縄線文、刺突文、押圧文などの文様のものがある。大洞A、A'式類似の土器を伴う。

新冠町緑丘遺跡 新冠川河口から北東へ9km、標高30～50mの台地上。配石をもつ土壙墓が発見されている。出土土器には突こぶ文、磨消手法による沈線文、三叉文をはじめ、変形工字文、曲線文、縄線文などの文様のものがある。縄文時代後期末葉から続縄文時代初頭までの時間幅をもつ。

浦河町白泉遺跡 浦河町市街から東南に約4km、白泉地区の西北端の段丘上。11個の土壙

墓が発見。出土土器には、変形工字文、曲線文、平行線文、縄線文などの文様のものがある。

上記の遺跡以外にも同じ内容の遺跡がいくつかある。旭町1遺跡を含めて、この地方における墳墓遺跡には以下のような共通点がある。

1. 立地、眺望のきく段丘上あるいは斜面、もしくは開けた部分
2. 埋土、墳口、墳底へのベンガラの使用およびローム、粘土の混入・被覆
3. 土墳墓周囲の焼獣骨片、木炭片、焼土、フレイク・チップなどの散乱
4. 土器文様（変形工字文、曲線文、縄線文）、大洞 A、A'系土器の伴出
5. 石器組成（長身鏃、幅広のナイフなど）。コハク製玉の出土

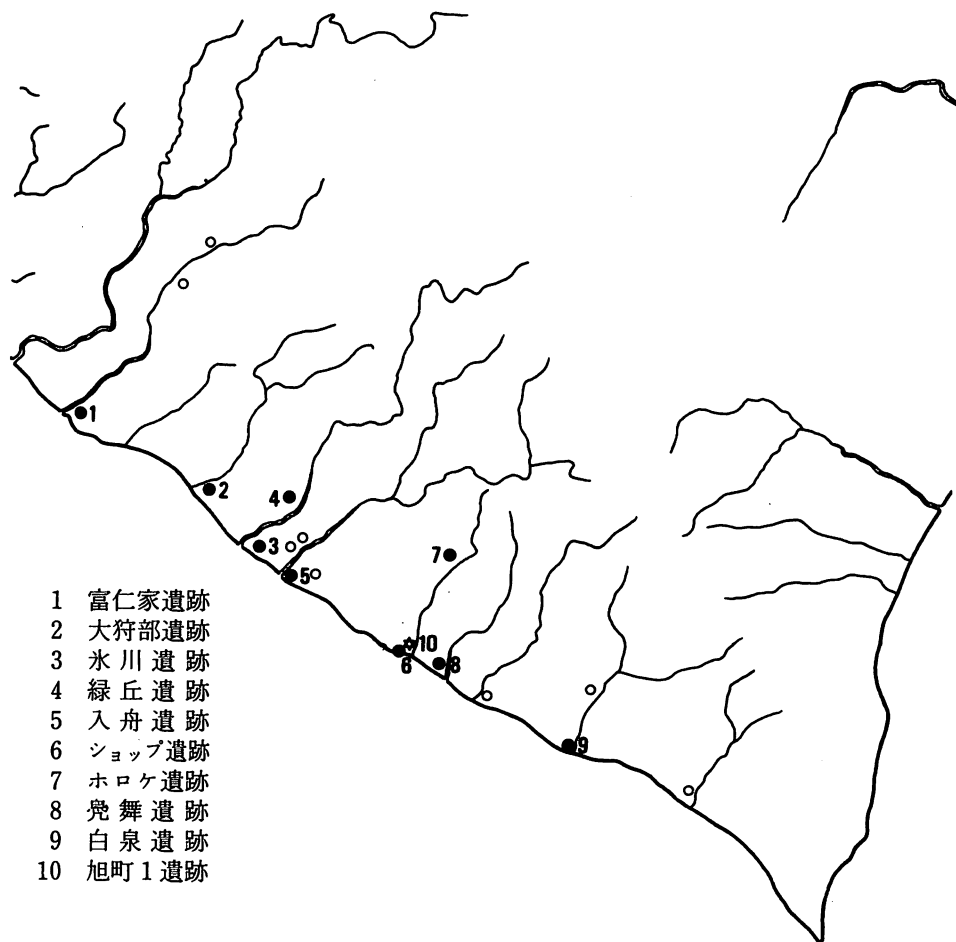


図3 日高地方における縄文時代後晩期および続縄文時代の遺跡

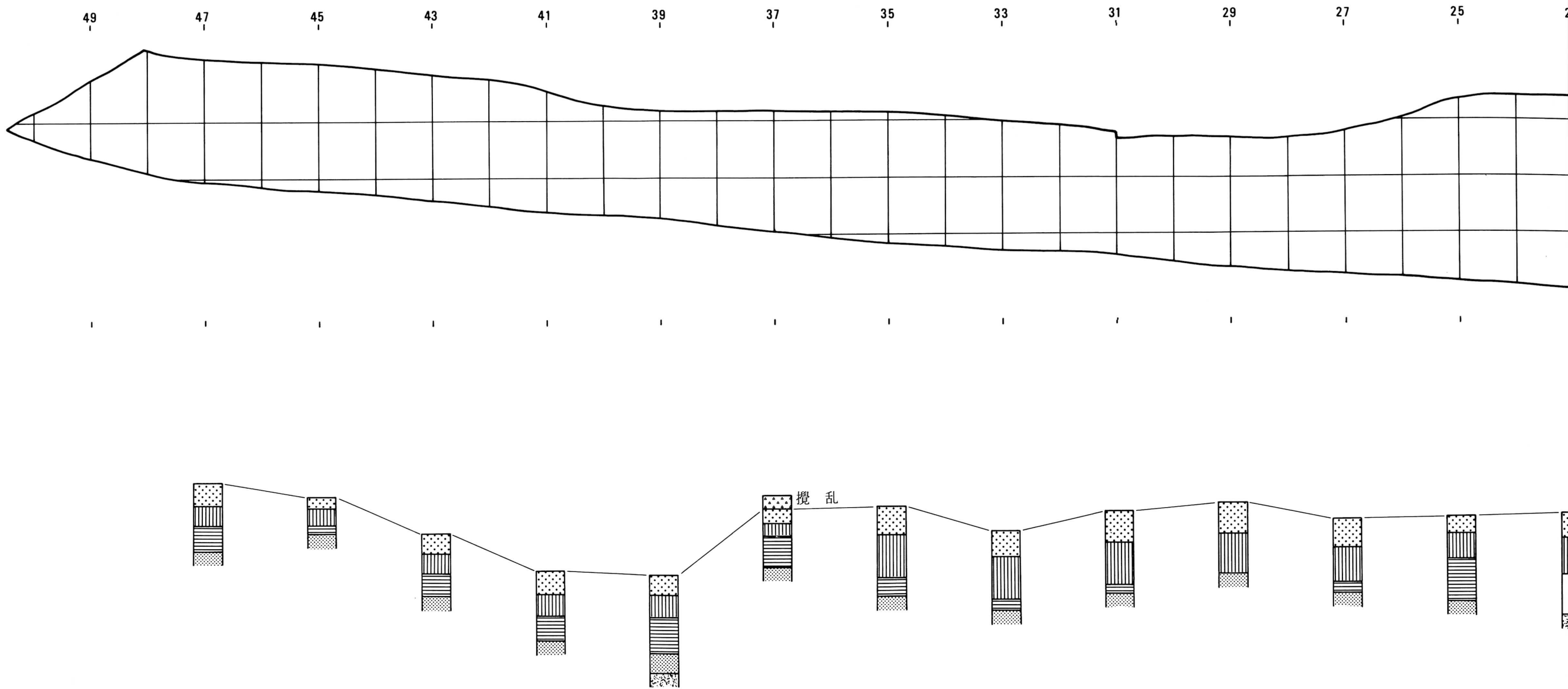


图 4 发掘区・土層柱状图

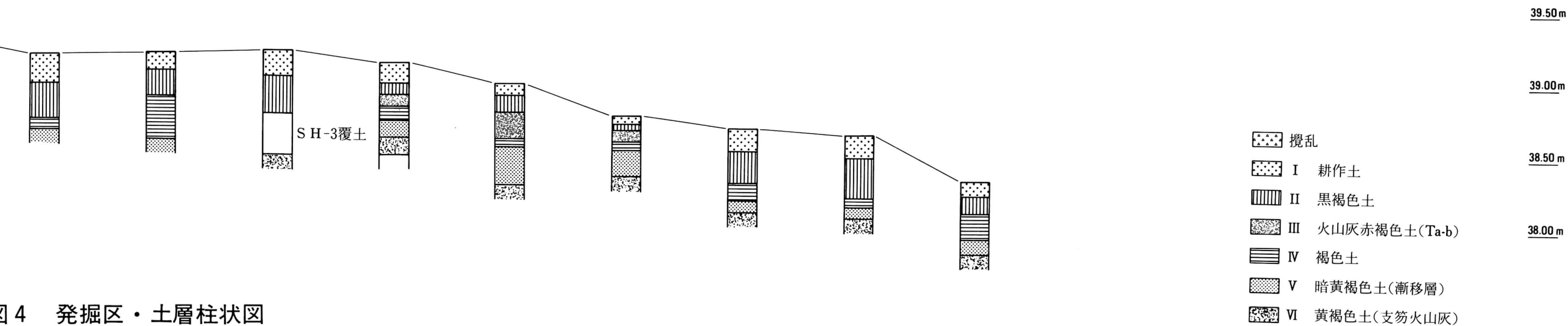
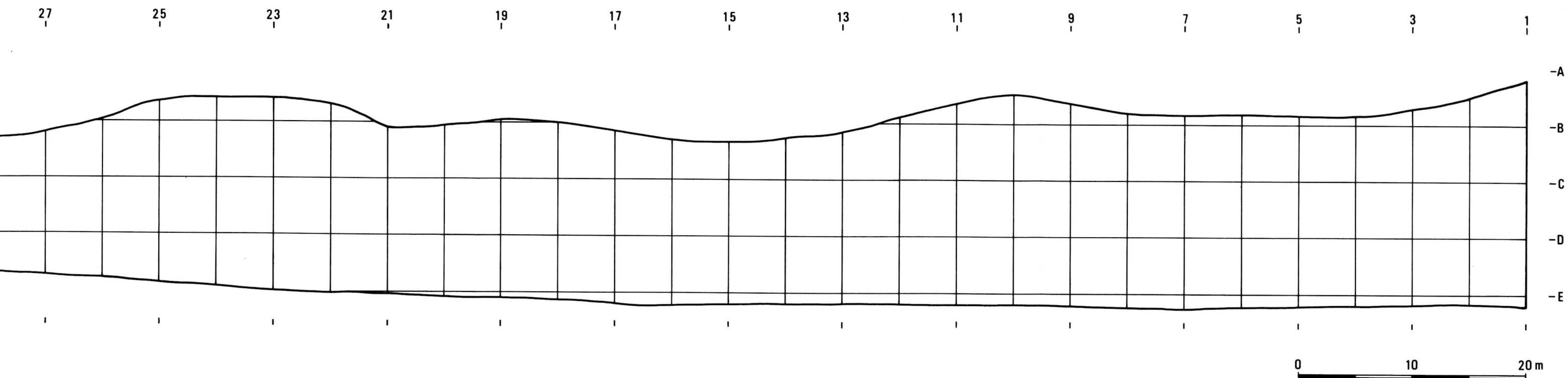


図4 発掘区・土層柱状図

第2章 遺 構

1 分布の傾向

発見された遺構は、住居跡9軒、土墳墓33個、埋壺47個、Tビット123個、円形土墳141個で、他に焼土が25か所ある。

住居跡は、1～10ラインの間、22～33ラインの間、40～49ラインの間にそれぞれ3軒ずつ分布する。分布は疎で、まとまりをもたない。SH-1は縄文時代中期後葉の遺物の分布と、SH-3は縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭の遺物の分布とも一致する。他に住居跡については、遺物の分布とは必ずしも一致しない。

土墳墓は、12～33ラインの間に分布する。ほとんどが微高地につくられている。土墳墓の分布は埋壺の分布とは重複しない。土墳墓は、規模、平面形、付属施設等から少なくとも3つのグループに分かれる。1グループは、12～15ラインの間にあるSP-185・187～190、2グループは25～29ラインの間にあるSP-108・118・120・212・221・223、3グループは23～33の間にあるSP-39・44・54・55・85・92・117・119・139・140～143・146・178・213・222である。遺物の分布と一致する土墳墓は25～28ラインの間に限られ、他は稀薄な地区に分布する。

埋壺は、13～29ラインの間にいくつかのまとまりをもって分布する。ほとんどが微高地にある。土墳墓の分布とは重複せず、むしろ土墳墓とは区別された場所にある。遺物の分布と埋壺の分布は一致する。

Tビットは調査地区の全域に分布する。ほとんどのTビットは長軸方向が段丘の崖線に対して直交あるいは斜交する。平行する例は少ない。いくつかの配列が想定できる。配列は等高線に沿ったものである。

円形土墳は調査地区の全域に分布する。地域によっていくつかのまとまりがみられる。①4～7ラインの間(P-12・15～25)、②17～18ラインの間(SP-194～197・199・201～203・230・236・237・239・247・248・255)、③27～29ラインの間(SP-153～158・160・161・191・192・211)、④44～48ラインの間(NP-8～18・20・21・25)、⑤48～51ラインの間(NP-1・2・5～7・31・32・33・38～40)などであるが、④、⑤については配列、方向性などはみられない。②は埋壺(SP-22～27)を取り囲むように分布する。

焼土は11～47ラインの間に分布するが、密度は疎である。石組をもつものは5個で、B-15、D-17、B-22、B-23、C-36区にそれぞれある。D-17区の石組の場合、埋壺群の中心にあり、石組の中は浅い掘り込みになっていて、焼けた砂が入っていた。このことはB-23(SH-2の覆土上)にある石組とも共通する。焼土は遺物の分布と一致する。とくに、獣骨片は、焼土の周囲に濃密な分布を示す傾向がある。

2 住居跡—付図 図6～図25—

9軒の住居跡が発見された。1～10ラインの間（昭和56年調査地）に3軒、22～33ラインの間（S地区）に3軒、40～49ラインの間（N地区）に3軒が分布している。

伴出した遺物から所属時期が推定できる住居跡がいくつかある。SH-1は縄文時代中期後葉、H-2・3、SH-3は縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭である。これら以外の住居跡について、同形態、内部施設の類似性などから、H-1とH-3、H-2とSH-2、NH-1とNH-3とが同時期であろうと思われる。

住居跡の内外の付属施設等は以下のとおりである。柱穴と考えられる小ピットをもつものには、H-2、SH-3、NH-1～3がある。NH-1～3の場合、住居の形に添うように小ピットが配列されている。しかし、このうちのNH-2は径が2mぐらいなので、内部の小ピット11個がすべて柱に対応するものとする、空間が狭くなり必ずしも、住居と認めがたい。床より高い位置に石組をもつものにSH-1とSH-2がある。SH-1、SH-2の石組も焼土をもち炉跡と考えられるが、床面からのレベルが高いこと等より2つの住居に伴うものではないと考えられる。住居が廃棄された後に使用されたものと思われる。また、住居内に多数の土壌がつくられているものに、H-1とH-3がある。いずれも堅穴がつくられた後に床から土壌が掘り込まれ、さらに一部の土壌は貼り床で覆われている。このようなケースは住居ではなく何らかの目的の土壌を設けるための堅穴である可能性がある。H-2の床面にはベンガラスポットがある。発掘所見では、土壌等の他の遺構との重複も認められなかったことからH-2に伴うものであろうと思われる。住居跡とTピットとの重複が少数例ある。H-2、SH-3、NH-1などはTピットより新しい堅穴が多い。また、住居跡と円形ピットとの重複少数例ある。SH-1・3、NH-2は円形ピットよりも古い堅穴である。

調査地区が細長い帯状の範囲であったため、この段丘上における住居跡分布の全貌は不明である。ただし、土壌墓、埋壺等の存在からみて、そう遠くないところに大規模な集落の存在が予想される。

H-1 (昭和56年調査 図5、図6)

位 置 B-1、C-1区。発掘区最南端にある。南東壁は工事により削平されている。

規 模 南北5.6m、東西4.1m。掘り方は比較的深く、掘り込み面より深さ、68cmである。

平面形 一部破壊されている。不整な円形。

覆 土 I 耕作土、II 黒褐色土、III 茶褐色土、2 黄褐色土(ブロック状に混入)、3 暗褐色土、5 褐色土、6 黒色土。

遺構は既施工地内に土層が露出しており容易に確認された。床は支笏ローム層を掘り込んで床面としている。床には9個の土壇が存在する。床面がつくられた後に掘り込まれたもので硬い貼り床で覆われた土壇もある。柱穴はなく、石組や炉跡等もたない。覆土中に焼土がブロック状に確認されたが床面より20cm程高いレベルであり、本竪穴に伴うものではない。

遺 物(図5) 砥石破損品が1点出土している。表面及び側面が使用されている。石質は砂岩である。

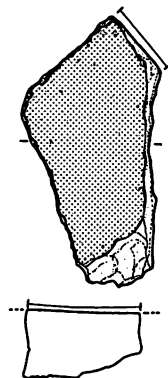


図5 砥石

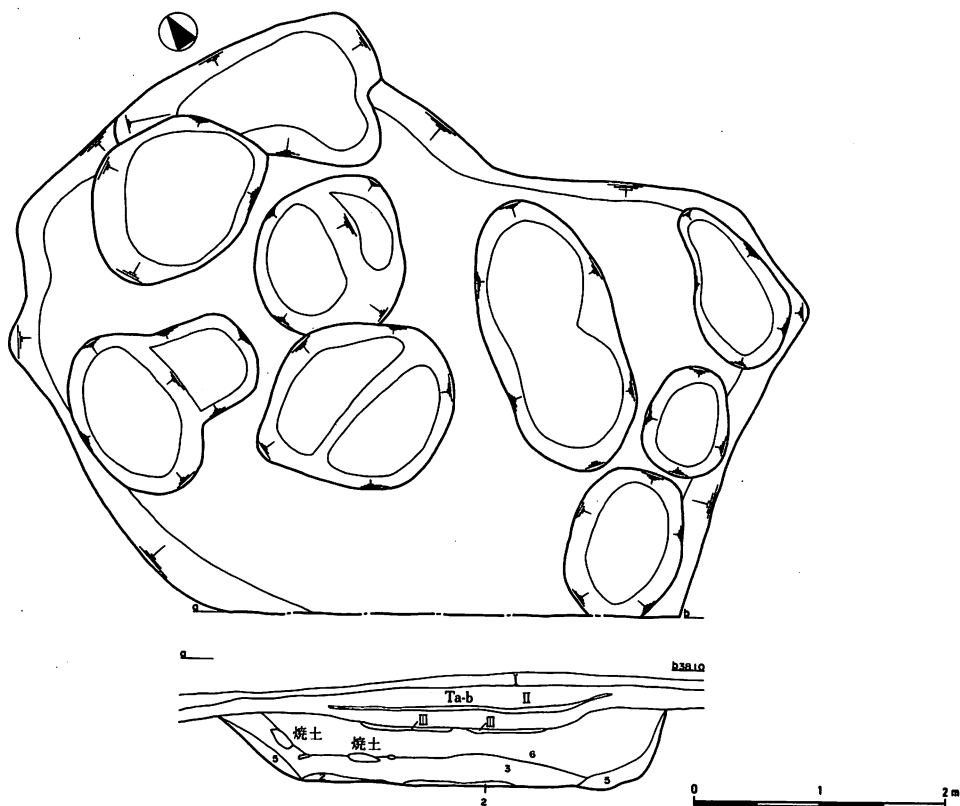


図6 H-1

H-2 (昭和56年度調査 図7～図9)

位 置 C-1、C-2区。発掘区南端、H-1住居跡北側にある。

規 模 長軸4.10m、短軸3.10m、深さは遺構確認面から約80cmである。長軸方向N-60°-W。

平面形 東西に長いだ円形。

覆 土 1 黒褐色土、2 黄褐色土(黒色土混り)、5 褐色土、6 黒色土。

遺構の確認面は、暗茶褐色土層(支笏ローム漸移層)上面であり支笏ローム層を掘り込んで床としている。遺構は床面でTビットを破壊している。床面はほぼ平らでベンガラがスポット的に出土している。また、床には柱穴が壁に添って7箇所配置されている。遺構北東壁際には礫が1点出土している。

遺 物 床面からは縄文晩期末葉の土器(図7)1点と石斧(図8)1点が出土した。土器は小形深鉢で口縁部がわずかに内傾し、地文は斜行縄文で口縁部には3本の横走る沈線がつけられている。沈線上には意識的に施文したと思われる刻みがみられる。石斧は泥岩製で表面に岩石面をのこす打製石斧である。刃部には使用による刃こぼれがみられる。

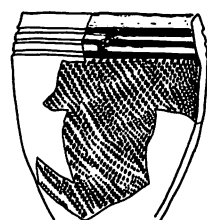


図7 H-2出土土器

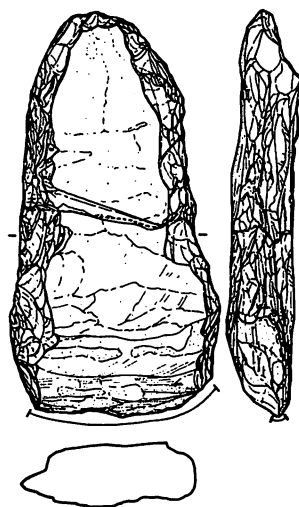


図8 石 斧

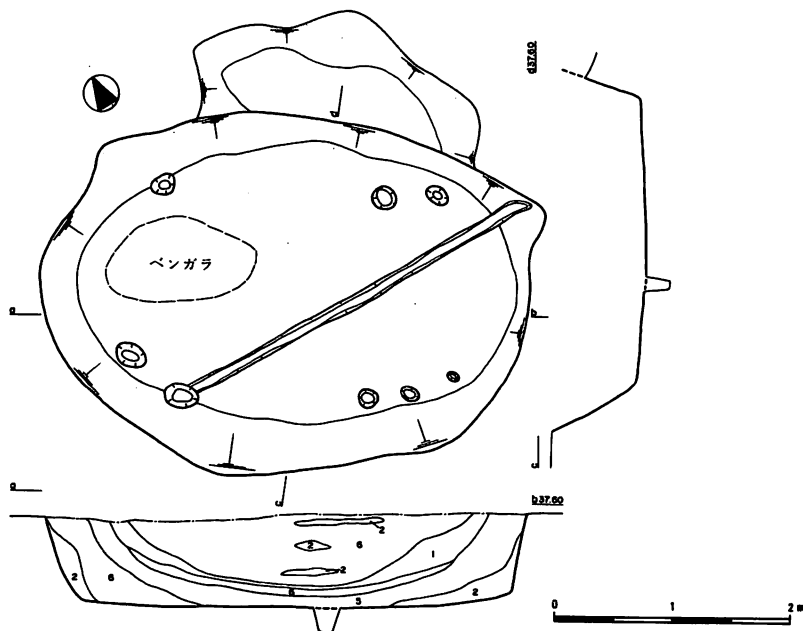


図9 H-2

H-3 (昭和56年度調査 図10～図11)

位 置 D-8・9、E-8・9区。西側がやや発掘区外にかかっている。

規 模 長軸4.40 m、短軸3.90 m。確認面からの深さは80～90 cmである。長軸N-74°-W。

平面形 不整な円形。

覆 土 1 黒褐色土(ローム粒混じり)、3 暗褐色土(ロームブロック)、6 黒色土。

床面は支笏ロームである。H-1住居跡同様、堅穴の床面がつくられた後に土壌が掘り込まれている。15個の土壌が床面に広がり、互いに切り合っているものもある。床からは、礫が多数出土しているが炉跡を形成しているものはない。焼土は確認できなかったが、床面近くに炭化物の集中域が3カ所ある。また、床面に柱穴は存在しない。住居以外の別の意味をもつ堅穴の可能性も想定できる。堅穴南東部外には埋壺が出土しており、本堅穴との関係も考えられる。

遺 物 土器(図11-1～4)には、舟形土器(1)、小形深鉢(2、3)、浅鉢(4)などがある。いずれも床からの出土である。1は口縁に2対の貼り付け突起をもち、曲線文が描かれる。口唇

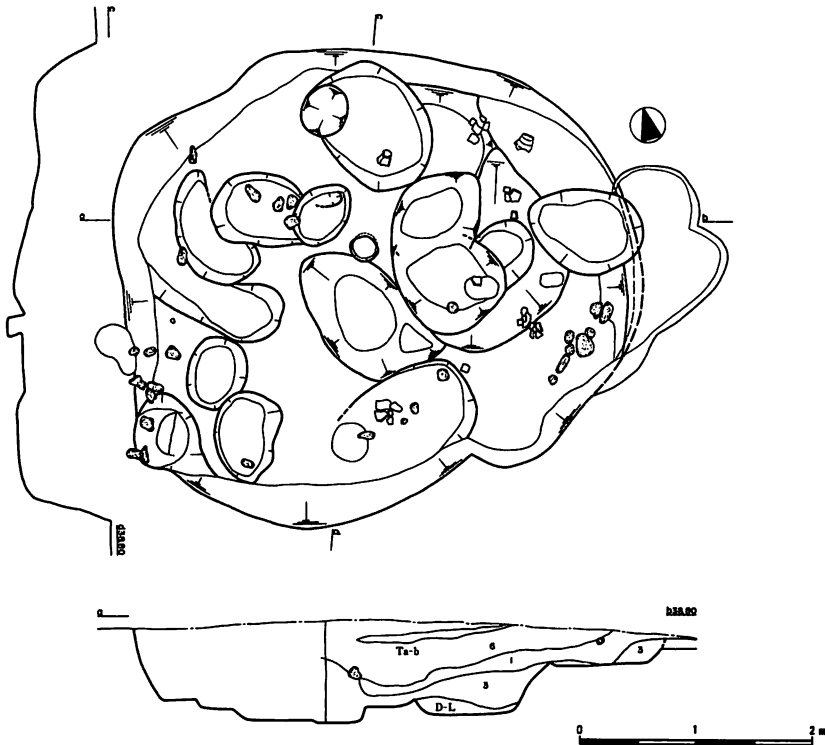


図10 H-3

部から底部には縄文が付される。2、3は縄文のみが施文される。いずれも底部は丸底でゆがむ。4は口縁部が欠損、上方に数条の縄線文が付される。石器（図12-1~10）には石鏃、ナイフ、スクレイパー、砥石、たたき石などがある。3のナイフは欠損後に熱を受けている。たたき石(10)は表面が砥石として使用されている。

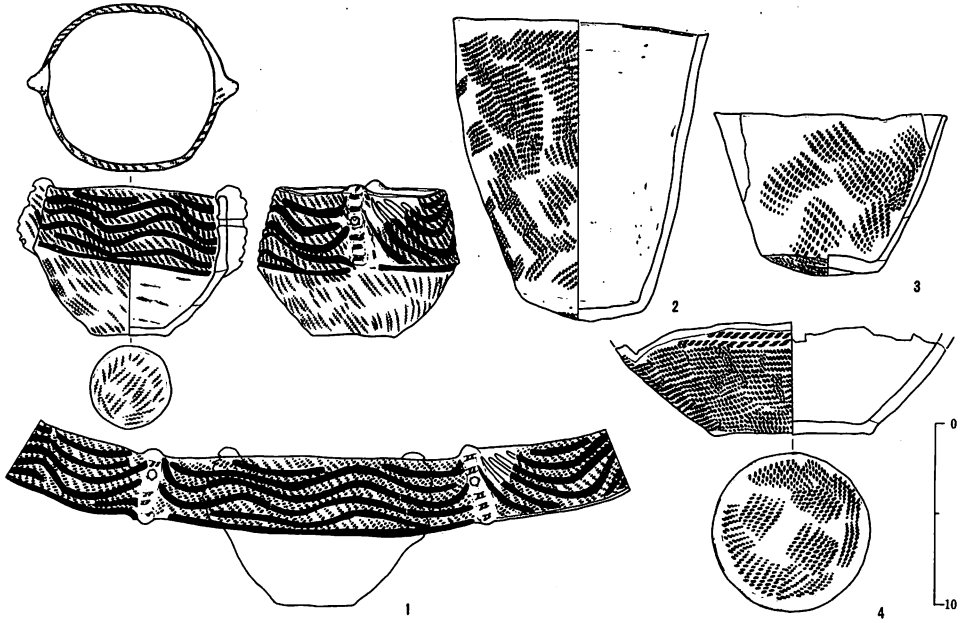


図11 土 器

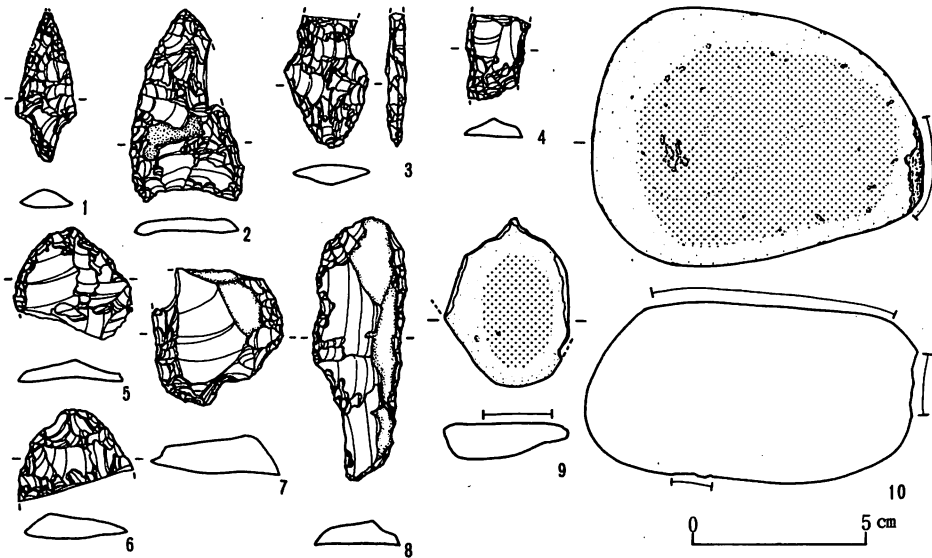


図12 石 器

SH-1 (図13～図14)

位 置 B-32・33区。

規 模 長軸2.60 m、短軸2.10 m。

確認面からの深さは20 cmである。長軸方向は、N-82°-W。

平面形 ややいびつな隅丸方形。

覆 土 1 黒褐色土、2 焼土(獣骨片を含む)、3 黒褐色土(ローム粒を含む)、4 焼土、5 ローム、6 褐色土(ローム粒多量に含む)。

本跡は、Tピット(SP-86・91)を切り、南側を円形ピット(SP-90)に切られている。床面はローム面にあるが意図的に埋めもどしたと思われる堅くしまった褐色土をのせている。床面は平らで東側壁に柱穴が2カ所確認できる。また、出土レベルが床面より30～40 cm 高く本住居に伴うものではないが、中央部からやや東側に石組と焼土が、北壁には炭化物の集中が確認できた。石組内の焼土は薄く、周辺の焼土の方が厚い。獣骨片を多く含む。周辺の焼土は石組内の焼土が掻き出されたものとも考えられる。これらは、本住居が廃棄された後に使用されたものと思われる。

遺 物(図13-1～6) 1、3～5は有茎石鏃であり、2は使用痕のある剝片である。6は扁平自然礫を使用した砥石である。1～5は黒曜石製、6は砂岩製である。

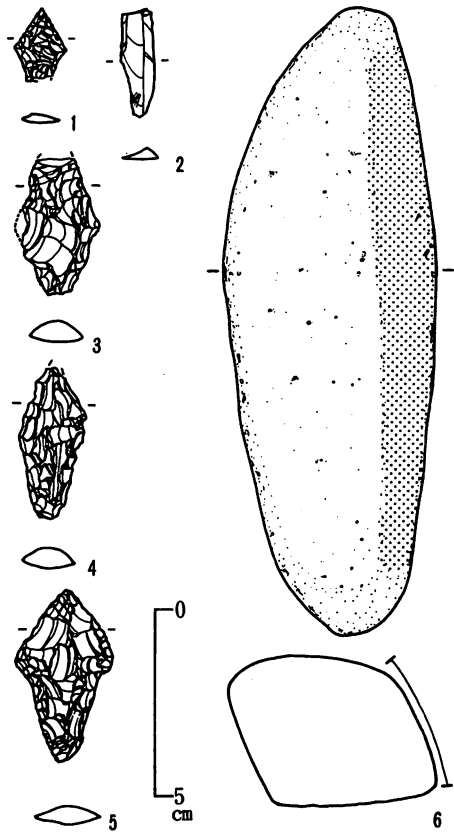


図13 石 器

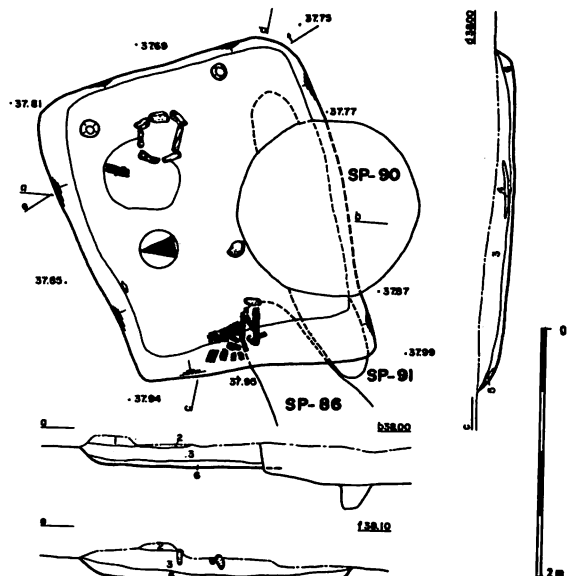


図14 SH-1

SH-2 (図15～図16)

位 置 A-22・23、B-22・23区。

規 模 長軸3.32m、短軸2.68m、
確認面からの深さ32cm。長軸方向は
N-33°-Eである。

平面形 だ円形。

覆 土 I 黒色土(耕作土、Ta-b
を含む)、II 黒褐色土、II' 黒褐色土
(土器片、炭化物を含む)、II'' 黒色土、
III 赤褐色土、V 暗黄褐色土(漸移層)、
1 黄褐色土、2 褐色土、3 ローム。

掘り込みは浅く、Tピット(SP-206)を切ってつくられている。床面はローム面にあり平坦である。西側壁に小ピットが1カ所検出された。本跡の南西部には、石組と焼土があるが、本跡とは直接的には関係がない。石組、焼土は住居跡の床面から1mほど高い位置にある。石組内には焼けた砂が充満していた。

遺 物(図15) 東壁寄りの床面から土器が出土した。土器は深鉢で、1/2が欠損している。口縁部はわずかに外反する。口唇は平縁で若干肥厚する。口縁には板状の工具によって左から右へ押し引きが2段に施され、その下位には棒状の工具による刺突が加えられる。体部には縄文が付される。

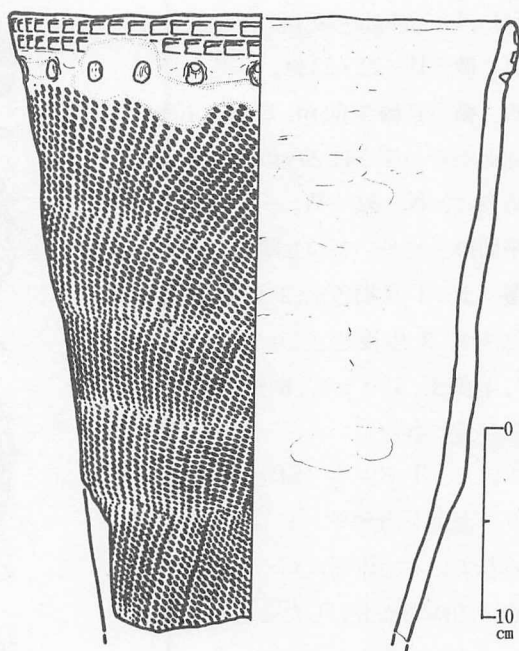


図15 土 器

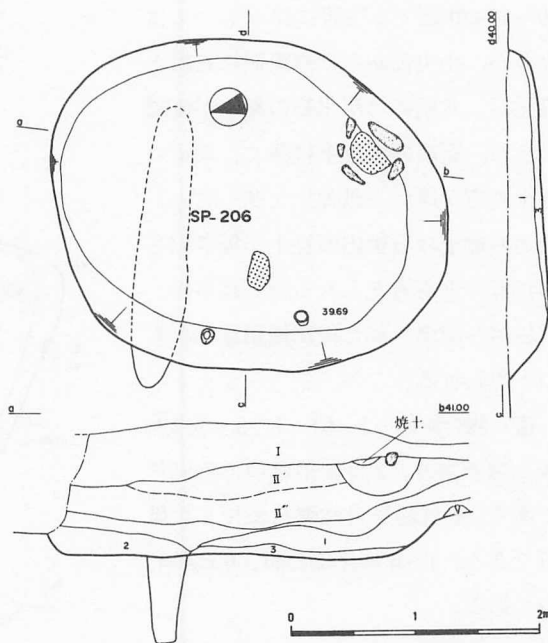


図16 SH-2

SH-3 (図17～図19)

位 置 C-23、D-22・23・24区。発掘区域内で最も低位にある。住居跡の西側は区域外にあり未調査である。

規 模 南北8.20 m、確認面からの深さは15 cm ほどである。

平面形 半分以上が未調査であるが、だ円形を呈するものと思われる。

覆 土 I 黒色土(耕作土、Ta-bを含む)、II 黒褐色土、IV 褐色土(ローム粒を含む)、1 暗褐色土(土器片、焼獣骨片、フレイク・チップ等を含む)、2 黄褐色土、3 暗褐色土、4 黒褐色土、5 焼土。

床面はローム面にあり平坦である。Tピット(SP-131、190)を切り、円形土壌(SP-99、151、193)によって切られる。壁際には小ピットがめぐる。小ピット内に土器片、石器、フレイク・チップ、焼獣骨片などが伴出するものもある。また、住居跡の外周には小ピットがめぐる。焼土は床のほぼ中央にあり、焼獣骨片、炭化物などを多く含む。

遺 物(図17、図19) 土器(図19)は浅鉢で、体部はゆるい曲線を描く。口唇から底部には縄文が付される。石器(図17)にはつまみ付ナイフ(1)、スクレイパー(2～7)、砥石(8、10)、たたき石(9)などがある。

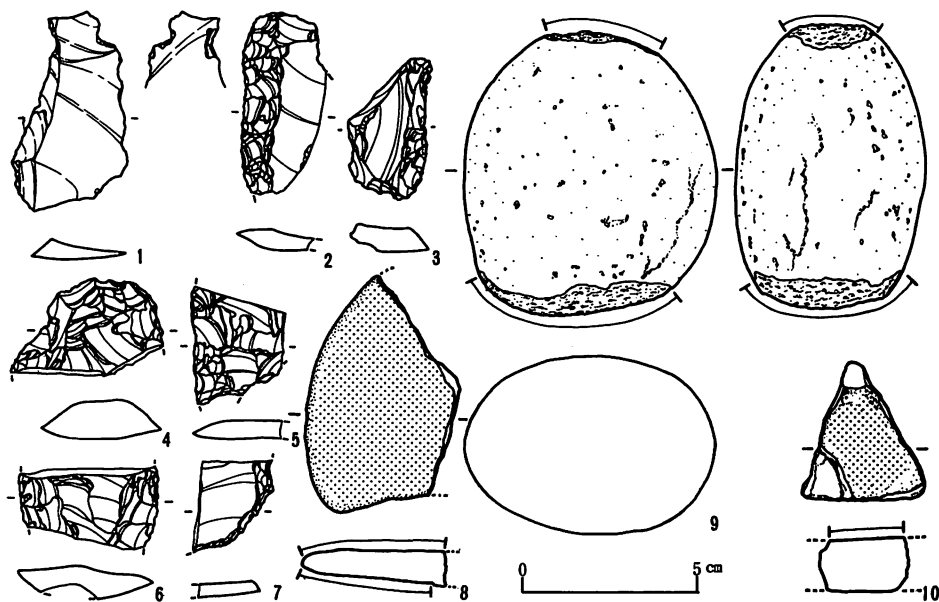


図17 石 器

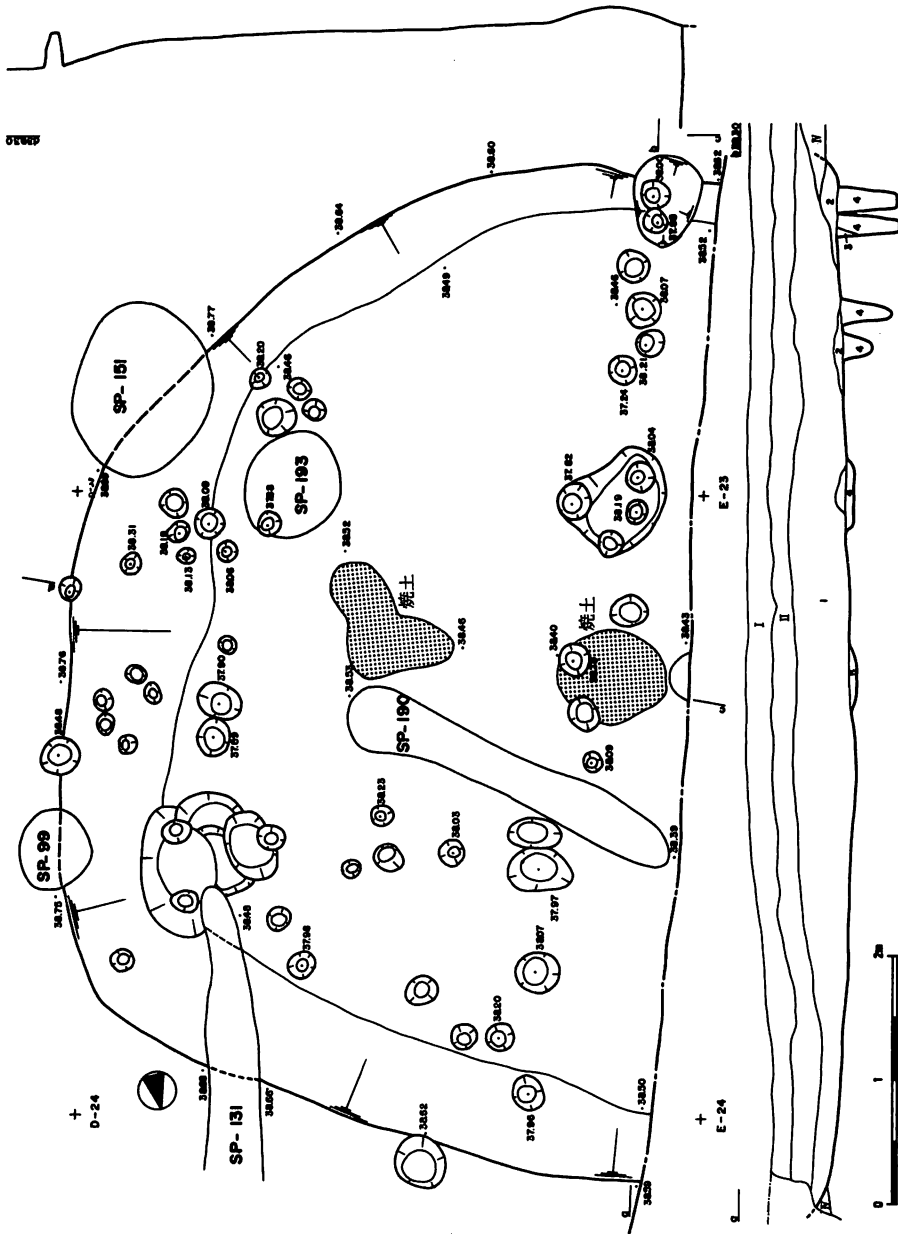


図18 SH-3

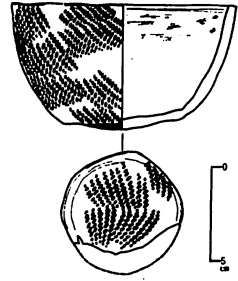


図19 土 器

NH-1・2 (図20～図22)

位 置 A-47・48区でNH-1の東壁は崖にかかる。NH-2はNH-1の北壁を切ってつくられる。

規 模 NH-1、南北7.05 m、確認面からの深さは25 cmである。NH-2、径2.30 m前後で、確認面からの深さは18 cmである。

平面形 NH-1はだ円形を呈するものと思われる。NH-2は円形。

覆 土 1 黒色土、2 暗褐色土(黒色土とロームを含む)。

NH-1はTピット(NP-28、58、61)を切ってつくられ、NH-2はNH-1と円形土坑(NP-41)を切ってつくられている。NH-1・2ともに掘り込みは浅い。床面はローム面にあり平坦である。2つの住居跡とも、小ピットが壁をめぐるようにして検出された。とくに、NH-2の場合、床面積が狭く、多くの小ピットを配していることから、住居とは認めがたい要素をもつ。NH-1の床面全体には焼土が広がる。NH-2は床面の中央からやや北寄りのところに焼土がある。また、NH-1の床面中央には礫石器および礫の集中がみられる。

遺 物(図20、図22) 剥片石器(図20)と礫石器(図22)がある。剥片石器は1～8がNH-1、9～12がNH-2のものである。1は無茎の石鏃で基部の一部を欠く。基部は内湾する。周縁の調整は丁寧である。2～4、7、9、10は有茎の石鏃で、2の茎部の作出は顕著でない。4は一部に自然面を残し、調整剥離は簡単である。5は調整剥離の状態からナイフと考えられる。6、11はスクレイパーで側縁に刃部の作出が認められる。8はノッチのあるスクレイパーで、ノッチ部以外の刃部の作出は顕著でない。12は一部に使用痕が認められる剥片である。礫石器は1～8がNH-1、9～12はNH-2のものである。石斧(1)、台石(2)、砥石(3～6、10)、たたき石(7)、くぼみ石(8、9、11、12)などがある。

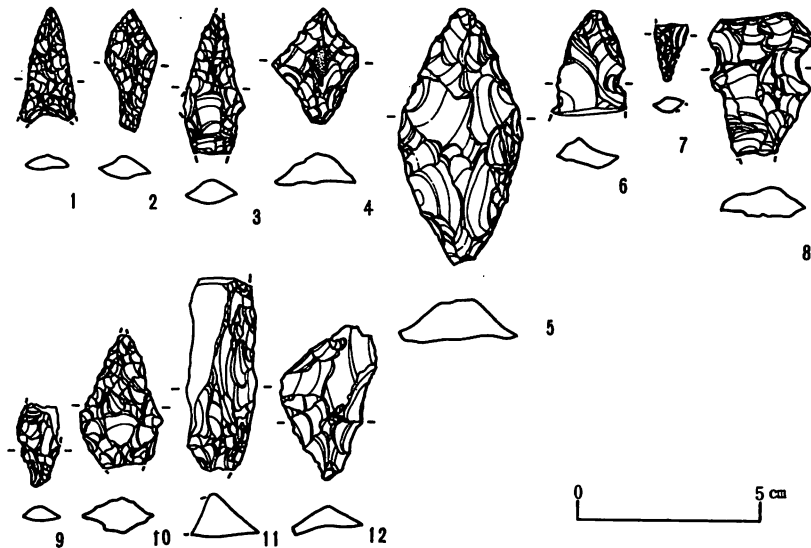


図20 剥片石器

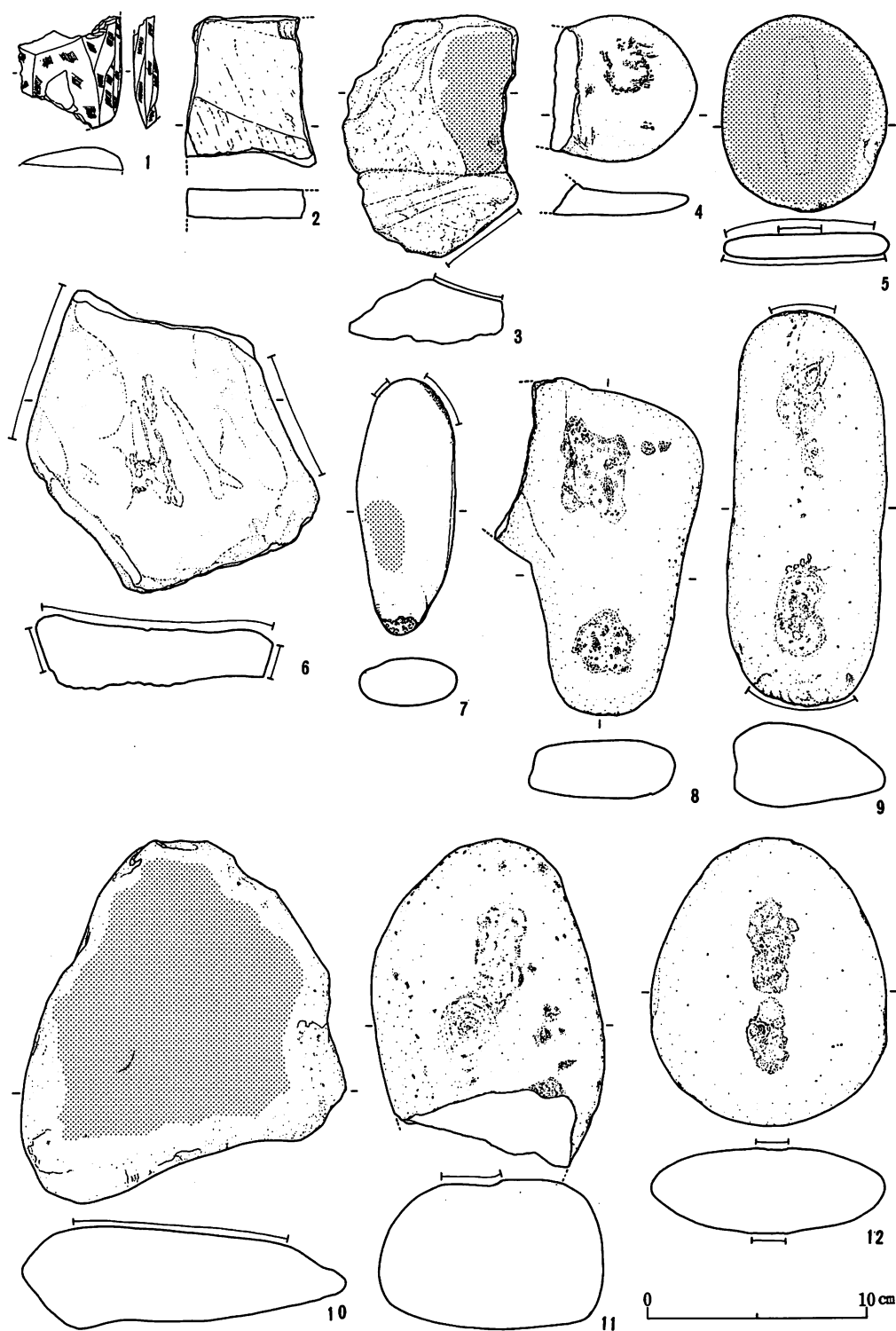


図22 礫石器

NH-3 (図23～図25)

位 置 A-40・42区、南西壁は崖線にかかる。

規 模 南北5.15m、確認面からの深さは45cmである。

平面形 南西側が消失しているが、円形ないしは円形を呈するものと思われる。

覆 土 1 黒色土、2 暗黄褐色土(黒色土と黄褐色土が均質に混る)、3 黒色土(第Ⅰ層よりもやわらかい)、4 黒色土。

掘り込みは浅い。ベンチ構造をもつ。一段目は確認面から22cm、二段目は45cmである。床面は、一段目、二段目ともローム面にある。住居跡の外周、一段目の壁際さらに二段目の周縁に小ピットがめぐる。これら小ピットが柱穴だとすれば、本跡は何回かの建て換え、拡張が行なわれたことも考えられる。また、二段目の床面には大形礫の集中がみられる。

遺 物 剥片石器(図24)と礫石器(図25)がある。

剥片石器、図24-1は無茎の石鏃で基部が内湾する。先端部を欠く。調整は入念である。2～5、9～11は有茎の石鏃である。4の鏃身は三角形を呈し、茎部とともに整った形をなす。5の茎部の作出は顕著でない。剥離の状態から削器的な用途を考えられる。6は剥離の状態からナイフ的な用途が考えられる。7、8は剥片の一部に刃部を作出したものである。調整剥離は雑である。13はナイフの柄部と考えられる。

礫石器、1、2は磨製石斧で、1は刃部片、2は頭部片である。1の刃部はかなり磨滅しており、片刃である。3はたたき石と考えられる。表面には帯状に使用痕がみられる。周縁の調整はなされていない。4は側縁に使用痕がみられる。形状は不明である。5はくぼみ石で、表裏面のほぼ

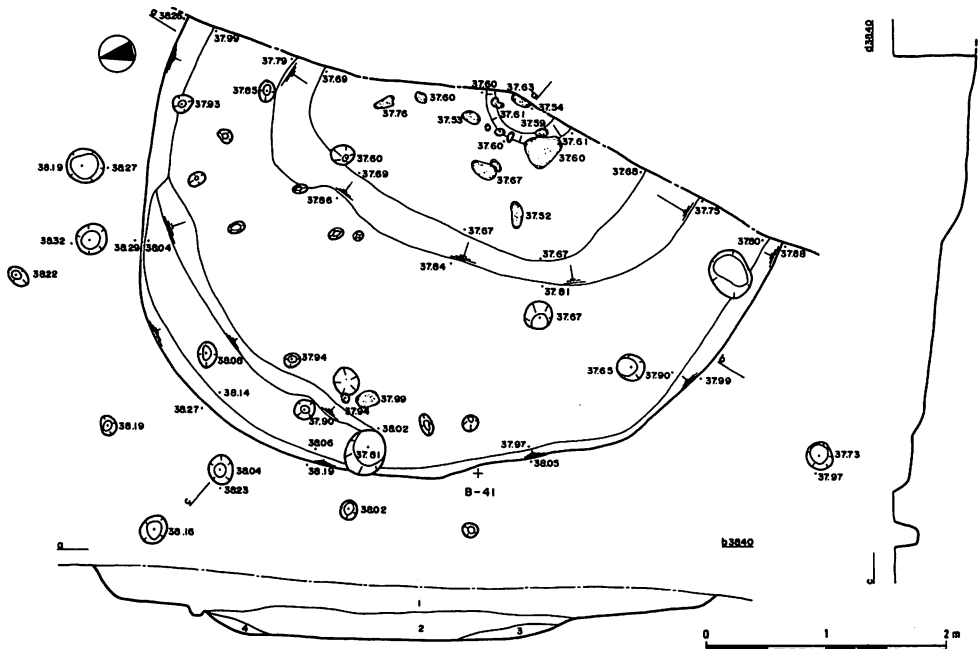


図23 NH-3

同じ位置に凹部がある。側縁は擦られており、砥石的な用途も考えられる。1、2は緑色泥岩、3は泥岩、4、5は安山岩製である。

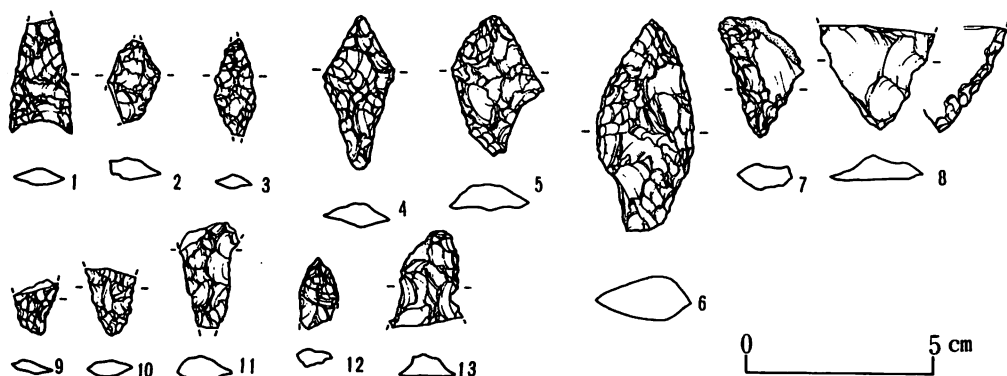


図24 刮片石器

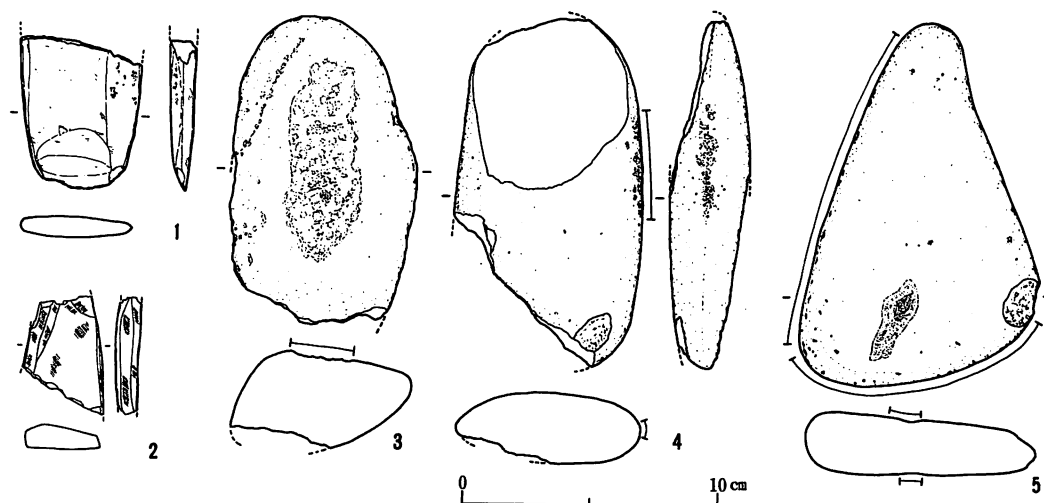


図25 礫石器

表 1 住居跡出土石器一覧表

遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質	遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質
H-1	6		砥 石	180	Sa	NH-1	21	8	スクレイパー	(8.8)	obs
H-2	9		打製石斧	545	Mud	NH-2	"	9	石 鏃	(0.9)	"
H-3	13	1	石 鏃	(2.9)	obs		"	10	"	(4.7)	"
	"	2	ナ イ フ	(7.8)	"		"	11	スクレイパー	(11.6)	"
	"	3	"	(4.8)	"		"	12	"	(4.0)	"
	"	4	スクレイパー	(3.0)	"	NH-1	23	1	石 斧	(25.2)	Gr-Mud
	"	5	"	(5.7)	"		"	2	台 石	95	Gni
	"	6	"	(5.2)	"		"	3	砥 石	265	Sa
	"	7	"	(9.0)	"		"	4	"	76	"
	"	8	"	9.4	"		"	5	"	130	"
	"	9	砥 石	(27.0)	Sa		"	6	砥 石	625	"
	"	10	たたき石	570	And		"	7	たたき石	125	Gr-Mud
SH-1	14	1	石 鏃	(0.6)	obs		"	8	くぼみ石	528	And
	"	2	使用痕の片 ある剥	0.6	"	NH-2	"	9	くぼみ石	800	And
	"	3	石 鏃	(4.7)	"		"	10	砥 石	9,750	Sa
	"	4	"	(3.7)	"		"	11	くぼみ石	1,310	And
	"	5	"	5.6	"		"	12	"	760	"
	"	6	砥 石	490	Sa	NH-3	24	1	石 鏃	(1.7)	obs
SH-3	18	1	つまみ付 ナイフ	6.2	che		"	2	"	(1.0)	"
	"	2	スクレイパー	(9.4)	obs		"	3	"	(0.7)	"
	"	3	"	(6.4)	"		"	4	"	3.0	"
	"	4	"	(12.4)	"		"	5	"	3.8	"
	"	5	"	(6.0)	"		"	6	やり先	13.4	"
	"	6	"	(6.2)	"		"	7	スクレイパー	3.5	"
	"	7	"	(3.6)	"		"	8	"	(3.0)	"
	"	8	砥 石	38.0	Sa		"	9	石 鏃	(0.4)	"
	"	9	たたき石	459	カコウ岩		"	10	"	(1.0)	"
	"	10	砥 石	27	Sa		"	11	"	(2.1)	"
NH-1	21	1	石 鏃	1.2	obs		"	12	"	(0.6)	"
	"	2	"	1.7	"		"	13	スクレイパー	(2.8)	"
	"	3	"	(2.8)	"		25	1	石 斧	44	Bl-Mud
	"	4	"	3.3	"		"	2	"	20	Gr-Mud
	"	5	やり先	8.6	"		"	3	たたき石	407	Mud
	"	6	スクレイパー	(2.9)	"		"	4	"	305	And
	"	7	石 鏃	(0.3)	"		"	5	くぼみ石	398	And

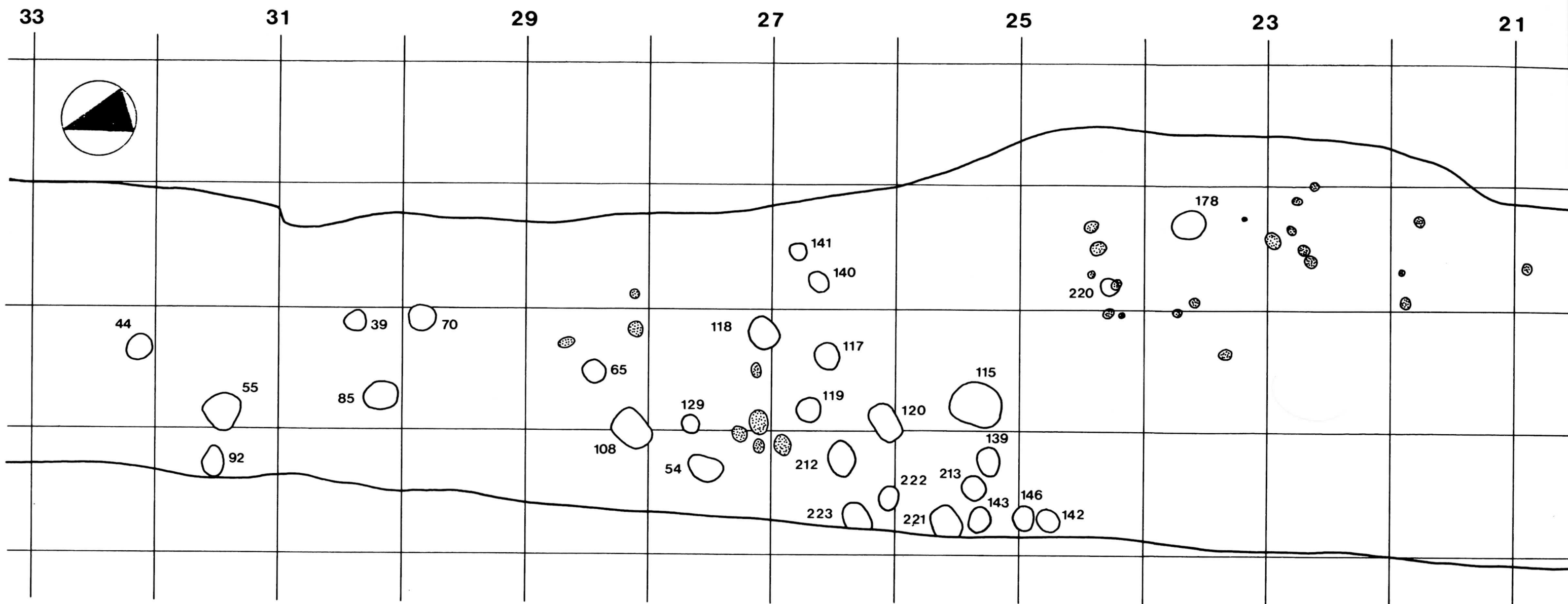


図26 土墳墓分布図

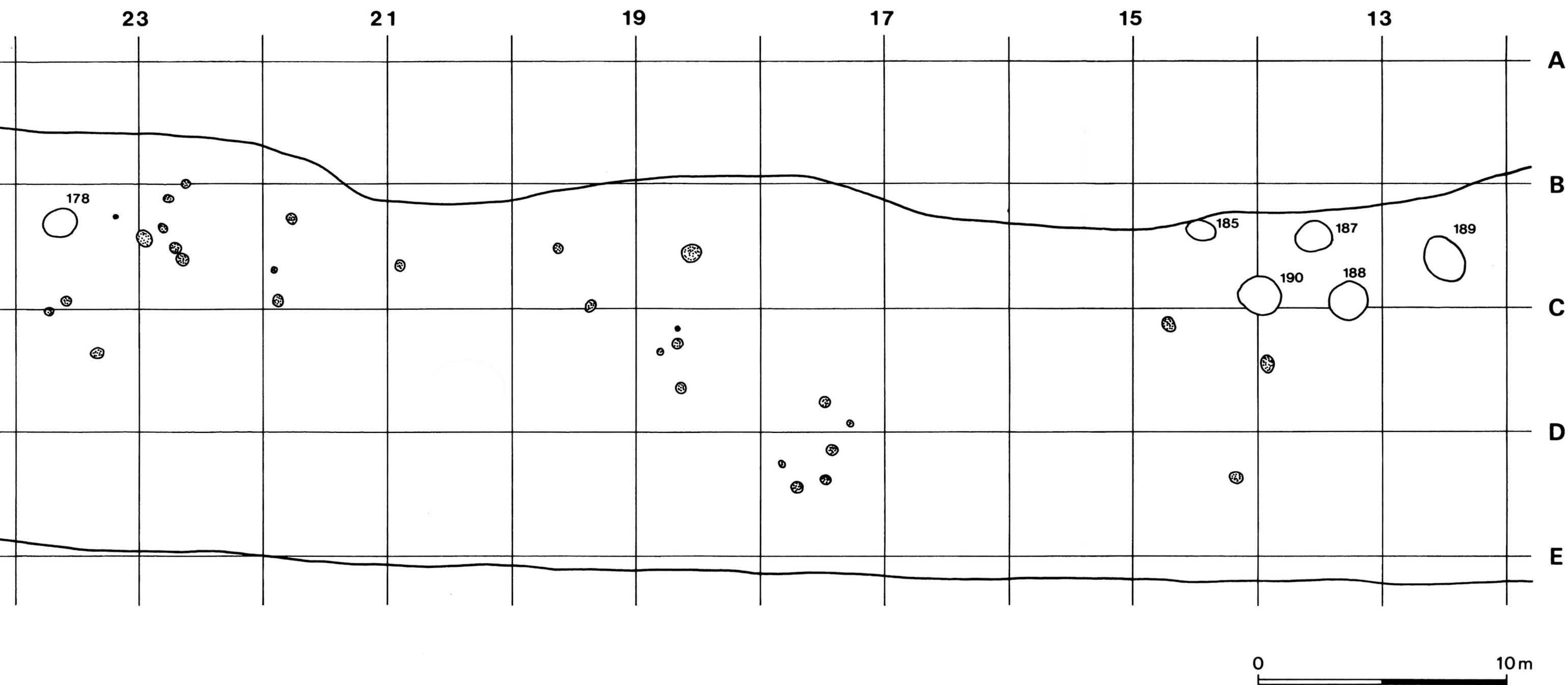


図26 土墳墓分布図

3 土墳墓—付図 図26～図103—

土墳墓は33個発見された。それらは12～15、23～33の2つの地区に集中する。ほとんどが微高地につくられており、発掘区域内の最低位面との比高が1m近くになるところもある。土墳墓の分布は、後項で述べる埋壺の分布とは重複しない。

平面形は基本的にはだ円形であるが、さらに小円形、卵形、類隅丸方形の三つに分かれる。小円形のものは22～30の間に、卵形のものは12～15、23～33の2つの地区に分布する。さらに類隅丸方形のものは、25～29の間に限られる。

土墳墓の規模では、12～15の地区にある土墳墓は、最大径が1.5～1.8mの範囲に、23～33の地区にある土墳墓は、卵形のものでは最大径が0.9～1.5m、類隅丸方形のもので最大径が1.5～1.7mの範囲にある。

付属施設（小ピット）のある土墳墓は、12～15のSP-185、187～190、25～29のSP-108、115、117～120、129、140、31～33のSP-44、55で、小ピットは墳底の壁ぎわにあり、1～3個配される。小ピットが2個の場合、相対するような配置がなされる。

伴出した遺物には、土器、石器、土製品、石製品、コハク製平玉などがある。これらには日常使用されていたものと埋葬用に特別につくられたものがあるが、基本的には日常用具の枠からはみ出さない程度のものである。SP-39の墳底面から出土した9点の石鏃には使用痕・擦痕など認められない（肉眼的観察による）ことから、この9点の石鏃は死者に供するために製作されたものと考えられる。土器は、ほとんどが墳口、墳中から出土しており、墳底面からの出土例はない。石器は、ほとんどが墳底面からの出土である。日常用具の種類によって埋納の位置が違ふことから埋葬にかかわる何らかの約束事があったものと考えられる。コハク製平玉を出土したのはSP-143、SP-146の2例だけである。

埋土の状態は、ほとんどの場合基本層である黒色土、褐色土に径1～2cmのローム粒を混入している。また、墳底面にはベンガラ（ベンガラ）の痕跡が認められ、墳口、墳中にもベンガラ（ベンガラ）の細粒を混入する例が多い。さらに墳底面から10～15cmほど上層に粘性の強い黒褐色土の層がみられる。これは遺体が腐植し土化したいわゆる遺体層と考えられる。墳口（最上層）では、フレイク・チップ、炭化物、獣骨片が混入される例がある。

調査地区が帯状であるため土墳墓がどのようなまとまりをもって分布するのかは予測できない。また、伴出した土器型式からも大きな差は認められない。しかし、これら土墳墓が同時に存在したものでないことは、今までに述べてきた分布域、平面形、規模、付属施設、伴出遺物などから明らかである。

SP-185 (図 27～図 28)

位 置 B-14 の崖線に接するところ

平面形 卵形(だ円形)、墳底面は平坦で墳口に比してせまい。

埋 土 1 黒褐色土(ローム混り)、2 暗茶褐色土(ローム混り)、3 黄褐色土(ロームと黒色土混り)、4 茶褐色土(ロームと黒色土混り)、5 暗黄褐色土、6 ペンガラ。

遺 物(図 28) 墳口と墳底面から出土している。墳口では土器が主体となり、墳底面からは剥片石器だけが出土している。

土器(1～3)、舟形、台付鉢、小形深鉢などがある。舟形土器(1)、口縁、体部をわずかに欠く。上面観はだ円を呈する。長径両端に貼り付突起がありその部分は穿孔される。地文は縄文で口唇から底面まで施文される。口縁部から体部中位までに棒状工具によって変形工字文が描かれる。全体に朱彩の痕跡あり。台付鉢(2)、台部を欠く。倒立した状態で出土した。口縁部に2対の突起をもち、その部分は穿孔される。口縁部には一条の横走沈線をめぐらし体部には縄文を付す。小形深鉢(3)、口縁部を1/3ほど欠く。口唇に刻みを付し以下底面まで縄文が付される。内面は磨かれている。

石器(1～8)、石鏃、ナイフ、砥石、たたき石などがある。ナイフについては取り上げ後所在不明となり実測は出来なかった。このナイフは、幅広の柄部をもつ、石ナイフとか石小刀などと言われるものである。石鏃(1～6)はすべて無茎で、基部がわずかに内湾する。2～5は裏面に一次剝離面を残す。両側縁の磨滅は3にのみみられる。砥石(7)は自然礫の一部を使用したもので、縁辺の調整はなされていない。たたき石(8)、小頭部に使用痕がみられる。

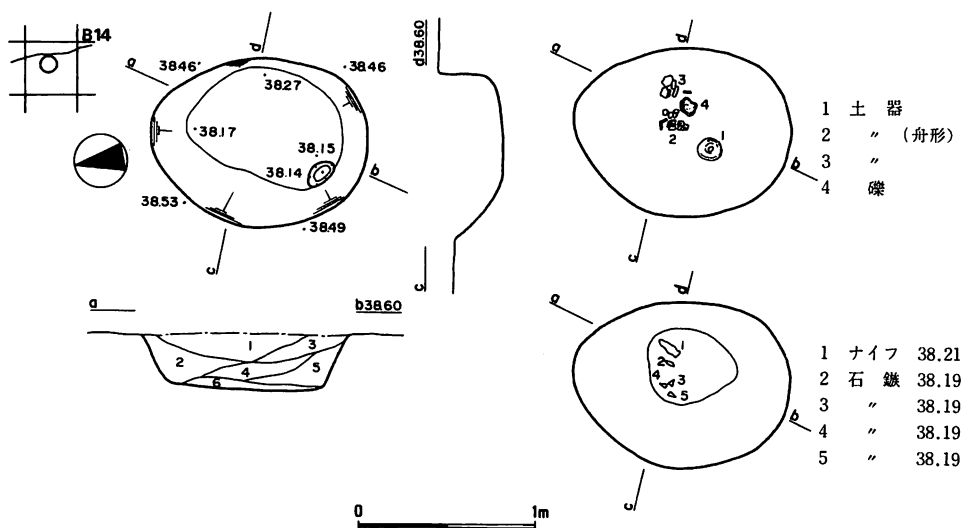


図27 SP-185

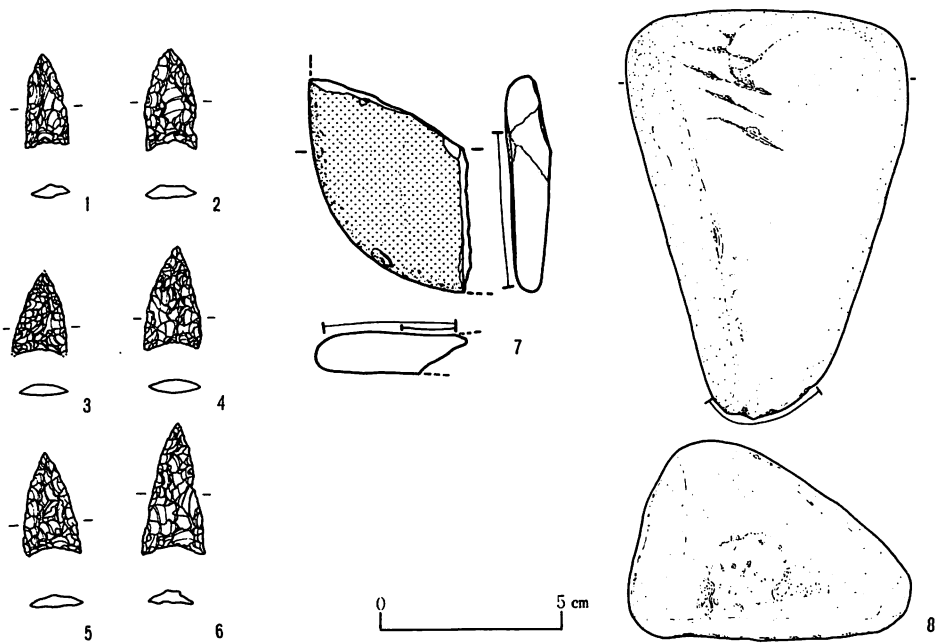
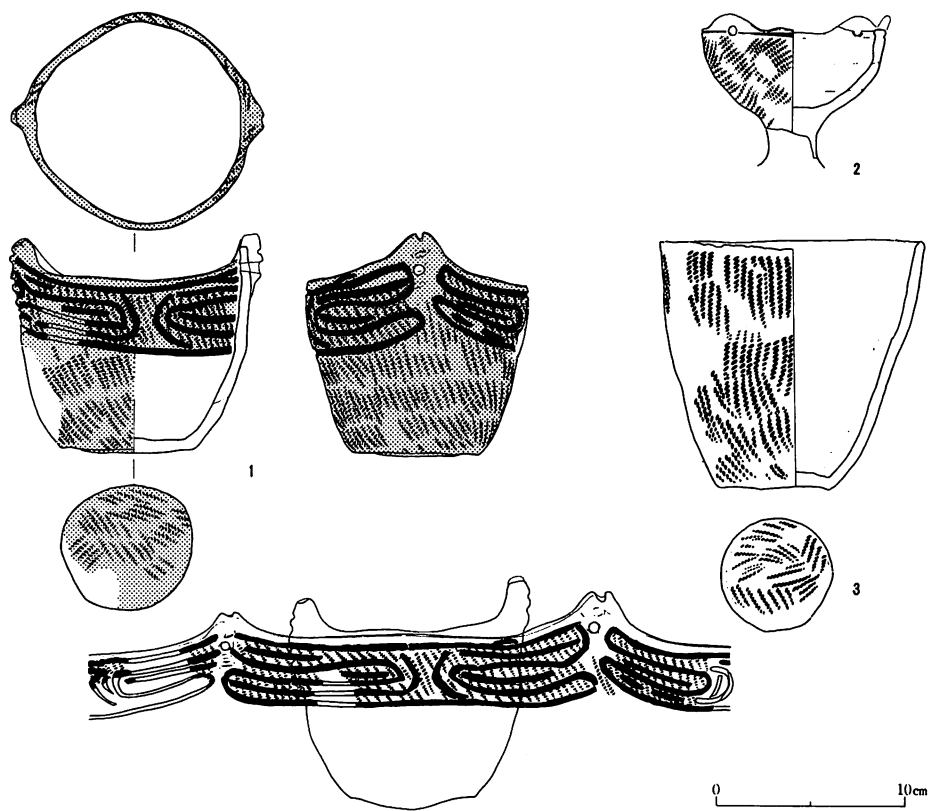


図28 S P-185の遺物

SP-187 (図29～図30)

位 置 B-12の崖線寄り

平面形 南北にやや長い円形を呈する。墳底面は平坦で、西壁際に小ピットを2個配す。

埋 土 1 茶褐色土(ベンガラを均等に含む)、2 暗茶褐色土(ローム粒混り)、3 黄褐色土(ローム粒混り)、4 暗黄褐色土(ローム・褐色土が小ブロック状に混入)、5 暗黄褐色土(4層よりローム小ブロックが多く混入)、6 ローム、7 赤茶褐色土(ベンガラ、ローム混り、粘性あり遺体層か)、8 ベンガラ。墳底面の中央部にベンガラのスポットがある。

遺 物(図30) 墳底面からスクレイパー、石のみ、石斧、ボーリングシェルなどが出土している。これらは、スクレイパーを除き墳底面の中央部に集中している。スクレイパー(1)、破片で形状は不明、大形のものと思われる。周縁に細かな加工を施し、鋭角な刃部をつくり出している。石のみ(2)、側面には自然面を残し、刃部のみを作出したものである。この刃部の作出は顕著である。表裏面ともに簡単な加工痕(擦痕)を残す。石斧(3)、擦切り手法による。頭部に調整加工がなされる。刃部の一部に二次的な剝離痕を残す。石のみ、石斧ともに使用痕は認められない。ボーリングシェル(4)、貫通孔がある。近くの海岸から採集され、埋納されたものと思われる。

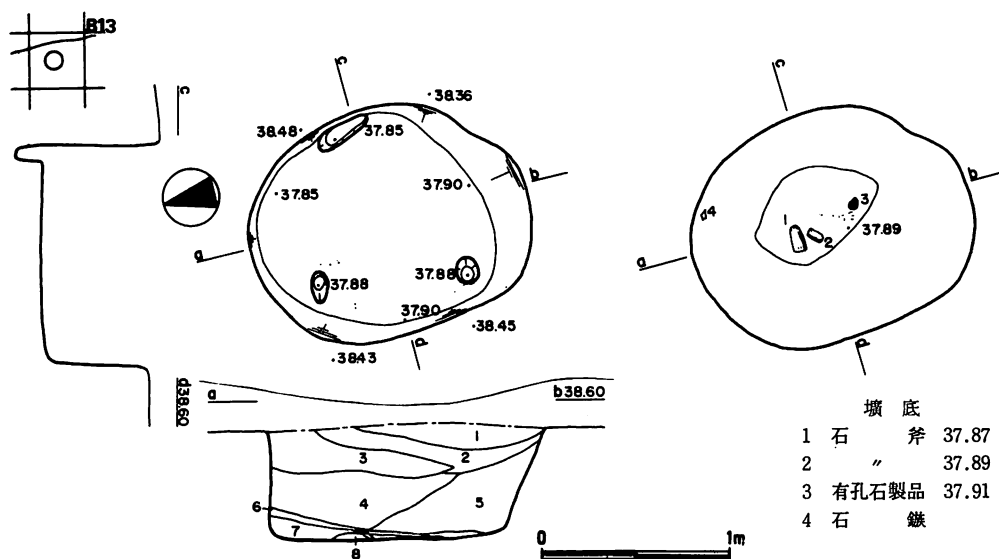


図29 SP-187

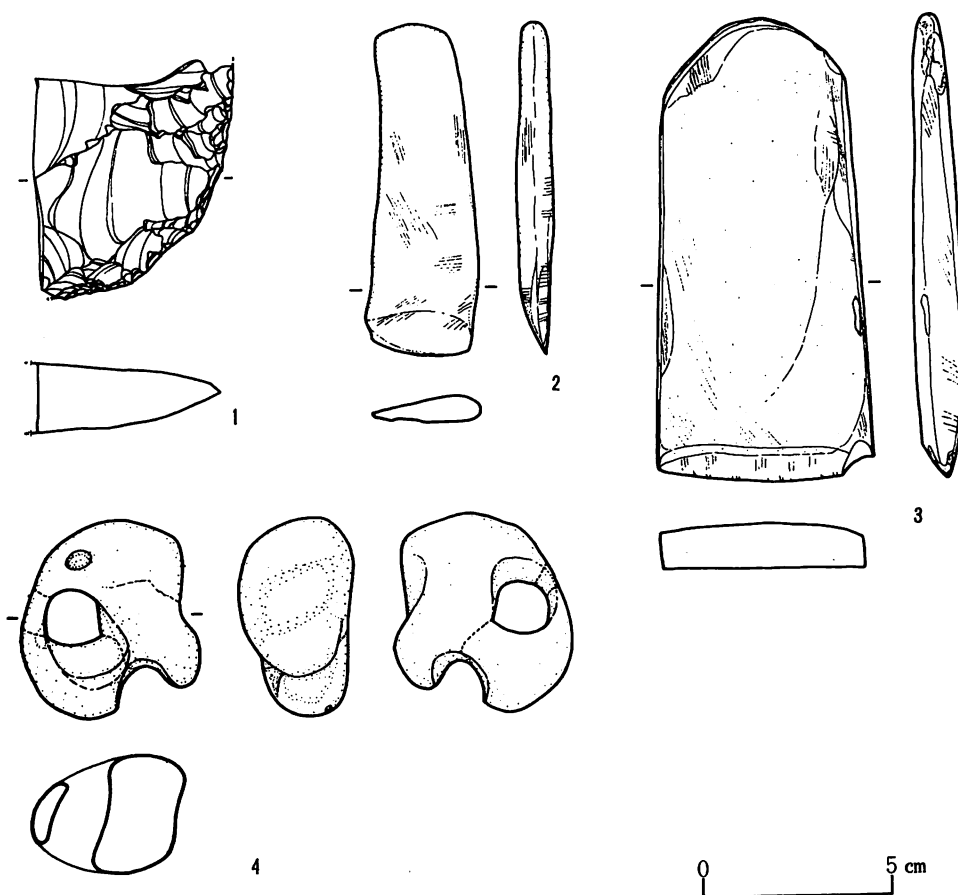


図30 S P-187の遺物

SP-188 (図 31)

位 置 B-13、C-13

平面形 だ円形、東・西壁際からそれぞれ小ピットが検出された。

埋 土 1 黄褐色土(ローム)、2 暗黄褐色土(基本層はローム、褐色土が少量混入)、3 褐色土(ローム、ブロック状に混入)。

SP-277(Tピット)の一部と重複する。本址の方が新しい。

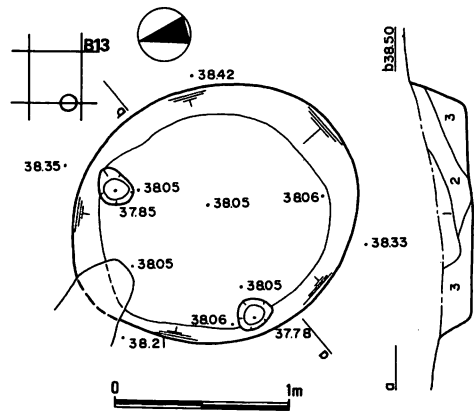


図31 S P-188

SP-189 (図 32～図 34)

位 置 B-12 のほぼ中央部

平面形 東西に長いだ円形、北壁際に2個、南壁際に1個の小ピットを配す。

埋 土 1 茶褐色土(ローム混り)、2 暗茶褐色(ローム・黒色土混り)、3 暗黄褐色土(ローム・黒色土混り)、4 赤茶褐色土(ローム・ベンガラ混り、粘性)。

遺 物(図 33, 34) 小形深鉢、口唇に刻みを付し、体部には縄文を施す。内面調整を行っている。石斧、両側縁に剝離痕を残す。刃部は鋭角をなす。使用痕は認められない。図 34-2・3 とともに用途不明の礫、両端に調整痕あり。3 は石斧の原材か。

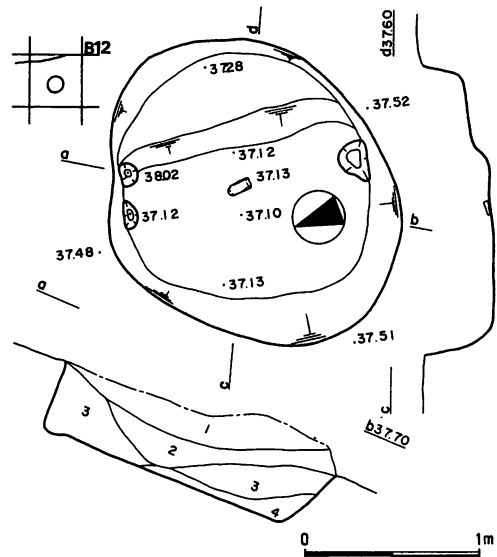


図32 S P-189

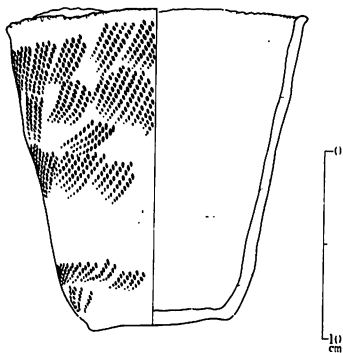


図33 土 器

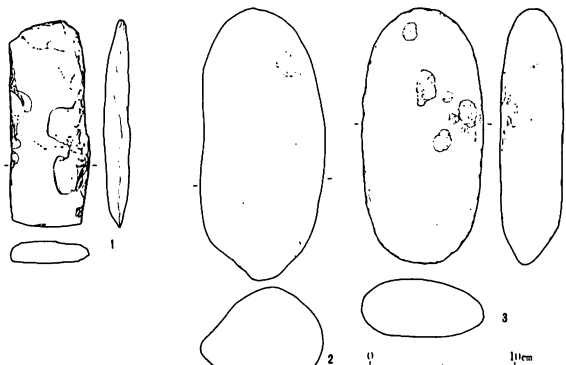


図34 石 器

SP-190 (図35～図38)

位 置 B-13、14

平面形 卵形（南北にやや長い円形）を呈す。墳底の南壁際から小ピットが検出された。墳底面は平坦である。

埋 土 1 暗赤茶褐色土（ローム小ブロック、褐色土が混る。上面近くにベンガラが粒状に均質に混る）、2 暗茶褐色土（ロームがブロック状に混入、ベンガラ含む）、3 黒褐色土（ローム小ブロックが混入）、4 茶褐色土（ロームと褐色土が混る）、5 暗黄褐色土（ロームと褐色土が混る。固くしまっている）、6 暗褐色土（褐色土に少量のロームが混る）、7 黄褐色土（ローム、ブロック状に混入）、8 壁崩落土。墳底面の中央部にベンガラが敷かれている。

遺 物(図36～図38) 墳中（確認面から10～20 cm 下層）と墳底から出土している。墳中の遺物には、土器、石器（ポイント、ナイフ、石斧）、有孔石製品などがある。土器は復元されたもの2個他は破片であった。浅鉢（図36-1）、口縁部から体部にかけて2/3 残存。上面観は八角形を呈する。山形の突起をもち、その下方には2カ所穿孔される。口唇には縄文原体による押圧がなされ、体部には縄文を付す。口縁付近は磨削が加えられている。浅鉢（図36-2）、口

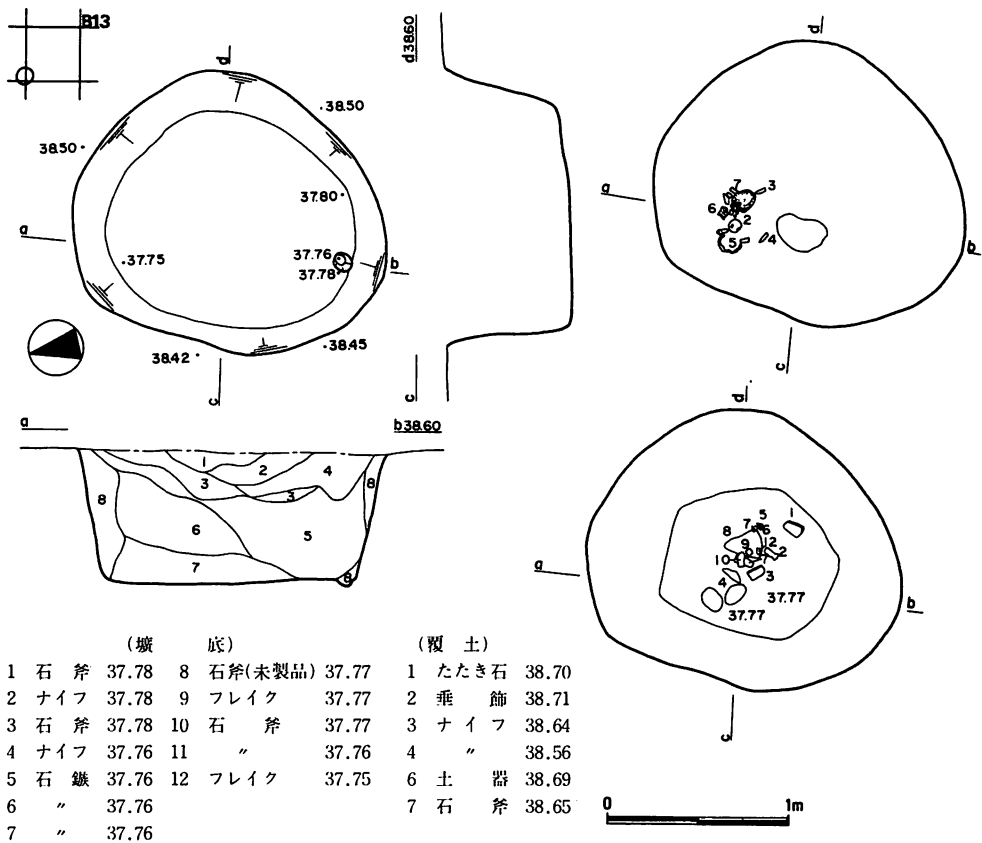


図35 SP-190

縁の一部を欠く、口唇、体部から底部にかけて縄文を付す。口縁部の一部は磨消がなされる。胎土に砂粒を多く含む。図37-1、2、4は曲線文、3は平行線文、5~8は口縁に磨消がみられ、以下縄文を付す。3は壺形土器の頸部片、その他鉢形土器の口縁部片、体部片である。石器(図38)、ポイント(1~6)、木葉形(3、5)、有肩(4)、有茎(1、2、6)などがあり、正面の剥離は丁寧である。5を除いて裏面に一次剥離面を残す。剥離の状態から、鏃・ヤリよりもナイフとしての機能をもつものと思われる。ナイフ(7)、柄部、幅広の柄をもつタイプのもので、頂部には調整剥離がなされ、側断面はくさびに近い形をす。スクレイパー(8、9、11)、これらは剥片の側縁に簡単な調整剥離を加えただけのもので、刃部の作出は顕著ではない。未調整部分での擦痕が認められる。9、11の刃部は磨滅している。10は、剥片の一部にわずかに調整を加えただけのものである。石斧(12、13)には側縁に打撃による調整を加えたもので、片刃で、刃部の使用痕は認められない。13、刃部は欠損している。両側縁は打撃による調整がなされる。砥石(14、15)、14は自然礫を未調整のまま使用したもので、使用面は平坦で、直線的な擦痕を残す。15は、面とりを行ったあとに使用したもので、使用面は凹みは顕著である。有孔石製品(16)、斜め方向に穿孔されている。穿孔は主として片面から行っており、回転の擦痕はみられず、削り取ったような痕跡が認められる。垂飾だろうか。

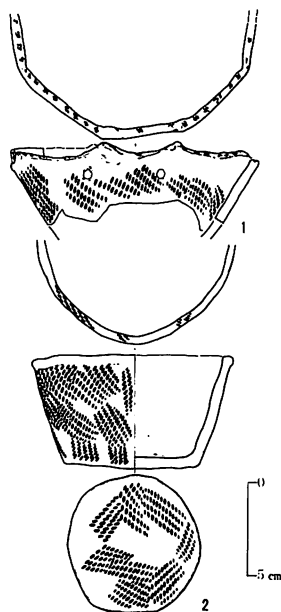


図36 土 器

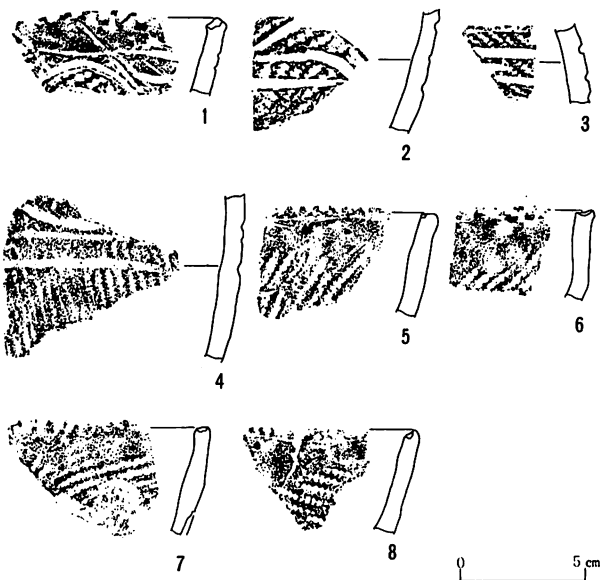


図37 土器拓影図

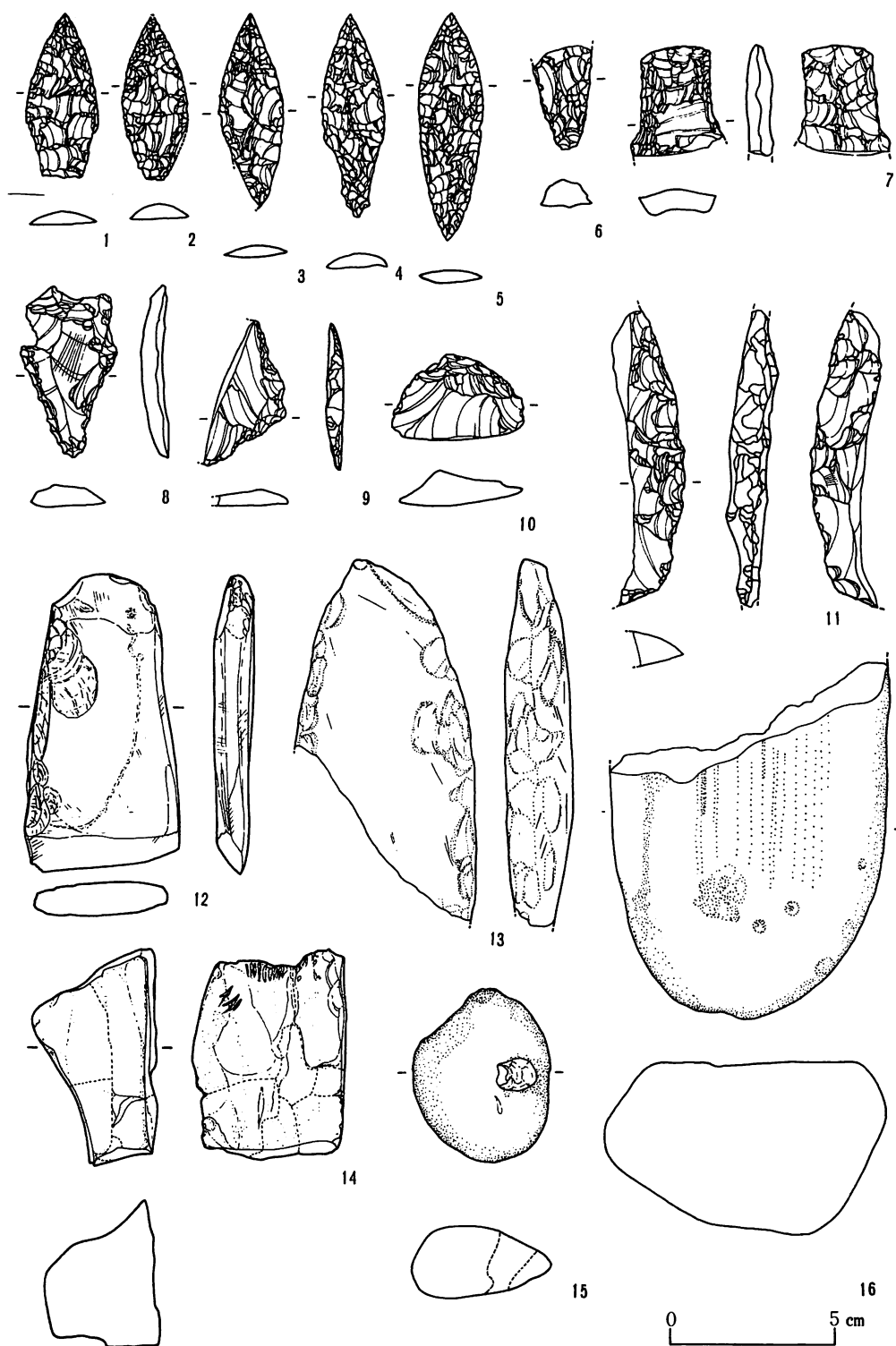


図38 石 器 等

SP-178 (図39～図41)

位 置 B-23、SH-2の北壁に近い部分

平面形 南北に長い卵形(だ円形)で、墳底面はボール状を呈する。

埋 土 第V層(漸移層)まで掘り下げたときに確認できたため、実際の掘り方よりも若干浅くなっている。1 暗茶褐色土(炭化物、獣骨片、ベンガラ粒、ローム粒を含む)、2 暗茶褐色土(獣骨片を少量含む)、3 暗黄褐色土(ローム小ブロック、炭化物を多く含む)

遺 物(図40～図41) 1層上面(墳口に近い部分)から土器片、石器などが出土している。

土器(図40)、口縁・頸部の破片で、変形工字文(1)、矢がすり文(2)、無文(3)などのものがあり、鉢形土器と思われる。1は山形の突起をもち地文は縄文で、文様帯の部分は磨消されている。内面は磨かれており、口縁付近に一条の沈線を、さらに下段では縄圧痕を付す。2は、地文は縄文で、明瞭な沈線によって文様が描かれる。3は小形深鉢の破片と思われる。石器には、石鏃、ナイフ、スクレイパー、石斧、砥石(砂岩、軽石製)などがある(図41)。石鏃は7点あり、1～6は無茎で基部が内湾し、4～6は先端、基部の一部を欠く。7は有茎のものと思われる。茎部を欠く。いずれも器面の一部に擦痕が認められる。4は熱を受けている。ナイフ(8、10)8は、幅広の柄部をもち、クツペラの様な形を呈する。柄部の頂部には両面から調整剥離が加えられ鋭角をなす。刃部両側縁の加工は入念である。裏面には一次剥離面を残す。10はナイフの柄部である。スクレイパー(9、11～15)、剥片の1辺あるいは両辺に簡単な剥離を加えたものである。石斧はすり切り手法のもので、刃部には使用痕がみられる。砥石(17～20)、20はたたき石から転用と考えられる。17.18.20までは帯状のすり面を残す。19は軽石製の砥石ですり面は平坦である。本址の場合、日常使用していたものをそのままの状態にて埋納したものと考えられる。

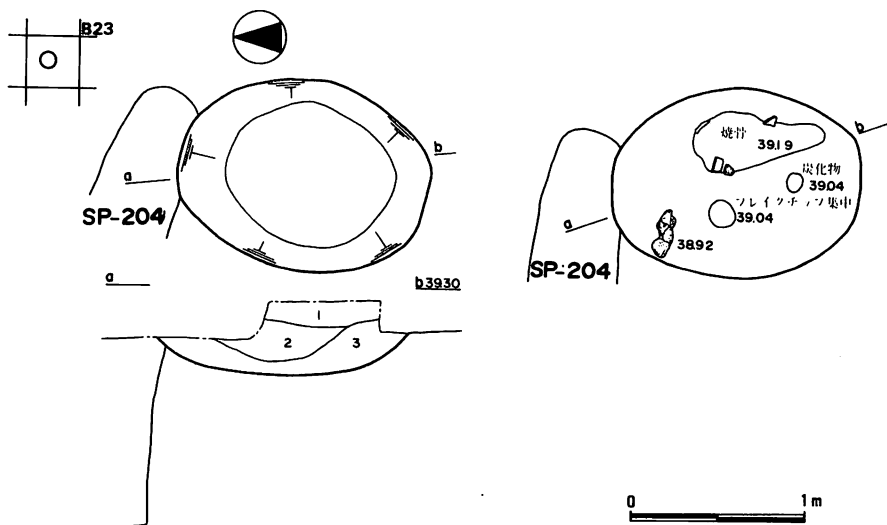


図39 SP-178

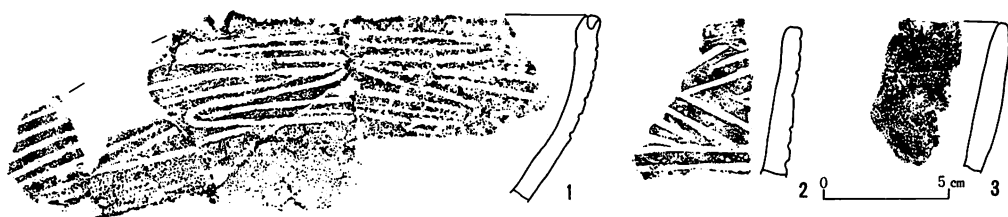


图40 土器拓影图

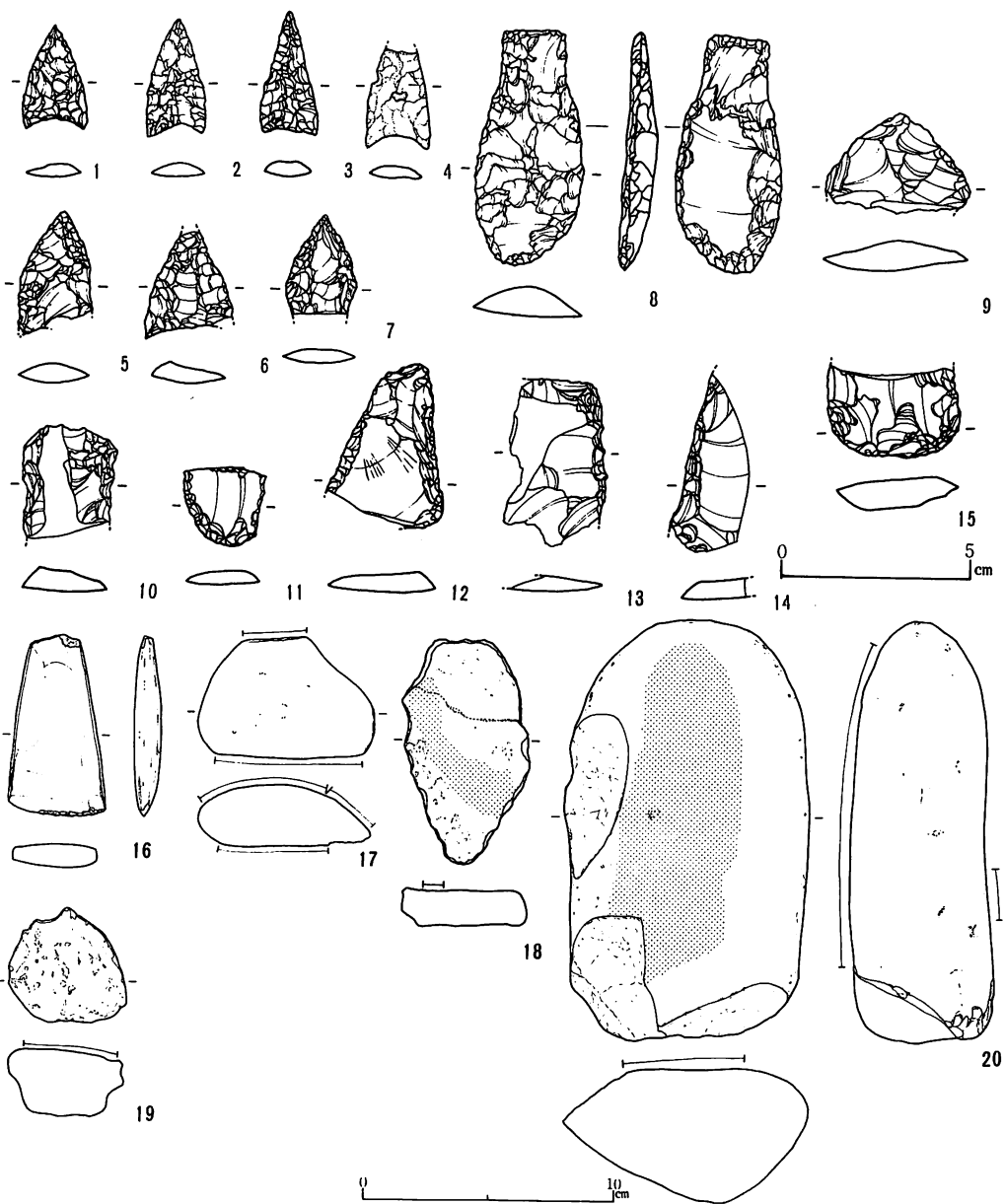


图41 石 器

SP-142 (図42～図44)

位 置 D-24、SP-146 に接する

平面形 南北にやや長い円形を呈する。墳底面は平坦であるが、墳口に比してせまい。

埋 土 1 黄褐色(ローム・褐色土を含む)、2 黒褐色土、3 黄褐色土、3 黄褐色土(径が2～3 cm のローム粒を含む)、4 黒褐色土(ローム粒を少量含む)、5 暗黄褐色土(ローム・黒色土を含む)、6 黒色土(ロームを少量含む)、7 黄褐色土(第3層と同じ)、8 黒褐色土(ローム粒を多量に含む)、9 褐色土(粘性が強い)、遺体層かと考えられる。10 黒色土(粘性が強く、粒の大きいロームを含む)

遺 物(図42～図43) 土器(図42)と石鏃(図43)が出土している。土器は墳口付近、石鏃は墳底面から出土した。小形深鉢、体部中位以上を欠く。体部および底部には縄文を付す。底部の周縁には絡縄体圧痕文をめぐらす。割れ口がかなり磨滅していることから、体部中位以上が欠損した後に縁辺を調整し再利用したものと考えられる。体部にはススが付着しており、さらに内部の一部にもススが付着している。内面には木皮あるいは葉のようなものでなでたような痕跡がみられる。石鏃、有茎鏃で、両側縁の剝離は入念である。裏面には一次剝離面を残しその部分には擦痕がみとめられる。

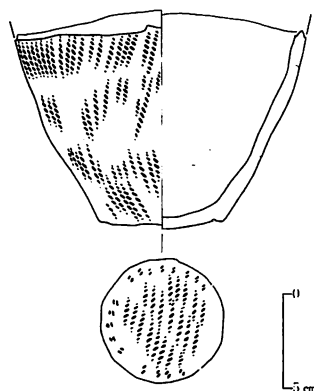


図42 土 器



図43 石 器

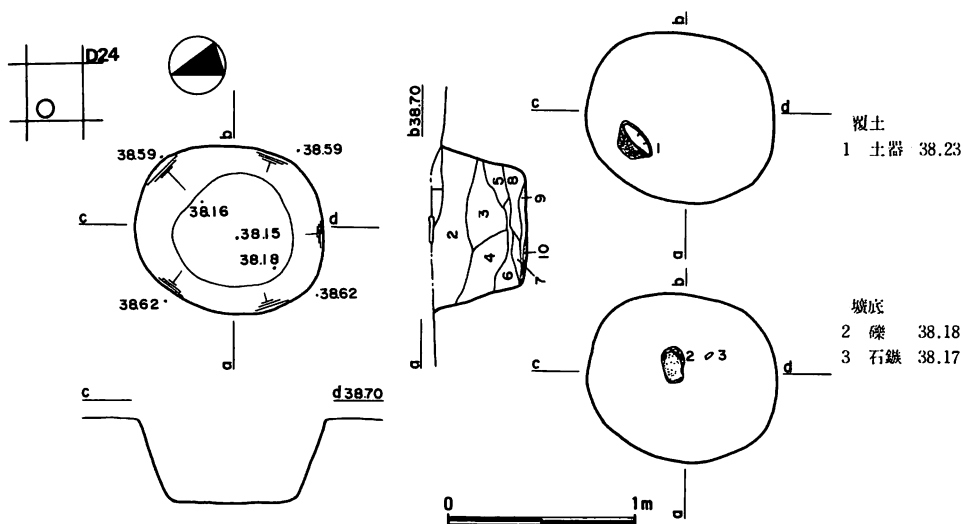


図44 S P-142

SP-143 (図45~47)

位 置 D-25、西側境界線に接する

平面形 東西にやや長い卵形を呈する。墳底面は平坦で墳口に比してせまい。

埋 土 最上層から墳底面まで90cmほどある。1 褐色土(ロームを多量に含む)、2 黄褐色土(少量の炭化物を含む)、3 黒褐色土(ローム粒を少量含む)、4 褐色土(ローム粒ベンガラを含む)、5 黒褐色土、6 黄褐色土(径3~5cmのローム粒を含む)、7 黒褐色土、8 暗褐色土(ローム粒を少量含む、粘性あり)、9 黒色土(ローム粒を含む、粘性あり)、8、9は遺体層と考えられる。

遺 物 墳底面の東壁に近い部分からコハク製の平玉が出土した。玉は連なるようにして90個ほど出土しており(図45)、あわせて、人骨の痕跡も認められた。西壁際には石鏃が2点と礫が1点出土している。

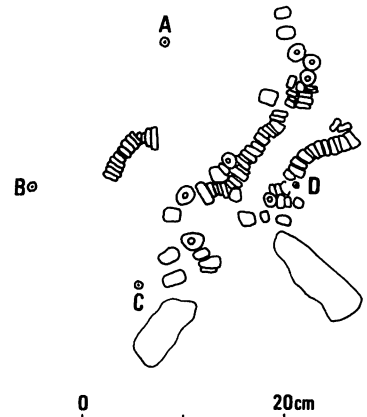


図45 コハク玉出土状況図

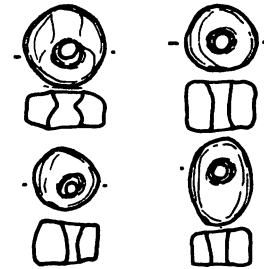


図46 コハク玉

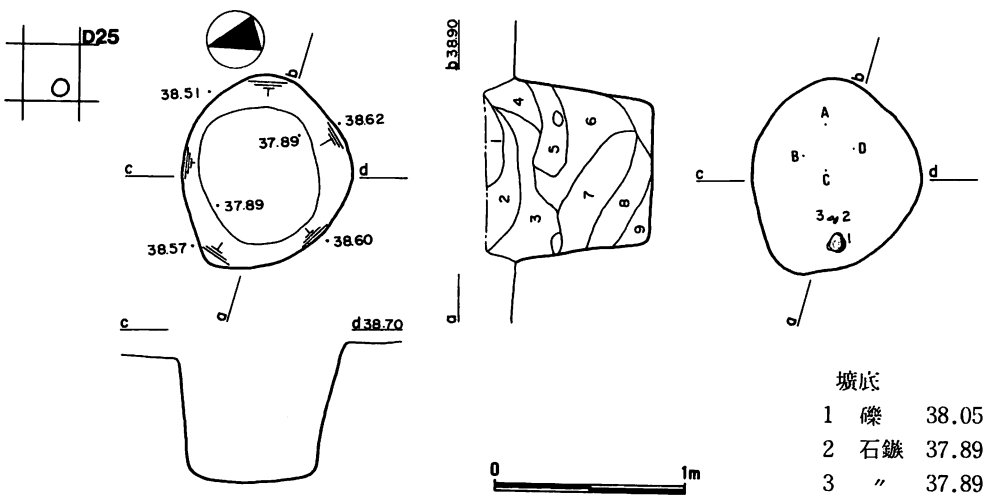


図47 SP-143

SP-139 (図48～図50)

位 置 D-25の東南寄り

平面図 東西に長い卵形を呈する。墳底面は中央部でわずかにくぼむ。

埋 土 全体的に東から西へ流れ込むような堆積状態を示している。1 黒色土、2 黒褐色土(径2～3cmのローム粒を含む)、3 黒褐色土、4 褐色土(径2～3cmのローム粒を含む)、5 黒色土(ロームを均等に含む)、6 黒色土、7 暗黄褐色土(ロームと少量の黒色土を含む)、8 褐色土(粘性が強い)、8層は遺体層と考えられる。

遺 物(図49～図50) 墳口では土器を、墳底面では石器を主体として出土した。墳口の南西寄りのところから、土器、土製品が連なるような状態で出土した。東から、漏斗状土製品の小さいものが大きいものの中にさし込まれるようにして、次いで、図49-1の土器が、そして5、6→3→2→4の順に西へつらなる。3と4には灰白色粘土が被覆されている。土器はすべて鉢形である。1は相対する位置に高まりを有し、平行線→曲線→平行線が口縁部から体部下半まで描かれる。口唇には刻みを付す。胎土には砂粒を多く含んでいる。2～4は小形の鉢で、1カ所に山形の高まりをもつ。2は無文、3、4は縄文を付し、4の底部周縁には絡縄体圧痕を配す。丸底である。5は小形深鉢で、底部を欠く。口唇断面は切出しナイフ状を呈す。口縁部は無文で、体部上位には絡縄体を押圧する。これは一周する。体部には縄文を付す。底面は丸味を帯びる。7、8は漏斗状の土製品である。注口土器の注口部に類似する。口唇部、体部には縄文を付す。用途は不明である。墳底面から出土した石器には石鏃、ナイフ、スクレイパー、石斧、砥石などがある。これらは、南東壁と北西壁の2カ所に集中する。石鏃(図50-1)、二等辺三角形を呈する。基部は内湾する。ナイフ(2～6)、5、6は一端を欠くが、2、3と同様、幅広の柄が付く

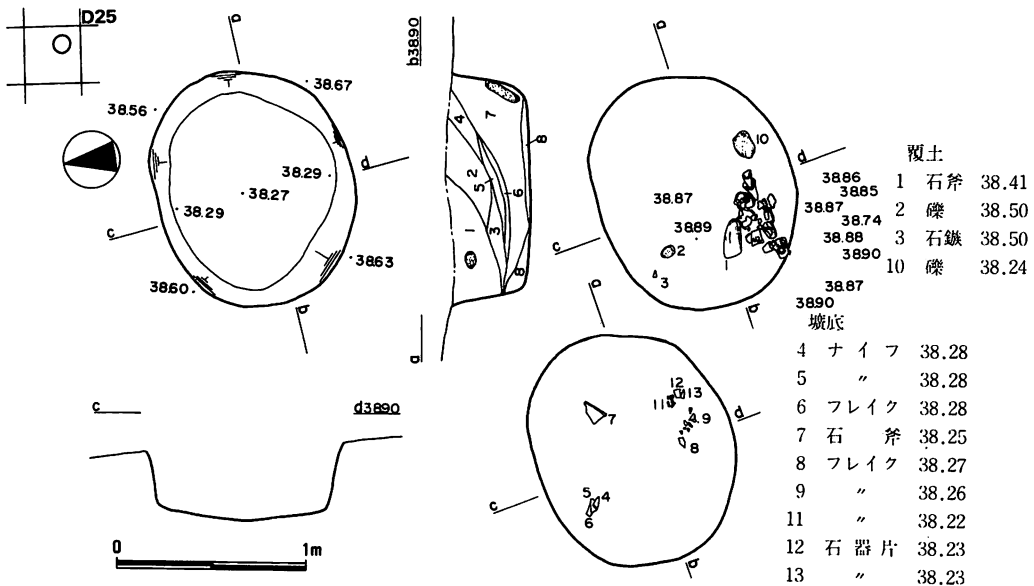


図48 SP-139

ものと思われる。2、3 いずれも先端部における刃部の作出は顕著で、表裏面ともに調整されている。柄部の頂部にも調整剥離がなされ、側断面がくさび形を呈している。この調整は、着装に由来するものであろうか。なお、2の場合調整剥離は表裏面とも先端部に限られる。5は、丸味を帯びた左側縁での調整剥離は表裏面とも入念になされる。6は右側縁にのみ刃部が作出される。4はいわゆる石匙の類で、裏面には一次剥離面を残し、調整はなされていない。7～10は、剥片の一部に加工痕がみられるものである。5、6、9は重なって出土している。石斧(11、12)11は擦り切り手法によってつくられ、12は、ベッキングの手法によってつくられたものである。いずれも刃部の一部に二次的な打撃痕がみられる。砥石(13、14)、砂岩製(13)と軽石製(14)とがある。13の一部に擦痕がみられ、わずかにくぼんでいる。14は、かなり使用されたものと思われる。擦り面が湾曲している。他部分には自然面をよく残している。

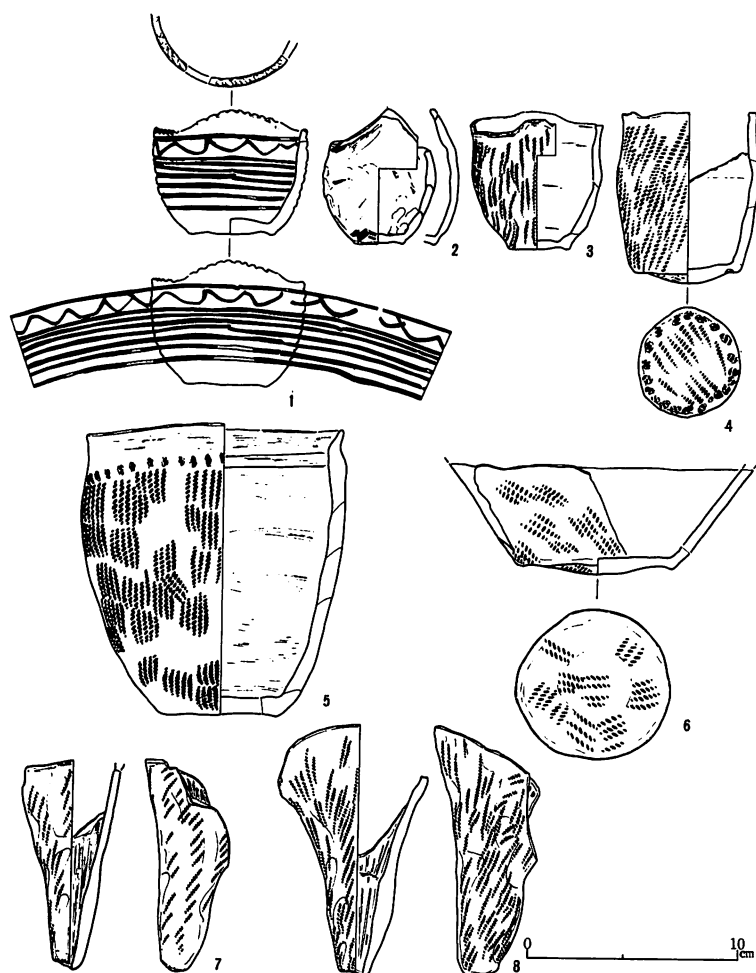


図49 土 器

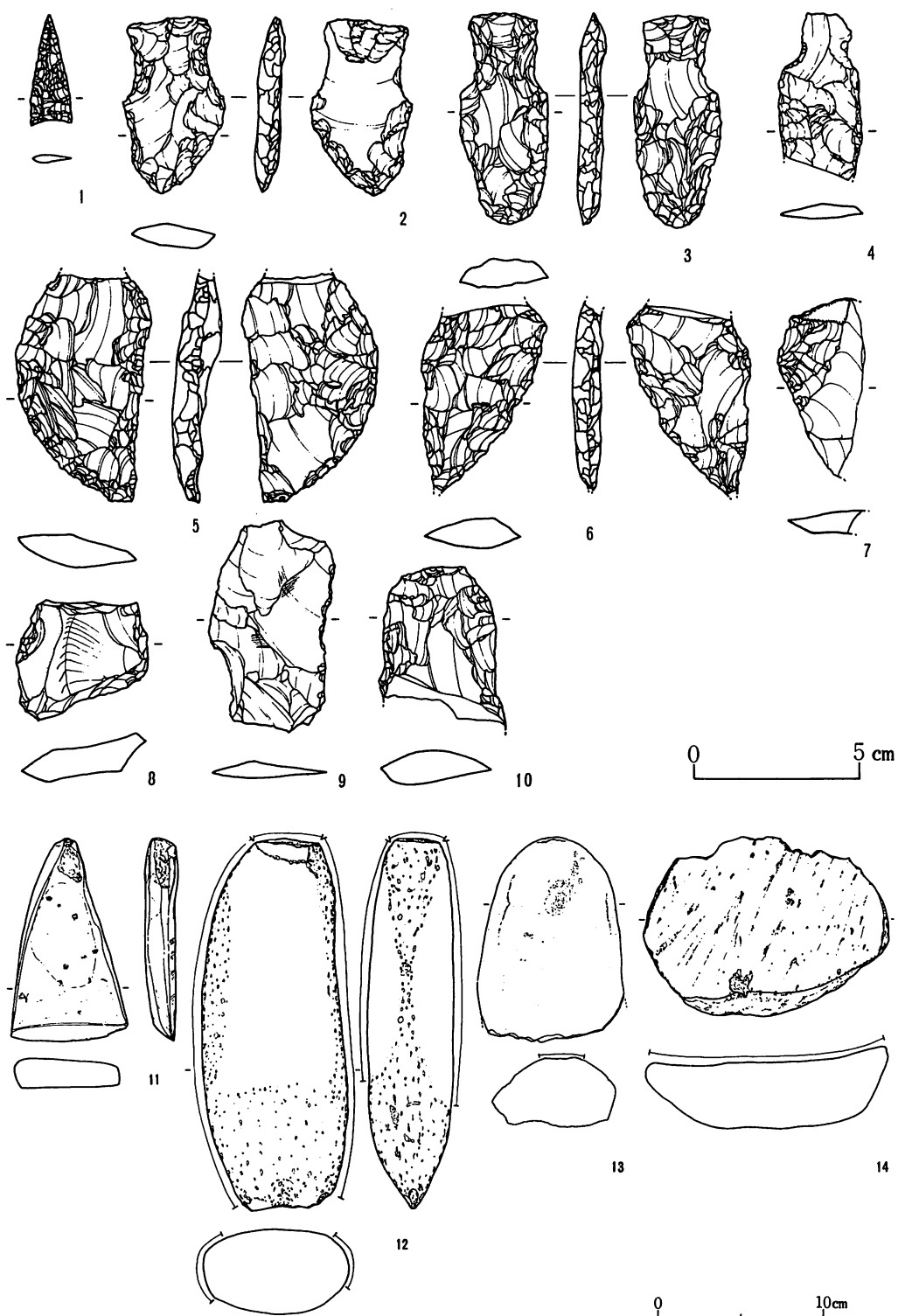


图50 石 器

SP-115 (図51～図53)

位 置 C-25、SP-139に近いところ。

平面形 北東→南西に長い円形を呈する。発見された土墳墓のなかで最大規模のものである。北壁と西壁にそれぞれ小ピットがつくられる。

埋 土 1 黒褐色土(ローム粒が混る)、2 黒褐色土、
3 ローム、4 褐色土(ローム粒を多量に含む)、5 黒色
土

遺 物(図51～図52) 墳底面からは中央部に骨の痕跡が認められただけである。土器、石器、フレイク・チップなどが墳中、墳口から出土している。土器(図51)、いずれも口縁部の破片である。1は曲線文で、口唇に刻みをもつ、地文は縄文である。2、3は平行線文と考えられる。1～3とも鉢形土器と考えられる。石器(図52)、石鏃4点、スクレイパー2点、フレイク・チップ76点である。石鏃、スクレイパーともに破損品である。1は菱形を呈するものと思われる。2は無茎で基部が内湾する。3は有茎で、鏃身と基部の比が1:1になるものと思われる。1～3とも裏面に一次剝離面を残しており、この面の調整剝離は周縁に限られる。4は大半が欠損しており形状は不明である。左側縁の表裏面ともに調整剝離がなされる。5は左側縁にのみ調整剝離がなされる。表裏面の一部に擦痕がみられる。

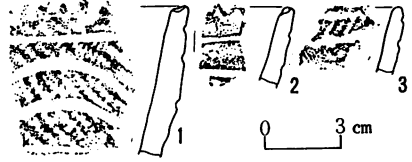


図51 土器拓影図

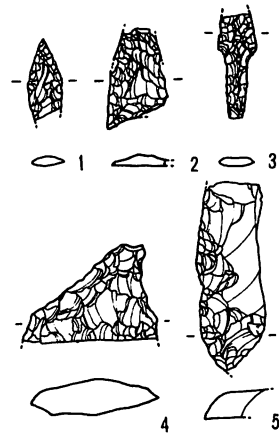


図52 石 器

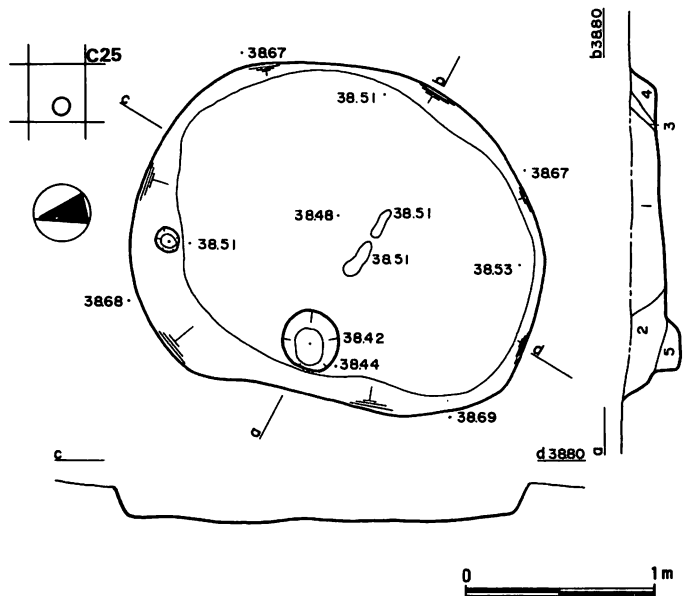


図53 S P-115

SP-146 (☒ 54~☒ 59)

位 置 D-24、SP-142 に南接

平面形 東西にやや長い円形を呈する。壙底面は比較的平坦である。

埋 土 第4層が基本層となり、西から東へ傾斜する。1 暗褐色土（ベンガラが混入する）、2 褐色土（ローム小ブロックが混入）、3 黒褐色土（ローム粒を少量含む）、4 黒色土（径2～3 cmのローム粒が疎に混入）、5 褐色土（粘性が強い）、5層は遺体層と考えられる。

遺物(図56～図59) 土器、石器、コハク製平玉、漆器などが出土した。土器(図56-1～3、図57-1～10)は墳中から出土している(第4層の下位付近)。1、小形深鉢、体部の一部を欠く。口唇から底部まで縄文が付される。底部周縁には絡縄体圧痕がみられ、絡縄体を押し付けたあと周縁の調整を行っているため、圧痕文はつぶれている。丸底を呈する。2は体部の一部が剥落しているが原形をよく保っている。器面の1/4にだけ縄文を付し、残りの3/4はみがかれている。器面にはススが付着している。3は口唇から体部に掛けて縄文が付される。底部には棒状施文具による刺突がなされる。刺突は周縁をめぐるが、底部中央での刺突については方向性がみとめられない。図57-1～10は口縁部～頸部の破片である。8は縄文だけを付したもので口縁部が磨消されている。他は細片であるため、どのような文様構成をなすのかは明確ではないが、1、5、6は連弧文か曲線文、2は変形工字文、3、4、7、9、10は平行線文か曲線文が描かれるものと思われる。墳底面の中央からやや北壁寄りの部分からコハク製の平玉が120数個出土した。これらは連なった状態にて出土している。コハク製玉と同じ位

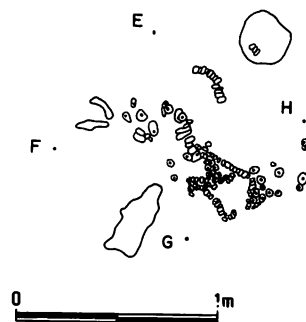
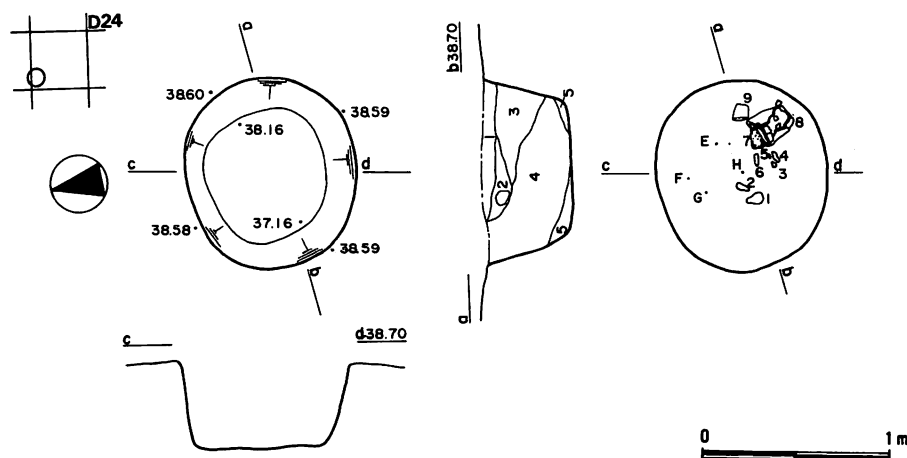


図54 コハク玉出土状況図



☒55 S P-146

置から骨の痕跡が認められた。石器
(図59-1~4)、石鏃(1)は無茎で
基部が内湾する。2はナイフの柄部
で周縁には調整剥離がなされる。石
斧(3)は自然面を多く残すが、刃部
の作出は顕著である。砥石(4)は自
然礫の一部を使用したもので、帯状
の使用痕がみられる。

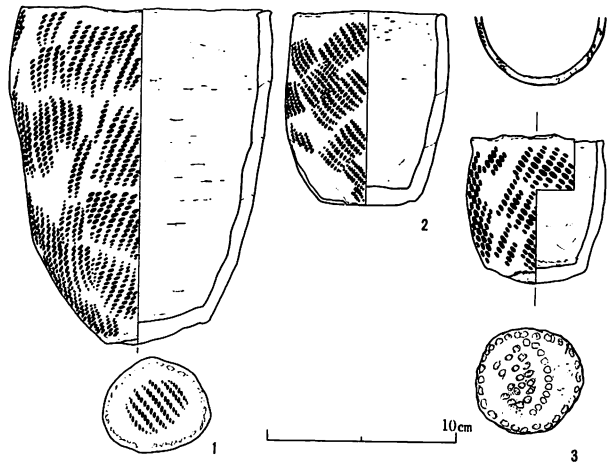


図56 土器

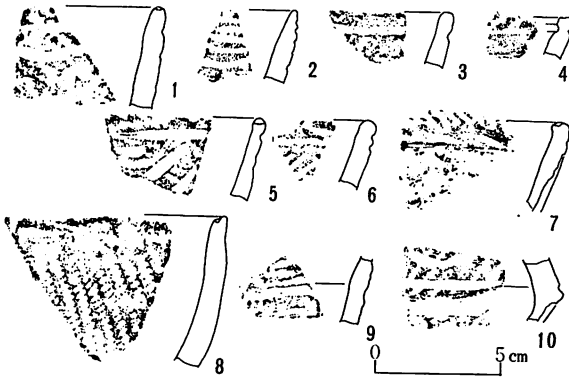


図57 土器拓影图

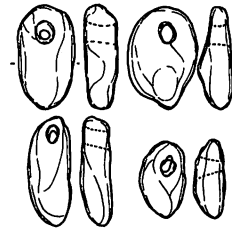


図58 コハク玉

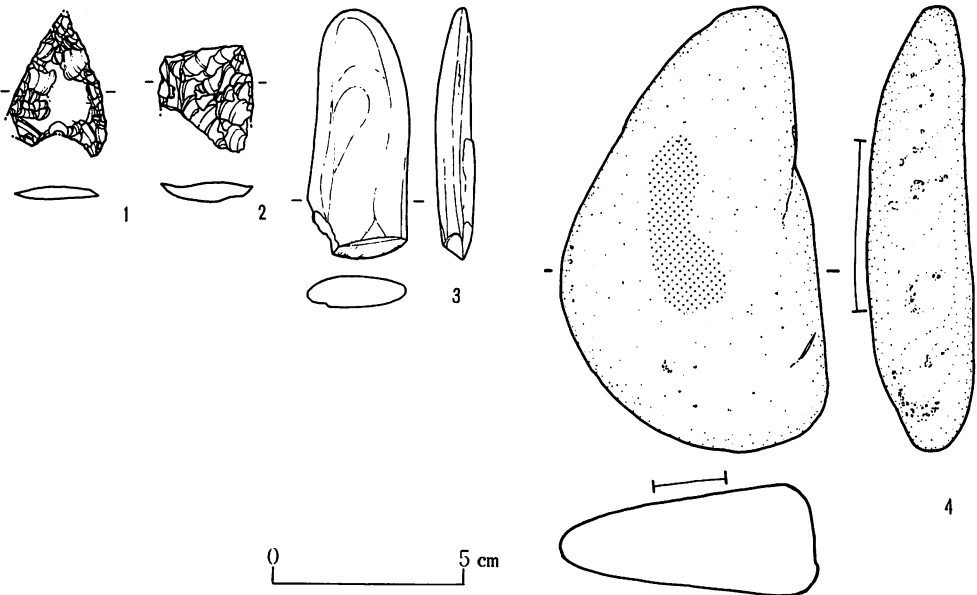


図59 石 器

SP-212 (図60～図62)

位 置 D-26 のやや東寄り

平面形 東西に長いだ円形(類隅丸方形)を呈する。墳底面は浅いボール状を呈する。

埋 土 1 褐色土(径0.5～1 cm のローム粒が混入)、2 ロームブロック、3 黒褐色土、4 褐色土(径0.5～1 cm のローム粒と黒色土を含む)、5 暗黄褐色土(ローム粒と褐色土を同量に含む)、6 暗褐色土(粘性が強い)、6 層は遺体層と考えられる。

遺 物(図60、図62) 墳口から土器、石鏃、ドリル、砥石などが出土している。墳底面からは石鏃、スクレイパー、加工痕のあるフレイク、ボーリングシェル、石斧、砥石などが出土している。これらは東壁付近に集中する。土器(図60)は小形深鉢のミニチュアで、口縁部と体部の一部を欠く。体部から底部には縄文を付す。体部の縄文はたて方向に縞状に付される。石鏃(図62-1～4)はすべて無形の三角鏃で基部が内湾する。4は、側縁に剝離を加えただけのものである。ドリル(5)、尖頭部を欠く、スクレイパー(7～14)は剝片の一边もしくは一部に剝離加工を施しただけのもので、形状は一定でない。9はエンドスクレイパーか。ボーリングシェル(15、16)、SP-187の例と同様、近くの海岸から採集し土器、石器などともに埋納したものである。コハク製玉の一部と形が似ていることから、コハク製玉のかわりをなすものであろうか。石斧(17)は1/2 が欠損している。刃部は磨滅している。砥石(18)、角柱状のもので、2面を使用している。19は中央部がくぼんでおり、浅い溝状を呈する。用途は不明。ハンディタイプの石皿であろうか。

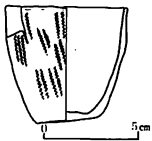


図60 土 器

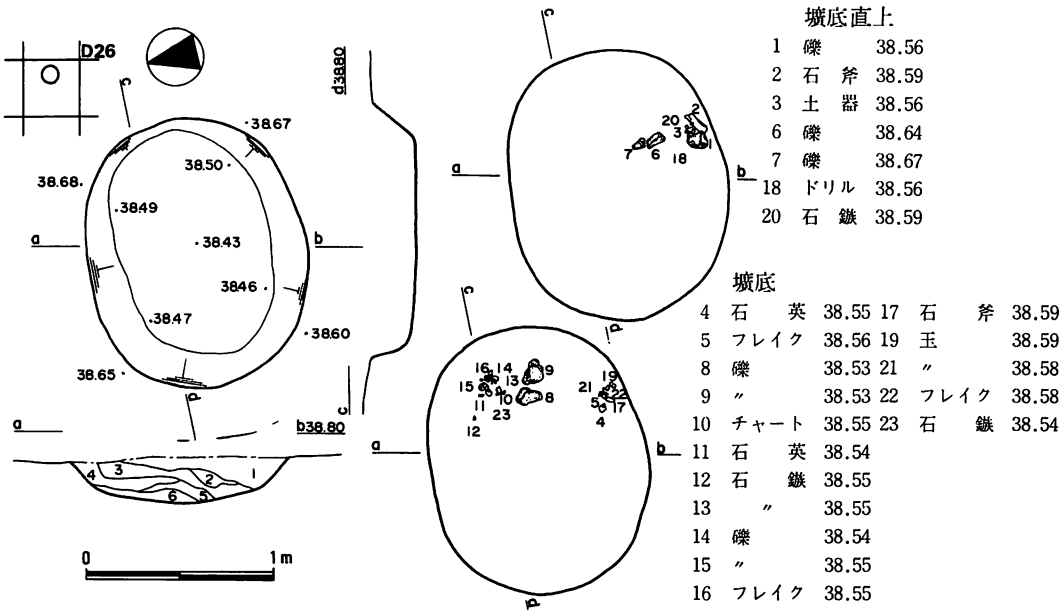


図61 S P-212

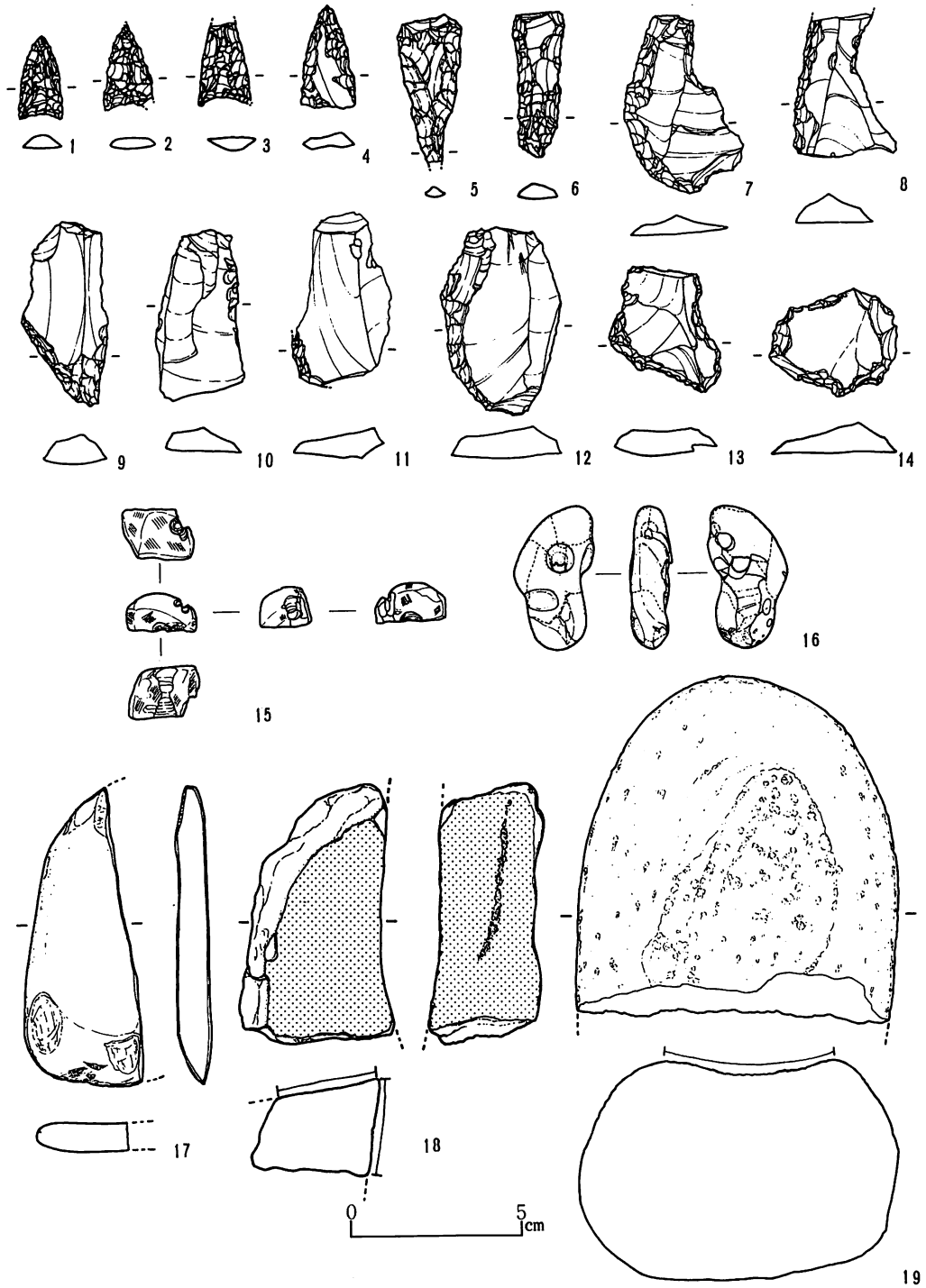


图62 石 器

SP-119 (図63～図64)

位置 C-26の北西コーナー寄り

平面形 東西に長い卵形を呈する。西壁際から小ピットが1個検出された。墳底面は平坦である。

埋土 1 褐色土(ローム粒を混入する)、2 黒褐色土、3 黄褐色土(ロームに褐色土が混る)、墳底面の中央部にベンガラスポットが確認された。

遺物(図63) 墳底面の中央部付近から4点の石鏃がまとめて出土した。他に石鏃が出土した近くから焼骨片が検出された。1 表裏面ともに丁寧な剥離加工がなされている。剥離面の磨滅、擦痕はみられない(肉眼的観察による)。2 表裏面、とくに尖頭部における剥離加工は丁寧である。基部の挟り込みは他のものに比して顕著でない。3 丁寧な剥離加工がなされる。挟り込みは0.6 cmで顕著である。4 基部の一部を欠く。一部に一次剥離面を残している。側縁に剥離加工がなされていない部分がある。尖頭部では表裏面ともに丁寧な剥離加工が行なわれている。これらは、長さ、幅に規格性をもつ。長さは4.2～4.6 cmの間、幅は1.9～2.0 cmであり、長さ/幅の比は0.41～0.45の間にある。また、4点とも実用に供されたような痕跡が見られないことから、埋葬用に製作されたものと考えられる。

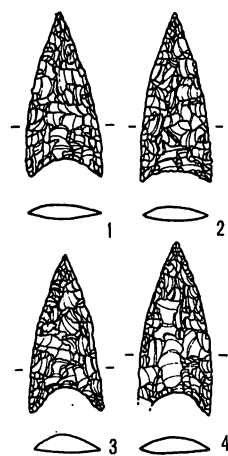


図63 石器

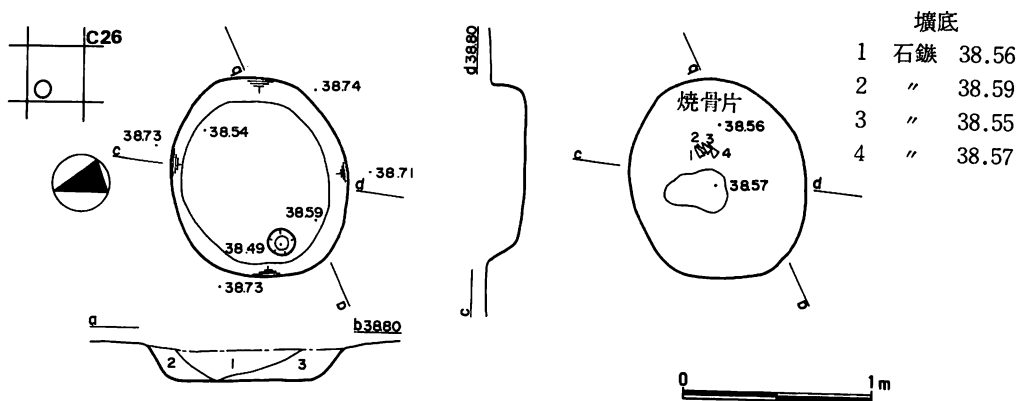


図64 SP-119

り、その部分での擦痕は顕著である。14 は、偏平な縦長の剥片を利用したもので、右側縁の一部に剝離がみられる。これは当初から剝離加工を行ったものではなく、素材の鋭利な部分をそのまま使用して出来た剝離と考えられる。石斧(1~7)、出土数としては本址が一番多い。擦り切り手法(2、5、6)のもの、素材をそのまま利用し刃部のみを作出したもの(1、3、4)、未調整(7)のものがある。1~6 まで刃部には使用痕が認められる。砥石(8、9)、自然礫をそのまま砥石として使用したもので、使用面は片面だけである。



図66 土器拓影図

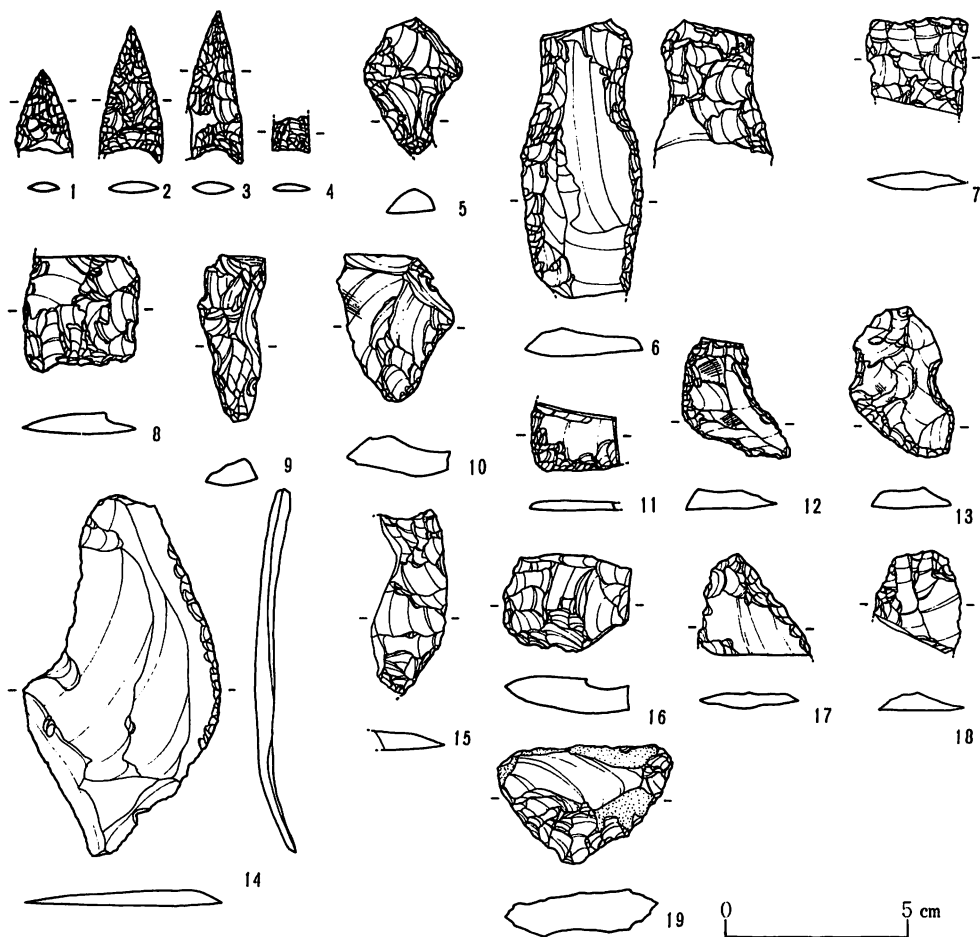


図67 石 器 1



图68 石 器 2

SP-140 (図 69～図 71)

位 置 B-26 の西寄りの部分

平面形 北東→南西に長い卵形を呈する。西壁際から小ピットが1個検出された。

埋 土 1 黒褐色土、2 黒褐色土(径1cmのローム粒を含む)、3 褐色土(ローム細粒とローム小ブロックを含む)、4 ローム、5 褐色土(粒性が強い)、5 は遺体層と考えられる。

遺物(図 70～図 72) 墳口(第1層上面)から鉢(図 70-1)が正立した状態で出土した。鉢は2カ所に山形の突起をもちその部分に穿孔される。口縁には2条の横走沈線がめぐり、体部、底部には縄文を付す。内面は丁寧に磨かれている。墳底面からは土器・石器(図70～71)などが出土した。これらは東壁際に集中する。小形深鉢(2)は、口唇断面が切り出しナイフ状を呈す。底部は丸くなる。体部は無文。3、体部から底部にかけて1/2残存。体部には縄文が付される。内面は磨かれている。4、口縁は大きく外方に広がる。1/3ほど残存。口唇から体部にかけて縄文が付される。内面にススが付着する。5は、平行線によって区画された中に弧線文が描かれる。6は平行線文、7は曲線文の平行線文の組合せ、8は曲線文、9は口縁部が磨消され以下縄文が付される。5、6、8、9は鉢、7は壺と思われる。石器には石鏃、ドリル、たたき石、凹石などがある。石鏃(図 71-1～5)、無茎と有茎がある。無茎のものは基部が内湾する。表裏面の剝離加工は丁寧である。1、2は裏面に一次剝離面を残し、尖頭部の調整は入念である。5は有茎で、鏃身に比べ茎部の方が長くなる、茎部の先端には表裏面ともに擦痕が認められる。6はナイフでひし形を呈し、刃部の作出は錯向剝離による。体部中位以下では表裏面ともに擦痕が認められる。着衣に由来するものだろうか。ドリル(7)、先端部にのみ剝離加工がなされる。8、9は剝片の一部に加工痕ないし使用痕がみられるものである。10はたたき石で両端に敲打痕を明瞭に残す。11は凹石で、数カ所に打撃痕(くぼみ)がみられる。

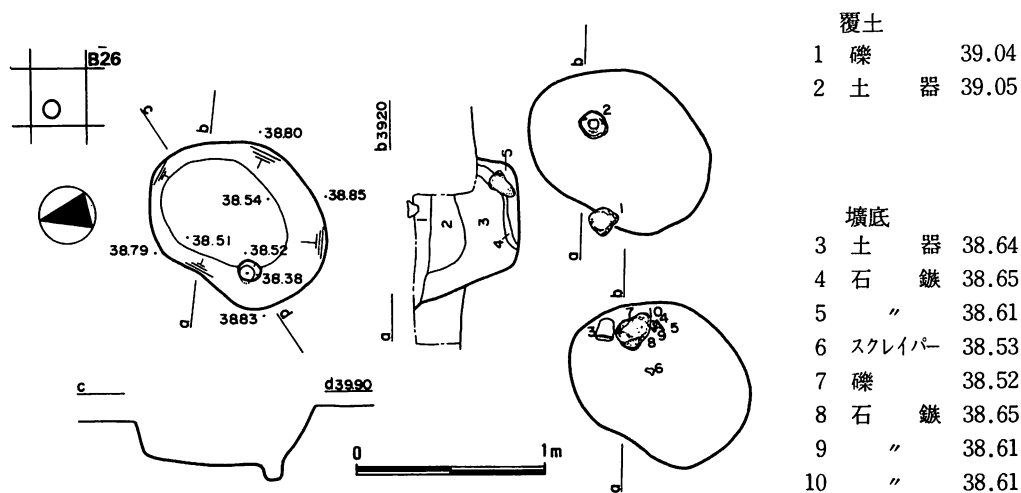


図69 SP-140

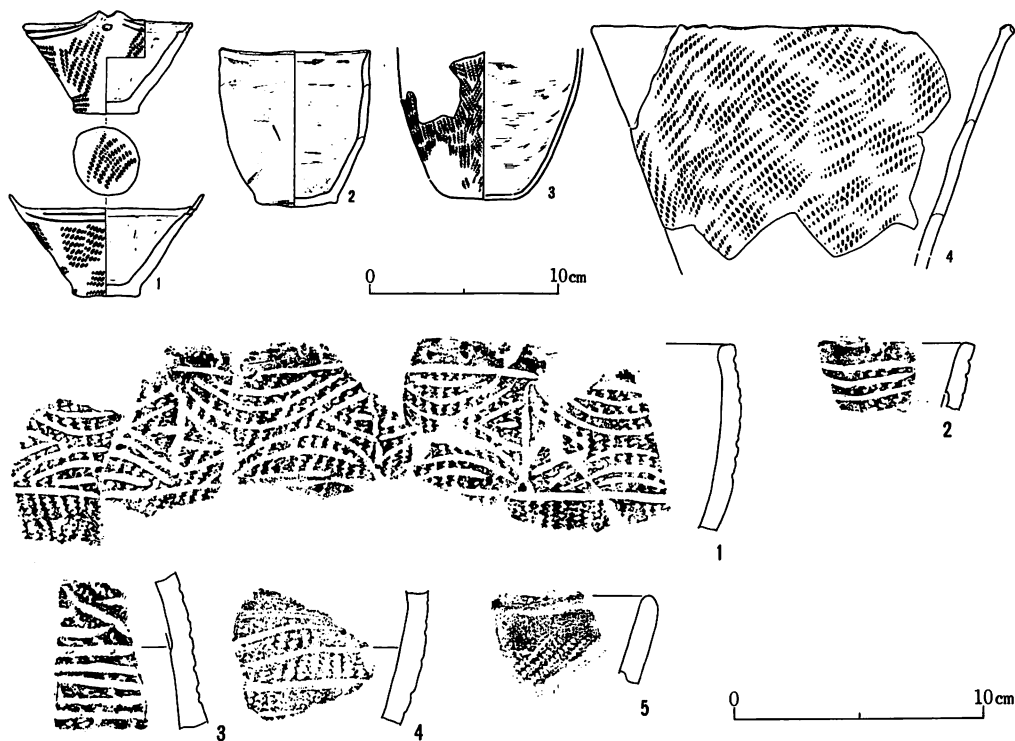


图70 土 器

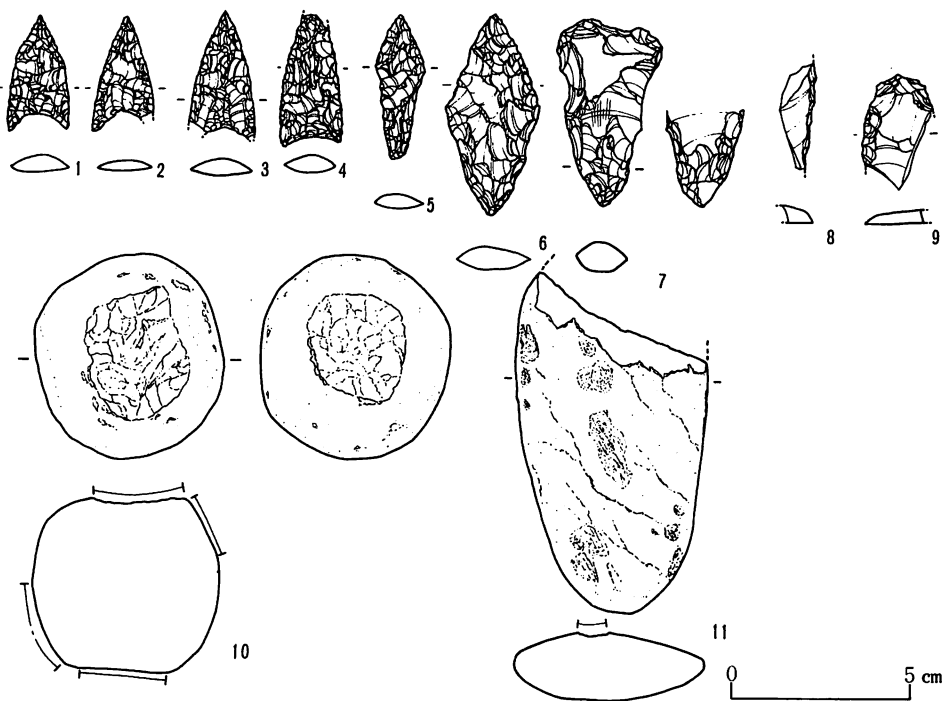


图71 石 器

SP-141 (図72～図73)

位 置 B-26 の北側、SP-140 に隣接する。

平面形 東西に長い不整な円形を呈する（原形は卵形と思われる）。墳底面は平坦である。

埋 土 1 褐色土、2 ローム、3 褐色土(径2～3 cm のローム粒を含む)

遺 物(図72) 墳口から土器片が2点、墳底面の東壁寄りの部分からナイフ(図72)が1点出土している。ナイフは、幅広の柄をもつタイプのものである。

柄部の頂部における剥離は鋭角をなし、側断面がくさび状になる。これは本遺跡出土のこのタイプのナイフに共通することである。やや肩が張り、ゆるやかなカーブを描きながら先端部に至る。先端は破損した後に再調整されたものであろうか。側縁の刃部の剥離面が連続しない部分がある。先端は内湾する。その部分の調整はあまり顕著でない。

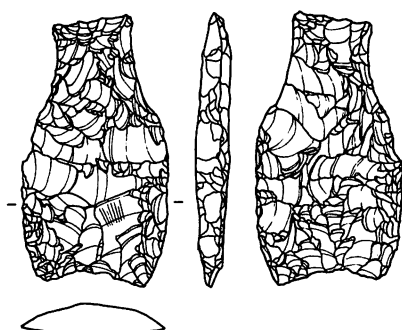


図72 石 器

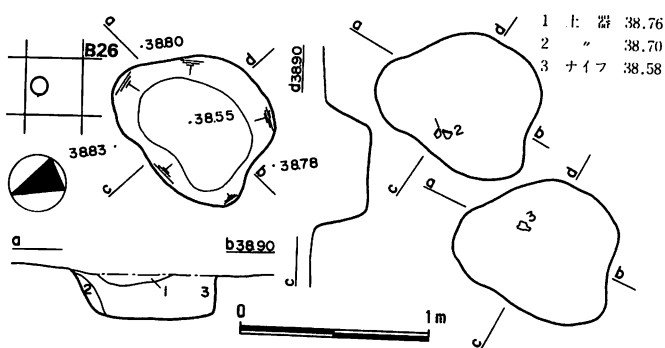


図73 S P-141

SP-117 (図74)

位 置 C-26 のほぼ中央付近から発見された。径が1.5 m の範囲に SP-118、119 がある。

平面形 東南→西北にやや長い卵形を呈する。南西の張り出しは本址とは無関係である。墳底面は平坦である。また、墳底面の東壁、南壁際から小ピットが検出された。

埋 土 1 褐色土(ローム細粒を含む)、2 黒色土(径1～2 cm のローム粒を少量含む)、本址のある周囲は、獣骨片、縄文時代晩期末～続縄文時代初頭の土器片などが最も多く出土したところである。

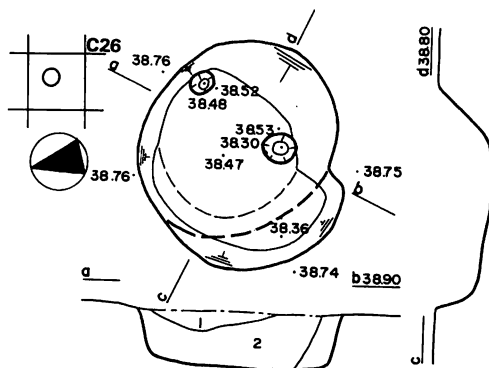


図74 S P-117

SP-108 (図 75～図 77)

位 置 C-28 の南西端

平面形 北東→南西に長い円形(類隅丸方形)を呈す。長軸両端に小ビットが検出された。

埋 土 1・4・6 黒褐色土、2 黄褐色土(ローム粒を含む)、3 黄褐色土(ローム小ブロック・ベンガラを含む)、5 黒色土、7 ペンガラ

遺 物(図 75～図 76) 墳口から土器片(図 75)が出土している。土器は深鉢と考えられ、口唇から体部にかけて縄文を付す。口縁部下位には刺突が加えられる。刺突は貫通せず、内面では突瘤の状態をなす。これは一周するものと思われる。図 76-2 はスクレイパーで、土器とともに出土した。墳底面からスクレイパー(図 76-1)、石斧(図 76-3)が出土した。石斧はベッキングによって器面の調整がなされ、刃部の作出は顕著で、部分的に刃こぼれが見られる。



図75 土器拓影図

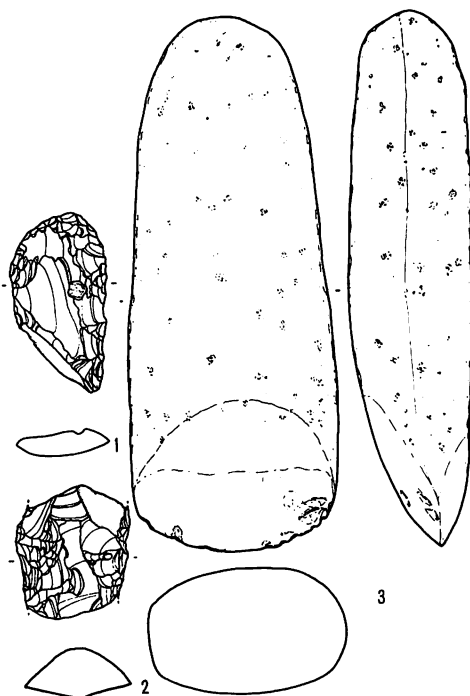


図76 石 器

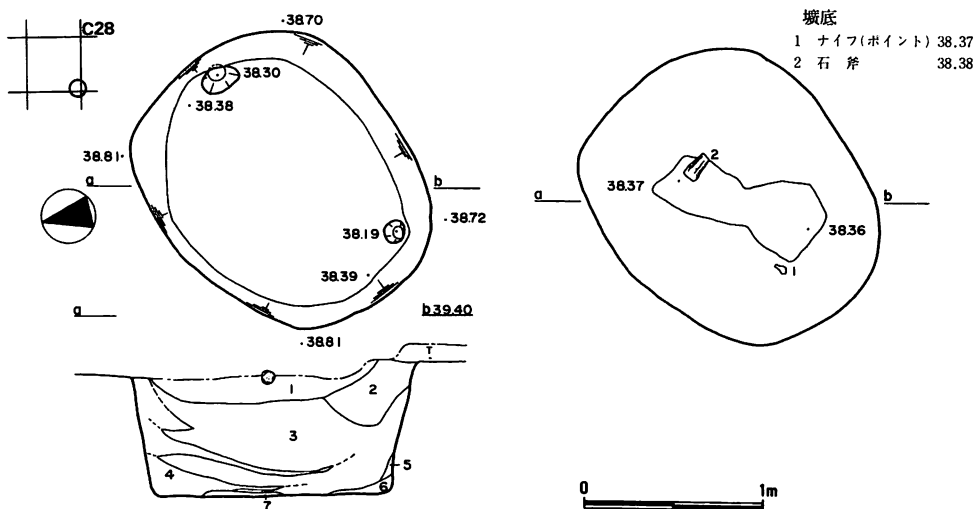


図77 SP-108

SP-118 (図78～図79)

位 置 C-27の東南端

平面形 北東→南西に長い円形(類隅丸方形)を呈する。北壁、西壁際から小ピットが検出された。墳底面は平坦である。

埋 土 1 褐色土、2 黒色土(径2～3 cmのローム粒を多量に含む)、3 黄褐色土(黒色土粒を少量含む)、4 黒褐色土(径2～3 cmのローム粒を含む)、5 黒色土

遺 物(図78) 墳口から柱状に割れた黒曜石の原石が出土した。表面は褐色を呈し、粉がふいたような状態である(スターチフラクチャー)。他に、墳中からフレイクが6点、墳底面に近いところからフレイクが5点出土した。

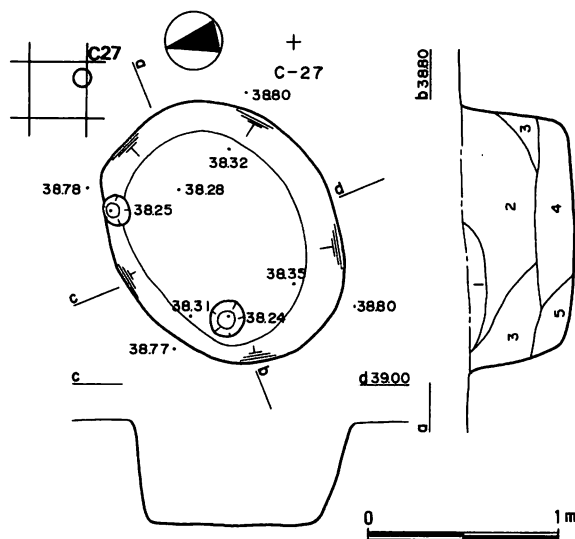
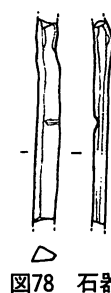


図79 SP-118

SP-65 (図80)

位 置 C-28のほぼ中央部

平面形 小さな円形を呈する。墳底面は平坦である。

埋 土 墳底の北西側にはベンガラ
のスポットがある。ベンガラは10 cmほどの厚みを有する。1 暗褐色土(ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む)、2 黒褐色土(ローム粒を多量に含む)、3 ベンガラ(暗褐色土粒を含む)、4 ロームブロック

本址のあるグリッドは、土器片、フレイクなどの出土が多いところである。

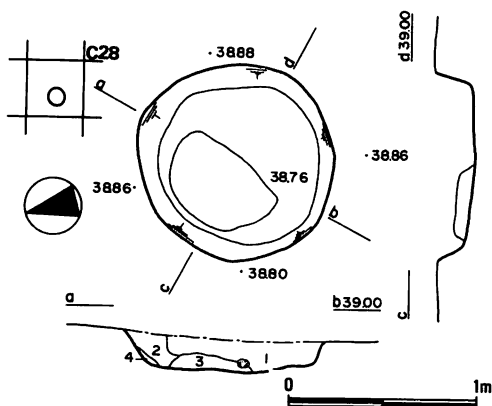


図80 SP-65

SP-129 (図81～図83)

位置 C-27の北コナ部にあり、円形土坑(SP-226)と重複する。

平面形 一部不整な部分があるが円形を呈する。北東壁、南西壁際に小ピットがある。

埋土 1 黄褐色土(炭化物が混る)。

遺物(図82～図83) 土器(図82)は坑口付近から出土した。肩部に列点を付す。坑底面の西壁付近から一部に使用痕がみとめられるフレイクが4点まわって出土した。



図82 土器拓影図

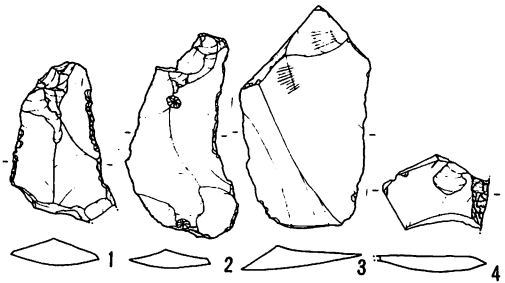


図83 土器拓影図、石器

SP-213 (図84)

位置 D-25のほぼ中央部にあり、SP-139、143、221などが隣接している。

平面形 北東→南西に長い卵形を呈する。坑底面は平坦である。

埋土 1 褐色土、2 黒色土(ローム小ブロックを含む)、3 黄褐色土(ロームがブロック状に混入)、4 黄褐色土(壁崩落土)、5 褐色土(ローム細粒を多量に含む)

坑底の東南部分において人骨と思われるいくつかのスポットが検出された。それとともに土器片が2点出土した。

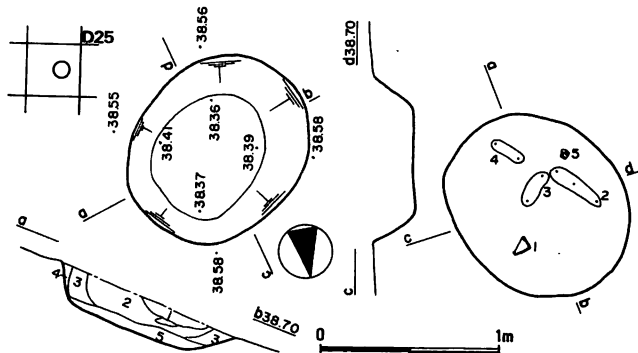


図84 SP-213

SP-120 (図 85～図 86)

位 置 C-26 の西コーナー部

平面形 東西に長いだ円形(類隅丸方形)で、東西壁際にそれぞれ小ピットがある。

埋 土 1 褐色土(ローム粒混り)、2 黒褐色土(ローム粒混り)、3 黄褐色土(径2～3cmのローム粒)、4・6 褐色土(ローム粒多く含む)、5 黄褐色土(ロームと褐色土混り)、7 黒色土、8 黄褐色土(黒色土混り)、墳底面からナイフの柄部が出土した。



図85 石 器

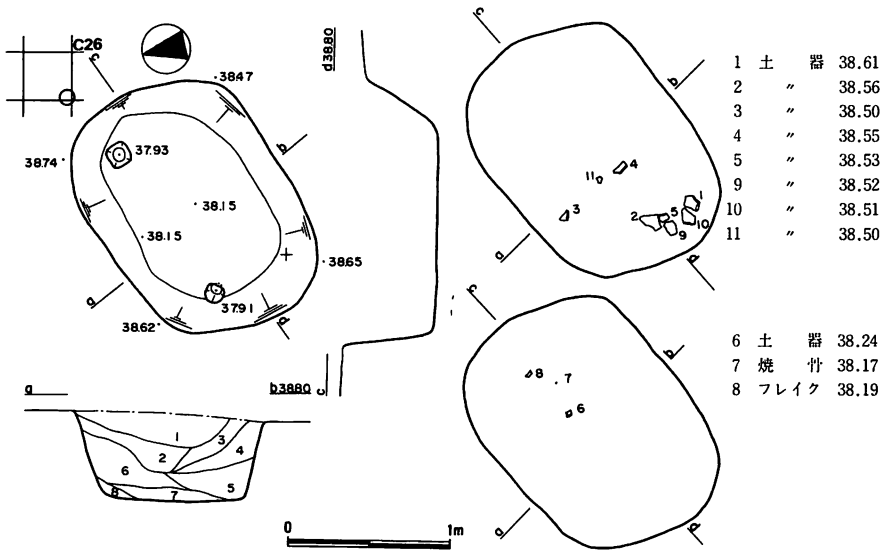


図86 S P-120

SP-223 (図 87～図 88)

位 置 D-26、区域境に接する

平面形 1/3が未発掘部分、東西に長いだ円形(類隅丸方形)を呈するものと思われる。

埋 土 1 黒色土(径2～3cmのローム粒を含む)、2 暗黄褐色土(ローム粒を多く含む)、3 黒褐色土、4 黄褐色土(ローム粒を多く含む)、5 黒色土(ローム粒を多く含む)、6 黄褐色土、7 ロームブロック、8 褐色土(ローム粒含む)。

墳底面から石斧(図 87)が出土。石斧は側縁を敲打によって調整し、刃部には使用痕がある。

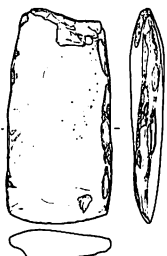


図87 石 器

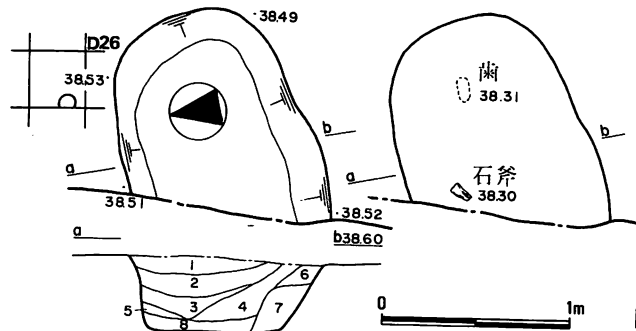


図88 S P-223

SP-220 (図 89)

位 置 B-24 の西寄りのところにあり、
埋壺(SP-135)によって切られる。

平面形 小円形を呈する。土壌内には礫の
集中があった。

埋 土 1 暗褐色土(木炭片、焼獣骨片など
を含む)、2 褐色土、3 ローム、

本址は第V層近くになって確認されたが実
際の掘り込み面は上方にあるものと思われ
る。また埋壺との時間の幅は大差ないもの
と思われる。

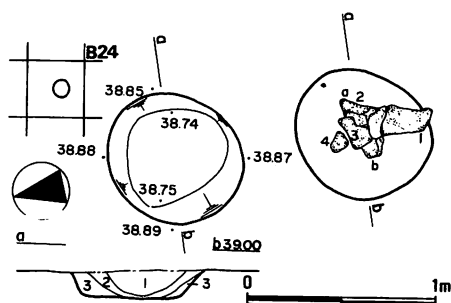


図89 S P-220

SP-221 (図 90)

位 置 D-25、西側区域境に接する

平面形 1/3 ほど未発掘部分があるが、東
西に長い円形(類隅丸方形)を呈すると思わ
れる。

埋 土 1・9 黒褐色土、2 暗褐色土(ロー
ム細粒を含む、わずかに炭化物が混る)、3 黒
褐色土、4 褐色土、5 褐色土(径1cm程の
ローム粒が混る)、6 黒褐色土、7 暗黄褐色土
(径1cm程のローム粒を多く含む)、8 褐色
土

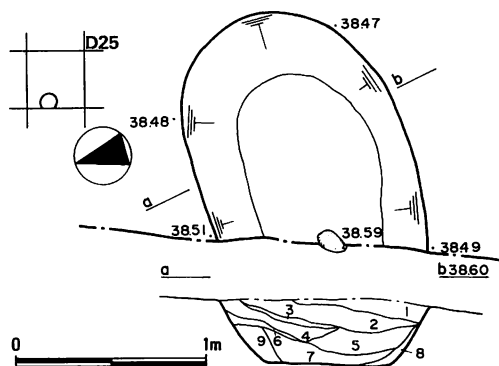


図90 S P-221

SP-222 (図 91)

位 置 D-26 の南側にあり、SP-223 に
隣接する。

平面形 東西に長い卵形。

埋 土 1 黒褐色土(ローム細粒・ベンガラ
粒を含む)、2 暗黄褐色土、3 黄褐色土(褐色
土が少量含まれ、粘性が強い)

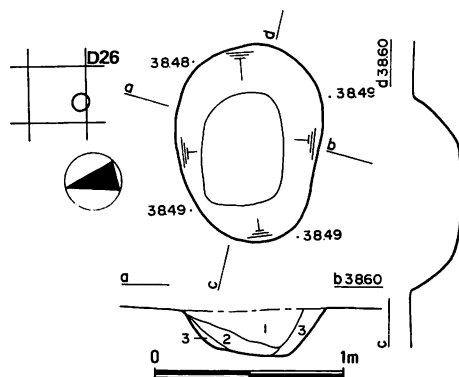


図91 S P-222

SP-39 (図92～図94)

位 置 C-30の西側

平面形 東南→北西にやや長い卵形を呈する。墳底面は平坦である。

埋 土 墳底面に5 cmほどの厚さにベンガラが敷かれる。1 黒褐色土、2 黒褐色土(ローム粒を多量に含む)、3 暗黄褐色土(ローム小ブロックを多く含む)、4 ベンガラ(褐色土を含む)、4の褐色土は遺体層と考えられる。

遺 物(図93～図94) 墳口からは土器、炭化クルミが、墳底面からは石鏃を主体とした石器が出土した。土器(図93-1～4)には舟形、ミニチュア、台付鉢の台部などがある。舟形を中心にし、両脇にミニチュア、台付鉢の台部を配すように出土した。舟形土器(1)は、倒立した状態で墳口の中心部から出土、1/2が第1層中に埋っていた。上面観はだ円形をなし、長軸両端には貼り付けがなされ、この部分だけ高くなる。貼り付けの中央部は穿孔されている。口縁部から体部中位にかけて三条の平行線文が描かれる。地文は無文である。2、3はミニチュア土器で、2は1/2程欠損、口唇部には刻みが入り、口縁下位の一部に穿孔される。口縁は内湾し、体部中位でくの字形に曲る。口縁部から体部上位にかけて二条の平行線文を付す。底部は平坦である。3は無文で丸底を呈する。4は台付鉢の台部で下端には横走沈線を一条めぐらす。内面には朱彩がみとめられる。1の舟形土器の中にスクレイパーが1点(図94-12)入っていた。他に墳口からは石鏃(図94-10)、スクレイパー(図94-13)が出土している。石鏃は有茎で裏面に一次剝離面を残す。表裏面ともに周縁、先端の剝離加工は丁寧である。茎部には表裏面ともに擦痕が認められる。スクレイパー、先端部では表裏面ともに剝離加工がなされる。

墳底面から出土した石器の主体は石鏃(図94、1～9)で、墳底の中央部から北東側に集中する。石鏃はすべて無茎で、基部が内湾する。3、4、6、8の裏面の一部には一次剝離面を残す。1～9とも両側縁、尖頭部の剝離加工は丁寧である。長さは4.2～5.0 cm、幅は1.7～1.8 cmの間、長/幅の比は0.36～0.42の間で、それぞれの石鏃にはそれ程の差は認められない。いずれも擦痕、磨滅痕など見られないことから、埋葬用に製作されたものと考えられる。10は基部を

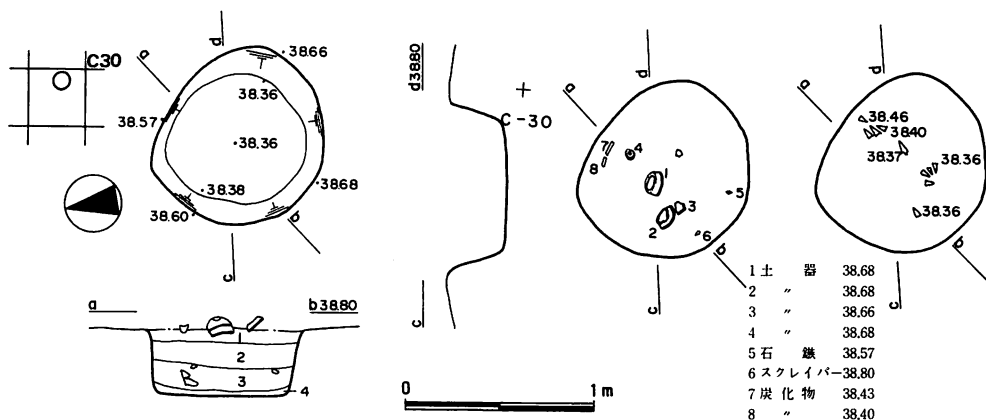


図92 SP-39

欠くが、五角形を呈するものと考えられる。
錯向剝離が認められる。刃部の作出は上位
にのみなされる。ナイフと考えられる。玉
(14) は四角形に面取りを行い、一カ所に
穿孔される。安山岩製である。

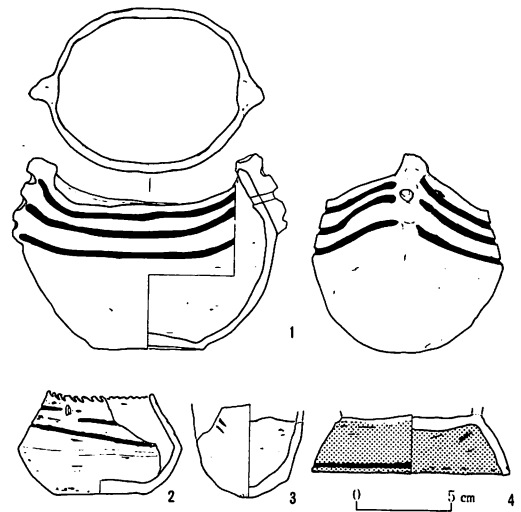


図93 土 器

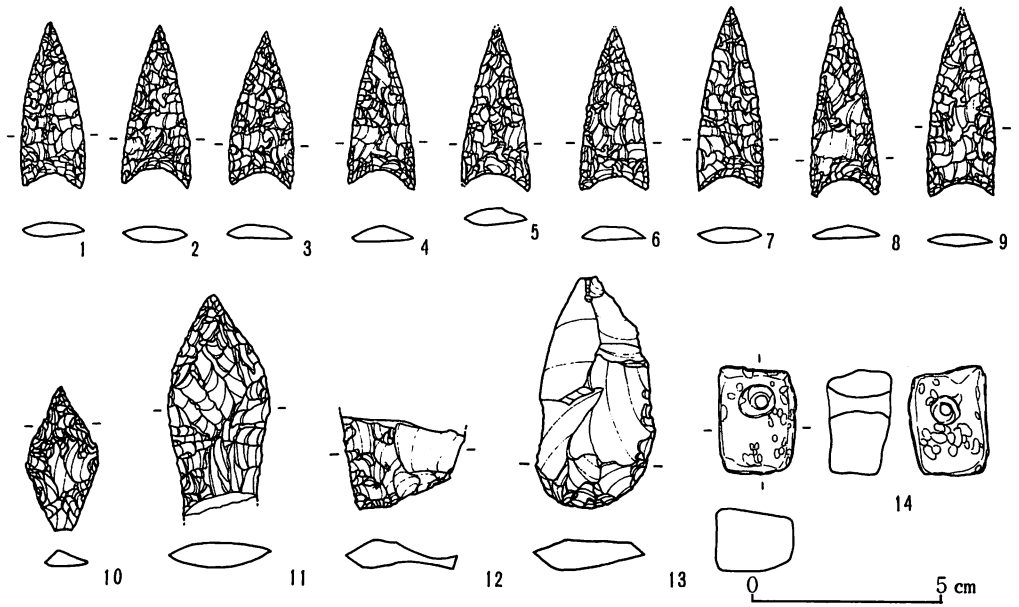


図94 石 器

SP-44 (図95～図97)

位 置 C-32の南側にあり、本跡は土墳墓群の北限にあたる。

平面形 南北に長い卵形を呈する。墳底面の東壁、南壁際からそれぞれ小ビットが検出された。墳底面は平坦である。

埋 土 墳底全面に5 cmほどの厚さにベンガラが敷かれる。また、墳底面から人骨と思われる痕跡が確認された。

1 暗黄褐色土、2 黒褐色土、3 黒褐色土(ローム粒・ローム小ブロックを多く含む)、4、9 黒褐色土、5 黒褐色土(薄く入り込む)、6 黄褐色土(ローム小ブロックを多量に含む)、7 黄褐色土(ロームブロック)、8 褐色土(ローム小ブロックを多く含む)、10 ベンガラ

遺 物(図96～図97) すべて墳口から出土している。遺物は墳口の中央から南寄りに集中する。主体は土器である。舟形土器(図96-1)と深鉢形土器(図96-2)がある。舟形土器は墳口の中央部、第1層中に半分以上埋設され、正立した状態にて出土した。完形品で、上面観はだ円形を呈する。長軸両端に貼り付けによる突起があり、その上位には穿孔がなされる。口縁部は内湾し、体部中位でくびれる。底部は平底である。文様帯を口縁部から体部中位にかけてもつ。上、下に波状文が描かれる。上下の波状文はその頂点が接しながら一周する。頂点間には区画が出来、その区画内には2本の短い沈線が付される。底面にも沈線がめぐる。体部のくびれ部には押し引きによる刺突部があり一周する。刺突の方向は右→左である。口唇から底面までは縄文が付される。また、器面全体に朱彩の痕跡を残す。舟形土器の中には樹皮の炭化したものがつまっていた。深鉢形土器は墳口の南側に、散布し、一部舟形土器に接している。体部中位以下を欠き約1/3残存。口唇部は押圧が加えられ、波状を呈する。口縁部から体部中位よりやや上方にかけて文様帯をもつ。一条の沈線によって画された部分には波状文が描かれるが、口縁部付近の文様はどのような構成になるのかわからないほどくずれている。地文は縄文で、体部全体に付されるものと思われる。ナイフ(図97)は舟形土器の中に入っていたもので、別々に出土したものが接合出来た。幅広の柄をもつタイプのナイフである。柄の頂部は表裏面とも入念な剝離加工がなされており、側断面がくさび形のように鋭角をなす。

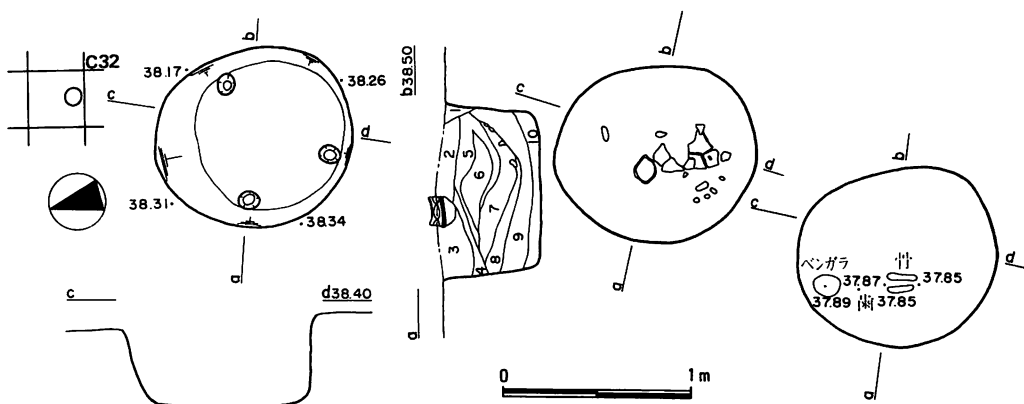


図95 SP-44

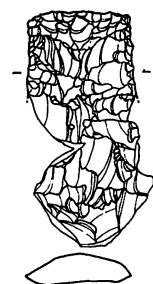


图97 石 器

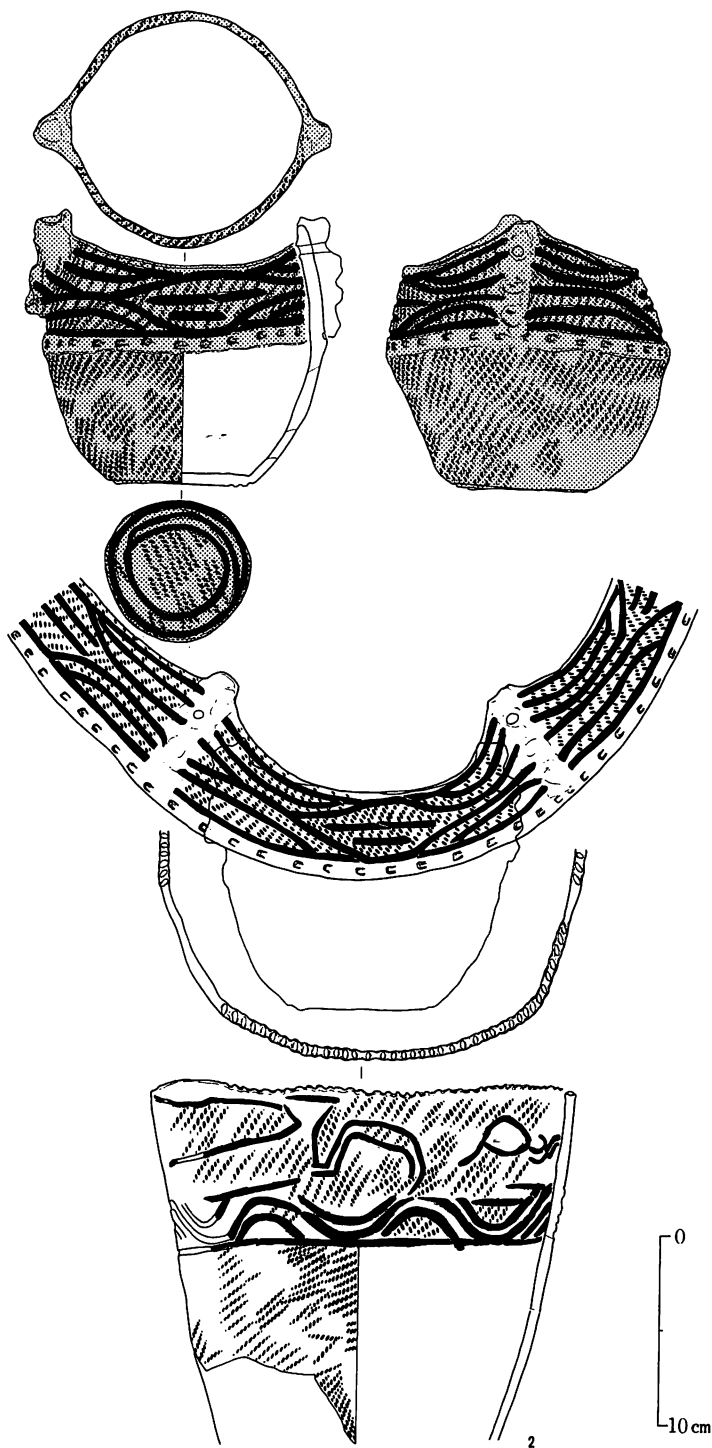


图96 土 器

SP-70 (図 98～図 99)

位 置 C-29 の東北端

平面形 円形を呈する。墳底面はわずかではあるが丸味をおびる。

埋 土 1 暗褐色土(ローム粒を少し含む)、2 黒褐色土(ローム粒を少し含む)、3 暗褐色土(ローム小ブロックを多量に含む)、4 黒褐色土(ローム粒を多量に含む)、5 暗褐色土(ローム小ブロックを少し含む)、6 ロームブロック

遺 物(図 99) 墳底の北壁寄りのところから石鏃が集中して出土した。石鏃は 10 点出土している。すべて無茎で基部が内湾するものである。1、7～9 の裏面の一部には一次剝離面を残している。1～10 とともに表裏面の一部(中央部が多い)に擦痕が認められる。これは着装に由来するものであろうか。ただ、刃部での磨滅痕、使用痕などの痕跡は見られない。長さは 3.0～4.5 cm の間にあるが、3.1～3.6 cm のものが多い。長/幅の比は 0.37～0.54 で 0.5 前後のものが多い。このことからこれら石鏃には規格性がうかがえる。

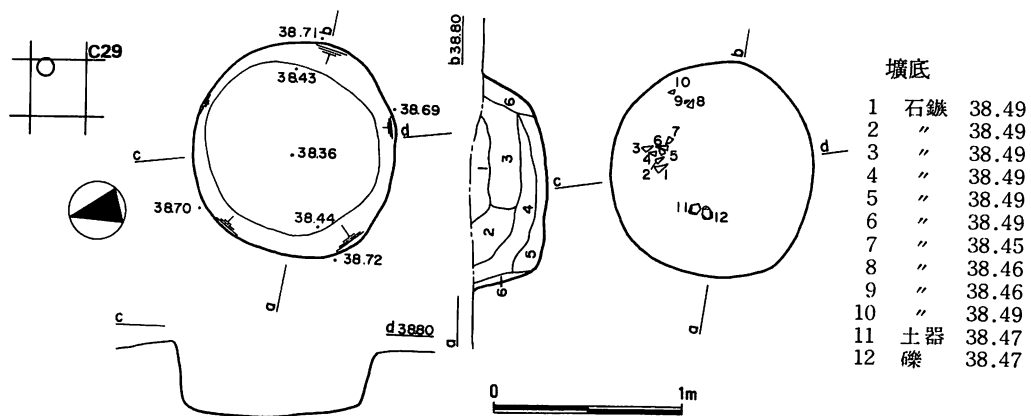


図98 SP-70

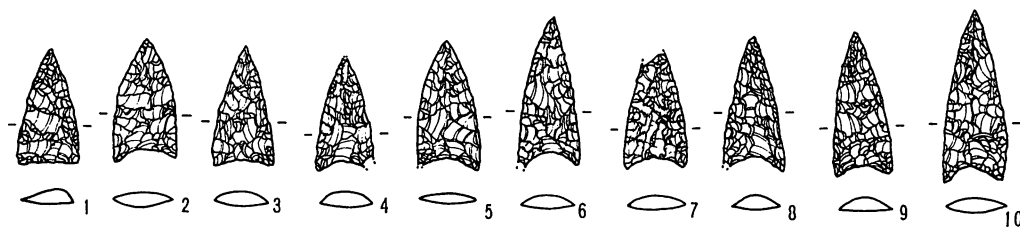


図99 石 器

SP-85 (図100～図101)

位 置 C-30の南西端にあり、Tピット(SP-109)の上につくられている。

平面形 北東→南西に長い卵形を呈する。墳底面は平坦である。

埋 土 墳底全面に5cmほどの厚さにベンガラが敷かれる。1 暗褐色土(ローム小ブロックを多量に含む)、2 暗褐色土(ベンガラ粒を多く含む)、3 褐色土(ローム小ブロックを含む)、4 暗褐色土(ローム小ブロックを含む)、5 暗褐色土(ローム粒を多く含む)、6 黒褐色土(ローム粒を多く含む)、7 暗褐色土(ローム粒・ベンガラ粒を若干含む)

遺 物(図101) 墳底面の中央付近から石鏃、スクレイパー、砥石などがまとまって出土した。石鏃は破損品も含めて6点出土した。有茎(6)と無茎(1、2、4、5)のものがある。無茎のもの基部は内湾する。1～6ともに剥離加工は丁寧である。スクレイパー(7、8)はいずれも側縁の一部に剥離加工を施したただけのものである。砥石(9、10)、2点とも軽石製である。9は中心に溝状のくぼみがあり、右側面にも使用痕が見られる。10は、上下面を使用しており、上面は平坦になっている。

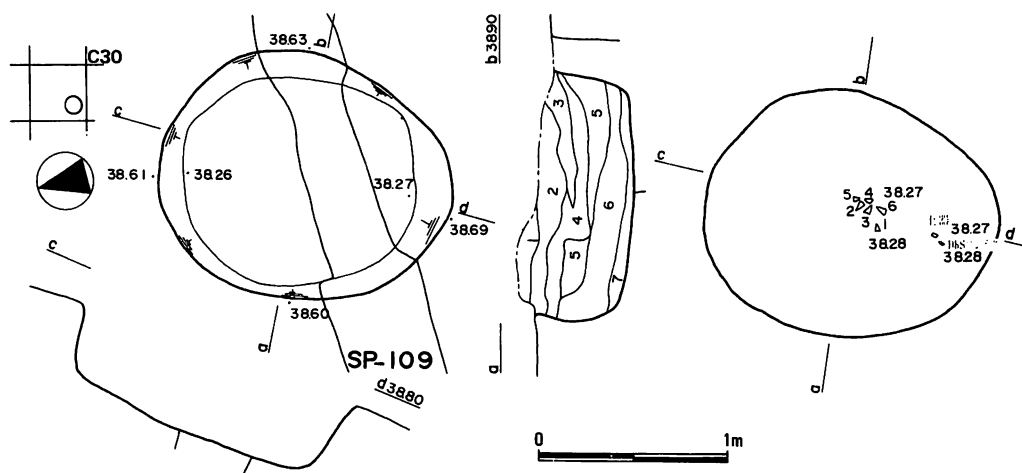


図100 SP-85

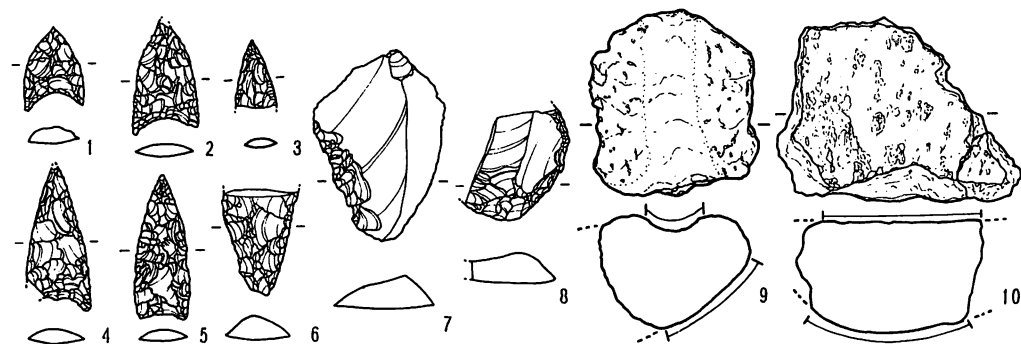


図101 石 器 等

SP-55 (図 102)

位 置 C-13 の西側、SP-92 と接するところ

平面形 だ円形。東壁および南西壁際に小ピットがある。これは墳口から確認されていた。

埋 土 北東壁際に灰白色粘土のスポットがある。墳底面の中央にはベンガラを敷く (6)。

1 黒褐色土(ローム粒、ベンガラ粒を含む)、2、3 暗褐色土(ローム粒・ローム小ブロックを含む)、4 暗褐色土(ローム粒を含む)、5 黒褐色土(ローム小ブロックを含む)。

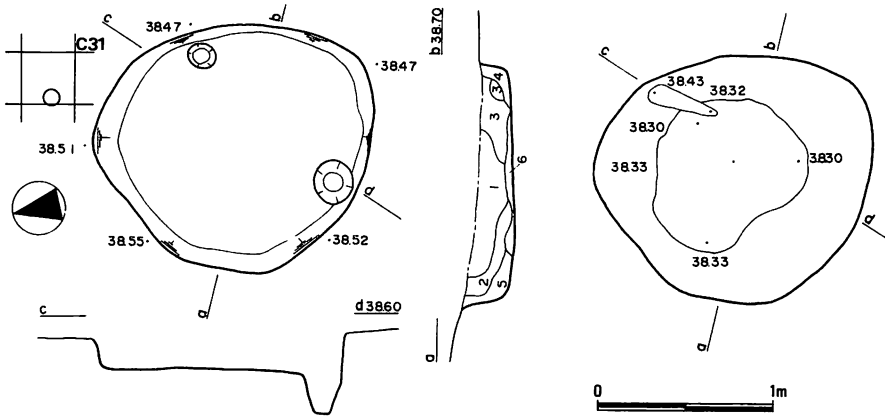


図102 S P-55

SP-92 (図 103)

位 置 D-31、境界線に接するところ

平面形 東西に長い卵形を呈する。北壁で段をなすが本址とは無関係である。

埋 土 墳口面、頭骨の位置にあたる場所に礫を置く。1 黒褐色土、2、5、7 黄褐色土、3 ローム、4、6、9 黒褐色土、8 頭骨、10 褐色土(粘性)で遺体層と考えられる。頭骨の部分にベンガラがある。頭骨の位置、埋土の状態から座葬かと思われる。

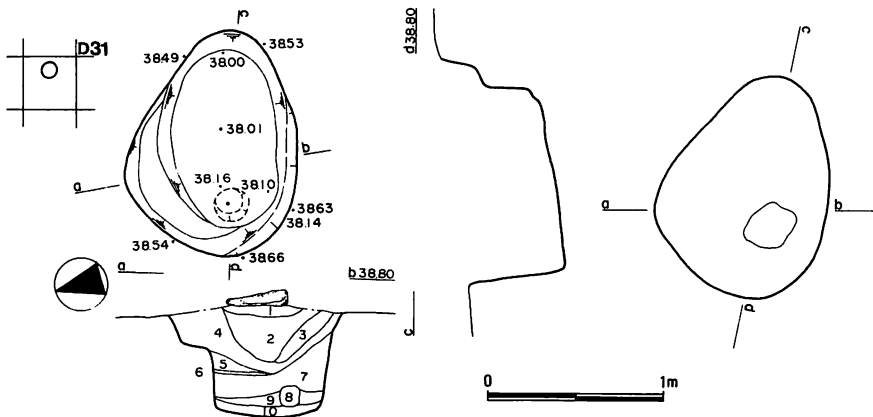


図103 S P-92

表2 土壌墓出土石器一覧表

遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質	遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質	遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質
SP-185	28	1	石 鉄	1.0	Obs	SP-115	52	1	石 鉄	(0.4)	Obs	SP-140	71	4	石 鉄	(3.1)	Obs
"	"	2	"	1.5	"	"	"	2	"	(1.0)	"	"	"	5	"	2.2	"
"	"	3	"	(1.0)	"	"	"	3	"	(0.5)	"	"	"	6	や り 先	7.8	"
"	"	4	"	1.1	"	"	"	4	スクレイパー	(7.2)	"	"	"	7	ドリル	(13.2)	"
"	"	5	"	1.4	"	"	"	5	"	(7.9)	"	"	"	8	ある 銅 片	1.0	"
"	"	6	"	18	"	SP-146	59	1	石 鉄	(2.6)	"	"	"	9	"	3.1	"
"	"	7	砥	35	Sa	"	"	2	ナ イ フ	(2.6)	"	"	"	10	たたき 石	215	石 英
"	"	8	たたき 石	500	And	"	"	3	石 の み	20	And	"	"	11	くぼみ 石	110.5	Gni
SP-187	30	1	スクレイパー	(65.4)	Obs	"	"	4	砥 石	280	Sa	SP-141	72	1	ナ イ フ	23.0	Obs
"	"	2	石 斧	35	Gr-Mud	SP-212	62	1	石 鉄	1.2	Obs	SP-108	76	1	スクレイパー	11.8	Obs
"	"	3	"	163	And	"	"	2	"	(1.0)	"	"	"	2	"	(19.4)	"
"	"	4	雨だれ 石	30	"	"	"	3	"	(1.2)	"	SP-118	78	"	棒 状 原 石	1.8	Obs
SP-190	38	1	や り 先	4.7	Obs	"	"	4	"	(2.0)	Age	SP-129	83	1	ある 銅 片	21.6	Obs
"	"	2	"	(3.8)	"	"	"	5	ドリル	(5.2)	Ha-sh	"	"	2	"	18.2	"
"	"	3	"	(3.1)	"	"	"	6	スクレイパー	3.7	Obs	"	"	3	"	40.5	"
"	"	4	"	4.7	"	"	"	7	"	8.9	Be-sch	"	"	4	"	7.2	"
"	"	5	"	4.9	"	"	"	8	"	9.9	Obs	SP-120	85	"	ナ イ フ	(3.7)	Obs
"	"	6	"	(3.3)	"	"	"	9	"	11.0	Ha-sh	SP-39	94	1	石 鉄	2.8	Obs
"	"	7	ナ イ フ	(7.5)	"	"	"	10	ある 銅 片	10.7	"	"	"	2	"	2.4	"
"	"	8	スクレイパー	8.3	"	"	"	11	"	17.5	Aga	"	"	3	"	2.0	"
"	"	9	"	(4.2)	"	"	"	12	スクレイパー	20.8	Ha-sh	"	"	4	"	23	"
"	"	10	ある 銅 片	8.3	"	"	"	13	"	9.6	Obs	"	"	5	"	(2.6)	"
"	"	11	スクレイパー	(16.8)	"	"	"	14	"	9.4	"	"	"	6	"	(2.4)	"
"	"	12	石 斧	90	"	"	"	15	玉	2.3	硅化木	"	"	7	"	2.8	"
"	"	13	石 斧	(136.0)	"	"	"	16	雨だれ 石	8	Mud	"	"	8	"	2.7	"
"	"	14	砥 石	50	And	"	"	17	石 斧	55	Bl-Mud	"	"	9	"	(2.8)	"
"	"	15	垂 飾	51.5	And	"	"	18	砥 石	105	And	"	"	10	"	2.6	"
"	"	16	砥 石	(430.0)	And	"	"	19	石 皿	630	Tu	"	"	11	や り 先	(10.0)	"
SP-178	41	1	石 鉄	1.4	Obs	SP-119	63	1	石 鉄	2.6	Obs	"	"	12	スクレイパー	(5.7)	"
"	"	2	"	1.4	Che	"	"	2	"	2.6	"	"	"	13	"	6.6	"
"	"	3	"	1.4	Obs	"	"	3	"	3.1	"	"	"	14	玉	12.5	Tu
"	"	4	"	(1.4)	"	"	"	4	"	2.6	"	SP-44	97	"	ナ イ フ	(17.2)	Obs
"	"	5	"	(2.5)	"	SP-54	67	1	石 鉄	(0.8)	Obs	SP-70	99	1	石 鉄	1.5	"
"	"	6	"	(2.0)	"	"	"	2	"	(1.8)	"	"	"	2	"	2.2	"
"	"	7	"	(1.8)	"	"	"	3	"	(1.8)	"	"	"	3	"	1.8	"
"	"	8	ナ イ フ	143	Ha-sh	"	"	4	"	(0.2)	"	"	"	4	"	(1.4)	"
"	"	9	ある 銅 片	6.0	Obs	"	"	5	ドリル	(7.2)	"	"	"	5	"	(1.8)	"
"	"	10	スクレイパー	(7.2)	"	"	"	6	ナ イ フ	(13.1)	Aga-sh	"	"	6	"	1.6	"
"	"	11	ナ イ フ	(5.8)	"	"	"	7	"	(4.0)	Obs	"	"	7	"	(2.0)	"
"	"	12	スクレイパー	1.8	"	"	"	8	"	(7.1)	"	"	"	8	"	(2.2)	"
"	"	13	"	(7.2)	Ha-sh	"	"	9	スクレイパー	4.2	"	"	"	9	"	1.9	"
"	"	14	"	(5.5)	Obs	"	"	10	"	6.0	"	"	"	10	"	2.8	"
"	"	15	"	(6.0)	"	"	"	11	"	(2.2)	"	SP-85	101	1	"	1.1	"
"	"	16	石 斧	48	Gr-Mud	"	"	12	"	(4.8)	"	"	"	2	"	1.6	"
"	"	17	砥 石	120	Sa	"	"	13	"	(7.4)	Aga	"	"	3	"	(0.4)	"
"	"	18	"	(110.5)	"	"	"	14	ある 銅 片	11.8	Obs	"	"	4	"	(2.1)	"
"	"	19	"	8	Pum	"	"	15	スクレイパー	(6.2)	"	"	"	5	"	1.6	"
"	"	20	"	1,310	Sa	"	"	16	"	9.4	"	"	"	6	や り 先	(3.1)	"
SP-142	43	"	石 鉄	1.8	Obs	"	"	17	"	(3.0)	"	"	"	7	スクレイパー	15.4	"
SP-139	50	1	"	0.8	"	"	"	18	"	(2.8)	"	"	"	8	ある 銅 片	5.8	"
"	"	2	ナ イ フ	12.0	Ha-sh	"	"	19	"	15.5	"	"	"	9	砥 石	50	Pum
"	"	3	"	15.0	Che	"	"	68	石 の み	9	Gr-Mud	"	"	10	"	50	"
"	"	4	フ ェ ム 鈎	(5.5)	Ha-sh	"	"	2	石 斧	28	"	SP-189	34	1	矢柄研磨器	200	Gr-Mud
"	"	5	ナ イ フ	(24.6)	Obs	"	"	3	"	53	"	"	"	2	石 斧	1,550	"
"	"	6	"	(15.8)	"	"	"	4	"	68	"	"	"	3	台 石	1,550	Sa
"	"	7	スクレイパー	(17.6)	"	"	"	5	"	496	"	SP-223	87	"	石 斧	233	Gr-Mud
"	"	8	ある 銅 片	18.8	"	"	"	6	"	43.6	"	"	"	"	"	"	"
"	"	9	ある 銅 片	11.0	"	"	"	7	石 斧 原 材	20	"	"	"	"	"	"	"
"	"	10	スクレイパー	(17.6)	Ha-sh	"	"	8	砥 石	109	Sa	"	"	"	"	"	"
"	"	11	石 斧	23.5	Gr-Mud	"	"	9	"	810	"	"	"	"	"	"	"
"	"	12	"	6,145	And	SP-140	71	1	石 鉄	1.8	Obs	"	"	"	"	"	"
"	"	13	くぼみ 石	600	Sa	"	"	2	"	(1.6)	"	"	"	"	"	"	"
"	"	14	砥 石	430	Pum	"	"	3	"	(2.4)	"	"	"	"	"	"	"

4 埋 壺—付図、図 104～図 199—

ここで言う埋壺とは、土壌の中に大型の壺形土器を埋設した状態、つまり土壌と壺形土器がセットになった遺構のことである。

埋壺は47個発見された。それらはいくつかのまとまりを示しながら13～29の間に分布する。土壌墓の分布状態と同様、ほとんどが微高地にある。しかし、土壌墓の分布とは重複しない。

土壌はほとんど場合、埋設する壺形土器の大きさとかけはなれたものではない。壺形土器は肩部まで土壌内に入っている。

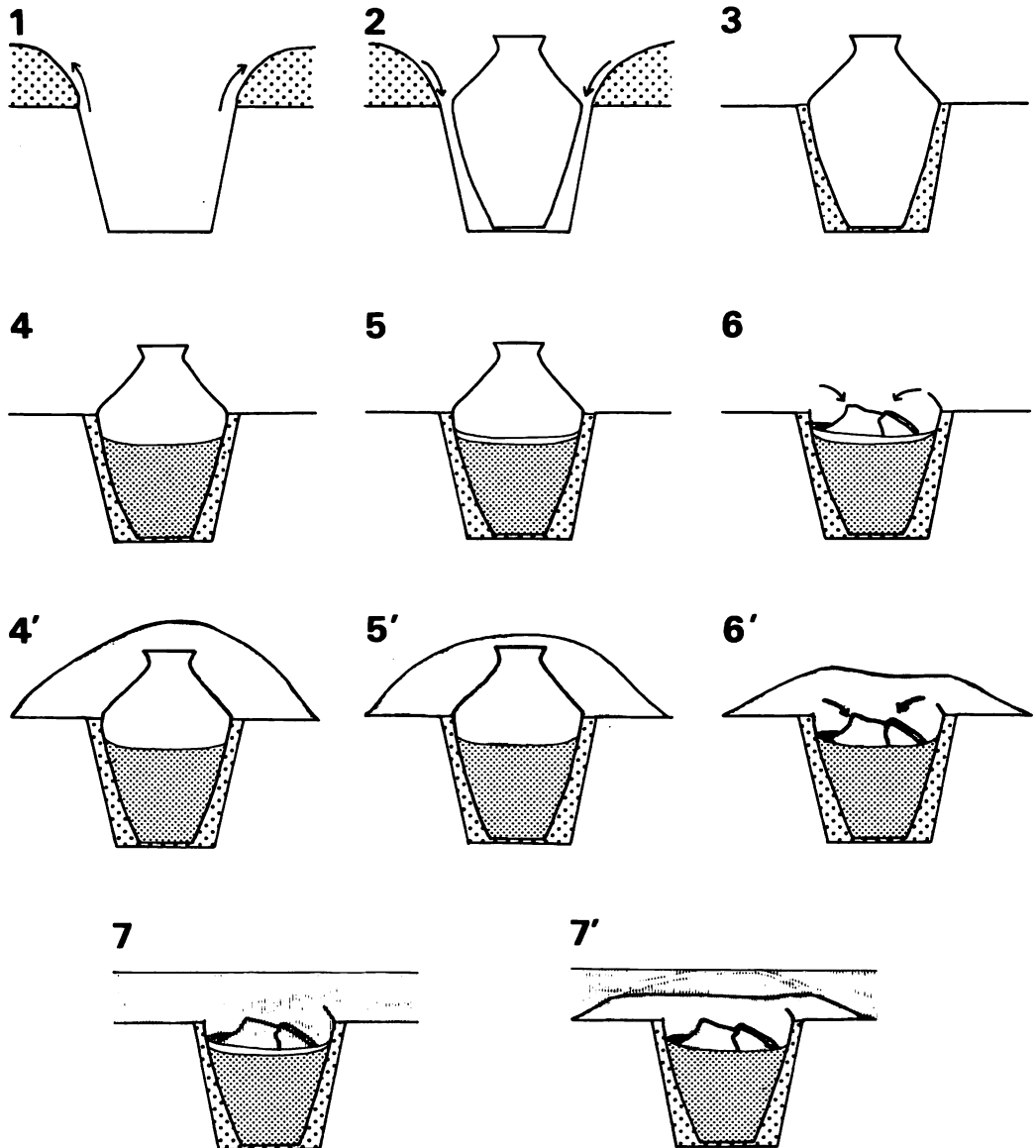
壺形土器の中には意図的に土砂を封入している。このことは、発見されたすべての壺形土器に共通する。封入された土砂には、ロームと黒褐色土を混合したもの、獣骨片、フレイク・チップ、炭化物、小砂利などと黒褐色土を混合したもの、青灰色粘土などがある。この土砂の状態は、土壌墓の埋土、後項で述べる円形土壌群の埋土の状態とも概ね一致する。

壺形土器が土壌に埋設され、崩壊して埋没する過程を復元してみると（挿図a）、1 土壌をつくる。この時掘り上げた土を土壌の際に積み上げておく。2 あらかじめ用意しておいた壺形土器を土壌内に埋設する。3 埋設した壺形土器と土壌との間隙を1の段階で積み上げておいた土砂でもって埋める。埋設の段階で壺形土器の胴下部～底部あるいは土壌底を青灰色粘土で覆う場合がある（SP-2、22、25～27、51、113、123、137、147、168、254）。4 壺内にあらかじめ用意した土砂を封入する。この段階において壺の内面（胴下部～底部）に粘土を貼り付ける場合がある。この封入土は肩部か胴中部までで、口縁部付近まで封入されていた例はない。ほとんどの場合、この段階で埋設は終了する。さらに、4' 壺形土器の露出部分（口縁部～肩部）をロームあるいはローム混りの黒褐色土などで被覆する例がある（SP-113、126、132、136）。1～4までの埋壺が崩壊し、埋没していく過程は、5 壺内に黒色土、黒褐色土など（堆積土）が流入する。6 口縁部の一部が壺内に崩落、ついで頸部、肩部の一部が崩落（この時点で、一度に口縁部が壺内に落ち込む場合もある—SP-25—）、これら壺形土器の破片は封入土より上に堆積する。7 崩落後新たに土砂が堆積する。1～4'の場合、5' 被覆土の一部（中央部付近）が壺内に流入、6' 口頸部、肩部の一部が被覆土とともに崩落、7' 崩落後新たに土砂が堆積する。

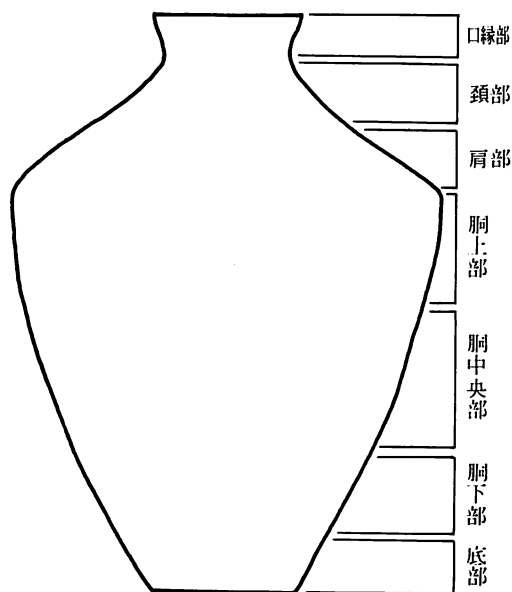
壺形土器は、肩部が張り出し、内傾しながら頸部から口縁部に至る。最大幅は肩部あるいは胴中部にもつものが一般的である。また、ほとんどの場合、胎土には小砂粒を多く含み、ち密ではない。さらに胴下部はすばまり、底部は丸底気味のものが多く安定性を欠く。このことから、この壺形土器は当初から土壌に入ることを前提に製作されたものと思われる。また、胎土の状態から液体を入れるために作られたものではないと考えられる。

壺形土器を、最大幅/器高の100分比で器形の面からの分類を行ってみた。それによると、① 60～69（SP-40～42、45、82、132）、② 70～79（SP-2、24、83、113、126、136、145、184）、③ 80～89（SP-1、23、25、26、84、111、147、166、168、180、182、228、254）、④ 90以上（SP-3、22、125、135、144、253）となり、①は、胴部が比較的細く、器高と幅の差が大きく、②は肩部の位置がやや上方にあり、他の壺形土器に比して器高がある。高さとの差が11 cm

上。③は最大幅を胴中部にもつもので、胴部のカーブが球形に近くなるもの。④は器高よりも幅の方があるものである。埋壺が検出された地点での分布域からすると埋壺は8つのまとまりをもつように思える。しかし、器形の面からそのまとまりを考えると上記の①～④のグループに分かれるだけである。そしてこれらは①のグループを除いて地区的に偏在する傾向はない。むしろ埋壺が発見された区域内全域に分布するようである(図245参照)。



挿図 a 壺形土器埋設・崩壊過程



挿図 b 壺形土器部位名称

表 3 埋壺出土石器一覧表

遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重 量(g)	材 質
S P-3	109		礫	88	Che
S P-22	112		砥 石	288	Sa
S P-25	119	1	スクレイパー	6.7	Obs
"	"	2	"	19.2	"
"	"	3	"	(4.3)	"
"	"	4	砥 石	45	Sa
S P-26	123		砥 石	800	And
S P-207	132	1	砥 石	113	Sa
"	"	2	"	8	Sa
S P-144	134	1	スクレイパー	9.8	Obs
"	"	2	"	(11.9)	"
S P-253	137		スクレイパー	(3.0)	"
S P-182	142	1	砥 石	8.5	Sa
"	"	2	"	180.5	Sa
S P-112	164			20.5	And
S P-134	155		砥 石	100	Pum
S P-123	165		砥 石	145	Sa
S P-113	167		砥 石	625	Sa
S P-145	195		砥 石	285	Sa

SP-1 (図 105、106)

位 置 C-13 の北側

検出状態 壺は正立した状態にて出土。口縁部の一部が欠けていたが頸部以下は完全である。土壌は浅いボウル状を呈しており、壺は土壌の西壁に片寄る。壺と土壌のとの間隙は黒褐色土によって埋められている。土壌底はロームに達する。

壺内土層 1 黒色土(堆積土)、2 褐色土(やわらかくしまっていない。堆積土)、3 褐色土(かたくしまっており、径0.5~1 cmの小砂利と石英碎片および砂質土が混る。封入土)、4 黒褐色土(非常にかたくしまっている。骨片、径0.5~1 cmの小砂利などを含む。封入土)、この場合、2の土砂の流入は比較的短期間のうちに行ったものと思われる。そのため、壺は原形を良く保っている。

壺形土器 最大幅を胴上部にもち、そこから内傾しながら頸部に至る。口縁は頸部からゆるやかに外反するものと思われる。底部は丸底気味のものである。残存部では、文葉帯をもたず頸部は無文、それ以外、底部までは縄文を付す。内面には、樹皮のようなものでナデによる器面調整の痕跡を残す。胎土には小砂礫を多く含んでおり、緻密な状態ではない。概して脆い。

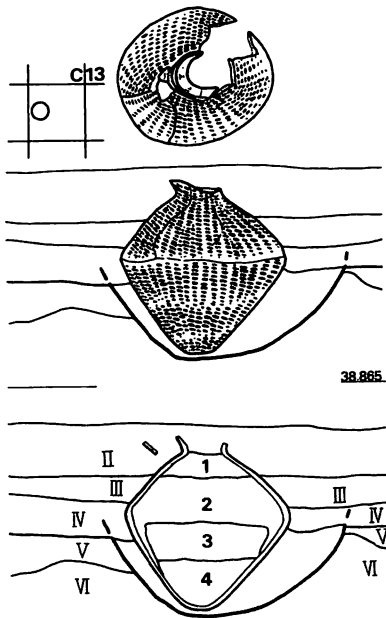


図105 SP-1出土状況図

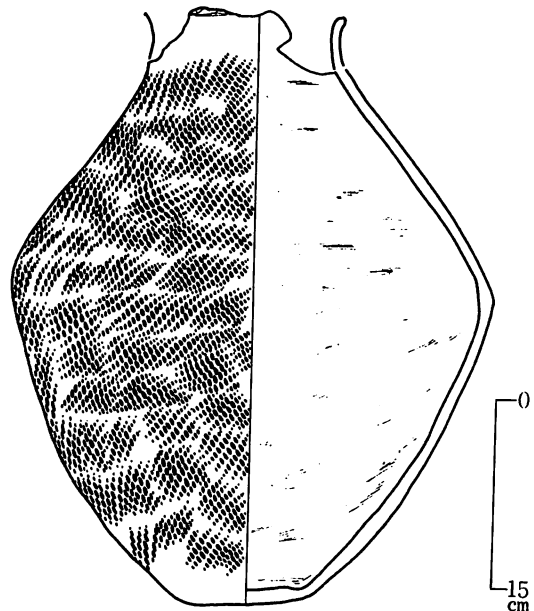


図106 SP-1実測図

SP-2 (図 107、108)

位 置 D-14 の東南端近く

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部から頸部にかけて完全に崩落し、第1層上面につぶれる様な状態にある。肩部から下は土壌内に埋設される。底部には青灰色粘土が付着していた。土壌は40 cmほどの深さで墳底面は丸底を呈する。標準土層の第II層から掘り込まれたものである。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。墳底はロームに達する。

壺内土層 1 黒褐色土、2 最上面(第1層との境)は、小砂利、木炭片、粘土などで覆われる。また、この面から炭化クルミが出土した。暗黄褐色土で、小砂利、焼獣骨片(細片)などが含まれる。なお壺の底部には4~5 cmほど土砂が堆積していた。この堆積土の上面には壺本体の口縁部が入り込んでいる。このことから、①口縁部を意識的に破壊して、2の土砂とともに封入した。②埋設終了後、被覆していた土砂とともにまず口縁部が崩落し、次いで頸部~肩部が崩落した。という2つのことが考えられる。②の場合、被覆した土砂とともに口縁部だけでなく肩部まで一斉に崩落するということも考えられる。前述した検出状態とあわせて考えると②の状態は否定的になる。

壺形土器 口縁部から胴部にかけて部分的に欠く。最大幅を肩部にもつ。肩部は強く張り出す。頸部にかけて内傾し、さらに口縁部に至ってわずかに立ち上る傾向を示す。口縁部はわずかに外反する。肩部から底部にかけては急なすぼまりを示す。底部は丸底気味である。口唇には刻みが付される。また、口縁部から頸部にかけて三段の平行沈線が描かれ口頸部を三つに区画している。さらに肩部にかけては曲線文が描かれるが、曲線文は一部では二段に描かれる。曲線文の下端(肩部)では工字文が描かれ、文様帯を区画している。地文は縄文で、頸部から底部にかけて施文される。胎土には小砂礫を多く含み、概して脆い。

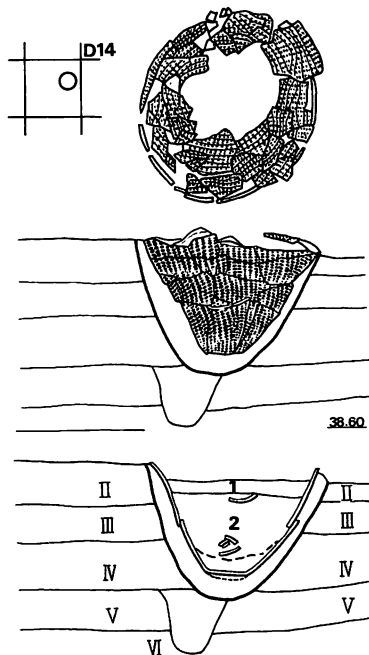


図107 SP-2出土状況図

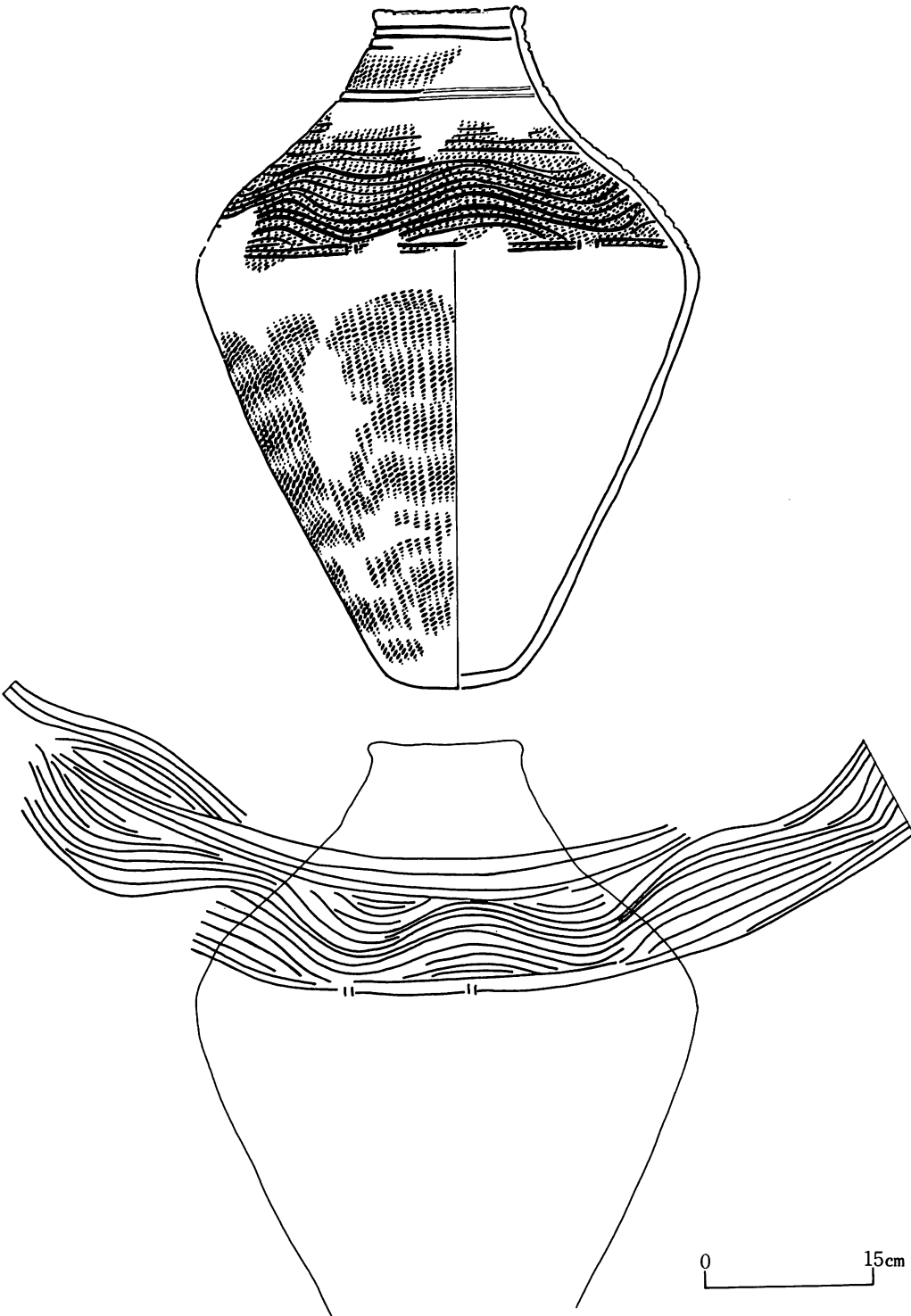


図108 S P -2実測図

SP-3 (図109～図111)

位 置 C-14の北西コーナ付近

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部から頸部にかけて完全に崩落しており、第1層上面を覆っている。口縁部は一部しか見あたらない。崩落の過程で散乱したのであろうか。肩部（あるいは胴上半）から下は土壌内に埋設される。底部は土圧によって幾分押し上げられている。底部の中央部を欠くが、穿孔されたものであろうか。土壌は第II層から掘り込まれたもので底はボウル状を呈する。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。墳底はロームに達する。

壺内土層 1 黒褐色土(やわらかい、堆積土)、2 黄褐色土(フレイク・チップ、小砂利、木炭片、獣骨片などを含む、封入土)。この場合、あらかじめ壺内に土砂が入っていたため肩部以上の崩落は第1層上面でとまっている。

壺形土器 頸部以上を欠く。球形の胴部をもち、最大幅を胴中部にもつと思われる。肩部の上面に一条の沈線があるが、どのような文様構成をなすのかは不明。肩部以下底部に至るまで縄文が付される。内面はナデによる調整がなされる。接合痕から幅5cm程度の粘土紐による輪積成形がなされたものと思われる。胎土には小砂礫を多く含む。壺内からチャート製の小円礫が出土した。使用痕は認められない。

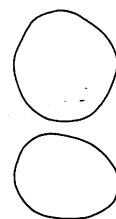


図109 石器

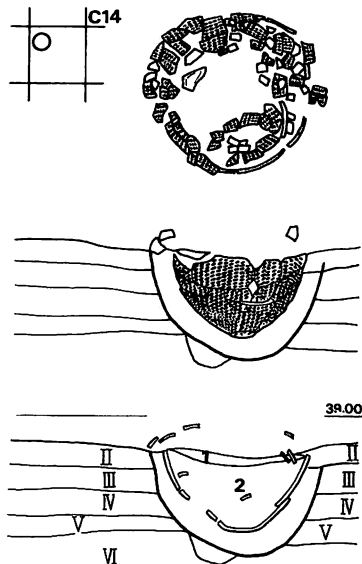


図110 SP-3出土状況図

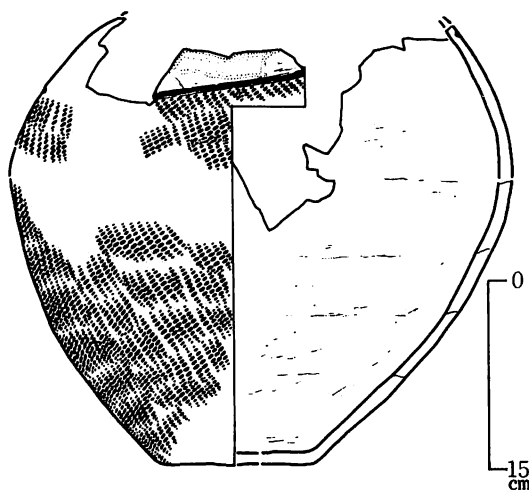


図111 SP-3実測図

SP-22 (図112～図114)

位 置 D-17の北側にあり、SP-23、24に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上は完全に崩落しており壺内の第2層から第1層にかけて破片がみられる。胴中部以下が土壌内に埋設される。胴部下位から底部には青灰色粘土の付着が見られる。土圧によって粘土の部分が内湾する。土壌は25 cmほどの深さで、墳底面は平坦である。第Ⅲ層から掘り込まれたものである。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。墳底は漸移層中にある。

壺内土層 1 暗褐色土(小砂礫、ローム粒を含む)、2 褐色土(土器細片、小砂礫、獣骨片、ローム粒、粘土などが混る)、3 灰褐色土(土器細片、小砂礫、粘土などが混る)、あらかじめ封入されていたのは2、3層で、壺の左側に片寄っている。壺の崩落は口縁部から始まり、ついで頸部、肩部とつぎつぎに崩落したものと思われる。壺内の右側にはこうした破片が積み重なる。壺は右側から崩落し始め、徐々に左側に移っていたものと考えられる。

壺形土器 口縁部を欠く。肩部が張り出し、球形のカーブを描きながら頸部に至る。胴部中位から底部までそれほど長くなく、高さと最大幅の差は4 cm、最大幅/器高の100分比は92とややす詰りの感じを受ける。底部は平底である。頸部下端には工字文が描かれ、肩部以下と区画をなす。文様帯は口頸部にあるものと思われる。肩部以下、胴下半まで縄文が付される。また頸部に1カ所穿孔が見られる。胎土には小砂粒を多く含む。壺の中から砥石(図112)が検出された。砥石は自然礫をそのまま素材として使用したもので、右側縁に使用痕が見られる。

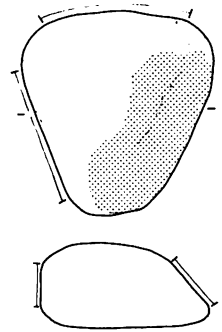


図112 石器

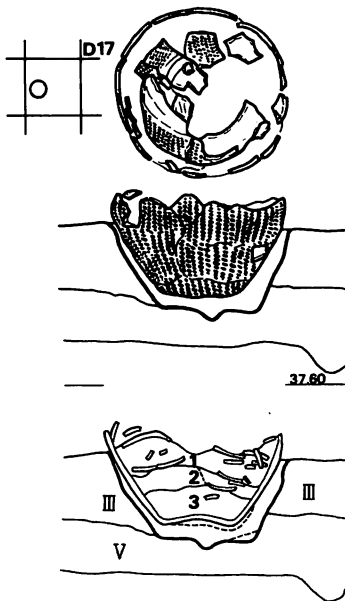


図113 SP-22出土状況図

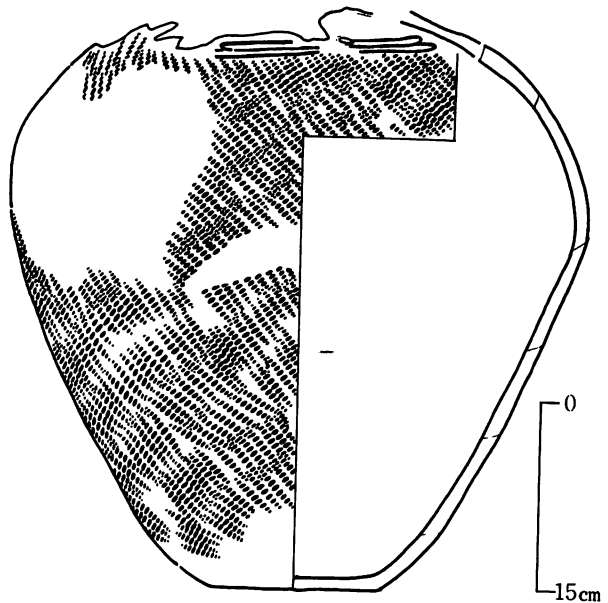


図114 SP-22実測図

SP-23 (図115~116)

位 置 D-17の北側、SP-22に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。土壌の上部はすでに削り取られている。実際は検出時の上場よりも上方に延びるものと思われる。口頸部は完全に崩落しており、口縁部は壺内およびその付近には見あたらなかった。本例も他のものと同様、肩部以下が土壌内に埋設されていたものと思われる。土壌は30 cmほどの深さで、壺底部と墳底部との間は10 cm以上のすき間がある。墳底面は平坦である。第Ⅲ層から掘り込まれたものと考えられる。壺と土壌との間隙は暗褐色土（炭化物、ローム粒が少量混る）によって埋められる。また、墳底と壺の間には土器片と扁平礫が置かれている。

壺内土層 1 褐色土（ローム粒が若干混る。やわらかくしまりが無い、堆積土）、2 褐色土（ローム粒が均質に混る。かたくしまっている。封入土）、3 暗黄褐色土（ローム粒が均質に混り、炭化物、ベンガラが底部付近に見られる。かたくしまる。封入土）。埋設当初壺内には2層と3層があらかじめ封入されており、1層の堆積中あるいは堆積後に口頸部の崩落が始まったものと考えられる。

壺形土器 口頸部を欠く。最大幅の位置はかなり上方にある。肩部がやや張り出し、内傾しながら頸部に至り、口縁部はわずかに立ち上がる器形をなすものと思われる。肩部には二本の横走る沈線が描かれ、胴部と区画する。頸部には曲線文が描かれる。胴部から底部にかけて縄文が付される。内面にはナデによる調整がなされる。5 cmほどの粘土紐による輪積成形による。胎土には小砂粒を多く含む。概して脆い。

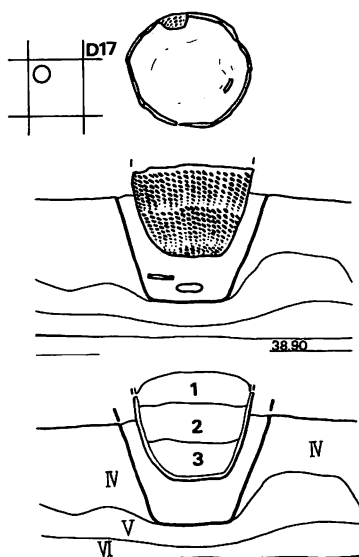


図115 SP-23出土状況図

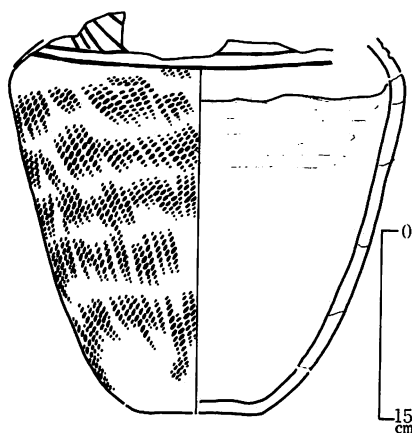


図116 SP-23実測図

SP-24 (図117～図118)

位 置 D-17のはば中央部にあり、SP-22、23、25が近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。口頸部がそっくり壺内に落ち込んでいた。破片は1層から4層まで入り込んでいる。肩部から下は土壌内に埋設される。底部には青灰色粘土が張り付けられる。第II層下面から掘り込まれ底はロームに達する。墳底面は平坦である。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 Ta-bを含む表土、2 黒色土(しまりが無い)、3 暗褐色土(しまりが無い)、4 褐色土(獣骨片、粘土を含む)、5 粘土(褐色土混り)。あらかじめ5層を封入しており、埋設当初は5層以外はなく空洞であったものと思われる。頸部付近の崩落が始まり、それとともに4→3→2→1と順次土砂が堆積したものと思われる。2層までの堆積が終了した時点で口頸部がそっくり落ち込んだものとする。

壺形土器 口縁部の一部を欠く。肩部が張り出し、内傾しながら頸部に至る。口縁部でわずかにくびれて外反する。胴部は徐々にすぼまりながら底部に至る。口縁部は無文でくびれ部には横走る2本の沈線を付し、以下縄文帯をはさみ、2本の粘土紐の貼り付け(バンド)がなされる。そのバンドの間に文様帯をもつ。文様は孤線文を主とする。上下の孤線文は相対する位置にあり、それが接する部分は菱形をなし中に円弧文が描かれる。口唇、バンドには竹管による刺突が加えられる。頸部以下には縄文を付す。

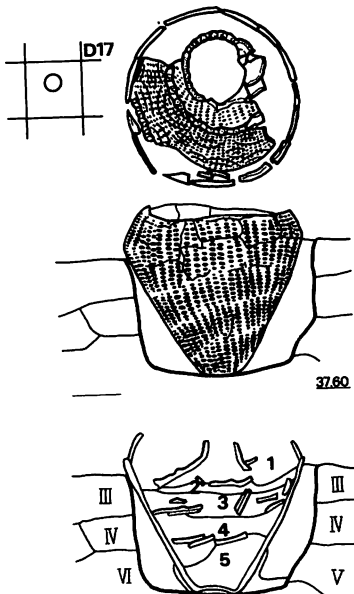


図117 SP-24出土状況図

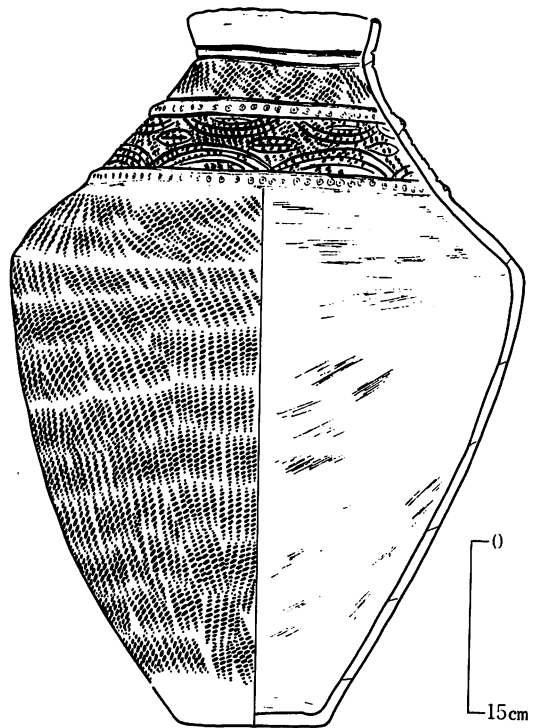


図118 SP-24実測図

SP-25 (図119～図121)

位 置 D-17の東南側にあり、SP-22～24が近接する。

検出状態 正立した状態にて出土。肩部から上は完全に崩落し1層上面を覆う。検出時には胴中部以下が埋設されていたが、調査所見から土壌はもう少し立ち上るものと考えられる。土壌には青灰色粘土が敷かれる。検出時の土壌は浅く、底は南西に傾斜する。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 暗茶褐色土(ローム粒ごく少量混る)、2 暗赤茶褐色土(焼土、炭化物少量混る)、3 暗黄褐色土(ローム粒、炭化物が少量混る)、4 茶褐色土(ローム粒、細砂粒が混る)、5 粘土、壺内には大きな礫が3点封入されていた。とくに上方の礫は壺の器面にそって入れられている。1～5までが封入土と考えられる。

壺形土器 胴上部で張り出し、内傾しながら頸部に至る。口縁部はやや内湾気味に立ち上る。口縁部には7本の平行沈線が描かれる。頸部から胴下部まで縄文が付される。壺内からスクレイパー3点と砥石が1点検出された。スクレイパーは一边ないし両辺に簡単な剝離加工を加えただけのものである。砥石は自然礫をそのまま素材として使用したものである。

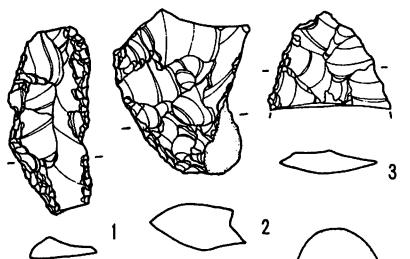


図119 石器

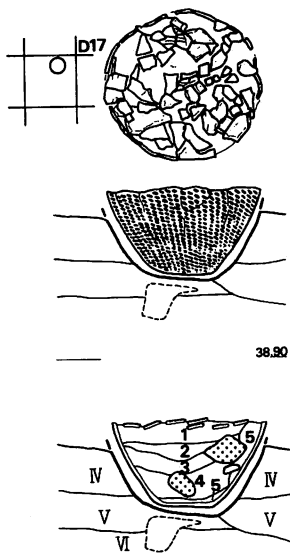


図120 SP-25出土状況図

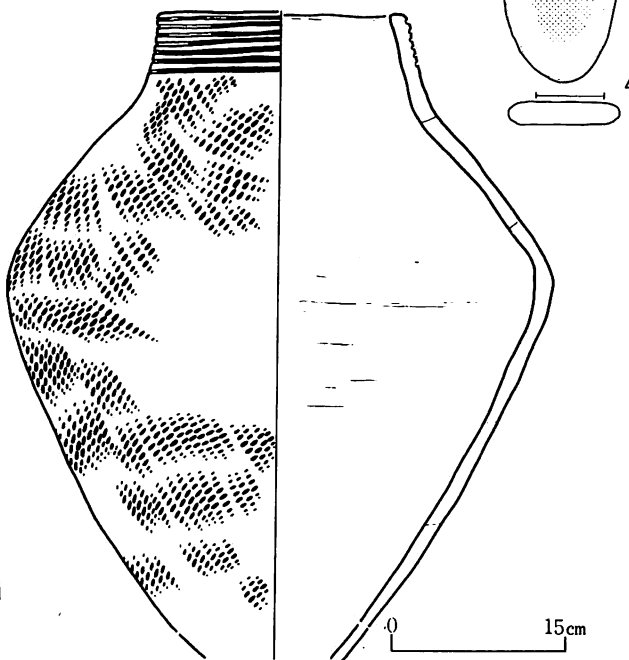


図121 SP-25実測図

SP-26 (図122～図124)

位 置 C-17の東側 SP-27に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。頸部の一部と口縁部が崩落しただけである。この破片は第1層中および上面にのみ入り込んでいる。肩から下は土壌内に埋設される。胴下部から底部にかけて青灰色粘土が付着している。この粘土はあらかじめ壺の胴下部および底部に付着させておいたものでなく、土壌内に敷いていた可能性が強い。なぜなら底面に粘土のブロックが認められる。底部は土圧によって押し上げられ内湾する。土壌は深さ30cm程度で中間でわずかに段をもつ。壺は土壌の一方に密着するように埋設され、間隙は黒褐色土によって埋められる。壺底はわずかに傾斜し、ローム面に達している。

壺内土層 1 茶褐色土(堆積土)、2 黒色土(乾燥している、封入土)、3 褐色土(サラサラしている、封入土)、4 暗褐色土(炭化物を少量含む、封入土)、あらかじめ用意した土砂を4→3→2の順に封入する。埋設当初は肩部から上方は空洞になっていたものと思われる。その後、土砂の流入とともに口頸部の崩落が始まる。本例の場合、土砂の流入が比較的早かったのか、あるいは土器の崩落が遅かったのかにより、頸部までの完全崩落はまぬがれている。

壺形土器 口縁部と頸部の一部を欠く。最大幅を肩部付近にもつ、肩部は張り出し内傾しながら頸部に至る、さらに口縁部は内湾気味に立ち上る。口辺部から頸部上位には横走沈線をめぐらし区画された中に曲線文を描くものと思われる。以下2本の粘土帯(バンド)を付す。バンド上には斜めからの刺突が加えられている。上下二本ずつの平行する沈線に区画された中には、曲線文と横走る短い沈線とが組合された文様が描かれる。頸部文様帯から胴下部、さらに底部には、縄文が付される。図124の下段の図は文様展開図である。これによると、この壺

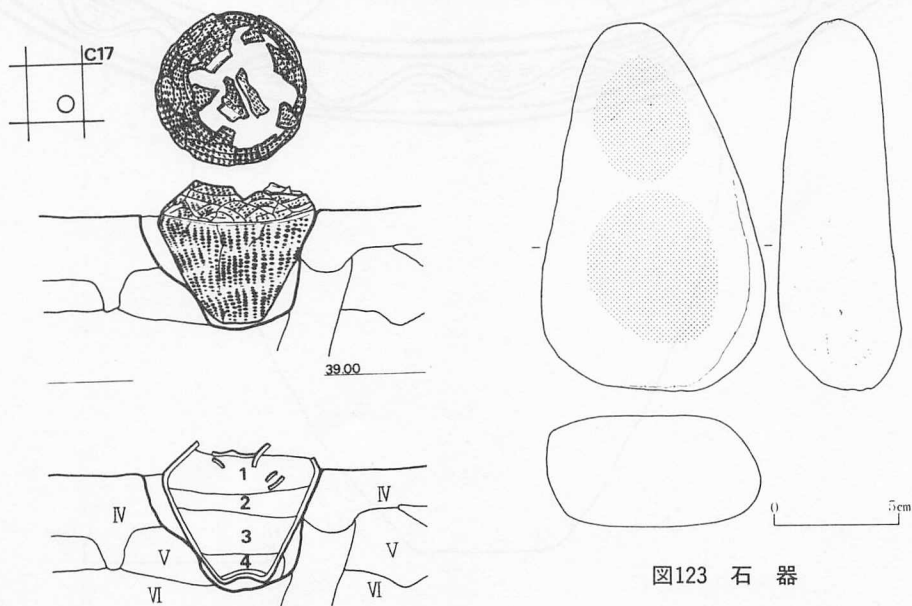


図123 石 器

図122 SP-26出土状況図

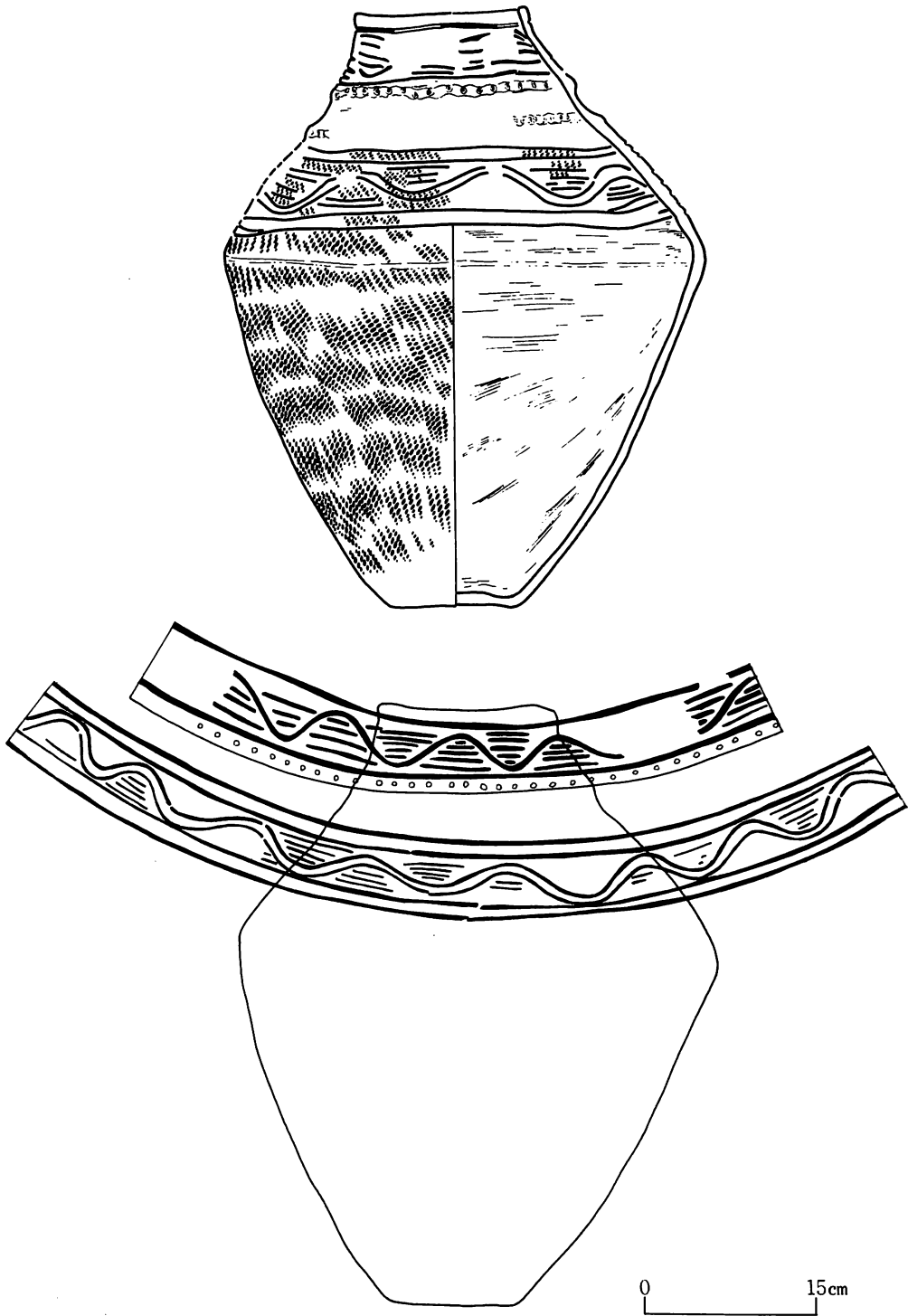


图124 S P-26実測図

には頸部中位の無文帯をはさんで、口縁部と肩部付近には同じ文様を描く文様帯が2か所ある。内面はナデによる器面調整が行なわれる。胎土には小砂粒を多く含む。

壺の中から砥石が検出されている。砥石は自然礫をそのまま素材として使用しており、表面の中央部および頭部付近に使用痕が認められる。

SP-27 (図125)

位 置 C-17の東寄りのところ

検出状態 壺は正立した状態で出土した。胴下部から底部にかけてしか残っていない。土壌は壺の底部よりもさらに深く掘り込んである。上方では壺と土壌との間隙はなくなり、ほとんど壁に密着するものと思われる。壺の底部には粘土が付着している。底部は土圧により押し上げられ内湾する。

壺内土層 1 褐色土(炭化物、小砂礫などが混る。粘性がありややしまる。封入土。)土壌内の土は暗褐色土(乳白色の粘土混り)で粘性がある。

検出時に壺はその形をとどめず整理過程においてもその復元は不可能であったため、ここに実測図は掲載していない。

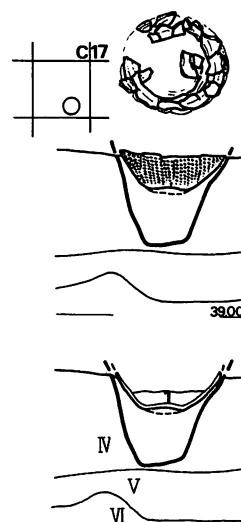


図125 SP-27出土状況図

SP-166 (図126～図127)

位 置 C-18の北側、SP-51、168、207に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にして出土。口縁部だけが崩壊して散乱する。壺内とは口縁部の破片は入っていない。胴中部から下が土壌内に埋設される。土壌は15 cmほどの深さで壺底はボウル状を呈する。標準土層第II層中から掘り込まれたものである。壺と土壌との間隙は(暗)褐色土によって埋められる。壺底は第IV層上面でとまる。

壺内土層 1 茶褐色土(炭化物が少量混る。堆積土)、2 黄褐色土(ロームが混る、下面に別個体の土器片—すべて裏面を上—にむけている—、礫、炭化粒などがおかれる)、3 黄褐色土(2層よりもかたくしめる。ロームブロック、木炭片、獣骨片などが混る)、4 暗茶褐色土(粘性があり、かたくしめる)。2～4は封入土である。まず4の土砂を壺内に入れ、その後、3の土砂を押さえ付けながら封入する。次いで、別個体の土器片を裏面を上にして置く、さらに土器片とともに礫、炭化物をも同じ位置に置く。そして2の土砂をかぶせる。封入土は胴中部のところまである。胴中部以上はしばらくの間空洞になっていたものと思われる。比較的早い時間のうちに土砂の流入があったため、口縁部および頸部の一部は壺内には崩落せずに周囲に散乱してしまったものと思われる。

壺形土器 頸部の一部と口縁部を欠く。最大幅を胴上部にもつ。肩部から頸部にかけては内傾する。胴中部以下は、肩部から頸部にかけてのカーブとほぼ同じような傾きをもって底部に至る。底部は丸底をなす。胴上部以上に文様帯をもつ。胴上部では平行線文が、肩部から頸部にかけては曲線文が描かれる。曲線の湾曲した部分に上下二段に半月状の文様を描いている。地文は縄文で、頸部から胴下部まで付されている。胎土には小砂粒を多く含んでいる。

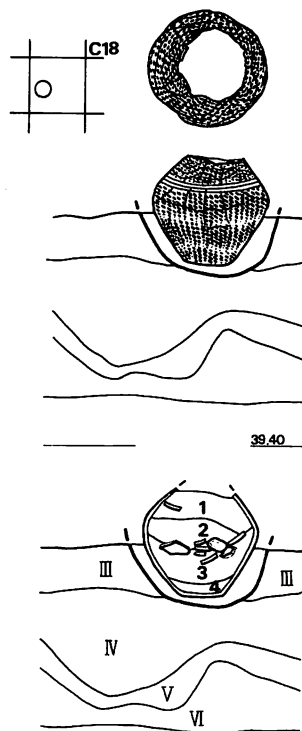


図126 SP-166出土状況図

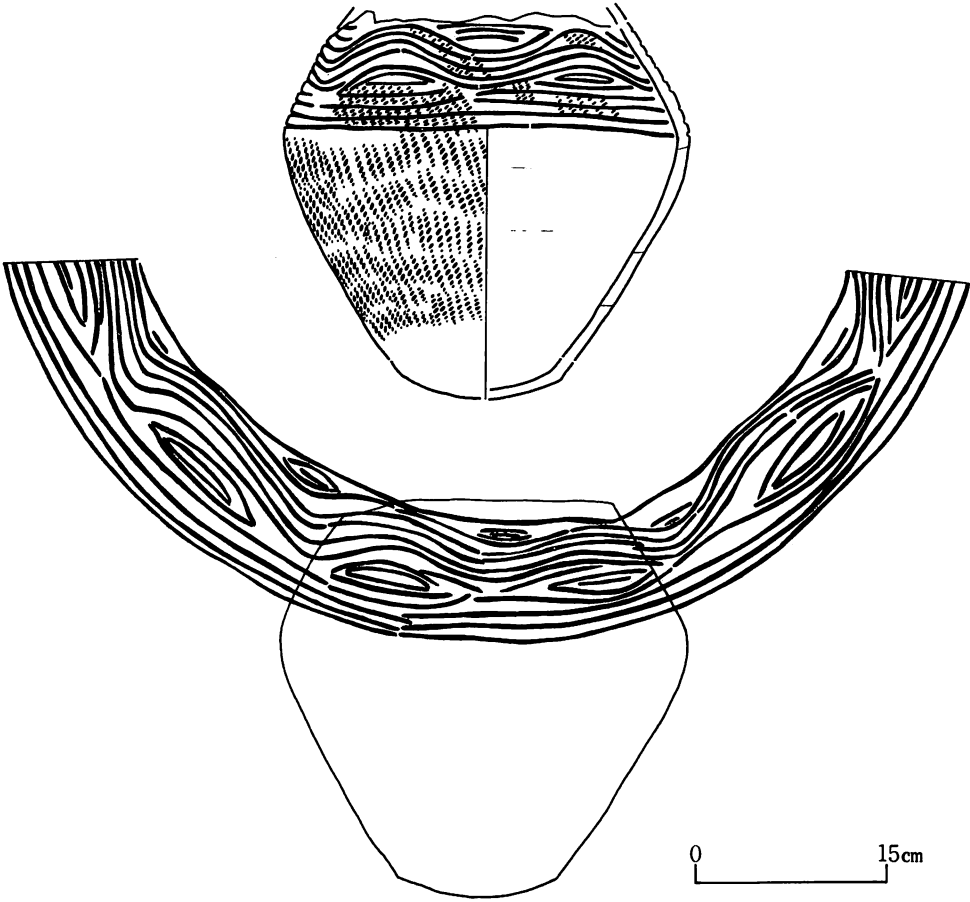


图127 S P-166实测图

SP-51、168 (図128、130)

位 置 C-18の中央からやや北寄りのところで、SP-51の東隣りにSP-168がある。

検出状態 いずれも正立した状態で出土。SP-51は胴下部以下だけが残っており、内面には青灰色粘土(3層)の封入が確認されただけである。SP-168は、頸部の一部を残して肩部から口縁部は崩落あるいは散乱している。肩部から下は土壌内に埋設される。壺との間隙はほとんどない状態である。底面に若干のすき間があるが、これは青灰色粘土の層である。土壌断面は壺形土器と相似形をなす。第II層から掘り込まれている。

壺内土層 Ta-bを含む黒色土(表土か、堆積土)を最上層とする。1 褐色土(ローム、小砂利、獣骨片などを含む、封入土)、2 褐色土(ロームを含む、非常にかたくしまっている、封入土)、3 青灰色粘土。

壺形土器 口縁部および頸部～胴部・底部の一部を欠く。最大幅を胴上部にもつ。胴は張り出し、内傾ながら肩部、頸部へと至る。口縁部は垂直気味に立ち上るものと思われる。口縁部には三条の縄線文を付し、口縁部下端では、横走する二条の縄線文間に縦位に縄線文を付す。二か所確認されることから、間隔をもって一周するものと思われる。頸部下位から肩部にかけて、二段に、絡縄体圧痕文を付す。これは一周する。さらに胴上部では粘土帯(バンド)が貼り付けられ、その上から押捺が加えられる。胎土には小砂粒を多量に含む。

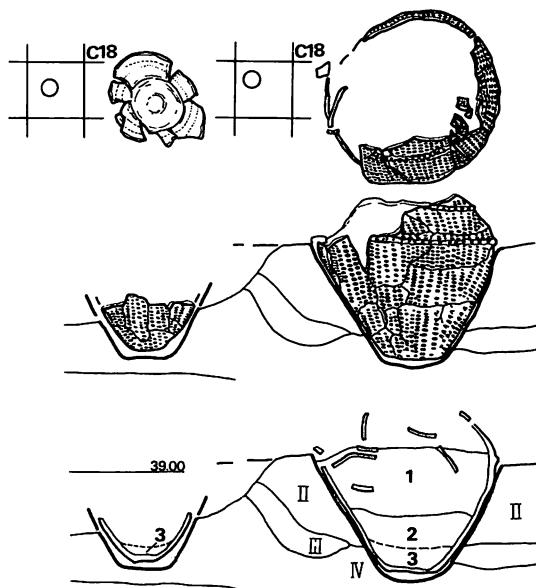


図128 SP-51・168出土状況図

SP-207 (図129、131、132)

位 置 C-17のほぼ中央部、東北側にSP-51、166、168がある。

検出状態 壺は正立した状態にて出土した。Tピットの覆土上面につくられている。胴下部以下が土壌内に埋設された状態にあるが、本来は胴中部以下が土壌内に埋設された状態にあるが、本来は胴中部以上まで土壌内に埋設されていたものと考えられる。壺と土壌の間隙は埋められているが、胴部の一部が土壌の壁に沿って入り込んでいる。胴中部以上が完全に崩落して壺内に入り込んでおり、封入されていた青灰色粘土(第1層)の上面でとまっている。このことから埋設時に

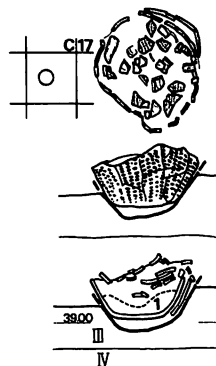


図129 SP-207出土状況図

は胴中部以上は空洞であった可能性が強い。土壇底は傾斜する。

壺形土器 胴中部以上を完全に欠く。全体観は不明である。胴部には縄文が付される。底部は丸底気味である。壺内から自然礫をそのまま素材とした砥石が2点検出されている。

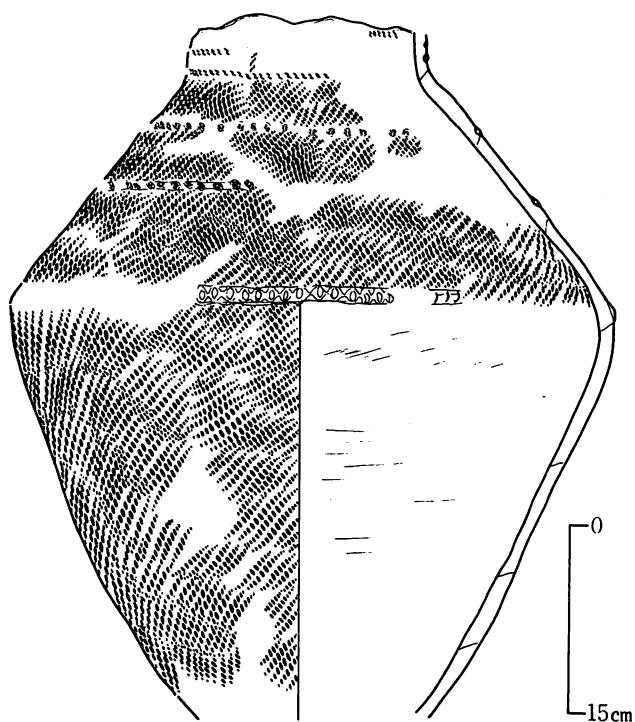


図130 S P-168実測図

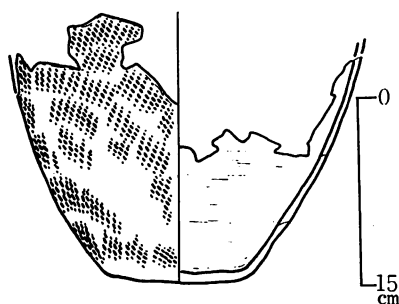


図131 S P-207実測図

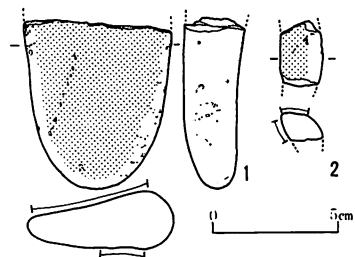


図132 S P-207石器

SP-148 (図133)

位置 B-17の西側、SP-254に近接する。

検出状態 底部付近だけが残っていた。正立した状態で埋設され、土壇底は東へ若干傾斜する。検出時にすでに脆くなっており復元は出来なかった。したがって実測図も掲載していない。壺と土壇の間隙を茶褐色土（第Ⅲ層）によって埋める。

壺内土層 1 ローム質粘性土(砂礫が若干混る)

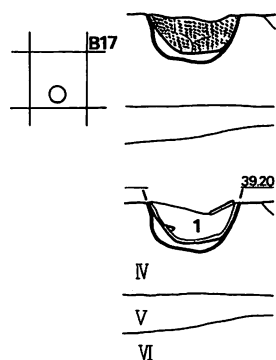


図133 S P-148出土状況図

SP-144 (図134～図136)

位 置 C-19の西側グリッドラインに接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部まで土壌内に埋設されている。肩部以上はすでに崩落しているが、壺内には肩部の一部の破片が落ち込んでいるだけで、頸部以上は見あたらない。土壌は第II層中から掘り込まれている。深さは35 cm程であるが、壺底と壺底部の間には黒色土(ローム粒を含む)がみられる。これは壺を埋設する前段階に埋められたものと思われる。壺埋設に伴う高さの調整であろうか。壺は土壌の南壁に接する。

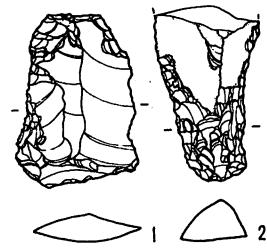


図134 石器

壺内土層 1 黄褐色土(小砂利、獣骨片、炭化粒、土器片などを含む、封入土)、2 褐色土(ローム細粒を含む、封入土)。あらかじめ壺内の肩部まで1～2の土砂を封入していたため、崩落した壺の肩部以上の破片は壺の中には入り込んでいない。

壺形土器(図135) 肩部以上が欠けている。最大幅を肩部にもつものと思われる。肩部には二本の横走る沈線がある。また、その下端には刻みが加えられる。胎土には小砂粒を多く含んでいる。概して脆い。壺内からスクレイパーが2点検出された(図134)。1は一辺にのみ剝離加工を加えたもので、器面の一部に自然面を残す。2は断面三角形を呈す。先端部での剝離加工は入念である。一部に自然面を残す。

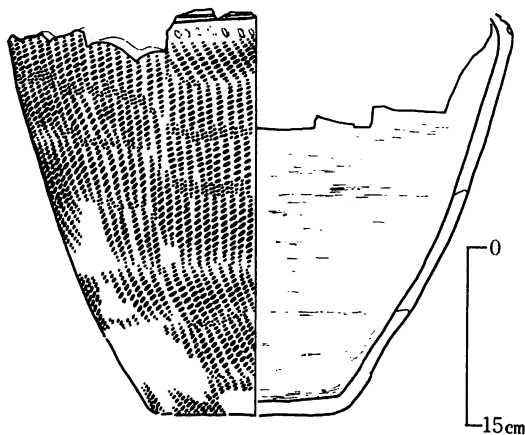


図135 SP-144実測図

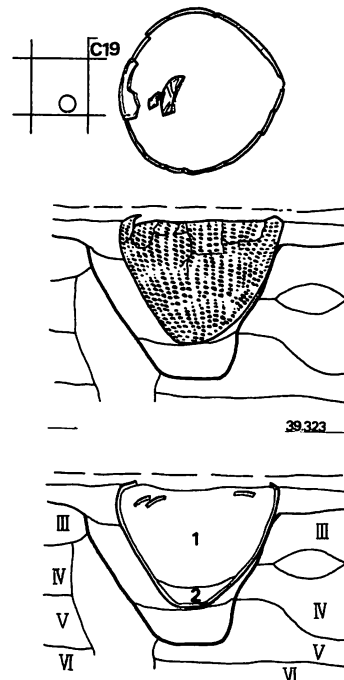


図136 SP-144出土状況図

SP-253 (図137～図139)

位 置 B-18 のほぼ中央部

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上は完全に崩落している。

壺内には胴中部以上の破片は見あたらない。胴中部以下が土壌内に埋設されたものと思われる。上墳は断面がすり鉢状を呈する。これは壺形土器の形状と相似形をなす。

壺内土層 検出時に胴中部以上が消失していた。壺内の土砂についても不明瞭な状態であった。1 黒色土(第IV層とほとんど変化がない)、2 粘土(封入土)。

壺形土器(図139) 胴中部以上を完全に欠く。最大幅を胴中部にもつ。胴中部は強く張り出し、内傾しながら底部に至る。底部は平底である。胴中部に粘土帯(バンド)を貼り付けている。胴中部以下の外面観はすり鉢状を呈する。胴部には縦位に縄文が付される。壺内からスクレイパーが1点出土している(図137)。スクレイパーは細身の剝片の両側縁に簡単な剝離加工を加えたものである。



図137 石器

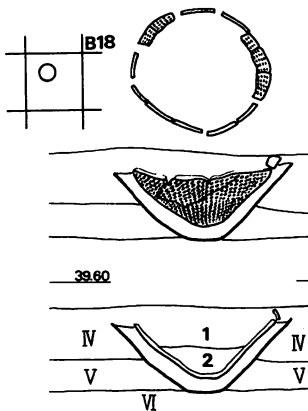


図138 SP-253出土状況図

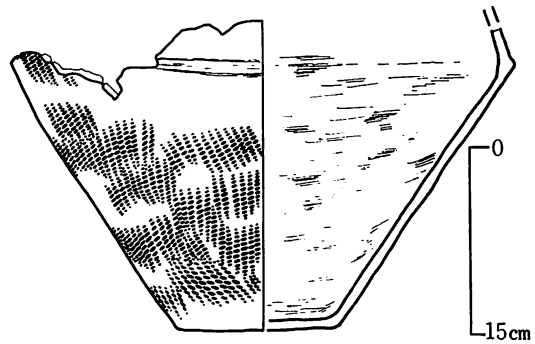


図139 SP-253実測図

SP-254 (図140～図141)

位 置 B-17 の中央部

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部から口縁部にかけて完全に崩落しており、破片は第1層上面を覆う。胴中部から下は土壌内に埋設される。壺の底部には青灰色粘土が付着している。土壌は深さ35cmほどのものでボウル状を呈する。第Ⅲ層下面から掘り込まれ墳底はローム中にある。壺と土壌との間隙は暗灰褐色土（第Ⅳ層と第Ⅴ層及び粘土が混入された土）によって埋められる。

壺内土層 1 褐色土(木炭片・獣骨片を含む、封入土)、2 粘土(木炭片、獣骨片を含む、封入土)。胴中部まで1～2の土砂が封入されていたため崩落した土器片は胴中部付近を覆うことになる。

壺形土器(図141) 口縁部および肩部から胴中部の一部を欠く。最大幅を肩部付近にもつ。肩部付近は張り出し内傾しながら頸部に至る。肩部から下は、ゆるやかなカーブを描きながら底部に至る。口縁部は無文をなす。頸部から肩部にかけて三段の粘土帯(バンド)が貼り付けられ、バンドには刺突が加えられる。二～三段目のバンドの間には文様帯がある。文様は、横走る短い沈線と曲線文が組み合わされたものと考えられる。三段目のバンドの下端にも横走る沈線が付される。頸部から胴下部まで縄文が付される。

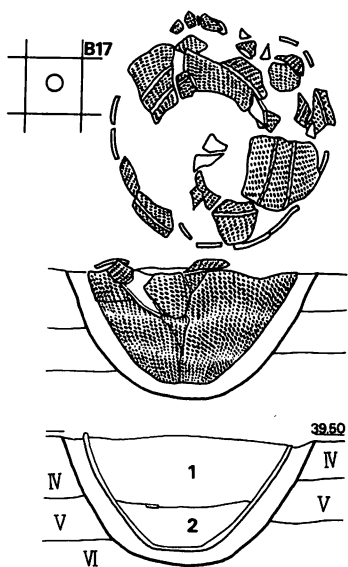


図140 SP-254出土状況図

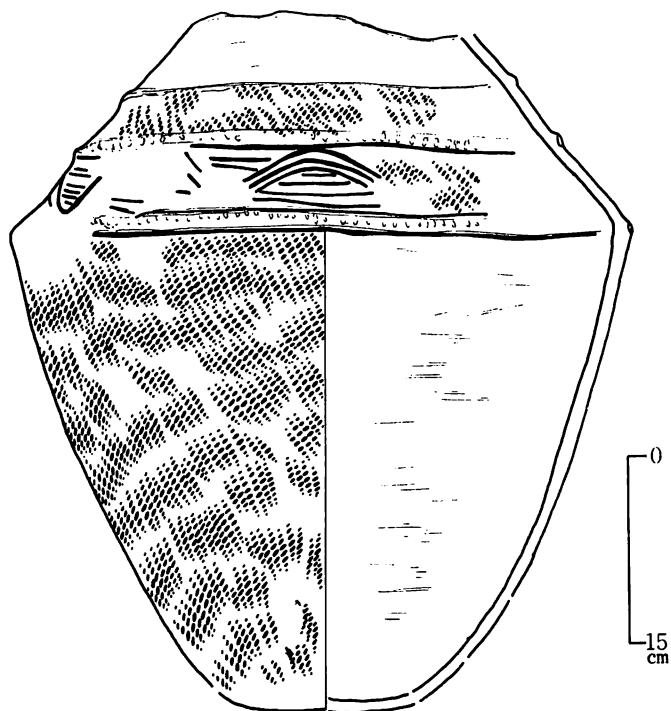


図141 SP-254実測図

SP-182 (図142～図144)

位 置 B-7の北コーナー部

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部から口縁部にかけて完全に崩落しており、破片は壺内には見あたらなかった。包含層中にも同一個体の土器片がないことから、胴中部以上は何らかの攪乱を受けたものと思われる。胴部は土壌内に埋設される。土壌は25 cm ほどの深さで断面はすり鉢状を呈する。土壌の掘

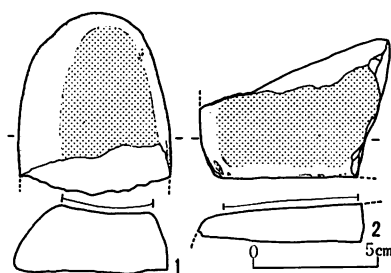


図142 石 器

り込み面は第II層中にあると思われる。壺と土壌との間隙は黒褐色土（第IV層と性質は同じ）によって埋められる。西に隣接して検出された壺形土器の口頸部は、検出時にはSP-182と同一個体で、崩落過程でそっくりころがり落ちたものと考えたが、この口頸部もSP-182と同様、土壌を掘って埋設されたことが判明した。土器も別個体のものである。

壺内土層 口頸部のみを埋設した土壌、1 黒色土(堆積土)、2 黄褐色土(ローム、封入土)、3 黒褐色土(壺と土壌との間隙を埋めた土)、SP-182、4 黒褐色土(堆積土)、5 黄褐色土(小砂利を含む、封入土)。

壺形土器(図144) 胴部下半のみ。器形から最大幅は肩部付近にあるものと思われる。底部は平底である。胴部には縄文が付される。口頸部(図143の左側の図)、口唇は肥厚し、押捺が加えられ、波状を呈する。口頸部は無文で、肩部以下には縄文が付されるものと思われる。壺内から砥石が2点検出された(図142-1、2)。いずれも自然礫をそのまま素材として使用したもので、1は使用面が浅くくぼんでいる。2は縁辺以外の全面を使用したものと思われる。

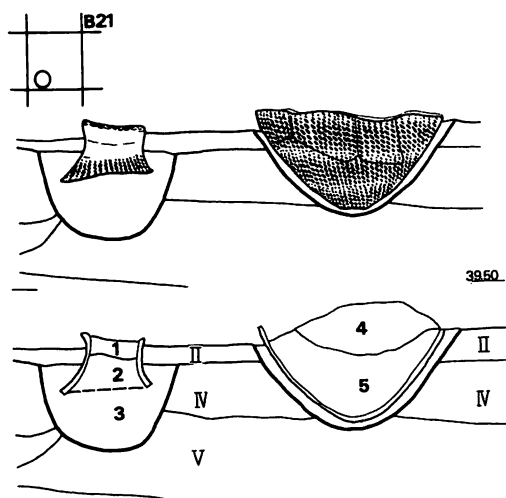


図143 S P-182出土状況図

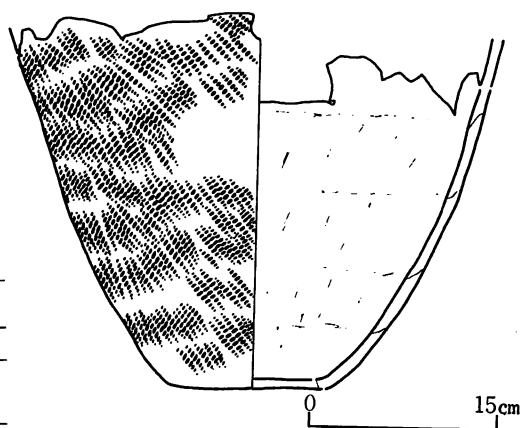


図144 S P-182実測図

SP-111 (図145～図146)

位 置 B-20 の北側ライン際

検出状態 壺は正立した状態にて出土。頸部から口縁部にかけて崩落しており、それら一部の破片は第2層上面にある。肩部から下は土壌内に埋設される。土壌は20 cm ほどの深さで断面はすり鉢状を呈する。土壌の掘り込み面は第Ⅲ層中にあるものと思われる。壙底面はローム最上面にある。壺と土壌との間隙は黒褐色によって埋めらる。

壺内土層 1 黒色土(堆積土)、2 暗茶褐色(ローム粒を多く含む、かたくしまっている、封入土)、3 灰褐色土(土器片、チップ、獣骨片、小砂利、炭化物粒などを含む、かたくしまる、封入土)、4 暗灰褐色(本体とは別個体の土器片が入る、獣骨片をも含む、封入土)。第3層と第4層の間には小砂利、炭化物、土器片などが入る。これは、SP-166 の封入土のあり方と似ている。

壺形土器(図146) 口縁部と頸部の一部を欠く。最大幅を胴上部付近にもつ。胴上部付近は張り出し、内傾しながら肩部、頸部へと至る。胴上部から下は内傾しながら底部に至る。底部は平底である。頸部の一部には無文帯が認められる。頸部から肩部にかけて文様帯がある。主体は曲線文で、湾曲した部分には横走する短い沈線(4本)を交互に描く。頸部から底部には縄文が付される。内面はナデによる器面調整がなされる。胎土には砂粒を多く含む。

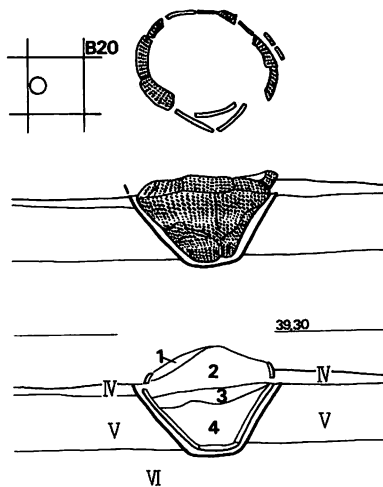


図145 SP-111出土状況図

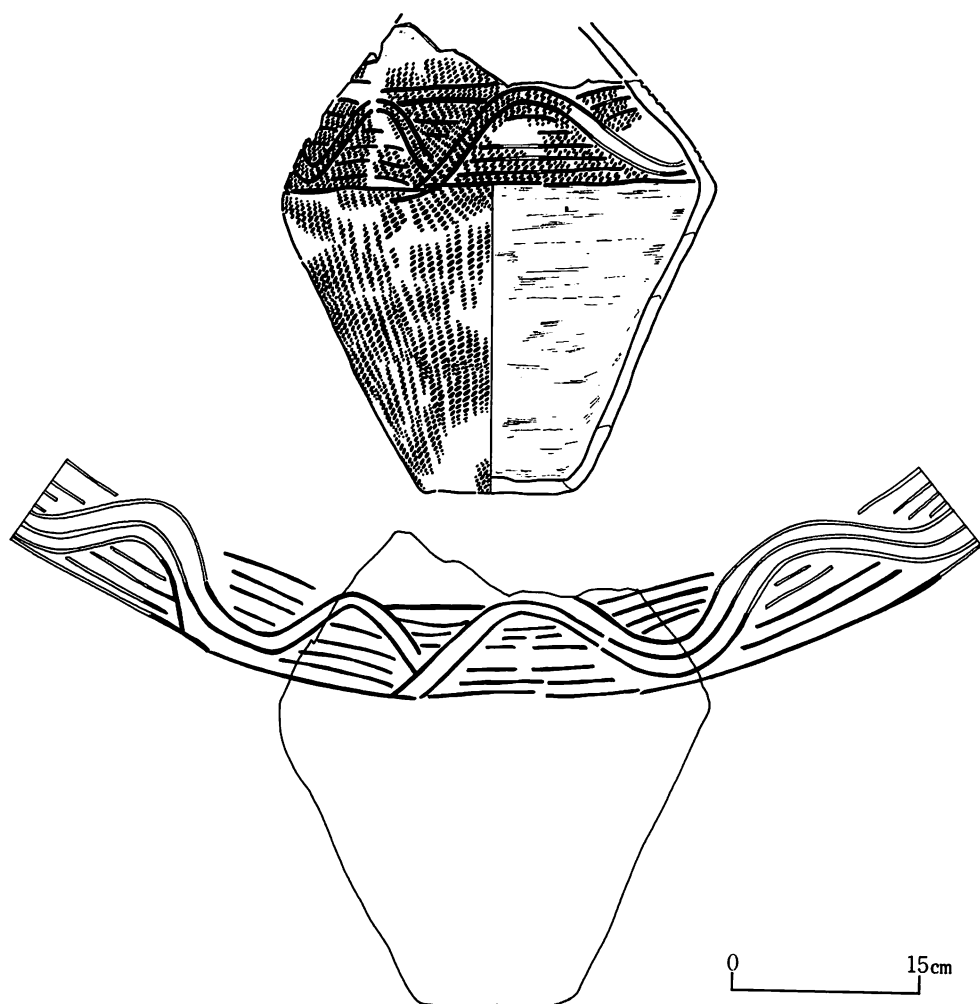


図146 S P-111実測図

SP-183 (図147)

位 置 B-21の北側、SP-182に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上は消失していた。胴下部以下が土壌内に埋設される。土壌は浅皿状を呈するが、本来の掘り込みは確認面よりも上方にあったものと思われる。壺底面は比較的平坦で、第IV層上面にある。

壺内土層 1 黄褐色土(封入土)。

部分的な復元しかできなく、実測は不可能であった。

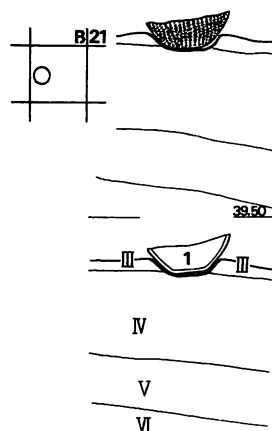


図147 S P-183出土状況図

SP-184 (図148～図149)

位 置 B-21の北西側

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部以上は崩落しすでに消失していた。胴下部以下は土壌内に埋設される。土壌は20 cmほどの深さのもので、浅いボウル状を呈する。第III層中から掘り込まれる。壺と土壌との間隙はない。

壺内土層 1 黄褐色土(小砂利を含む、封入土)。

壺形土器(図149) 肩部から上を欠く。最大幅は肩部にある。肩部の張り出しはゆるやかである。肩部からやや内傾しながら底部に至る。底部は平底をなす。肩部から胴下部にかけて縄文を付す。内面にはナデによる調整がなされる。胎土に砂粒を多く含む。

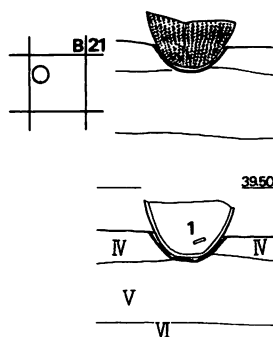


図148 S P-184出土状況図

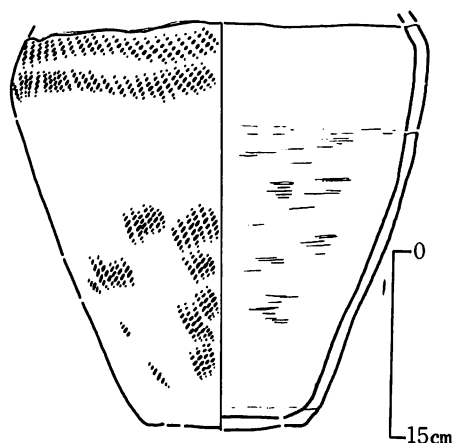


図149 S P-184実測図

SP-180 (図152～図153)

位 置 B-23の南東側にあり、SH-2と重複する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。土圧によって押しつぶされたような状態にあった。頸部は崩落し壺内に落ち込んでいた。肩部から下は土壌内に埋設される。土壌は25 cmほどの深さで、壙底は平坦である。第II層中から掘り込まれ、壙底はSH-2の覆土上面にある。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 褐色土(下面に頸部片が落ち込んでいる。堆積土)、2 黒褐色土(ローム粒を含み、かたくしまっている。封入土)。第2層中に入り込んでいる土器片は、本体の胴下部が押しつぶされずれ込んだ結果のものである。埋設当初は、胴中部以上空洞だったものと思われる。

壺形土器(図153) 口縁部、肩部と胴部の一部を欠く。最大幅を肩部付近にもつ。肩部は張り出し、内傾しながら頸部に至る。口縁部は垂直気味に立ち上るものと思われる。肩部から下は内傾しながら底部に至る。底部は平底をなす。頸部から口縁部付近には文様帯をもつ。文様は、曲線文、横走する沈線の二種である。頸部から底部にかけて縄文が付される。5 cmほどの粘土紐による輪積成形による。胎土には砂粒を多く含む。

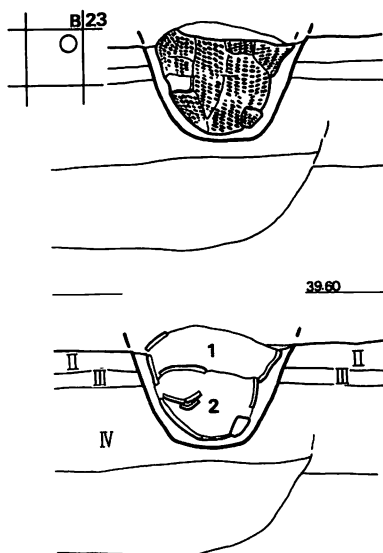


図152 SP-180出土状況図

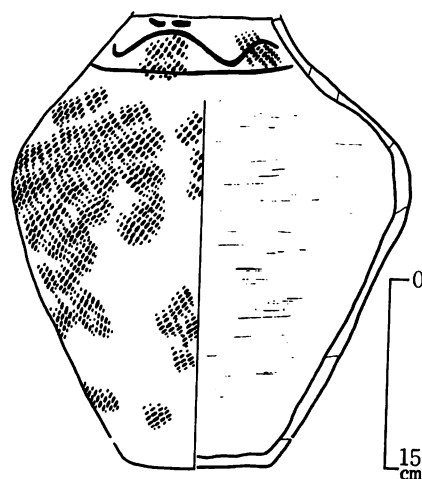


図153 SP-180実測図

SP-134 (図154～図155)

位 置 B-22の北側 SP-228に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上が完全に崩壊しており、破片はすでに消失。耕作によるものと思われる。胴中部以下は土壌内に埋設される。土壌断面はボウル状を呈する。円形土壌を切ってつくられている。この円形土壌は埋壺土壌をつくる際に同時に掘られ、さらにロームを主体とする褐色土で埋め戻し、その上から埋壺土壌をつくったものと考えられる。土壌は第II層（表土に近い位置）中から掘り込まれたものである。

壺内土層 1 暗灰褐色土(フレイク・チップ、木炭片、獣骨片、小砂利を含む。バサバサした感じを受ける。封入土)。壺内から軽石製の砥石が検出された。周縁には調整が加えられている。主な使用面は平坦になっている。

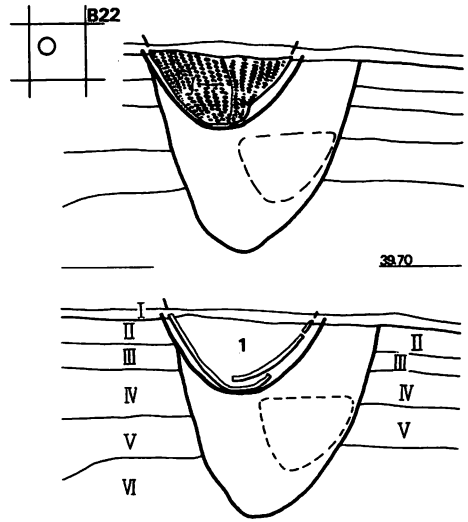


図154 SP-134出土状況図

SP-138 (図156～図157)

位 置 B-22の北東側で、近くに SP-137、219、228 などがある。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上が完全に崩壊、消失していた。胴中部以下が土壌内に埋設されるが、壺と土壌との間隙はない。土壌は第III層中から掘り込まれる。

壺内土層 1 暗灰褐色土(フレイク・チップ、木炭片、獣骨片などを含む。封入土)

壺形土器(図157) 胴中部以上を欠く。胴部以下はすぼまるような器形をなす。胴部には縄文を付す。

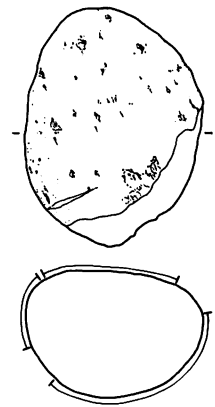


図155 SP-134石 器

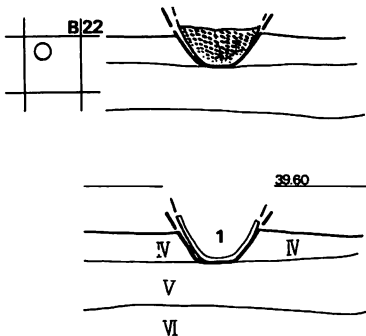


図156 SP-138出土状況図

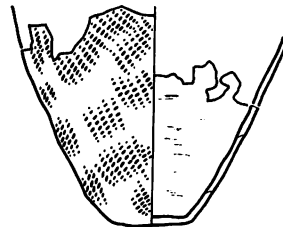


図157 SP-138実測図

SP-228 (図 158～図 159)

位 置 B-22 の中央付近、SP-134、137 が近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。右側の肩部から胴下部にかけて崩落している。頸部の一部は壺内に入り込んでいた。胴上部以下は土壌内に埋設される。土壌は 35 cm ほどの深さでボウル状を呈する。第Ⅲ層中から掘り込まれ、壺底はローム上面に達する。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。円形土壌(SP-229)の北壁を切っている。

壺内土層 1 黄褐色土(小砂利を含む、被覆土か)、2 黄褐色土(ローム粒を含む。かたくしまる)。埋設当初、胴中部以上は空洞であったと思われる。肩部以上の崩落が始まると同時に第1層の土砂が落ち込んだものと思われる。

壺形土器(図 159) 口縁部、頸部～底部にかけてそれぞれ部分的に欠く。最大幅を肩部にもつ。肩部は強く張り出し、内傾しながら頸部に至る。肩部以下はすぼまりながら底部に至る。底部は丸底気味で、全体的に安定感のない器形を呈する。肩部から頸部にかけて文様帯をもつ。文様は曲線文と横走する短い沈線(5～6本)が組合されたものである。肩部の横走沈線の下端には縄文原体を押捺している。頭部から胴下部にかけては縄文が付される。胴土には砂粒を多く含む。

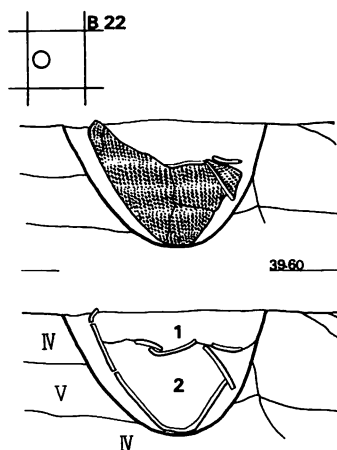


図158 SP-228出土状況図

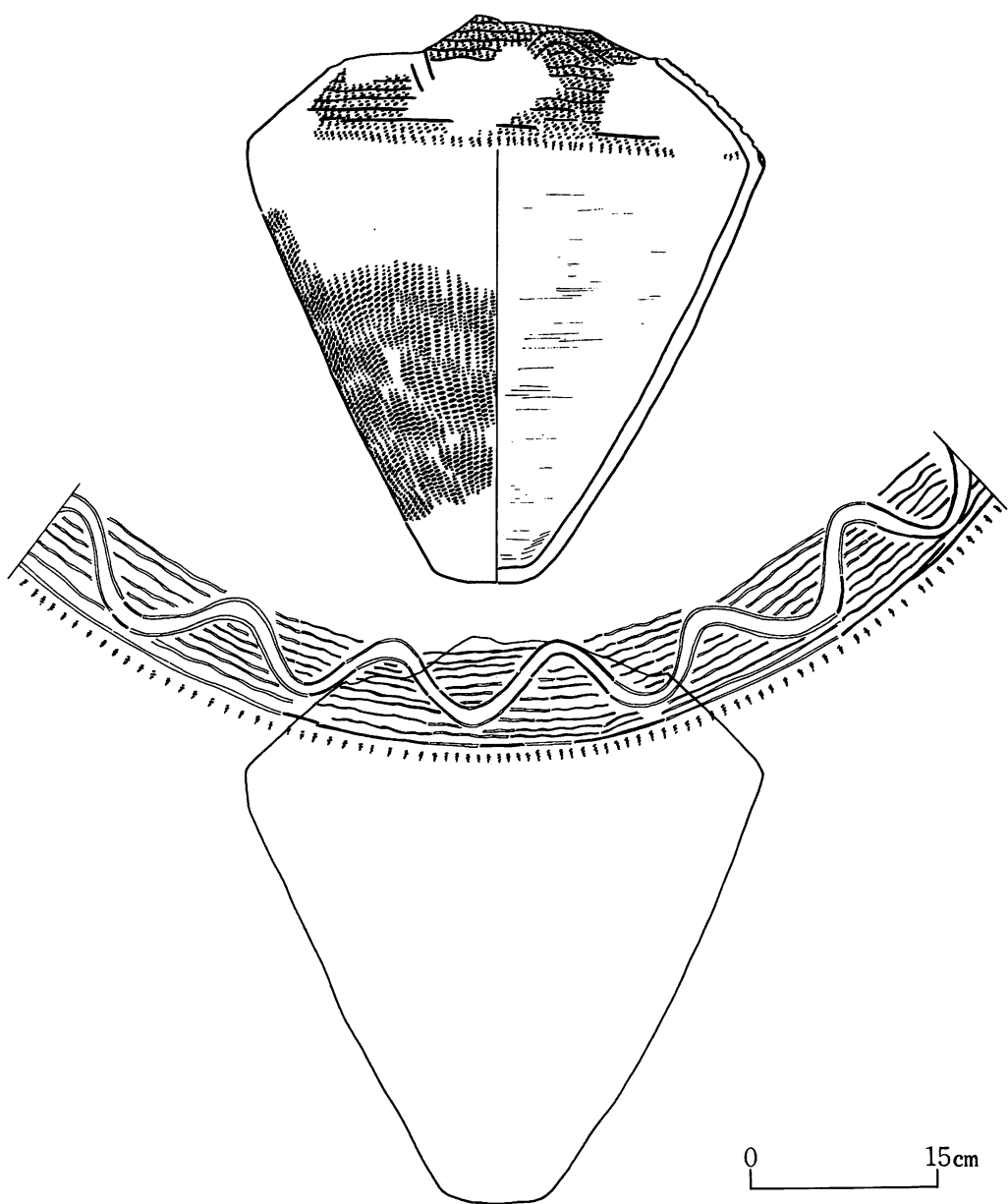


図159 S P-228実測図

SP-137 (図160～図161)

位 置 B-22の北寄りのところ、SP-136、138、228などが近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上が崩壊し、消失。壺の底部には青灰色粘土を貼り付けている。土壌は浅くボウル状を呈する。SP-136の被覆土(黄褐色土)を切り、さらにSP-218(円形土壌)の北壁をも切っている。

壺内土層 1 青灰色粘土(暗褐色土および小砂利が混る。封入土)

壺形土器(図161) 胴中部～胴下部のみ残存。底部は検出時にはすでに細片であった。縄文を付している。胎土には砂粒を多く含む。

SP-219 (図162)

位 置 B-22の西側グリッド線上にあり、SP-138が近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上は崩壊し、消失。胴中部以下は土壌内に埋設されるが、第1層が上方まであったことから、他の例と同様、肩部付近まで埋設されていたものと思われる。土壌はボウル状を呈する。壺と土壌との間隙はほとんどない。検出時にはすでに土器が脆くなっており、細片化していたため、復元は不可能であった。

壺内土層 1 黒色土(上方まで存在していた。堆積土)、2 粘土(暗褐色土が混る、封入土)。

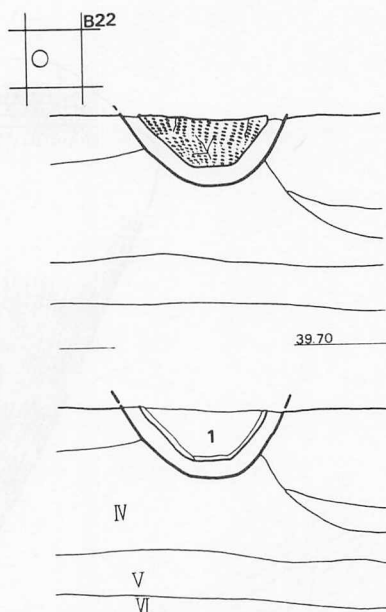


図160 SP-137出土状況図

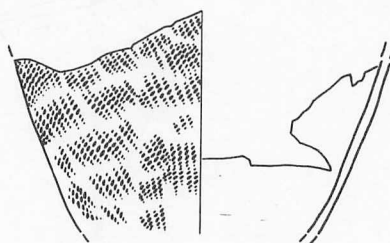


図161 SP-137実測図

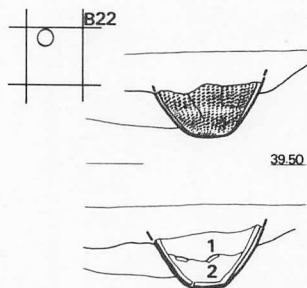


図162 SP-219出土状況図

SP-112 (図163～図164)

位 置 B-24の中央付近にあり、SP-113が近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴中部以上は崩壊しており、壺内およびその付近には見あたらなかった。胴中部以下は土壌内に埋設される。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。SP-113の被覆土(黄褐色土)の一部を切っている。

壺内土層 1 褐色土(ローム粒混り、封入土)。

壺形土器 検出時にはかなり脆く、細片化していたため復元は不可能であった。剝離痕のある礫(図164)が壺の中から検出された。頭部および右側縁に剝離痕がみられる。使用痕であろうか。

SP-123、124 (図165～図166)

位 置 SP-123はC-24東側グリッド線上に、SP-124はC-23東側グリッド線上にある。

検出状態 SP-123、壺は倒立した状態にて出土。口縁部および胴上部以下は欠落していた。器面に沿って粘土が付着する。SP-124、正立した状態にて出土、胴上部から上、胴部の一部が崩壊していた。破片は壺内および周囲には見られなかった。SP-123、124ともに大きな土壌のほぼ中央に埋設されており、壺と土壌との間隙は褐色土(木炭片を含む)によって埋められている。SP-123の壺内から自然礫をそのまま素材として使用した砥石が検出された(図165)

壺内土層 1 褐色土(粘土を1/2以上含む、封入土)、2 褐色土(封入土)、3 粘土。

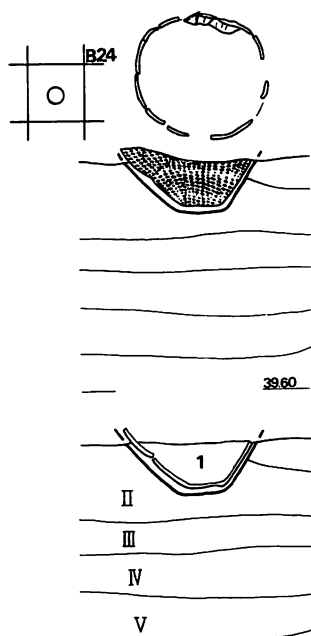


図163 SP-112出土状況図

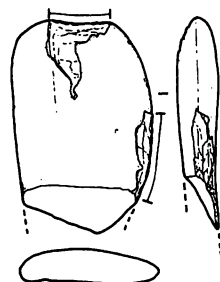


図164 SP-112石器

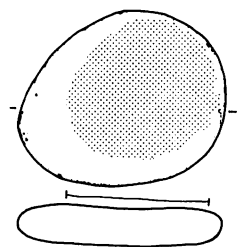


図165 SP-123石器

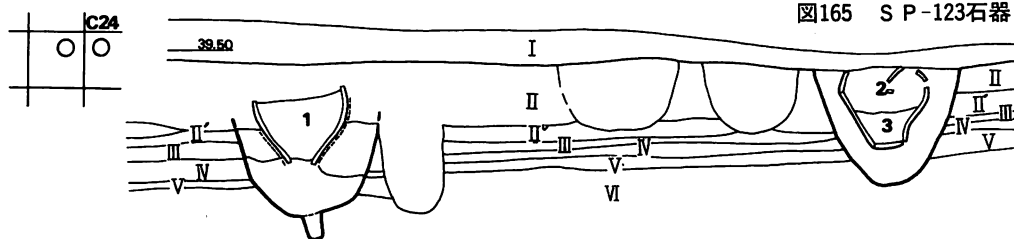


図166 SP-123・124出土状況図

SP-113 (図 167～図 169)

位 置 B-24 の中央付近にあり、SP-112、135 などが近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。口縁部だけが崩壊している。肩部以下が土壌内に埋設される。壺の胴中部以下には青灰色粘土が付着する。土壌は 45 cm ほどの深さで、墳底面は平坦である。土壌は第Ⅱ層から掘り込まれ、墳底はロームに達する。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。壺の肩部から土壌の掘り込み面には黄褐色土（木炭片、獣骨片、小砂利を含む）の集積がみられる。本来この位置には黄褐色土は存在しないことからこれは被覆土と考えられる。

壺内土層 1 粘土質褐色土（小砂利、礫を含む、封入土）、2 オレンジ色を呈する粘土（封入土）、3 黒色土（粘性あり、封入土）、4 オレンジ色を呈する粘土（別個体の土器片が混る、封入土）。埋設時に 1～4 までの土砂を封入していたため壺の崩壊はまぬがれている。

壺形土器(図 169) 口縁部だけを欠く。最大幅を肩部にもつ。肩部は張り出し、内傾しながら頸部に至る。口縁部は直立するものと思われる。肩部以下は、内傾しながら底部に至る（すぼまるような状態を呈する）。底部は平底をなす。頸部は無文。頸部下端には粘土帯（バンド）を貼り付けている。バンド上には刻み加えられる。頸部下端から肩部に文様帯をもつ。文様帯の区画は、上方ではバンド、下方では横走る沈線によってなされる。曲線文を基本とし、曲線の湾曲した部分には交互（上・下）に孤線文が描かれ、三角形を呈する文様をなす。壺内から砥石が検出された(図 167)。砥石は側縁に自然面を残しており、主な使用面はくぼんでいる。

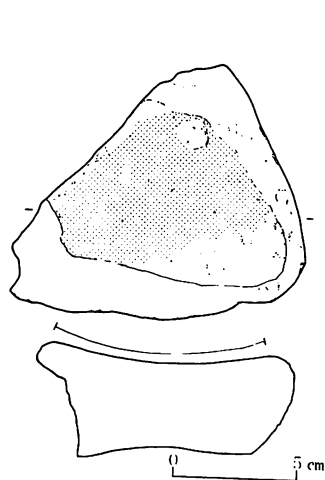


図167 S P-113石器

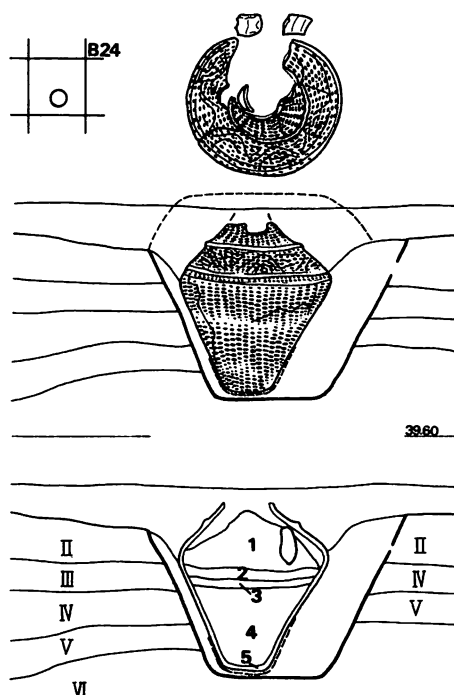


図168 S P-113出土状況図

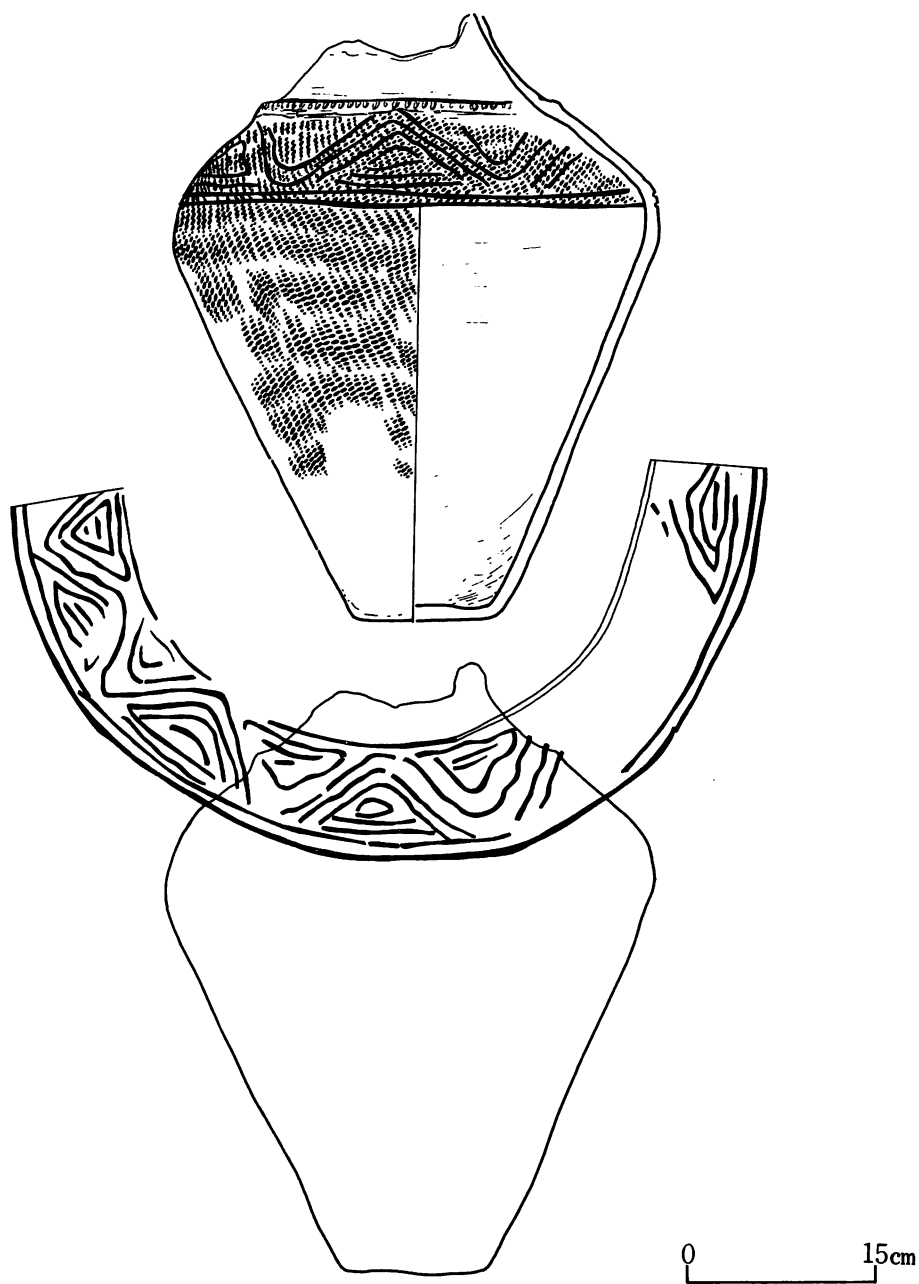


図169 S P-113実測図

SP-125 (図170～図171)

位 置 C-23の中央付近

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部以上は壺内に崩落していた。胴中部以下は土壌内に埋設される。土壌は25 cmほどの深さで、断面はボウル状を呈する。第Ⅲ層中から掘り込まれている。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黄褐色土(木炭片、獣骨片、ローム粒、小砂利などを含む)。同じ個体の破片(肩部～頸部)や底部まで入り込んでおり、その上から黄褐色土が覆う。このことから、壺の埋設時には、壺内は空洞の状態であった。さらに壺の上半は(地上に露出した部分)、黄褐色土(第1層)によって被覆されていた。そして、壺の崩落とともに被覆土が壺内に落ち込んだものと思われる。

壺形土器(図170) 口縁部を欠く。最大幅を肩部にもつ。最大幅が器高を越えたいわゆる寸胴型を呈している。肩部は強く張り出し、頸部は極端な傾きを示している。肩部以下は、内傾しながら胴下部に至り、底部ですぼまる。底部は丸底気味である。頸部には粘土帯(バンド)を貼り付けており、上方の文様帯と下方の縄文帯とを区画する。バンド上には押捺が加えられる。頸部文様は、曲線を基本とし、口縁部付近には横走沈線を、バンドの上端では、変形工字文が描かれる。また曲線の湾曲する部分には交互に横走する短い沈線が描かれる。

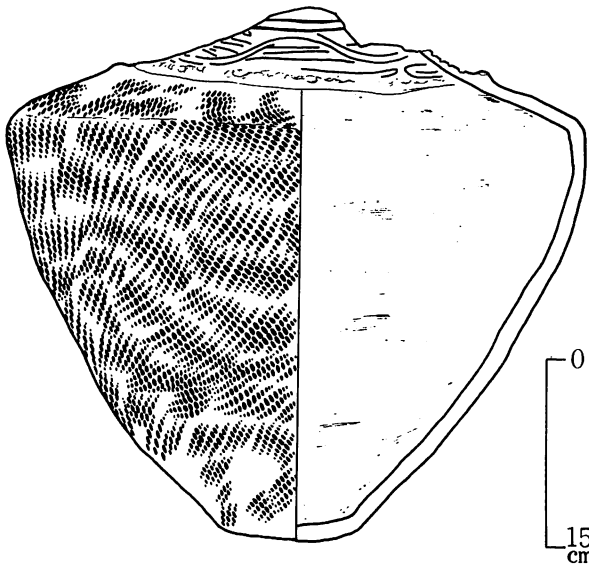


図170 SP-125実測図

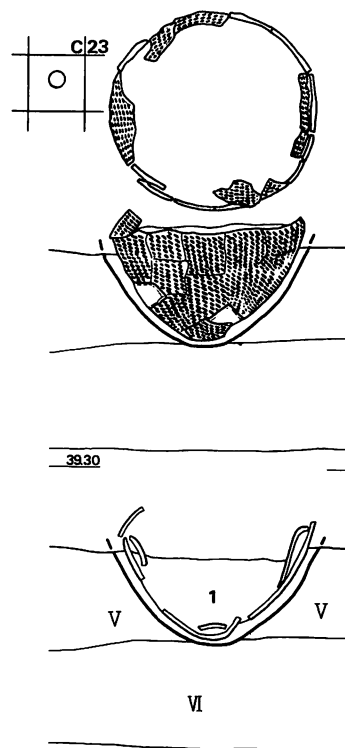


図171 SP-125出土状況図

SP-126 (図172～図173)

位 置 B-23の西側ライン付近、SP-124に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。土圧による多少のゆがみがあるものの、壺は埋設時の状態にあった。頸部以下は土壌内に埋設される。このため、壺は崩落せずに完全な形で残っていたものと思われる。土壌の深さは50 cmで壺底は丸底気味である。第Ⅲ層下面から掘り込まれ、底面はローム面にある。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(第Ⅱ層と同じ性質のものである。堆積土)、2 暗灰褐色土(土器細片、フレイク・チップ、木炭片、径2～3 cmの小砂利などが混り合う)。図中の波線部分は第Ⅲ層に近いものであるが、明確には分層出来なかった。埋没時には肩部付近まであらかじめ土砂が封入され、肩部以上は空洞であったと思われる。

壺形土器(図173) 肩部～口縁部をわずかに欠く。最大幅を胴上部にもつ。胴上部は張り出し、内傾しながら頸部に至る。口縁部はわずかに外反する。胴上部から下は、内傾しながら胴下部に至り、底部でわずかにすぼまる。底部は平底をなす。口唇部に肥厚帯をもつ。頸部と肩部には粘土帯(バンド)が付され、頸部のバンド上には縄圧痕が付され、肩部のバンドは磨り消がなされる。口縁部から底部にかけて縄文が付される。接合痕からこの壺は、底部→胴下部→胴中部→胴上部・肩部→口縁部の5段階に分かれてつくられ接合されたものと思われる。

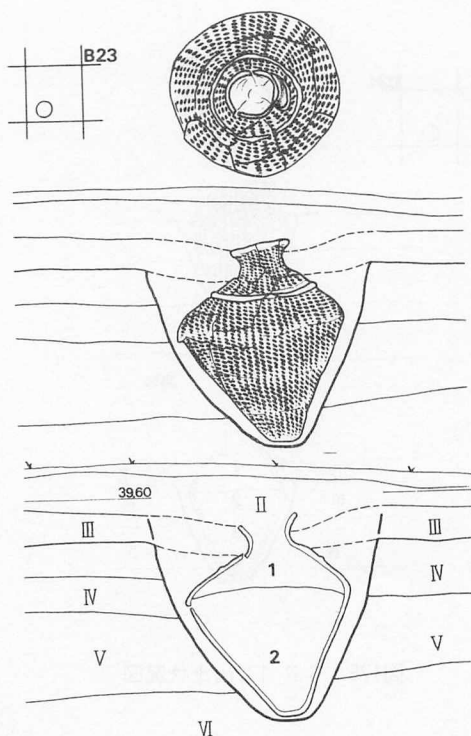


図172 SP-126出土状況図

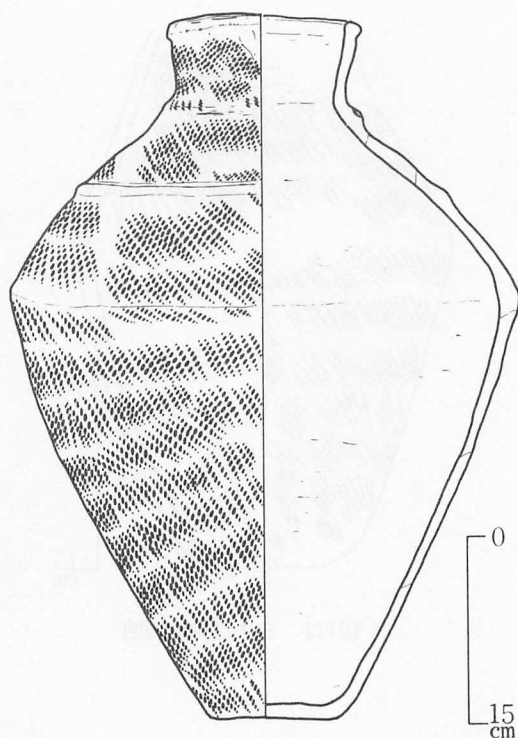


図173 SP-126実測図

SP-132 (図174～図175)

位 置 B-24の中央付近にあり、SP-112、113、135が近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。頸部の一部と口縁部は消失している。胴上部以下は土壌内に埋設される。肩部から頸部の位置には別個体の土器(鉢)の口縁部だけをかぶせている。また、壺の両側には黄褐色土(小砂利を含む)の集積がみられる。これは頸部以上には及ばず肩部付近を覆っている。埋設終了時には口頸部が地上に露出していたものと思われる。土壌断面は壺の胴上部以下の形と相似形をなす。第Ⅲ層から掘り込まれ、壺底は第Ⅴ層にある。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(堆積土)、2 褐色土(かたくしまっている。封入土)、3 暗灰褐色土(ローム粒が混る。封入土)、4 粘土(小砂利が混る。封入土)。胴上部(くびれ部)まで土砂を封入し、それ以上は空洞となる。さらに、肩部から頸部にかけて黄褐色土の被覆がなされる。それとともに別個体の土器で部分的にではあるが被覆する。口頸部は露出。

壺形土器 (図174) 頸部以上を欠く。最大幅を胴上部にもつ。胴上部は張り出し、わずかに内傾しながら肩部、頸部へと至る。胴上部以下についてもわずかに内傾しながら底部に至る。底部は平底をなす。他の壺に比して、胴の張らない、比較的小形の壺である。頸部には横走する沈線が認められる。残存する器面全体には縄文が付される。胎土には砂粒を多く含む。

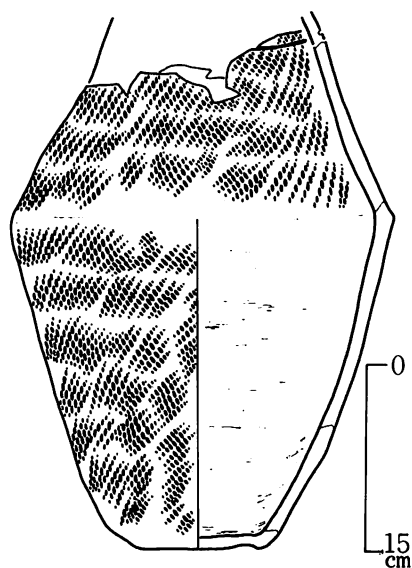


図174 SP-132実測図

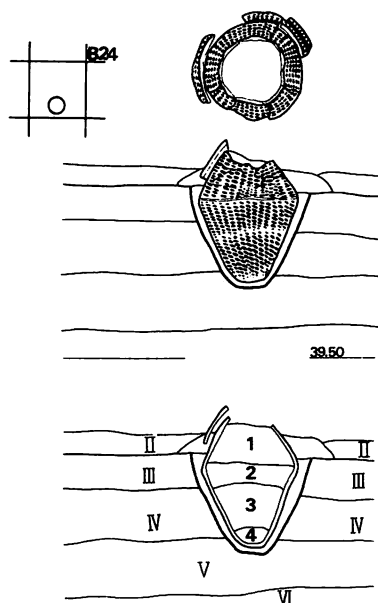


図175 SP-132出土状況図

SP-135 (図176～図177)

位 置 B-24の南西コーナー付近、SP-132に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。口縁部から肩部は土圧によって幾分落ち込んでいるが、完全に崩落したということはない。肩部以下が土壌内に埋設される。土壌断面は壺の肩部以下の形と相似形をなす。第Ⅲ層上面から掘り込まれ、壙底はローム中にある。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(やわらかい。堆積土)、2 暗黄褐色土(かたくしまっている。土器片、獣骨片、小砂利、ローム粒などを含む。実際は、黒褐色土と粘土の互層である)。壺内の胴下部から底部に沿って粘土が貼り付けられる。第1層の堆積は口縁部から肩部が崩落する前になされたものである。第2層がかたくしめる過程で容積が小さくなり、その封入土と壺とに隙間が生じ、そこへ黒色土が流れ込んでいる。

壺形土器(図176) 口頸部を部分的に欠く。最大幅を肩部付近にもつ。器高と最大幅の差があまりない寸胴タイプのものである。肩部は強く張り出し、内傾しながら頸部へ至る。口縁部もまた内傾するが、やや立ち上る。肩部以下も内傾しながら底部に至る。頸部の傾斜度に比すればゆるやかな傾斜である。底部は丸底気味である。口縁部は素縁で一条の横走沈線をめぐらす。頸部には粘土帯(バンド)が付され、バンド上には押捺が加えられる。バンド以下、底部まで縄文を付す。胎土には砂粒を多く含む。

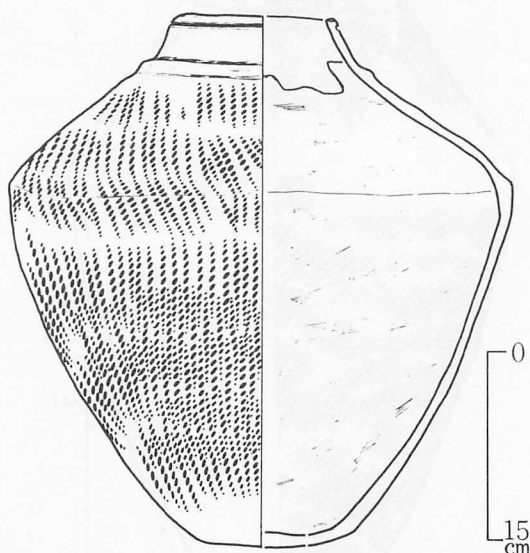


図176 SP-135実測図

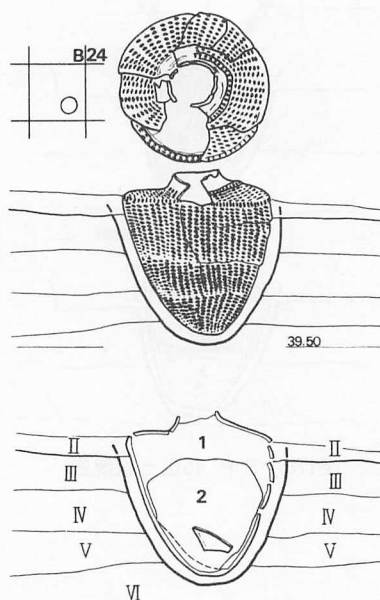


図177 SP-135出土状況図

SP-45 (図178～図179)

位 置 D-27の南東コーナ部、SP-83、84、128などに近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部から口縁部は崩落して壺内に落ち込んでいる。肩部以下は土壌内に埋設される。土壌断面は壺の肩部以下の形と相似形をなす。第IV層下面から掘り込まれた墳底はローム層中にある。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(崩落した土器片を含む。堆積土)、2 暗灰褐色土(粘土混り、封入土)、3 粘土ブロック。埋設時には壺内には第2層のみが封入され、胴中部以上は空洞であったと考えられる。次いで口頸部の崩落が始まり、土砂の堆積とともに肩部付近の崩落がある。肩部まで土砂が堆積した時点で土器の崩落は止まる。

壺形土器(図179) 口縁部と胴上部の一部を欠く。最大幅を胴上部にもつ。胴上部は張り出し、ゆるく内傾しながら頸部に至る。頸部でわずかにくびれ、口縁部は直立するものと思われる。胴部ではゆるやかな傾斜を示しながら底部に至る。底部は平底をなす。頸部以上に文様帯をもつ。下から、二本の横走沈線が描かれ、その間には押し引きがなされる。さらに上方では曲線文が描かれる。残存する頸部から底部には縄文が付される。内面にはナデによる調整が加えられる。胎土には砂粒を多く含む。器形はSP-132に類似する。

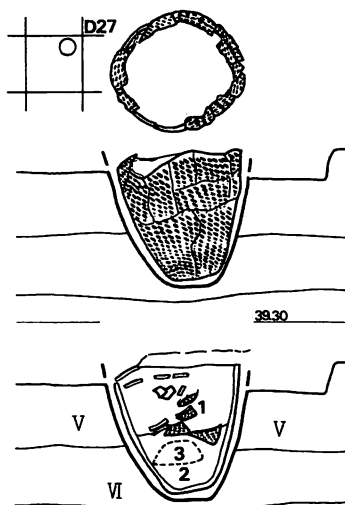


図178 SP-45出土状況図

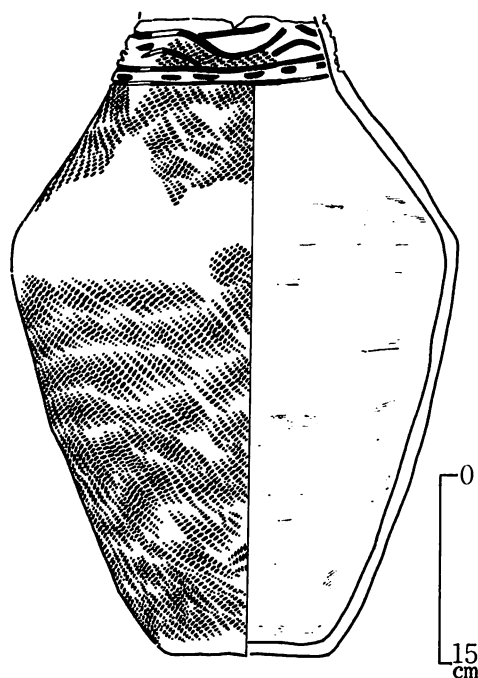


図179 SP-45実測図

SP-82 (図180～図181)

位 置 C-27の南側グリッドライン付近、土墳墓(SP-118)に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴部の一部が土圧によって押しつぶされた状態を呈する。壺全体が土墳内に埋設される。土墳は断面は壺の器形、とくに肩部以下の形と相似形をなす。第二層から掘り込まれ墳底は第V層中にある。壺と土墳との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(やわらかい。堆積土)、2 青灰色粘土(封入土)。埋設時には第2層だけが封入されており、それ以上は空洞であったと思われる。壺内に土砂が流入する過程で壺の胴部の一部が崩落し始める。土砂が完全に堆積したころ肩部以上がゆがみ落ち込む。

壺形土器(図180) 口縁部と肩部、頸部の一部を欠く。最大幅を胴上部にもつ。やや内傾気味に頸部へ至り、徐々に立ち上りながら口縁部に至るものと思われる。胴部は内傾し、胴下部、底部とすぼまる。底部は丸底をなす。胴上部から頸部にかけて文様帯をもつ。頸部および胴上部には横走する沈線が描かれ、その間には曲線文と横走する短い沈線(8～9本)が組合された文様が描かれる。頸部から底部にかけて縄文を付す。胎土には砂粒を多く含む。

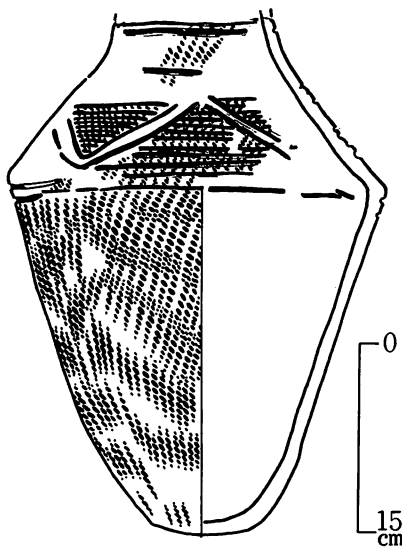


図180 SP-82実測図

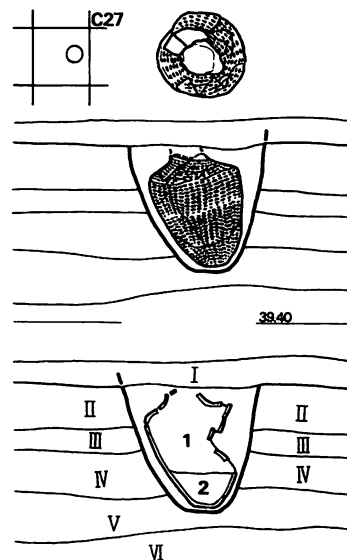


図181 SP-82出土状況図

SP-83 (図182～図183)

位 置 1-27の南西コーナ部にあり、SP-82、84、128、45などに近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。全体的に土圧によって押しつぶされたような状態を呈する。胴中部以下が土壌内に埋設されたものと思われる。土壌断面はボウル状を呈する。第III層上面から掘り込まれ、墳底は第V層下面にある。壺と土壌との間隙は黒褐色によって埋められる。

壺内土層 1 褐色土(木炭片を含む。堆積土)、2 褐色土(粘土、小砂利を含む。封入土)、3 粘土。第2、3層は埋設時にすでに封入されていた。胴中部以上は空洞であったと思われる。

壺形土器(図183) 頸部から口縁部と底部の一部を欠く。最大幅を胴中部にもつ。内傾しながら肩部から頸部に至る。胴中部以下はゆるいカーブを描きながら底部へ至る。底部は平底をなす。残存した部分全体には縄文が付される。胴下部の一部に穿孔がなされる(補修孔か)。胎土には砂粒を多く含む。

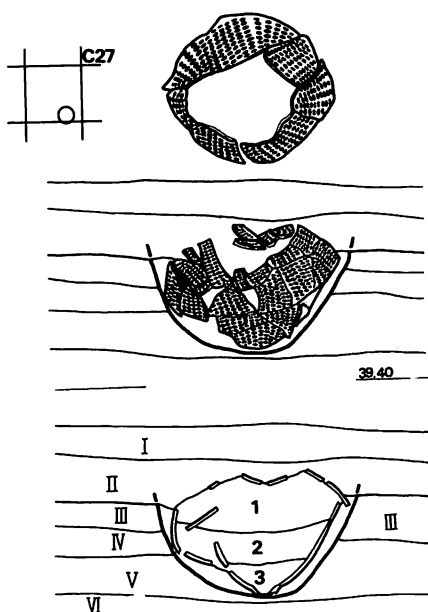


図182 SP-83出土状況図

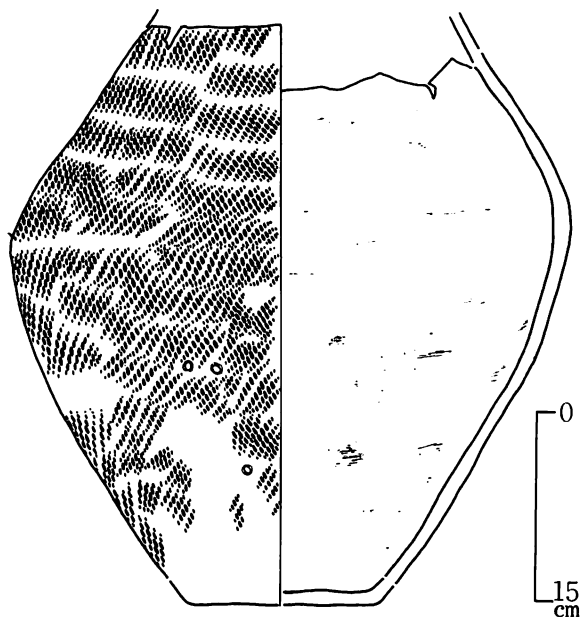


図183 SP-83実測図

SP-84 (図184～図185)

位 置 D-26の北東コーナ部にあり、SP-45、83などに近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴上部以上はすでに崩壊しており、その破片は壺内には見あたらなかった。胴中部以下は土壌内に埋設される。土壌断面はボウル状を呈する。壺の器形と相似形をなす。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 暗灰褐色土(黄色味がかかる。木炭片、小砂利が混る。封入土)、2 暗灰褐色土(黒味がかかる。木炭片、小砂利が混る。封入土)

壺形土器(図184) 胴上部以上及び胴部の一部を欠く。最大幅を胴上部にもつものと思われる。胴下部まではゆるやかなカーブを描く。底部は丸底をなす。残存部では胴上部から底部にかけて縄文が付される。胎土に砂粒を多く含む。

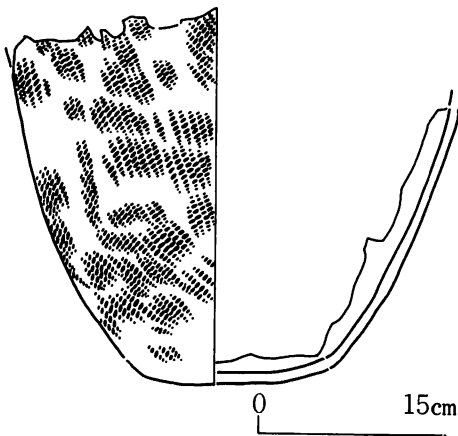


図184 SP-84実測図

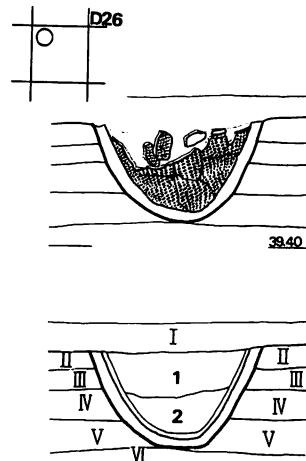


図185 SP-84出土状況図

SP-128 (図 186~図 187)

位 置 D-27 の東側ライン上にあり、SP-45、83 などに近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴上部以上は崩壊し、破片の一部は壺内の第1層上面にある。胴上部付近以下は土壙内に埋設される。土壙断面はボウル状を呈する。第III層中から掘り込まれ、壙底はローム中にある。壺と土壙との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 褐色土(木炭片・獣骨片が混る。やや固い。封入土)、2 粘土(小砂利を含む、封入土)。第1層上面には黒褐色土があるこれは堆積土と思われる。胴中部以上が空洞であったと思われる。

壺形土器(図 186) 胴上部以上は細片で復元は出来なかった。胴中部以下が残存。底部は平底をなす。器面には縄文を付す。

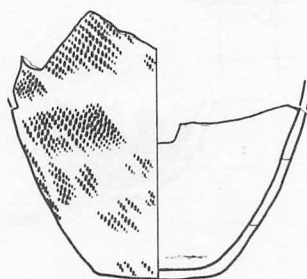


図186 S P-128実測図

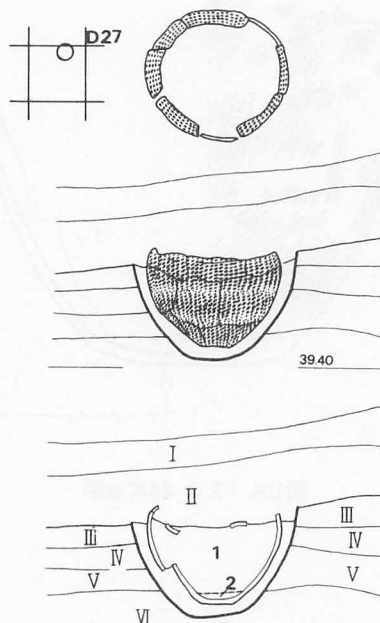


図18 S P-128出土状況図

SP-40 (図188-図189)

位 置 B-28の南西コーナ部、SP-41に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。肩部以上はすでに崩落しており、破片の一部は壺内(第1層中)にある。胴上部以下が土壌内に埋設される。土壌断面は壺の器形、とくに胴上部以下の形と相似形をなす。第IV層上面から掘り込まれ、墳底はローム上面にある。壺と土壌の間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 黒色土(やわらかい。堆積土)、2 褐色土(獣骨片、チップを含む。底部には木炭片が密集している。同時に炭化した種子一品種不明ーが1点検出された。胴下部以下にだけ土砂が封入されており、胴中部以上は空洞であった。

壺形土器(図189) 口縁部および胴部の一部を欠く。最大幅を胴上部付近にもつ。内傾しながら肩部から頸部に至り、口縁部は外反する。胴中部以下は徐々にすぼまりながら底部に至る。底部は丸底をなす。口唇部は肥厚し、その上から刻みを加えられる。以下底部までは文様帯をもたず縄文だけが付される。胎土には砂粒が多く含まれる。SP-45、82などに類似する器形を呈する。

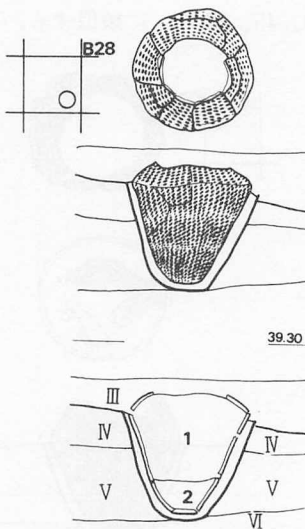


図188 SP-40出土状況図

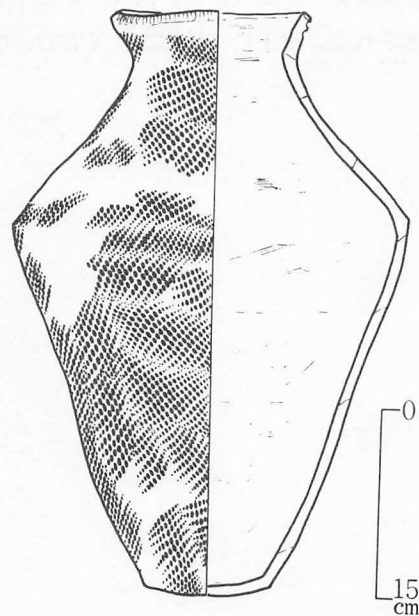


図189 SP-40実測図

SP-41 (図190～図191)

位 置 C-28の南東コーナー部、SP-40に近接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。頸部が崩落し壺内に入り込む。破片は第2層上面にとどまる。胴中部以下は土壌内に埋設される。土壌断面は壺の器形、とくに胴中部以下の形と相似形をなす。第III層下面から掘り込まれ、壺底はローム面に達する。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 茶褐色土(小砂利を少量含む。頸部片が入り込んでいる。堆積土)、2 黄褐色土(小砂利を多量に含む。小砂利の径の大きさからさらに2層に分層が可能。底部から10cmほど上方では、径2～3cmの小砂利が、底部から5cmほど上までは径が4～5cmの小砂利—玉砂利のような感じを受ける—が詰まっている。この層にはフレイク・チップを含む、土はかたくしまっている。封入土)。

壺形土器(図194) 口縁部と頸部の一部を除く。最大幅を胴上部付近にもつ。胴の張り出しは顕著でない。やや内傾気味に肩部、頸部へと至る。胴下部についても同様である。底部は平底をなす。肩部以上に文様帯をもつ。横走る沈線によって文様帯が画される。文様の主体は曲線文で、交差するように組合され、曲線の山と山の間に区画帯が生じる。地文は縄文で、頸部から底部に付される。胎土には砂粒を多く含む。SP-40、45、82などに類似する。

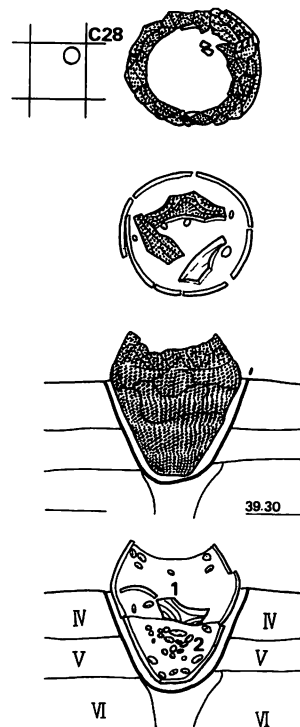


図190 SP-41出土状況図

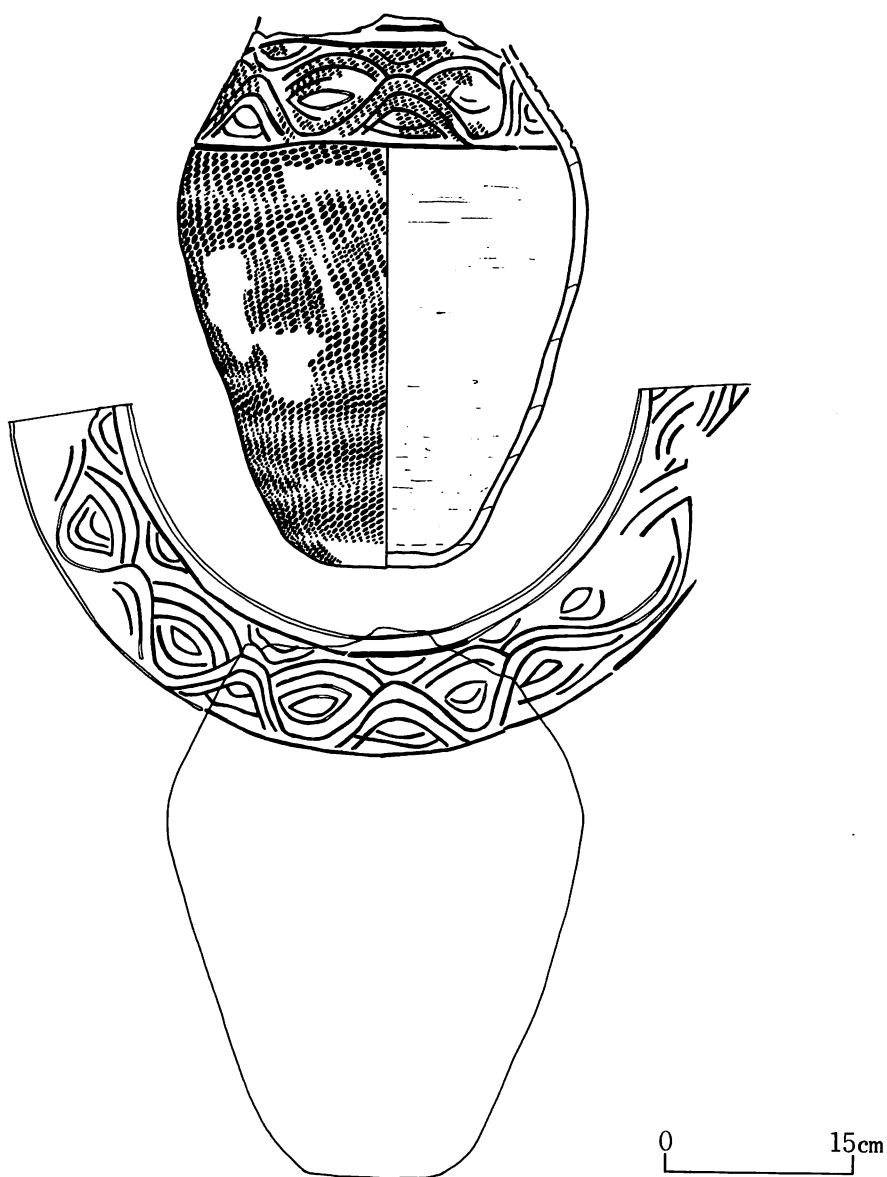


図191 S P-41実測図

SP-42 (図192～図193)

位 置 C-28の中央からやや北寄りのところ、本調査区での埋壺の北限である。

検出状態 壺は正立した状態にて出土。胴上部以上が崩落し、破片の一部は壺内にある。破片は非常に脆い状態である。胴中部以下は土壌内に埋設される。土壌底は比較的平坦である。壺と土壌との間隙は黒褐色土によって埋められる。

壺内土層 1 褐色土(やわらかい。堆積土)、2 暗黄褐色土(第V層に近い土砂であるが、ローム粒はきわめて少量、チップを数点含む。封入土)。埋設時には胴中部まで土砂が封入され、それ以上は空洞であったと思われる。崩落は肩部から始まり、頸部→口縁部へと移行する。壺の右側の肩部以上は完全に崩壊して、検出時にはすでに消失していた。左側肩部もずれて、堆積土によってかろうじて支えられていた。

壺形土器(図192) 検出時には頸部まで存在していたが、水洗後かなり脆くなり、破片はかなり細かくなってしまった。そのため、肩部以上の復元は不可能であった。検出時の状態から器形、文様などを復元すると、最大幅を胴上部にもつ。張り出しはゆるやかで、内傾気味に肩部、頸部へ至る。胴下部ではかなり細身の器形を呈する。底部は丸底をなす。文様帯は肩部以上にある。肩部付近では横走沈線をめぐらし、頸部では曲線文と横走る短い沈線が組合された文様が描かれる。頸部から底部にかけて縄文が付される。胎土には砂粒を多く含む。SP-40、41、45、82などに類似する。

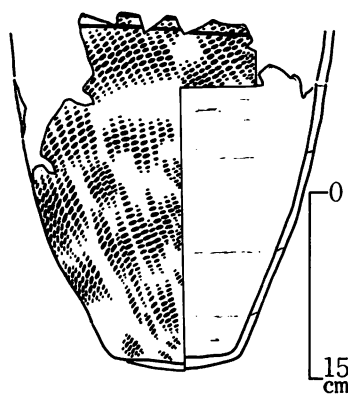


図192 SP-42実測図

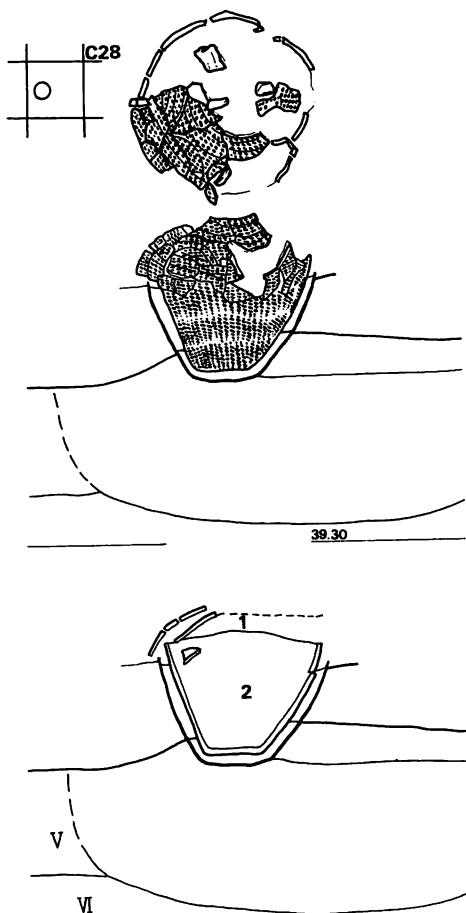


図193 SP-42出土状況図

SP-145 (図 194～図 195・図197)

位 置 実測図記載ミスで正確な位置は不明。写真から 18～19 の C ライン付近と思われる。

検出状態 壺は正立した状態にて出土した。土壌の実際の掘り込み面は上層の方である。壺は実測途中に倒壊してしまったため胴部以下だけになってしまったが実際は肩部付近まで土壌内に埋設されていた。壺は土壌の一方の壁に密着する。間隙は黒褐色土によって埋められる。壺底面は傾斜する。

埋内土層 1層だけである。褐色土中には、フレイク・チップ、砥石片、小砂礫、石斧原材料、獣骨片などが混入していた。肩部付近まで封入していた。そのため、肩部から上の崩落した破片はすべて肩部付近にとどまっていた。

壺形土器 口頸部の一部を欠く。胴部の張出しはゆるやかで、内傾しながら頸部に至る。口縁部は直立気味に立ち上るものと思われる。肩部には横走沈線が、頸部には平行線文と刺突文が付される。頸部は無文で胴部、底部には縄文が付される。図 195 は壺から検出された砥石。

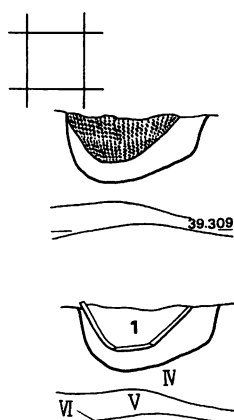


図194 SP-145出土状況図

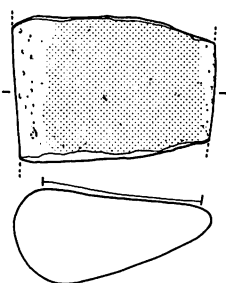


図195 SP-145石器

SP-147 (図 196～図 197)

位 置 実測図記載ミスで正確な位置は不明。SP-145 に隣接する。

検出状態 壺は正立した状態にて出土した。壺は土壌ぎりぎり埋設されていた。肩部から口縁部にかけて完全に崩落していた。崩落した土器片は第1層上面を覆っている。壺底面はボール状を呈する。

壺内土層 1 褐色土(獣骨片・小砂礫を含む、封入土)、2 粘土(封入土)。壺の真中に杭が打ち込まれた痕跡がある。

壺形土器 口縁部と胴部の一部を欠く。肩部は強く張り出す。内傾しながら頸部に至る。口縁部に至ってはやや内湾気味に立ち上る。肩道上端に粘土帯を貼り付けその上に刺突を加える。また頸道上端ではすり消しが見られる。地文は縄文で口縁部から底部にかけて付される。

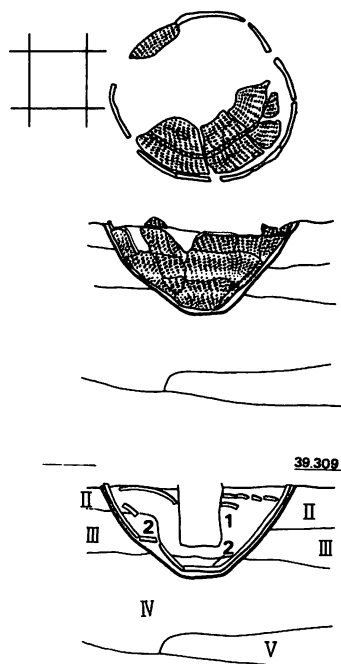


図196 SP-147出土状況図

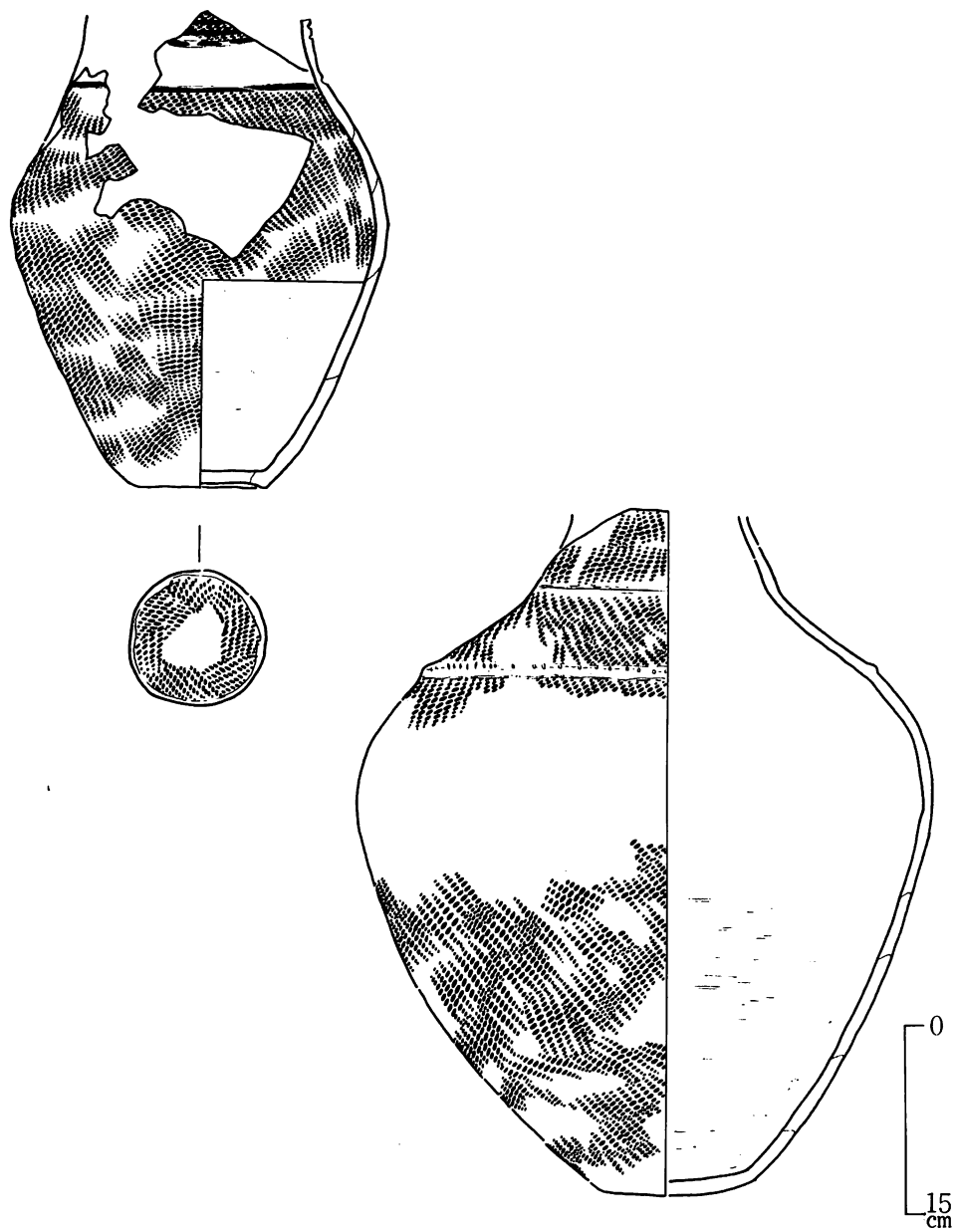


図197 S P-145・147実測図

壺形土器(図198) 工事中に発見されたもので、本遺跡発見の契機ともなった土器である。出土位置は不明。壺内に1978年ショップ台地と記されているだけである。どうい状態出土したのかは不明。今まで述べてきた壺形土器と上下が正反対の器形をなす。本来底部であるべきところが開口し、口縁部であるべきところが閉じている。最大幅を胴下部にもつ。球形に近いカーブを描きながら底部に至る。底部は台状をなす。底部下端とくびれ部にはそれぞれ縄線が付され、底面にも縄文線があり、三重の円を描く。胴下部には横走る沈線がめぐる。頸部から底面に至るまで縄文が付される。

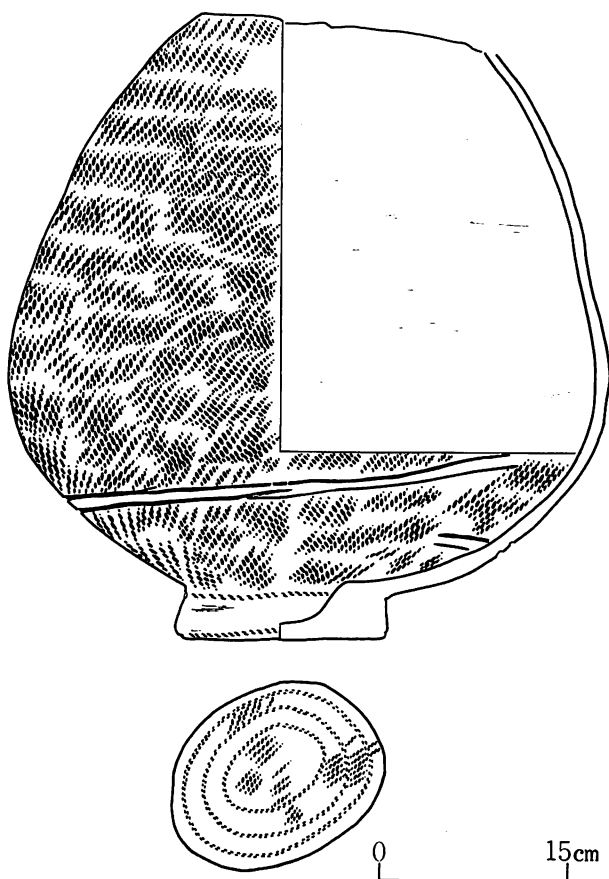


図198 遺跡発見の契機となった土器

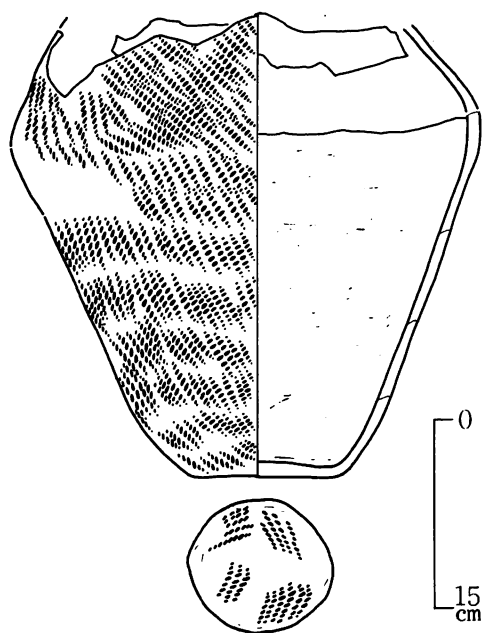


図199 56年度調査時出土土器

壺形土器2(図199) 昭和56年度調査地区。H-3の南壁寄りのところから発見された。胴中部以下が土壌内に埋設され、正立した状態にて出土。口頸部を欠く。最大幅を肩部付近にもつ。肩部は張り出し、内傾しながら頸部に至る。肩部以下は内傾しながら底部に至る。底部は平底をなす。肩部から底面には縄文が付される。胎土には砂粒を多く含む。

5 Tピット—付図 図200～図213、挿図a、b—

Tピットは123個発見された。それらは調査地区の全域に分布している。その切り合い、配列、形状の違いなどからある程度の時間の幅が認められる。Tピットは溝状を呈するものが多い。また、123個のうち2個だけが長円形プランで、底に2～3個の小ピットをもつものがある。これは道央地方に普遍的にあるタイプで、この地方では新知見である。

Tピットの時期は、住居跡等との切り合いから推定すると、SH-1（縄文時代中期後葉）に切られ、H-2、SH-3よりも古い。すなわち縄文時代中期から続縄文時代初頭の間で作られ、使用されたものである。

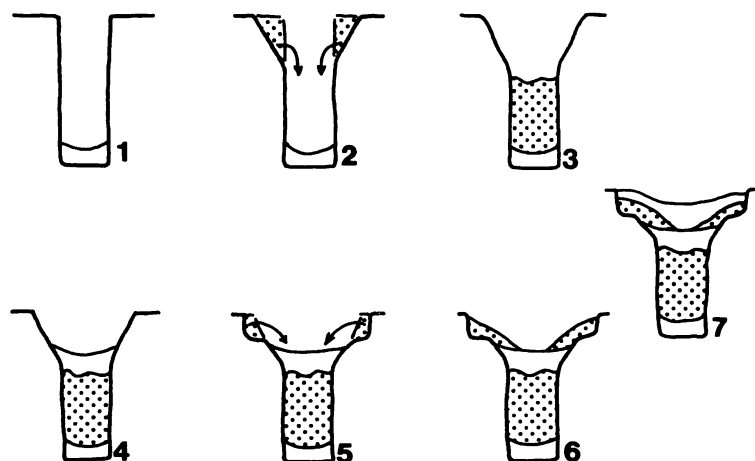
長軸方向は一般に東→西、東南→北西であるが、これはこの段丘の地形に制約されたものであろう。

配列について（挿図b）、段丘東端の崖線に直交、あるいは斜交するように作られたものが多く平行するものはわずかである。

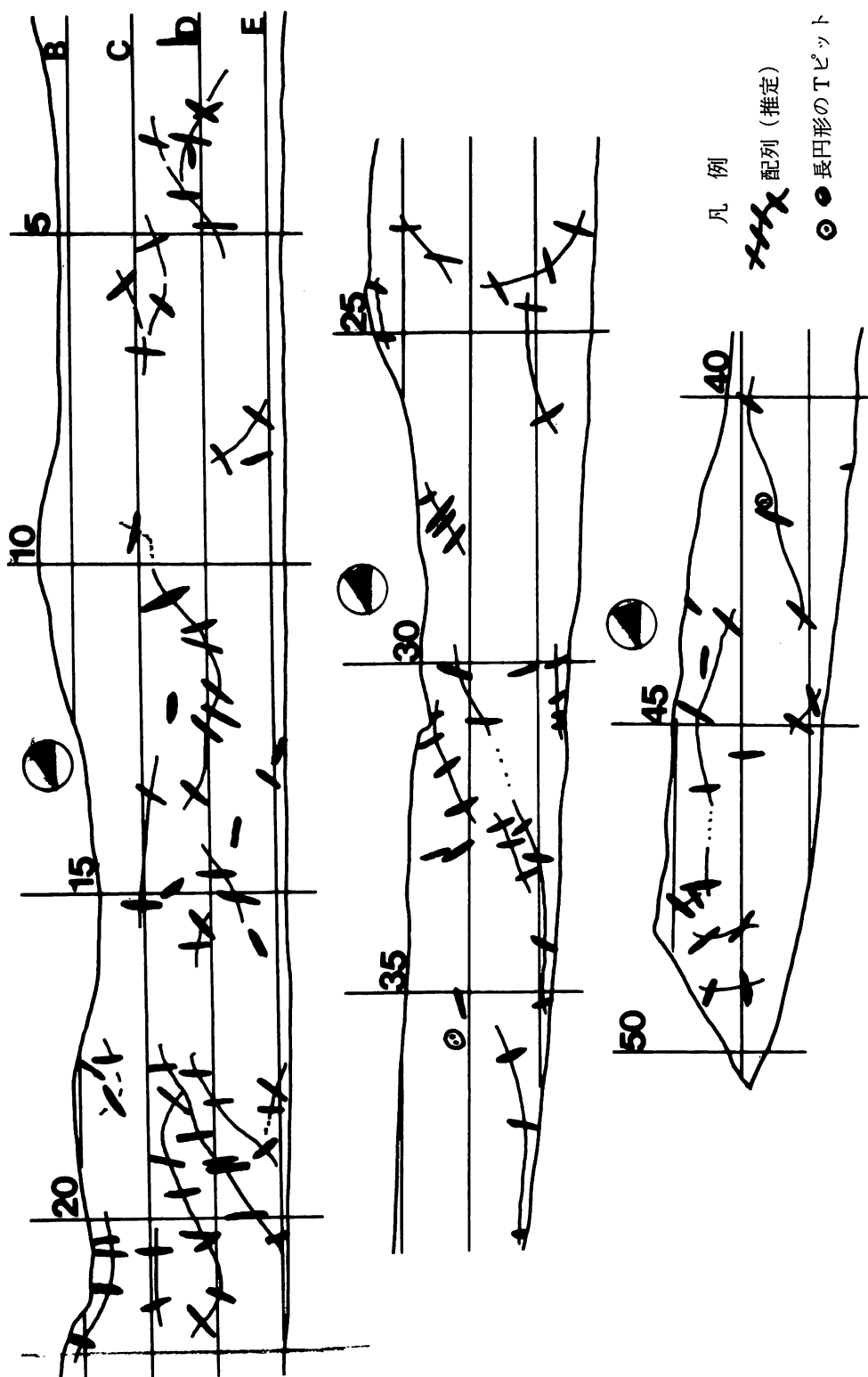
Tピットの埋没の過程を推測したのが挿図aである。1、使用期間中あるいは放棄直後に、底に10～20cmほどの土砂が流入堆積する。2・3、開口部付近の壁が崩落し始める。一度に崩落しTピットのほとんどが埋まってしまう場合もある。4、崩落土上へ土砂が堆積する。このとき雨水の浸透、木根などによって帯状に黒色土が入り込むことがある。5・6、さらに開口部付近の壁が崩落する。7、2度目の崩落土の上に土砂が堆積する。

本遺跡の場合、崩落した壁の体積と崩落土の体積が概ね等しいことから、崩落土をすぐすくい上げて再利用した可能性はない。

壁の崩落は地面の凍結、溶解のくり返しの過程で起こるものであろうからその時期は、晩秋から春先にかけてと思われる。また、地面が凍結している季節に深さが2mもの穴を掘ることは困難であろうことからTピットは初夏から秋口にかけて作られたものと思われる。そして、その耐用期間は長くとも2シーズンを越えることはなかったものと考えられる。



挿図a Tピット埋没過程模式図



挿図 b Tピット配列

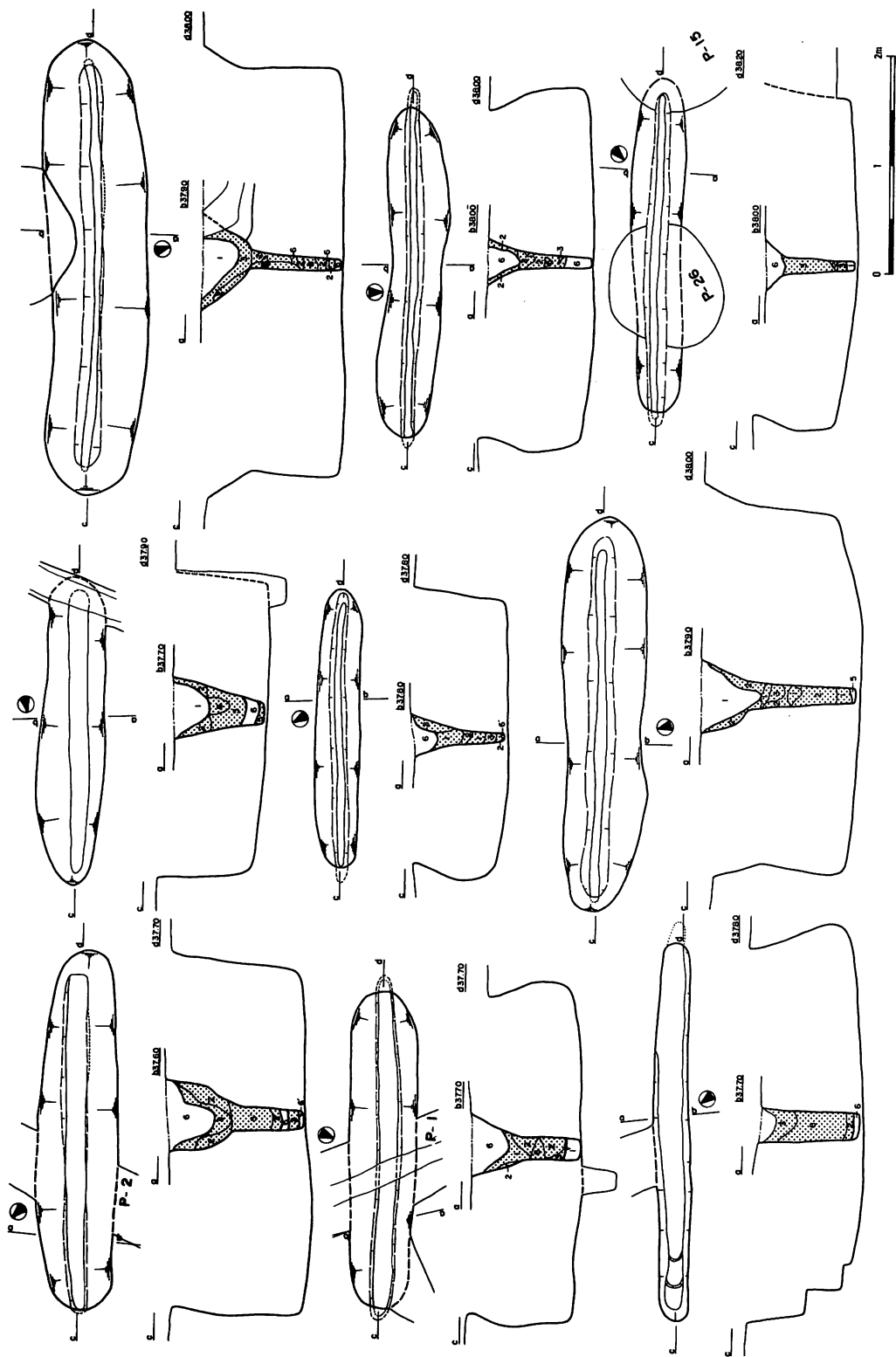


図200 Tピット(1)

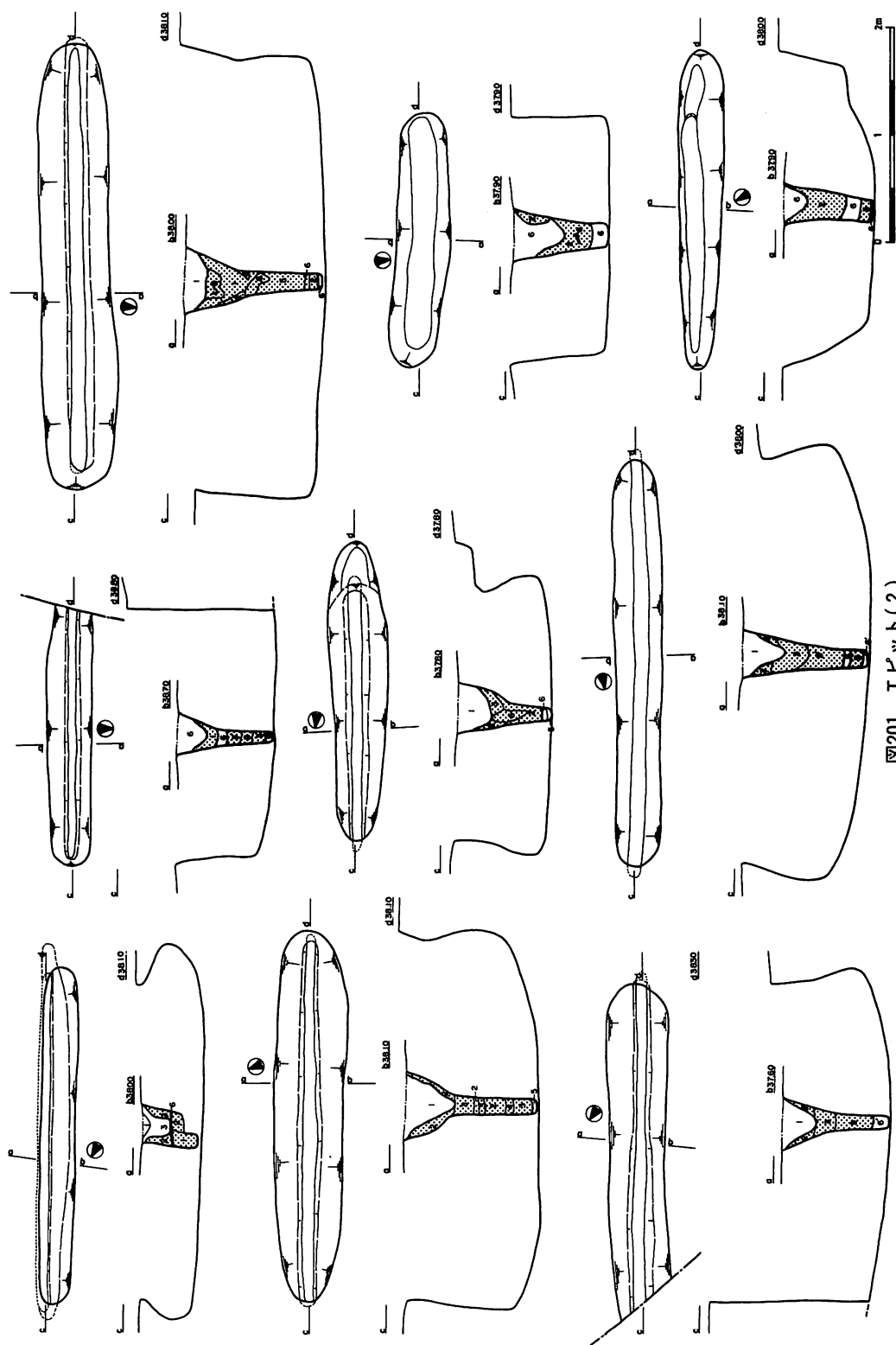


図201 Tピット(2)

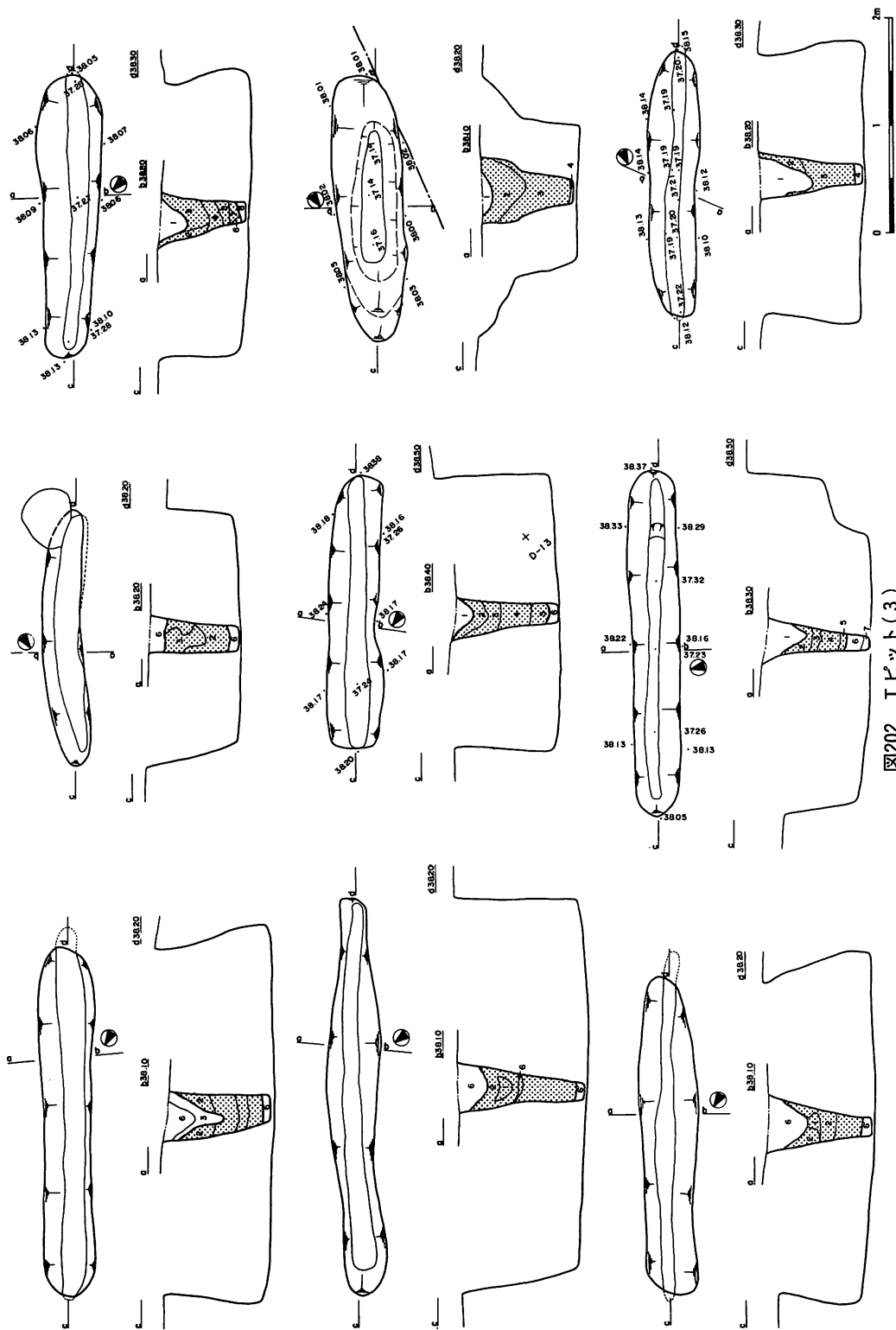
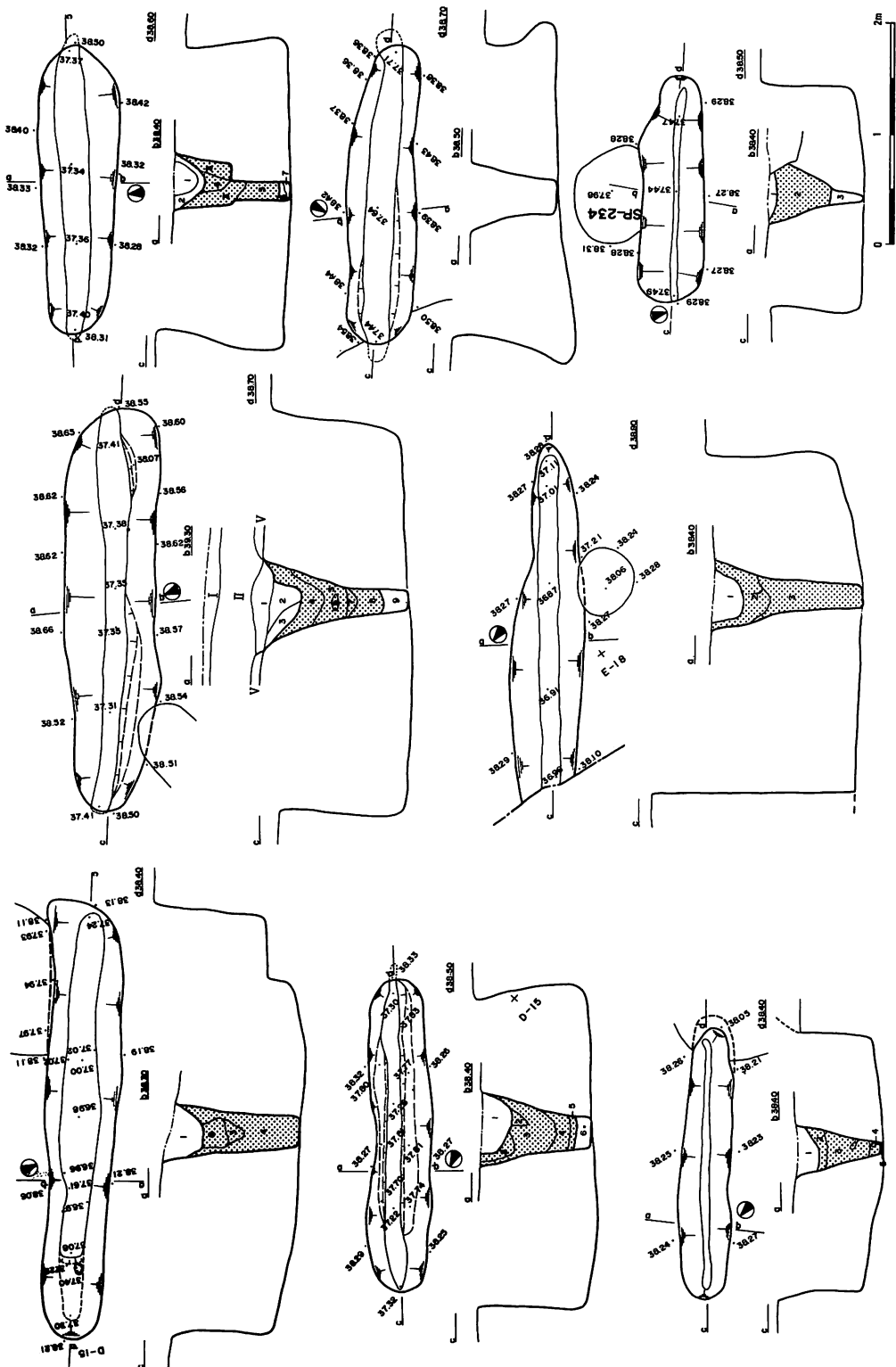
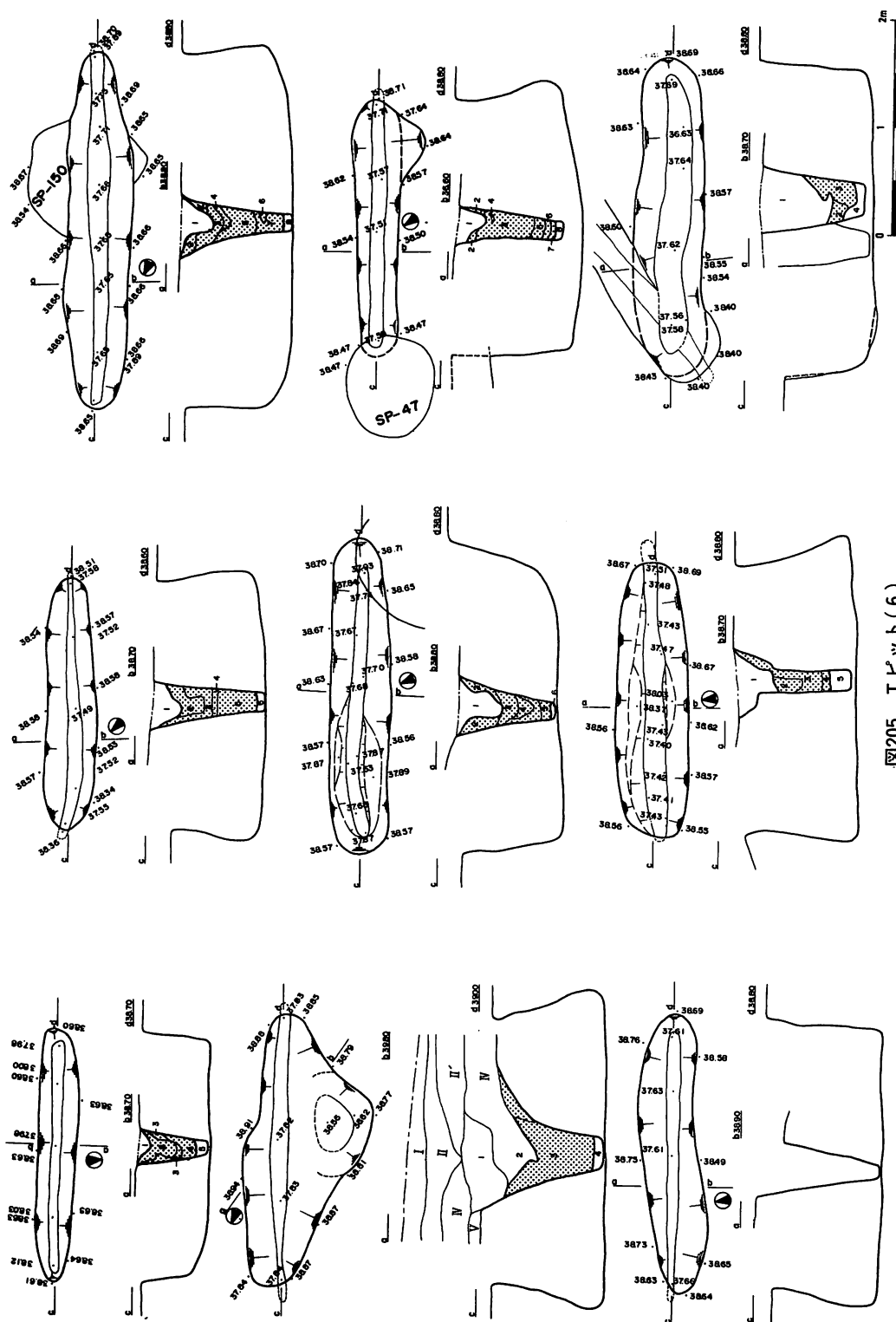
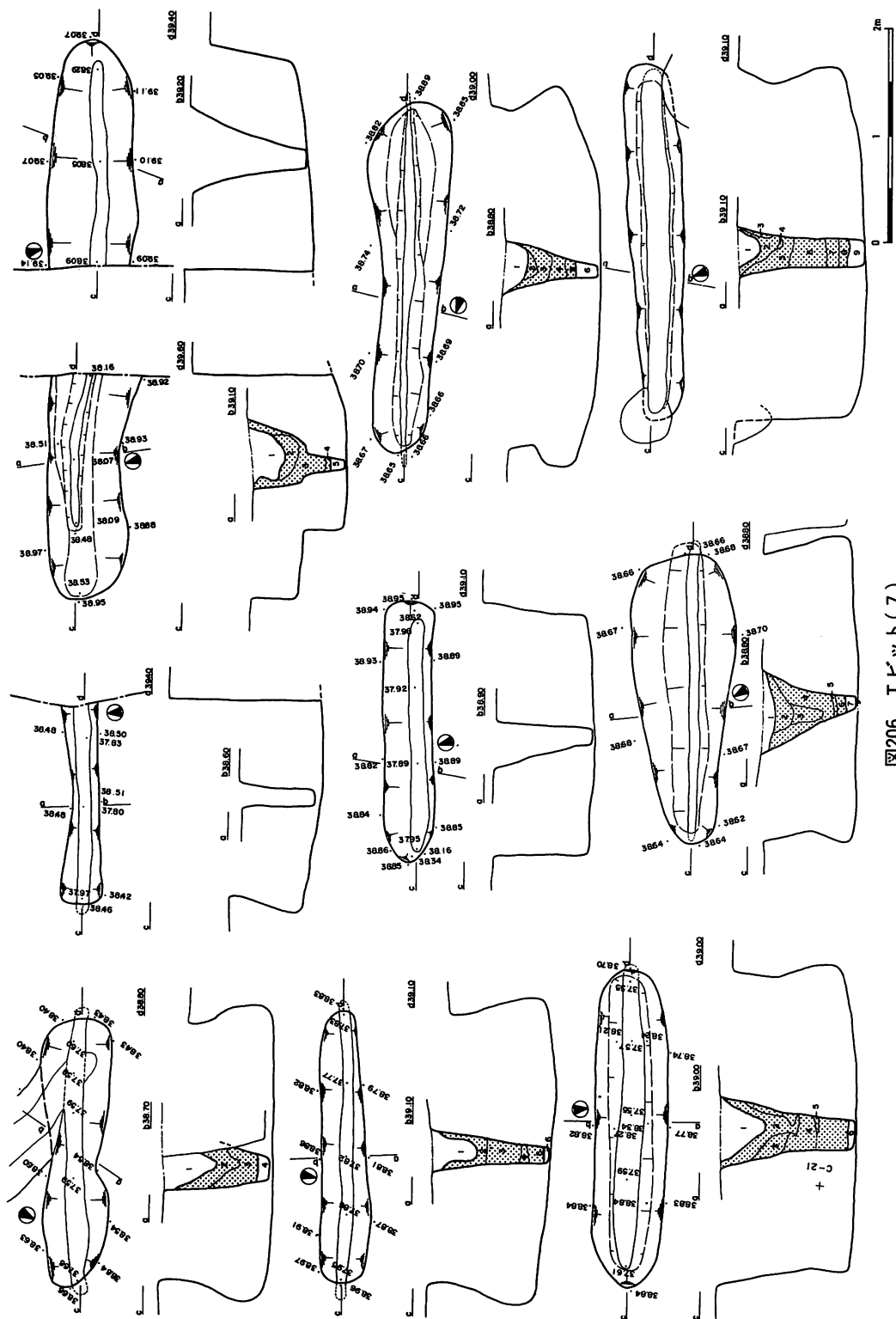


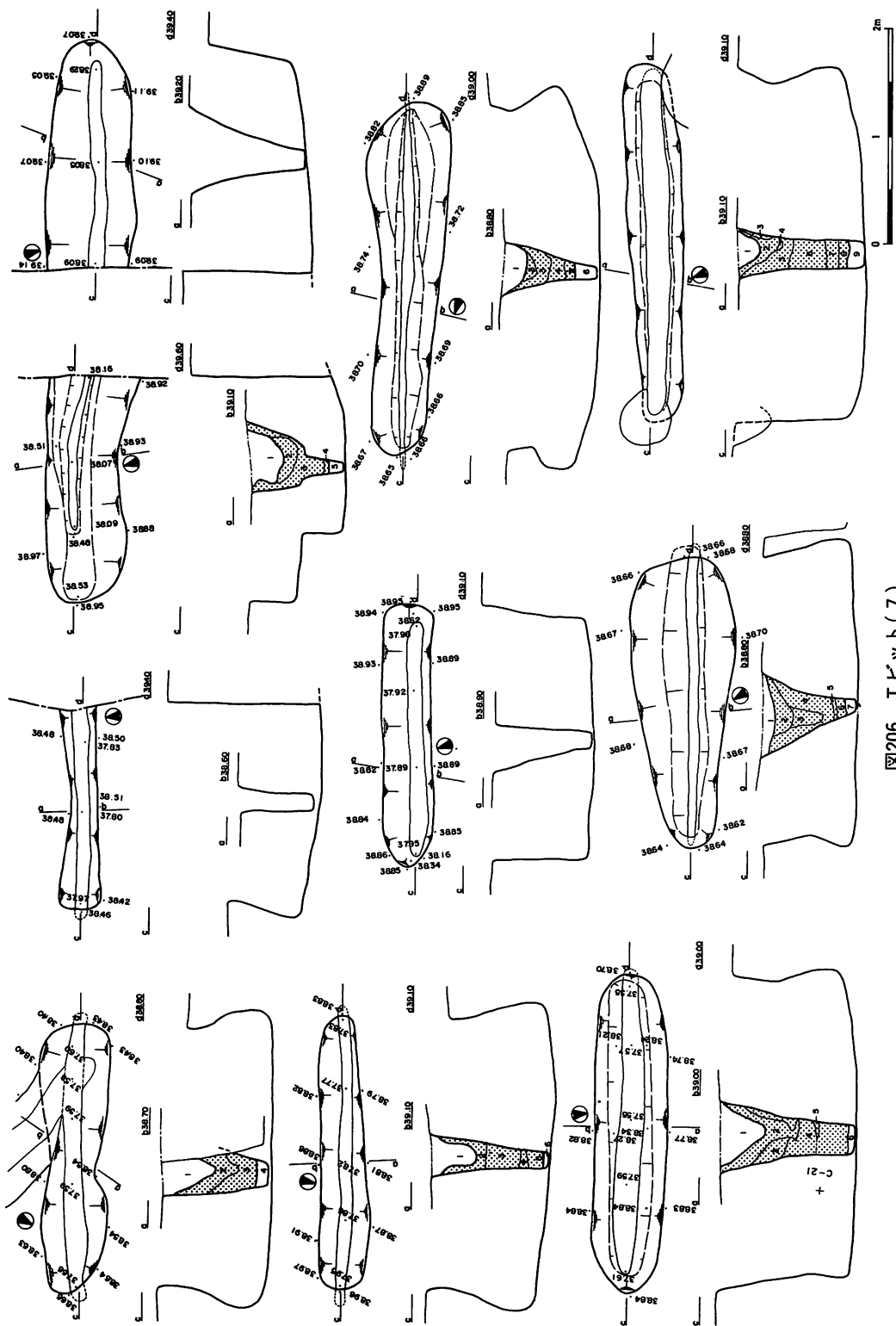
図202 Tピット(3)





☒205 Tピット(6)





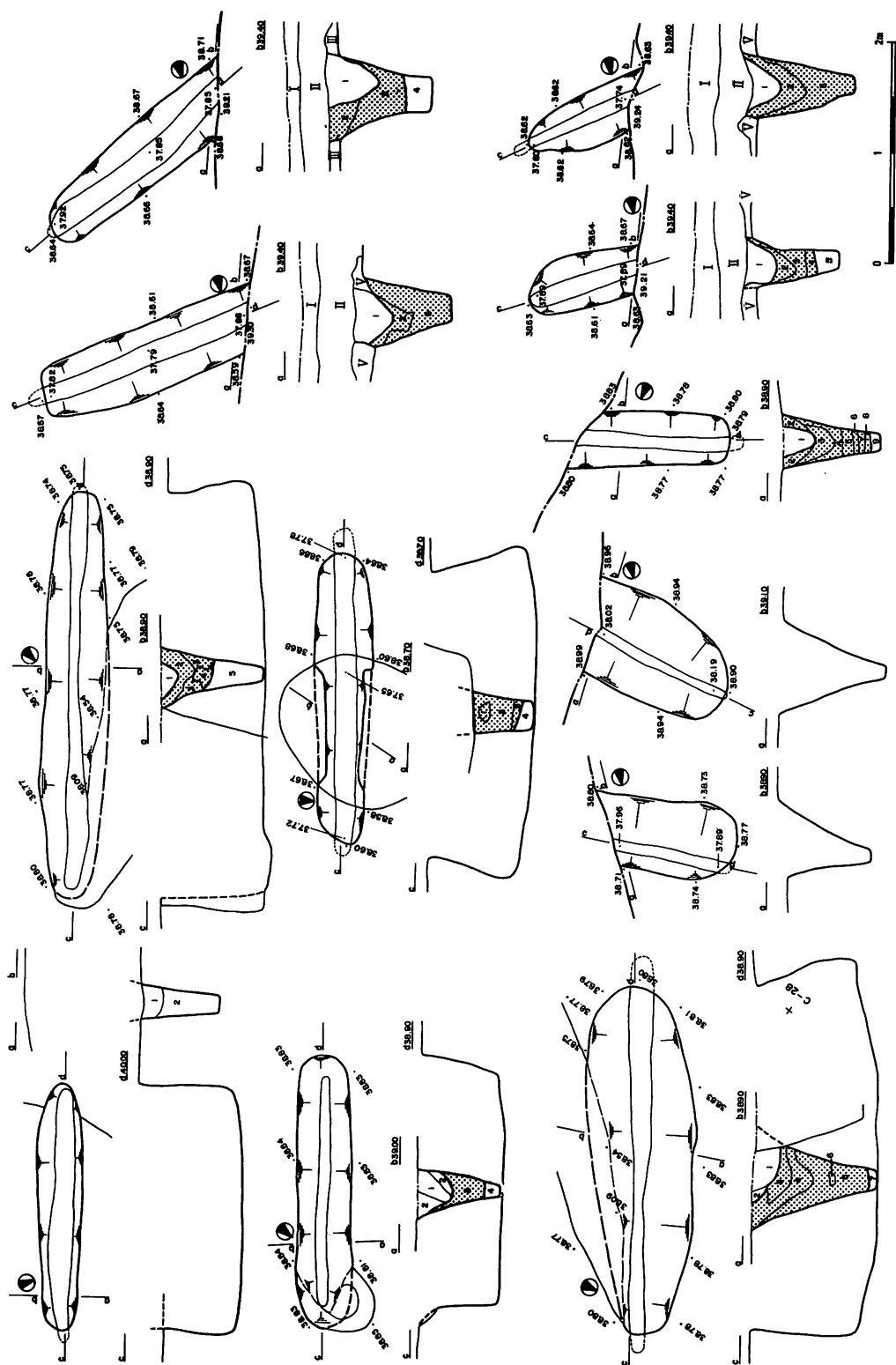
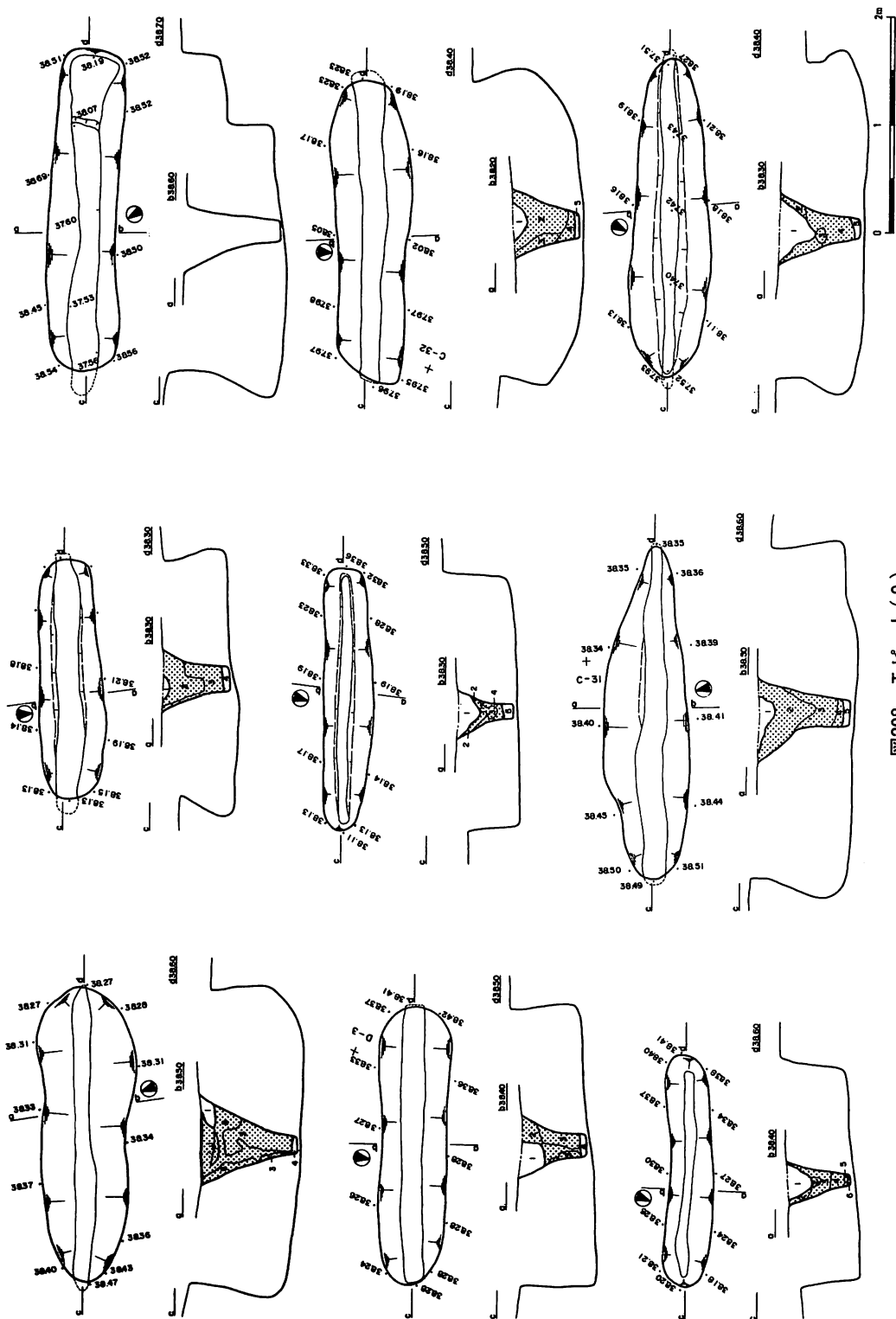


図 207 Tピット(8)



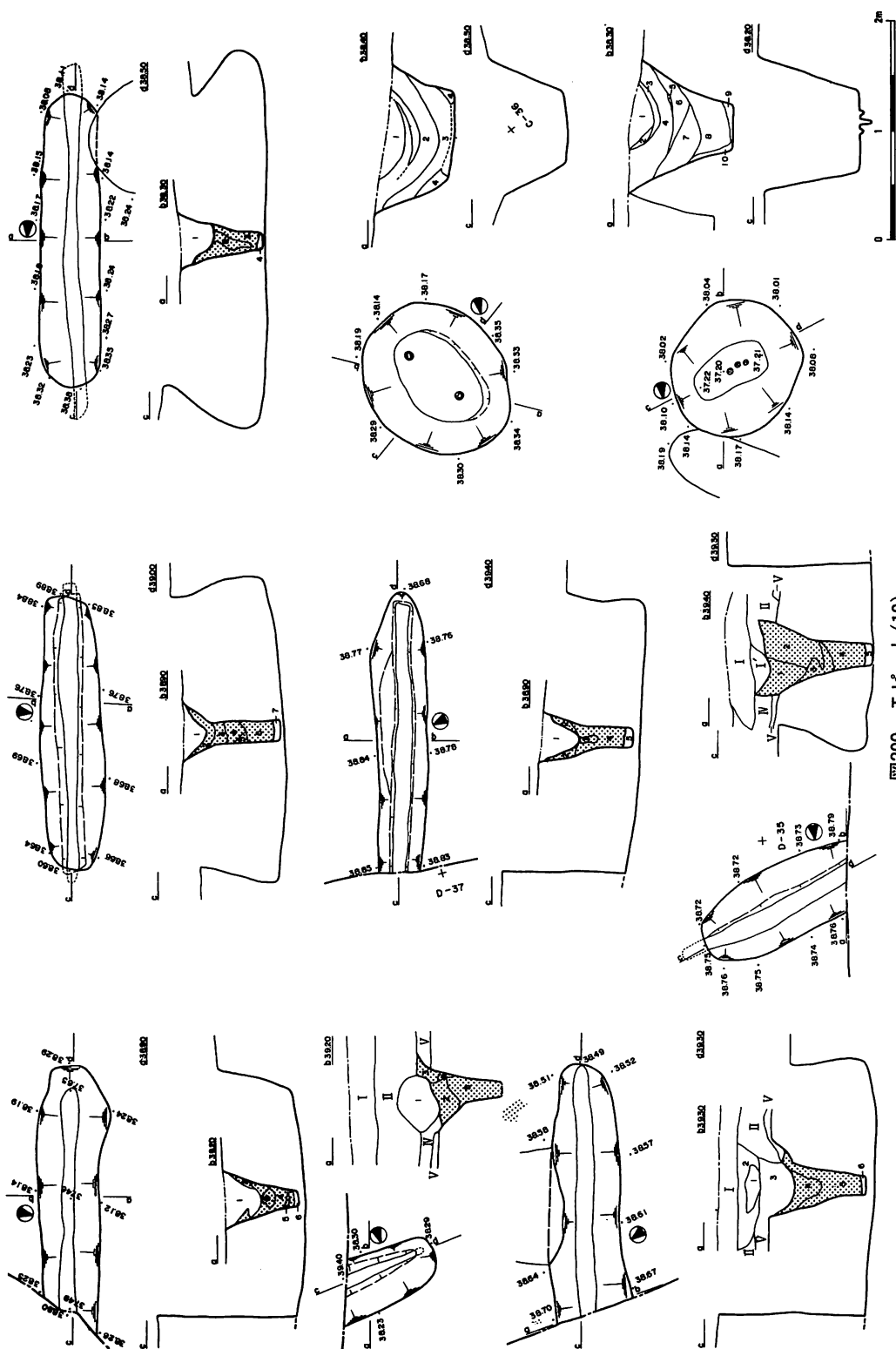


図209 Tピット(10)

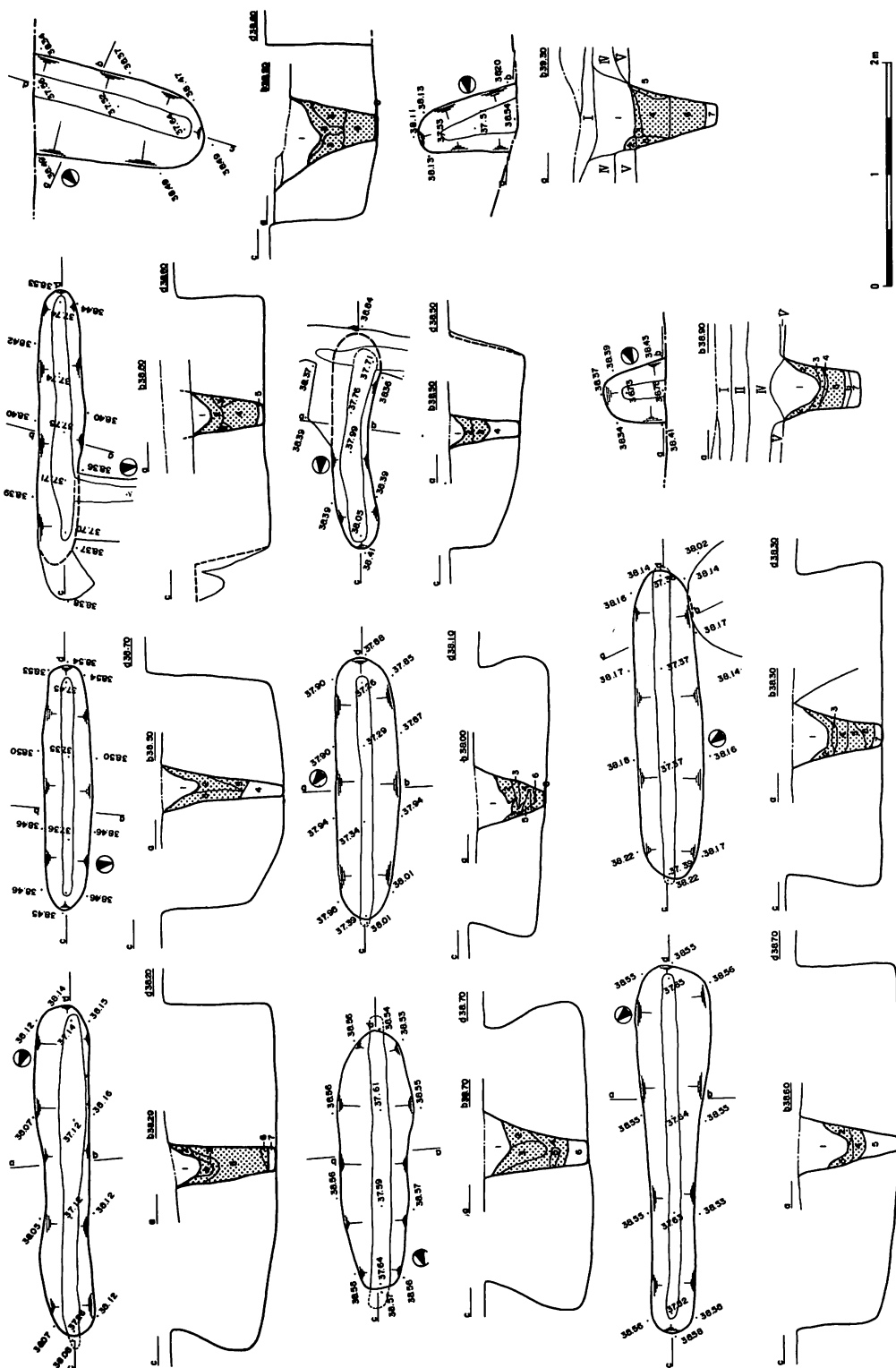


図212 Tピット(13)

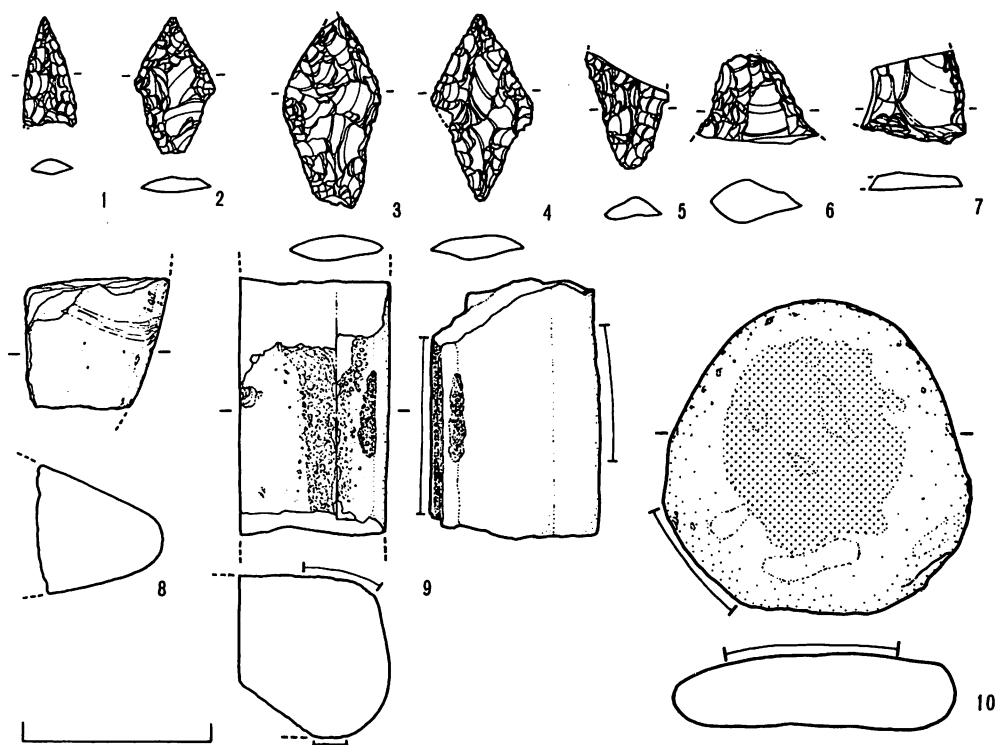


図213 Tピット(S・N地区)出土遺物

表4 Tピット出土石器一覧表

遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重 量(g)	材 質
S P-50	213	1	石 鏃	1.2	Obs
N P-23	213	2	石 鏃	2.2	Obs
"	"	3	や り 先	7.0	Obs
N P-37	213	4	や り 先	(5.3)	Obs
N P-23	213	5	や り 先	(2.5)	Obs
N P-51	213	6	ナ イ フ	(5.3)	Obs
S P-98	213	7	スクレイパー	(3.5)	Obs
S P-30	213	8	砥 石	55	Sa
S P-200	213	9	石 斧	254	Gr-Mud
"	"	10	砥 石	195	Sa

6 円形土壇—付図 図 214～図 230—

円形土壇は141個発見された。それらは調査地区の全域に分布している。土壇墓との切り合いはない。とくに、土壇墓の分布域における円形土壇の数はきわめて少ない。円形土壇とTピットの切り合いがいくつかある。すべて円形土壇の方が新しい。

円形土壇の配列、方向性は明らかでないが、本章1項で述べたように、地域によっていくつかのまとまりがみられる。

① 4～7ラインの間(P-12、15～25)、12個ともほぼ同様な土層で、短期間のうちに埋没した状態を示す。規模、形状ともに一致する。また、これらは微高地にある。

② 17～18ラインの間(SP-194～197、199、201～203、230、236、237、239、247、248、255)にあり、埋壺(SP-22～27)を囲むような配置をなす。土層は埋壺の封入土と同じ傾向を示す。この円形土壇群の中心に石組をもつ焼土がある。

③ 27～29ラインの間(SP-153～158、160、161、191、192、211)にあり、Tピットの上につくられる。整然とまではならないが大体3×3個の配列をなすようである。土層は埋壺の封入土と同じ傾向を示す。

④ 44～48ラインの間(NP-8～18、20、21、25)、いずれも浅い掘り込みで、土層も同じような傾向を示す。

⑤ 48～51ラインの間(NP-1、2、5～7、31～33、38～40)にあり、④のグループとほぼ同じ状態である。

④、⑤とも地域的なまとまりを示しているだけで、配列、方向性は見出せない。

②、③の円形土壇の埋土は、基本層は黄褐色土で、その中に、土器細片、フレイク・チップ木炭片、焼獣骨、粘土などが混入される。このことは、土壇墓における開口部付近の埋土、埋壺の封入土などにきわめて類似する。

円形土壇の時期は、②、③については、伴出遺物、埋土の状態などから土壇墓、埋壺と同じと考えられるが、①、④、⑤については時期設定は困難であるが、Tピットを切って作られていること、SH-1を切っていることなどから縄文時代中期以降のものと思われる。

円形土壇の用途については不明であるが、②、③の場合、葬送に係る何らかの施設であろうと思われる。また、埋壺の分布域と同じであること、微高地にあることなどから、埋壺と同じような性格が考えられる。あるいは、埋設される壺の供給がなされなくなりその代用としてこのような円形土壇を作ったのだろうか。

円形土坑群 1 (図 214～図 215)

前述した②のグループである。C-17、D-17 から発見された。小円形を呈し、径が30～50 cm、深さは30 cm ぐらいである。埋土は、黄褐色土を基本層とし、その中に焼獣骨片、木炭片、フレイク・チップなどが混入される。これらは埋壺を囲むように分布する。SP-255 から壺形土器が出土した(図 214)。壺は口頸部のみで、 $\frac{1}{2}$ を欠く。ほぼ直立する口縁部を呈し、頸部はくびれ、肩部が張り出すものと思われる。口唇部は素縁である。口辺部と頸部には絡縄体圧痕文がめぐり、口縁部の文様を区画する。文様は縦横に浅い沈線を付したもので、縦位の沈線→横位の沈線という順序で描かれる。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成もきわめて良い。他の土器とは異質である。



図214 SP-255出土土器

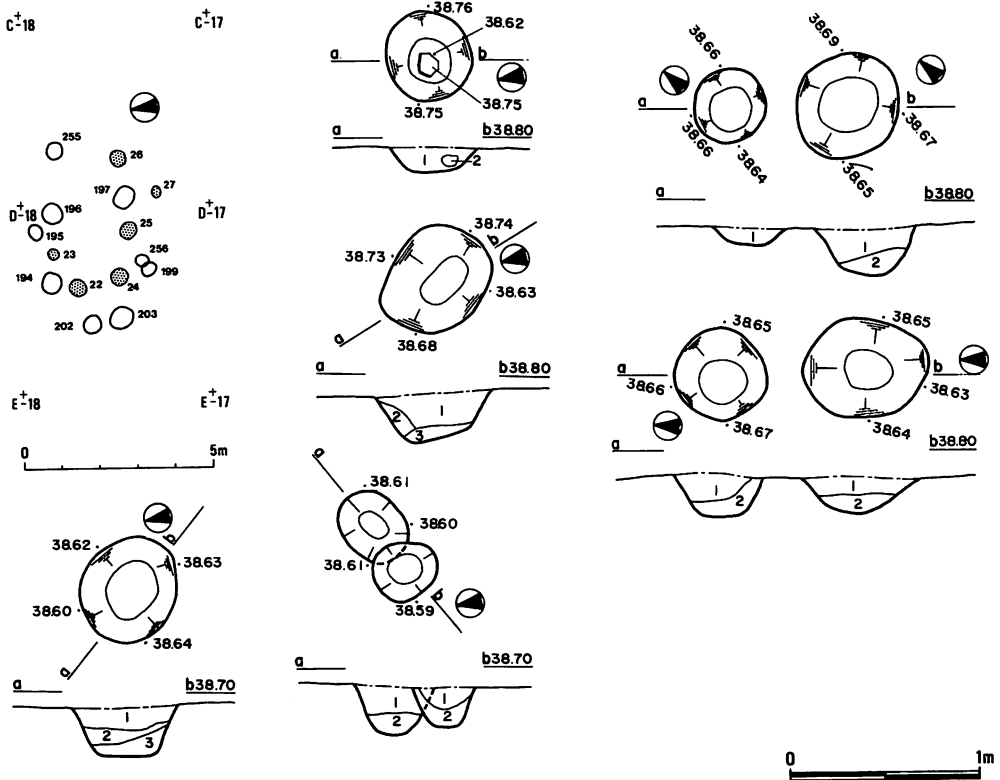


図215 円形土坑

円形土坑群 2 (図 216~218)

③のグループである。B-27、B-28 から発見された。小円形を呈し、径 30~50 cm、深さ 50 cm 前後のものである。埋土は、黄褐色土を基本層とし、その中に土器細片、フレイク・チップ、焼獣骨片、本炭片、粘土などが混入される。これは埋壺の封入土と同質のものである。SP-153、SP-160 から土器、石器などが出土した。土器(図 217)は、舟形土器といわれるもので、約 $\frac{1}{2}$ が欠損する。上面観はだ円で口縁部の一部は突出し、相對する。突出した部分は穿孔される。口縁は大きく外反し、底部は丸底である。口縁部から底部には縄文が付される。内外面の一部にスガが付着する。石器には、石鏃(図 218~1、2)、ドリル(3)、砥石(4、5)、くぼみ石(6)などがある。石鏃は2個とも有茎のもので、1の調整剝離は入念である。2は茎部の調整にくら

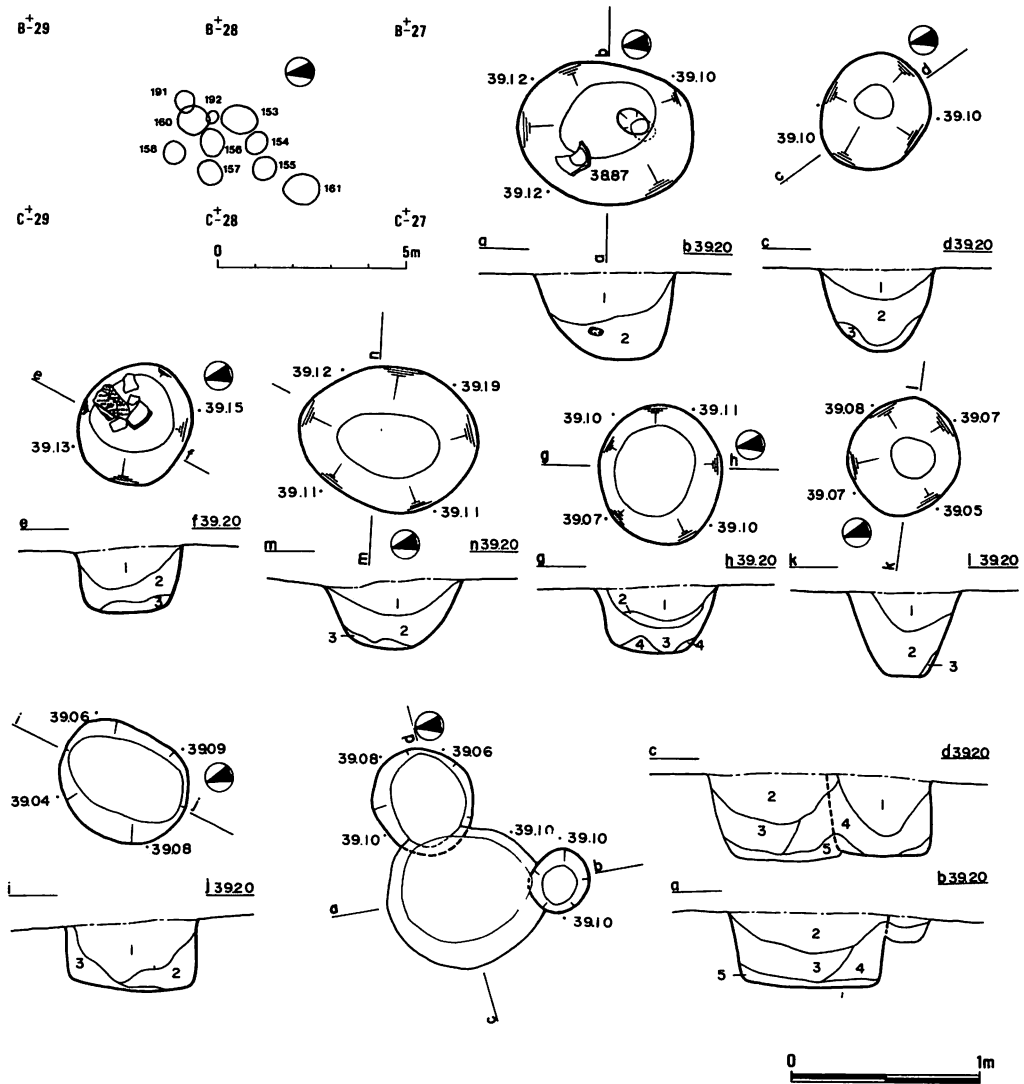


図216 円形土坑

べ鍬身の方は簡単なものである。ドリルは、先端部にのみ剥離加工を施したものである。砥石は側縁の加工を行ったもの（4）と自然礫をそのまま素材として使用したもの（5）がある。いずれも全面を使用している。くぼみ石は、表面の中央部にわずかな凹部が認められたもので、用途は不明である。

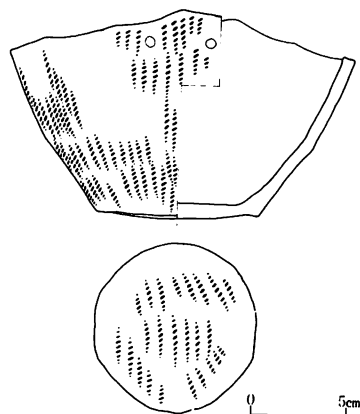


図217 S P-153出土土器

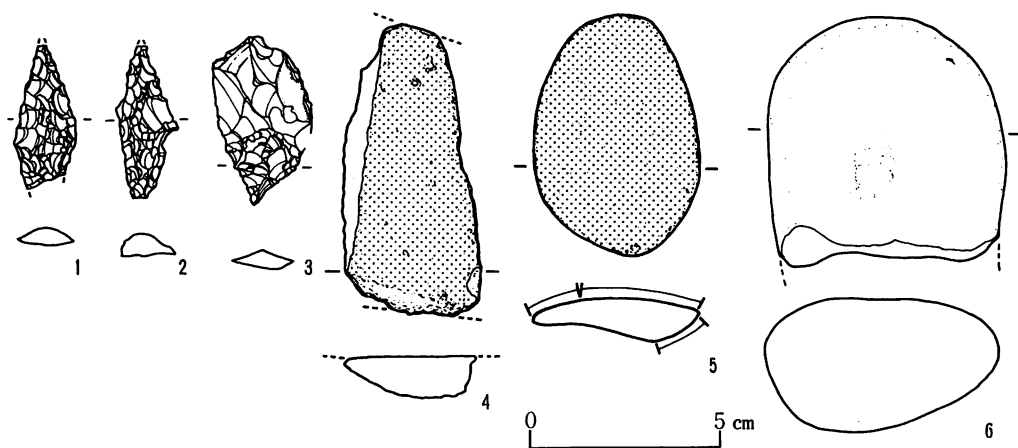


図218 石 器

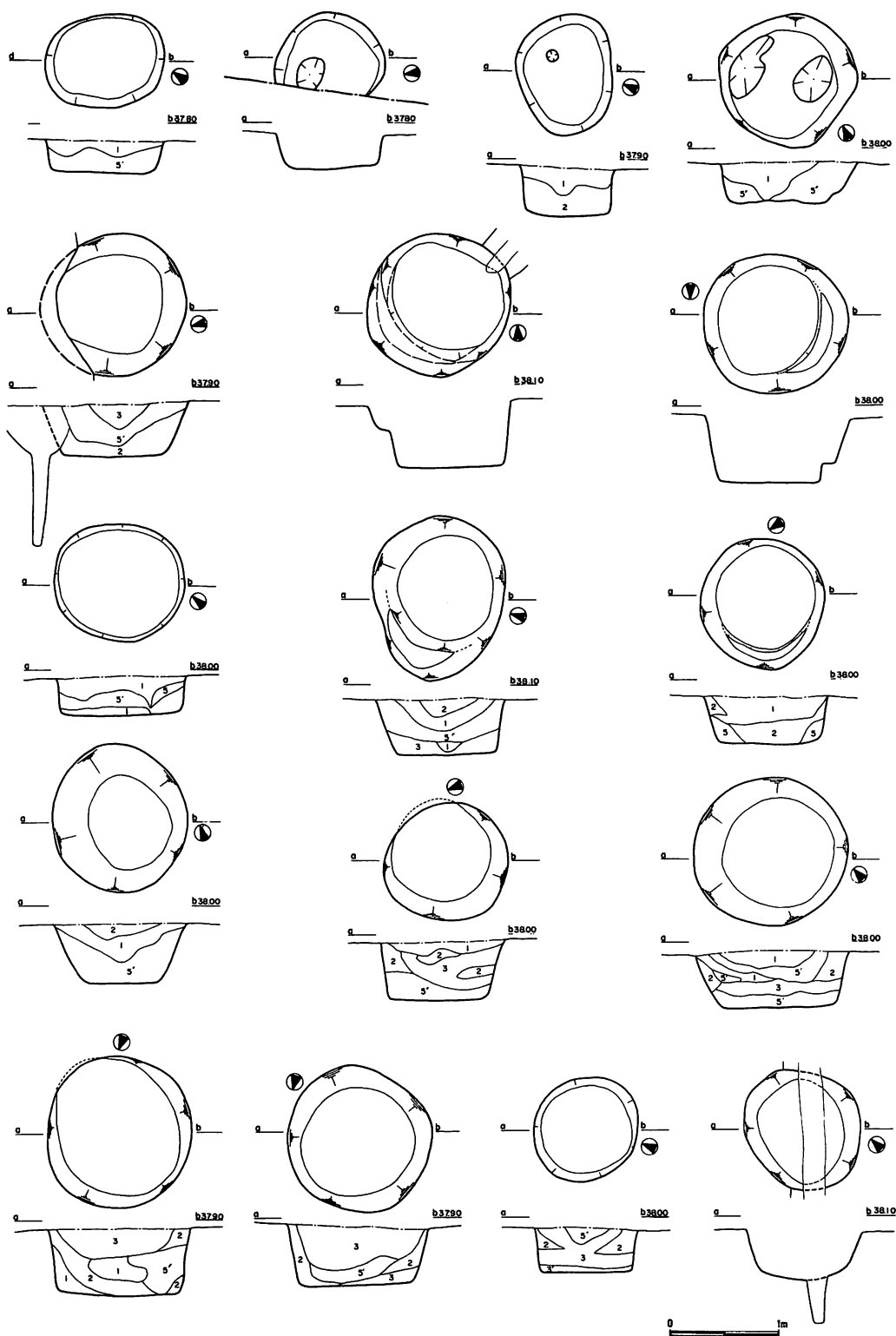


图219 円形土坑(1)

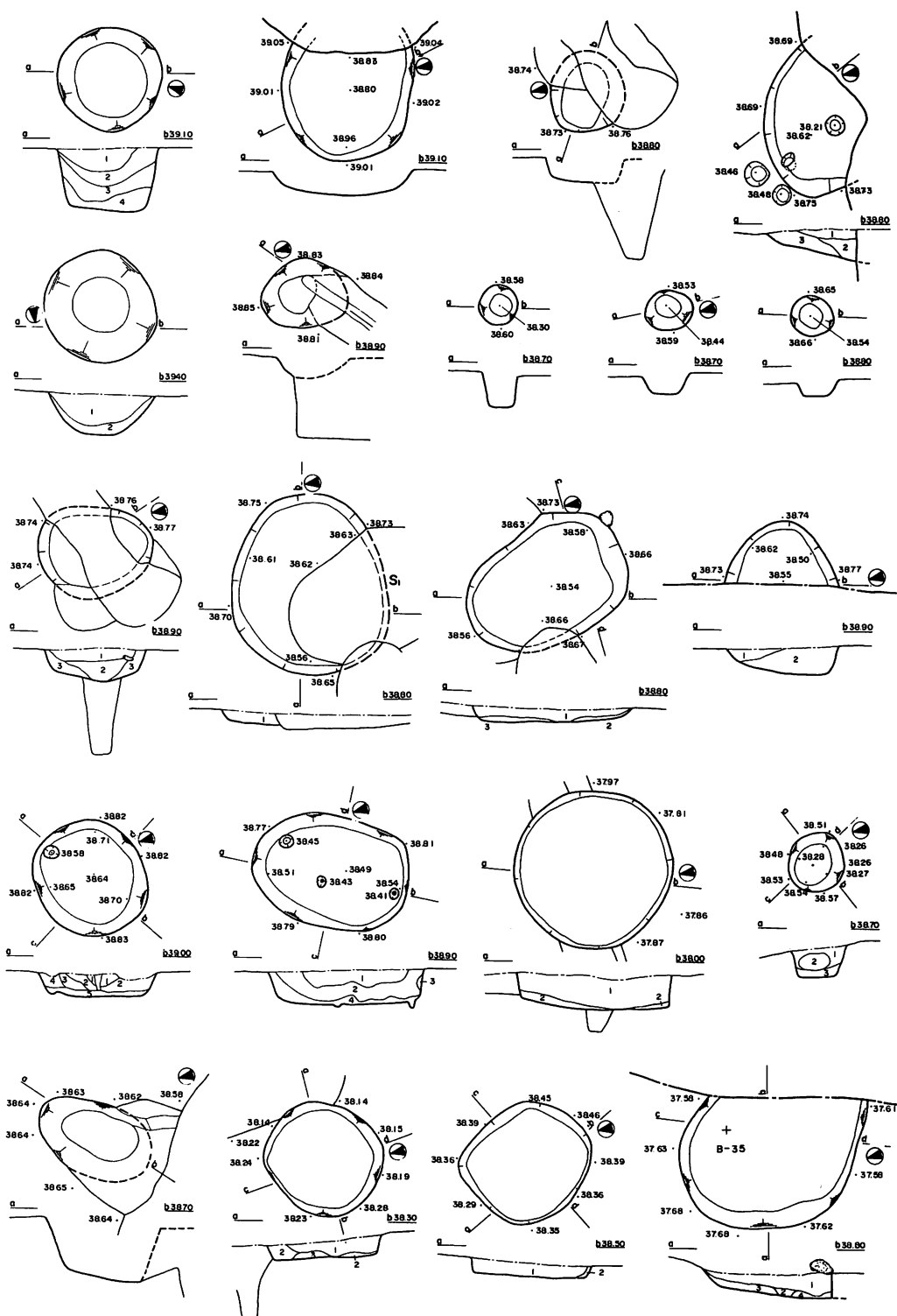


図220 円形土壌(2)

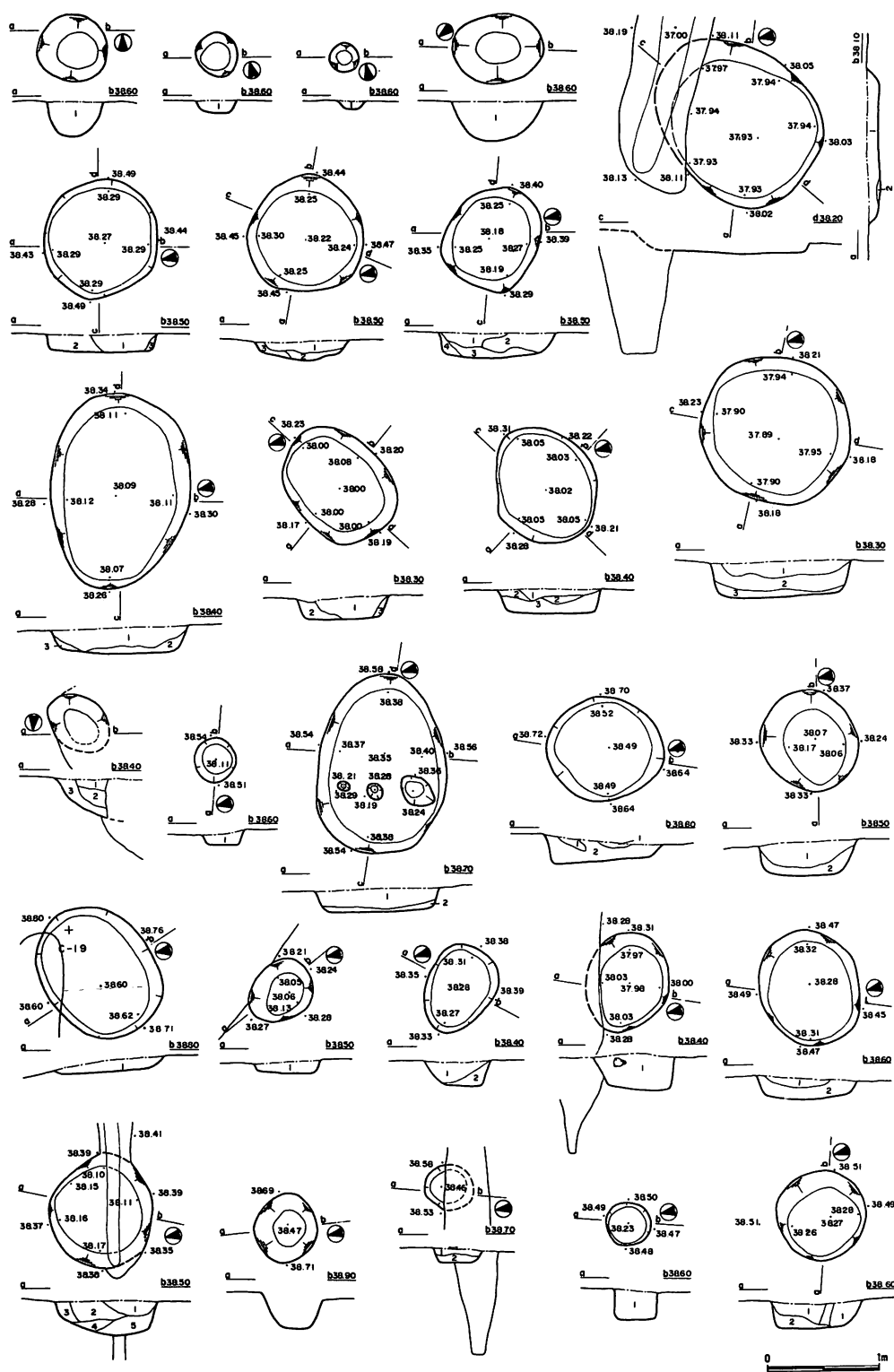


图221 円形土坑(3)

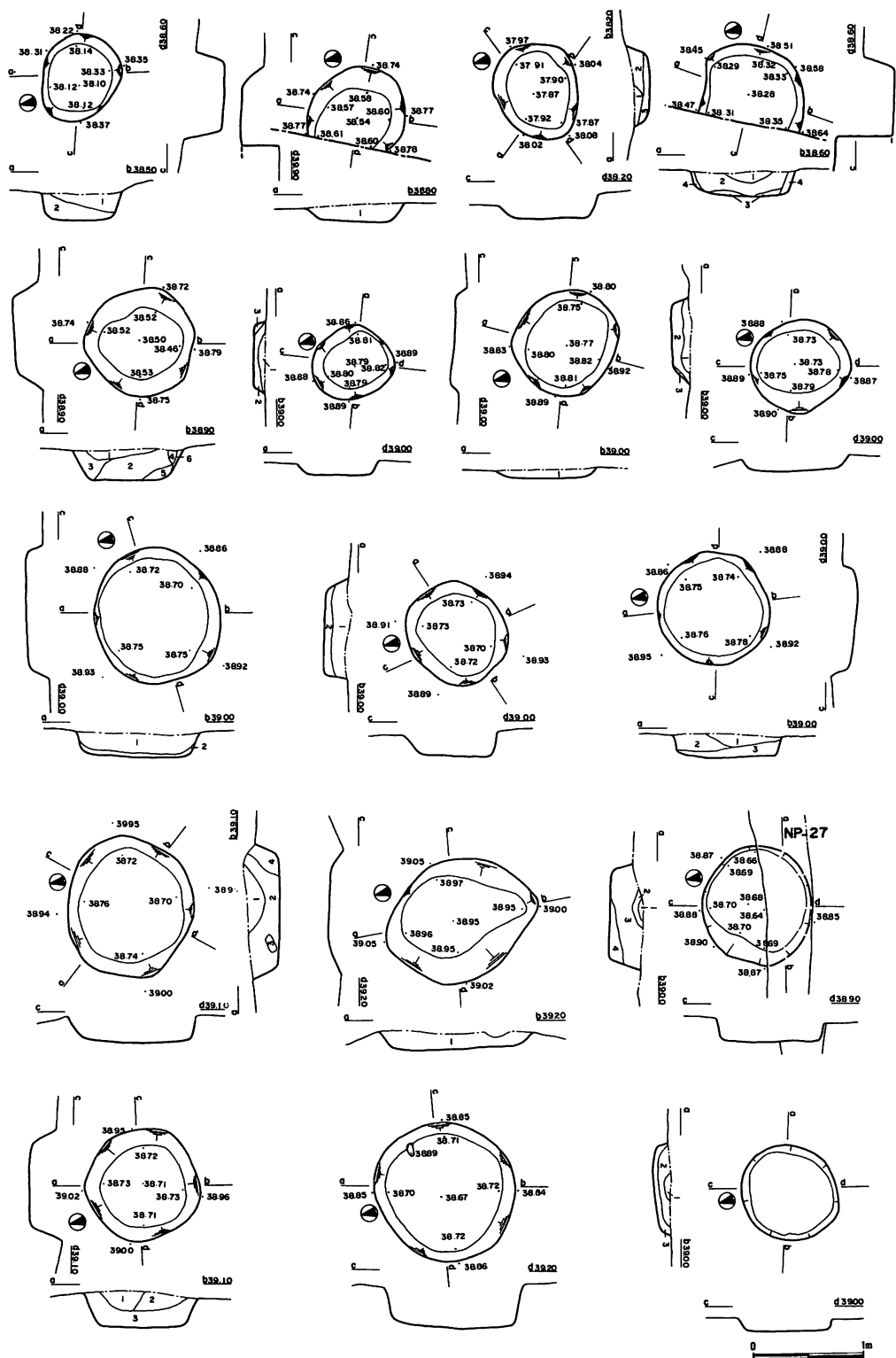


图223 円形土坑(5)

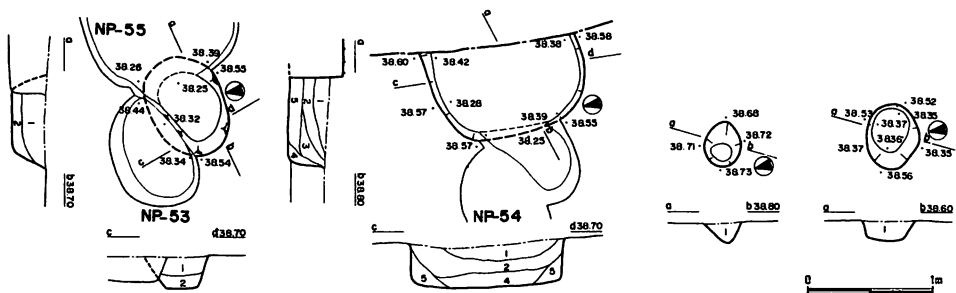


图225 円形土坑(7)

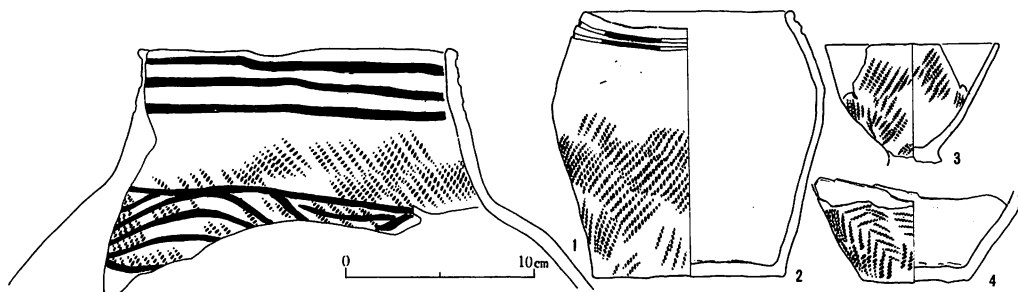


图226 S地区円形土坑出土土器

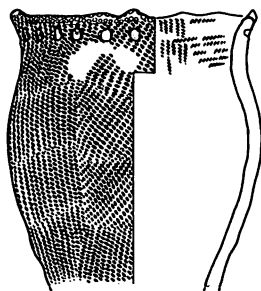


图227 N P-7出土土器

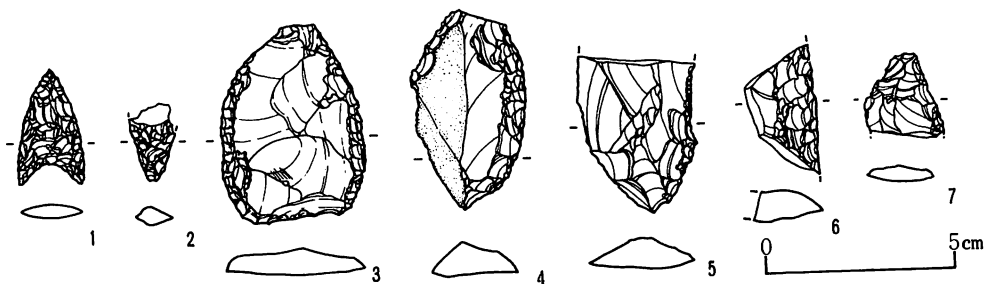


图228 S地区円形土坑出土石器(1)

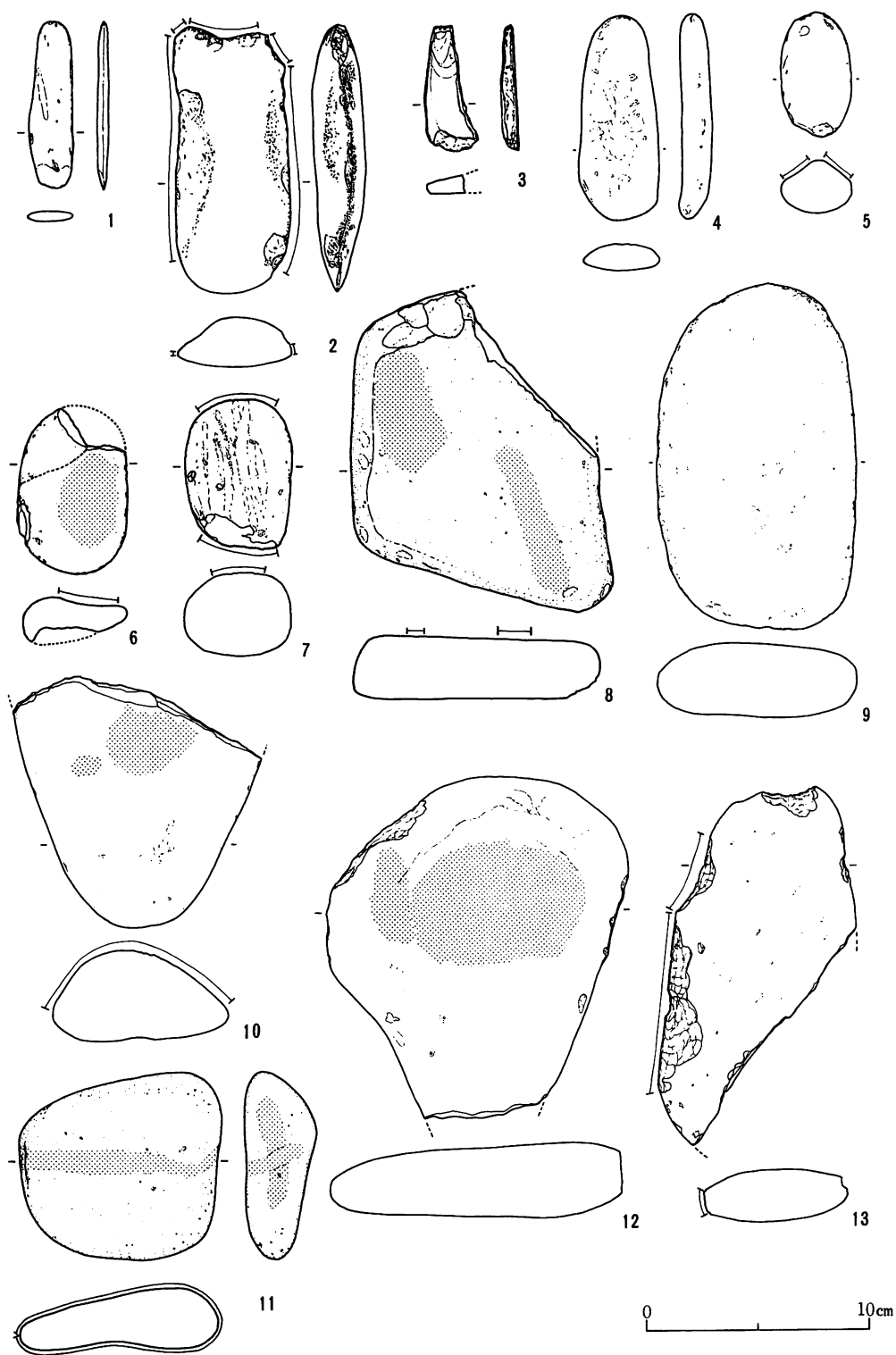


図229 S地区円形土壇出土石器(2)

円形土坑出土遺物 (図 226～図 236)

土器 (図 226～図 227)。壺 (図 226～1)、深鉢 (図 227)、小形深鉢 (図 226-2、4)、台付鉢 (図 226-3) などがある。壺は (SP-127 出土) は口頸部だけで、 $\frac{1}{2}$ 以上が欠けている。口縁部は直立気味に立上る。口唇は素縁である。口縁には三条の平行沈線を、頸部には横走る沈線にはさまれて、曲線文が描かれる。地文は縄文である。小形深鉢 2 (SP-228 出土) は口縁部の一部を欠く。最大幅を体部上部にもつ。体部上部はやや張り出し、口縁部は内傾する。底部まではやや直線的である。底部は平底で、径も大きく安定感のある器形を呈する。口縁部には二本の横走沈線をめぐらす。体部には縄文を付す。内外面ともにススの付着が著しい。台付鉢 (SP-229 出土) は、台部および口縁部を $\frac{1}{2}$ 以上欠く。口縁部は外方に広がり、直線的に体部下端に至る。体部下端はくの字形にくびれる。器面には縄文を付す。深鉢 (NP-17 出土)、体部下半を欠き、約 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部には4つの突起をもつ。突起は対角線上にあるものと思われる。また、口縁には棒状の工具で刺突が加えられる。体部には縄文が付される。内側 (口縁付近) にも縄文が付される。

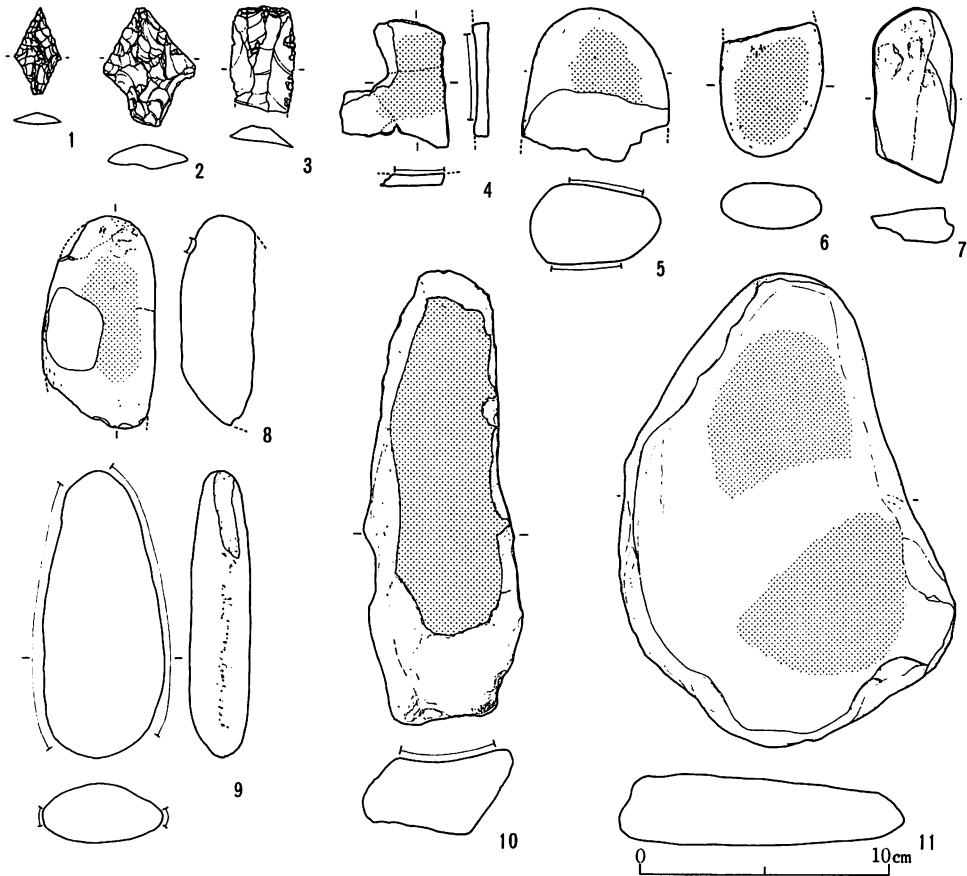


図230 N地区円形土坑出土石器

石器(図228～図230)には石鏃、スクレイパー、石斧、砥石、すり石などがあり、すべて覆土中から出土した。スクレイパー(図228-3～7、図230-3)は両側縁あるいは一辺に簡単な加工を施しただけのもので、形状も不揃いである。砥石には自然礫をそのまま素材として使用したもの(図229-6,10,11、図230-5,6)と周縁を加工したもの(図229-4,8,12、図230-10,11)とがある。いずれも使用面は浅くくぼんでいるか平坦になっている。

表5 円形土坑出土石器一覧表

遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質	遺構番号	図版番号	遺物番号	名 称	重量(g)	材 質
S P-156	218	1	石 鏃	(2.5)	Obs	S P- 35	229	7	砥 石 (溝)	160	カコウ岩
S P-153	218	2	石 鏃	(2.6)	Obs	S P-225	229	8	砥 石	734	Sa
"		3	スクレイパー	(80)	Obs	"	"	9	"	800	Sa
S P-155	218	4	砥 石	35	Sa	S P- 81	229	10	く ぼ み 石	492	Sa
S P-160	218	5	砥 石	45	Sa	S P-258	229	11	砥 石	300	Sa
S P-160	218	6	く ぼ み 石	210	Sa	S P-171	229	12	た た き 石	1,000	And
S P-151	228	1	石 鏃	1.5	Obs	S P-115	229	13	た た き 石	490	And
S P- 90	228	2	石 鏃	(1.1)	Obs	N P- 45	230	1	石 鏃	1.5	Obs
"	"	3	スクレイパー	(13.7)	Ha-sh	N P- 42	230	2	石 鏃	10.2	Obs
S P-225	228	4	スクレイパー	13.0	Obs	N P- "	"	3	加工痕・使用痕のある剥片	(8.7)	Obs
S P-151	228	5	スクレイパー	(10.2)	Obs	N P- 22	230	4	砥 石	115	Sa
S P-152	228	6	スクレイパー	(5.2)	Obs	N P- 50	230	5	砥 石	1,120	Sa
S P- 95	228	7	使用痕のある剥片	(1.8)	Obs	N P- 15	230	6	砥 石	500	And
S P-151	229	1	石 の み	1	Mud	N P- 12	230	7	凹 石	(340)	Sa
S P-258	229	2	石 斧	225	Gr-Mud	N P- 45	230	8	た た き 石	1,315	And
S P- 35	229	3	石 斧	10.2	Gr-Mud	"	"	9	た た き 石	1,500	And
S P-127	229	4	石 斧	70	Mud	"	"	10	砥 石	3,000	Sa
S P-250	229	5	た た き 石	50	Sa	"	"	11	台 石	8,800	And
S P-250	229	6	砥 石	73	Sa						

表6 円形土壌土層一覧

遺構番号	層		遺構番号	層	
56年度		(図219)	S P-80	1	黒褐色土(黄褐色土粒、炭化物を含む)
	1	黒褐色土		2	褐色土(黄褐色土を多量に含む)
	2	黄褐色土(支笏火山灰)	S P-81	1	黒色土(黄褐色土粒を含む)
	3	暗黄褐色土(黄褐色土粒混り)		2	黄褐色ローム
	3'	暗褐色土(粘性有り、ロームがブロック状に混入)		3	暗褐色土(黄褐色土粒を含む)
	4	灰褐色土(粘性有り)		4	暗褐色土(黄褐色土粒を含む)
	5	褐色土(粘性有り)	S P-90	1	黒褐色土(ローム粒少量含む)
	5'	褐色土(ローム粒混り)		2	褐色土(ローム粒)
	6	黒色土	S P-93	1	黒褐色土(ロームブロック少量含む)
	6'	黒色土(粘性有り)		2	ロームブロック
S 地区		(図215, 216, 220, 221, 222)		3	黒褐色土(ロームブロックを含む)
S P-6	1	黄褐色土	S P-95	1	暗褐色土(黄褐色土粒、獣骨片、ベンガラ粒、チップ土器片を多量に含む)
S P-7	1	褐色土(ローム粒と獣骨片を若干含む)		2	暗褐色土(黄褐色土粒を少量含む)
	2	暗黄褐色土(ローム粒と黒色土粒を混入)		3	暗褐色土(黄褐色土ブロック状に混入)
S P-11	1	暗褐色土(黄褐色土を含む)		4	黒褐色土(黄褐色土粒、炭化物を含む)
	2	褐色土(黄褐色土粘を多量に含む)	S P-100	1	茶褐色土(漸移層土)
	3	黄褐色土(崩落土)		2	ローム(漸移層が若干混入)
S P-12	1	褐色土(黄褐色土粒少量混入)	S P-105	1	暗褐色土(黄褐色土粒、獣骨片、ベンガラ粒チップ土器片多量に含む)
	2	褐色土(黄褐色土が小ブロック状に混入)		2	暗褐色土(黄褐色土粒を少量含む)
	3	暗褐色土(炭化物、黄褐色土粒混入)		3	黒褐色土(黄褐色土粒、炭化物を含む)
	4	黄褐色土(崩落土)		4	暗褐色土(黄褐色土ブロック状に混入)
S P-13	1	暗褐色土(黄褐色土粒混入)			(162)、(163) に同じ
	2	黄褐色土	S P-127	1	暗灰褐色土
	3	褐色土(黄褐色土ブロック状に混入)		2	黒褐色土
S P-14	1	褐色土(黄褐色土粒を多量に含む)		3	暗黄褐色土
	2	黒褐色土(黄褐色土が多量混入)		4	黒褐色土
	3	黄褐色土(崩落土)		5	黒褐色土(ローム粒を含む)
S P-16	1	ローム		6	暗黄褐色土
S P-17	1	黒褐色土(黄褐色土粒を少量含む)	S P-149	1	黒褐色土
	2	暗褐色土(黄褐色土をブロック状に含む)		2	黒色土
	3	黄褐色土(崩落土)		3	暗黄褐色土(ローム粒多い)
S P-20	1	褐色土(少量のローム混入)		4	黒色土(ローム混入)
	2	暗黄褐色土(黒色土にロームが混入)		5	暗黄褐色土(ローム多い)
	3	黄褐色土(ロームに黒色土が少量混入)		6	暗黄褐色土(ローム粒多い)
S P-21	1	褐色土(黒色土にローム粒混入)		7	黄褐色土、ローム
	2	暗黄褐色土(黒色土粒多量混入)	S P-151	1	褐色土(ロームを少量含む)
	3	ローム粒(少量の黒色土混入)		2	黄褐色土(ロームに黒色土が混入、漸移層土固くしまる)
S P-43	1	褐色土(黒色土にローム全体に混入)		3	茶褐色土(ロームが混入)
S P-46	1	黄褐色土(ローム粒に褐色土が少量混入)		4	ローム
	2	暗褐色土(黒色土にロームが混入)	S P-152	1	暗灰褐色土(土器片、獣骨片を微量含む)
S P-47	1	黒褐色土(炭水化物、焼けた獣骨片を多量に含む)		2	暗灰褐色土(獣骨片を微量含む)
S P-66	1	暗褐色土(黄褐色土粒、小ブロックを多量に含む)		3	黒褐色土
	2	黒褐色土(黄褐色土粒を多量に含む)		4	暗黄褐色土
	3	暗褐色土(ベンガラ粒を多量に含む)			(154)、(155)、(161) に同じ
	4	黄褐色土ブロック	S P-153	1	暗灰褐色土(炭化物、ベンガラを微量含む)
	5	暗褐色土(黄褐色土粒小ブロックを含む)		2	黒褐色土
S P-67	1	暗褐色土(黄褐色土粒小ブロックを多量に含む)		3	暗黄褐色土
	2	黒褐色土(黄褐色土粒を多量に含む)			(153)、(155)、(161) に同じ
	3	暗褐色土(ベンガラ粒を多量に含む)			(153)、(154)、(161) に同じ
	4	黄褐色土ブロック	S P-154		(157)、(158)、に同じ
S P-68	I	黒色土((耕作土Ta-bを含む)		1	暗灰褐色土
	II	黒褐色土(II層とIV層の境目がない)	S P-155	2	黒褐色土(小ローム含む)
	V	暗黄褐色土漸移層	S P-156	3	暗黄褐色土
	1	黒色土、ローム粒混入		4	灰褐色土
	2	暗褐色土			(156)、(158) に同じ
	3	黄褐色土、ローム	S P-157		(156)、(157) に同じ
S P-78	1	黒褐色土(黄褐色土粒)	S P-158		
	2	暗褐色土			
	3	褐色土(黄褐色土を含む)			

表7 円形土壌土層一覧

遺構番号	層		遺構番号	層	
S P-159	1	暗灰褐色土(小砂利、炭まじり、ローム粒)	S P-229	1	黒褐色土(ローム粒を含む)
	2	褐色土	S P-230	1	黒褐色土(ローム粒を含む)
S P-162		(127)、(163)に同じ	S P-232	1	黒褐色土(黄褐色土粒、炭化物を含む)
S P-163		(127)、(162)に同じ	S P-234	1	黒色土(ローム粒を含む)
S P-171	1	暗灰褐色土(粘土質チップ、木炭、焼骨、ローム粒混入)	S P-236	1	黒褐色土(黄褐色土粒を含む)
	2	褐色土		2	暗褐色土(黄褐色土小ブロック)
S P-173	1	黒褐色土(ローム粒を含む)	S P-237	1	暗褐色土(黄褐色土粒を含む)
	2	黒色土(獣骨、焼土少量、ローム粒を含む)		2	黒色土(黄褐色土粒を含む)
S P-177	1	黒色土(獣骨、焼土少量、ローム粒を含む)	S P-238	1	黒色土
	2	黒褐色土(1層よりローム粒多い獣骨片、炭化物少量)		2	暗褐色土(黄褐色土粒を含む)
	3	黒色土(獣骨、焼土少量、ローム粒を含む)	S P-239	1	黒褐色土(黄褐色土粒)
	4	黄褐色土		2	暗褐色土(黄褐色土ブロック)
	5	褐色土(多量のローム粒を含む)	S P-241	1	黒褐色土
S P-179	1	黒褐色土	S P-243	I	黒色土(耕作土、Ta-bを含む)
	2	暗黄褐色土		II	黒褐色土
S P-181	1	暗灰褐色土(小ロームブロックの層微量の獣骨片 焼土粒を含む)		II'	黒褐色土(土器片、炭化物を含む)
	2	黒色土(ロームブロック1~2個)		II'	黒褐色土(ローム粒を含む)
S P-186	1	黄褐色土(ローム)		III	赤茶褐色土(火山灰)
	2	茶褐色土(黒色土にローム少量混入)		IV	褐色土(ローム粒を含む)
	3	黄褐色土		V	暗黄褐色土(漸移層)
S P-194		(199)、(201)		1	暗灰褐色土(少量の炭化物、土器片を含み粘性あり)
	1	褐色土(obsチップを含む)		2	黒褐色土
	2	暗褐色土(黄褐色土粒を多量に含む)		3	黒褐色土(4層を含む)
	3	黒褐色土		4	暗黄褐色土(粒子が粗い)
S P-195		(196)、(197)に同じ	S P-245	1	褐色土
	1	暗褐色土(小礫、黄褐色土、獣骨片を含む)		2	褐色土(ローム粒が散在する)
	2	暗褐色土(黄褐色土粒を多量に含む)		3	黄褐色土
	3	黒褐色土	S P-246	1	暗褐色土(灰色がかった黄褐色土、土器片、獣骨片 を含む)
S P-198		(195)、(197)に同じ		2	黒褐色土
S P-197		(195)、(196)に同じ		3	ローム
S P-199		(194)、(201)に同じ		4	暗褐色土
S P-202		(203)に同じ	S P-247	1	黒褐色土(黄褐色土の小ブロックを含む)
	1	黄褐色土(土器片、obsチップ、獣骨片、礫を含む)	S P-248	1	黒褐色土(黄褐色土粒混入)
	2	暗黄褐色土(土器片、黄褐色土粒、獣骨片を含む)		2	褐色土(黄褐色土、小砂礫、炭化物混入)
S P-203		(202)に同じ	S P-255	1	暗褐色土
S P-205	1	黒色土(ローム少量混入)		2	ロームブロック
	2	黒褐色土(ローム粒が帯状に入る)			N地区
	3	ローム			(図223, 224, 222)
S P-214	1	黒色土(ベンガラ微量硬い)	N P-1	1	茶褐色土(黒土にロームが多くまじる)
	2	黒色土(ローム粒を含む)		2	暗褐色土(ロームに黒土が少しまじる)
	3	ローム	N P-2	1	黒褐色土
S P-216	1	黒褐色土(ローム粒を含む)	N P-5	1	黄褐色土(黒土が少しまじるローム)
	2	暗褐色土(ロームに黒色土少量含む)		2	褐色土(ロームが小ブロック状にまじる)
S P-217		(218)に同じ		3	ローム(若干の黒土まじる)
	1	暗灰褐色土	N P-6	1	黒褐色土
	2	褐色土		2	褐色土(ロームを若干含む)(暗黄褐色土)
S P-218		(217)に同じ		3	褐色土(壁崩落土)に含む(黄褐色土)
S P-224	1	暗褐色土		4	褐色土(壁崩落土)
	2	褐色土(ローム粒が少量混入)	N P-7	1	黒褐色土
S P-226	1	褐色土		2	褐色土(ロームを多量に含む)(黄褐色土)
	2	黄褐色土		3	褐色土(暗黄褐色土)
	3	焼土		4	ローム(ブロック状)
S P-227	1	褐色土		5	3層と類似するが若干のロームを含む
	2	黒褐色土		6	黒褐色土、ロームを含む壁崩落土
	3	黄褐色土(ロームと褐色土混入)	N P-8	1	黒褐色土(黒土にロームが少量まじる)
	4	乳白色土(ローム質粘性土)		2	暗黄褐色土(ロームに黒土が少しまじる)
	5	黒色土		3	黄褐色土(ローム崩落土)
			N P-9	1	黒褐色土(ローム粒含む)

表 8 円形土壌土層一覧

遺構番号	層		遺構番号	層	
NP-10	1	黒褐色土(ローム粒少量含む)	NP-34	5	黄褐色土(黄色ローム+黒色土)
	2	黄褐色土(ローム粒多量に含む)		NP-38	1
	3	ローム(崩落土)	NP-39		1
NP-11	1	黒褐色土(ローム粒含む)		2	黄褐色土(黒色土+黄色ローム粒子が均質にまじる)
	2	暗黄褐色土(粒状にロームが入る、ロームが多くまじる)	3	暗褐色土(黒色土+黄色ローム2層より黒色強い、炭化物含む、やわらかい)	
NP-12	1	黒褐色土(黄褐色土粒を含む)	4	暗黄褐色土(黒色土+黄色ローム)	
	2	暗褐色土(黄褐色土粒を含む)	5	黒褐色土	
NP-13	1	黒褐色土(ロームが微量まじる)	NP-40	6	黄褐色土(黒色土+黄褐色ローム)
	2	黄褐色土(ロームが少しまじる)		1	黒色土
	3	黄褐色土(ローム粒がやや多い)	2	暗褐色土(黒色土+黄色ローム粒子)	
NP-14	1	黒褐色土(ロームが微量まじる)	3	暗褐色土(黒色土+黄色ロームブロック2層より黄色強い)	
	2	黄褐色土(ロームに黒土がまじる)	4	黄褐色土(黄色ローム、わずかに黒色粒子まじる)	
	3	黄褐色土ブロック(ロームに黒土が少しまじる)	5	黒色土	
NP-15	4	褐色土(黒土にロームが少しまじる)	NP-41	1	黒色土
	1	黒褐色土(黄褐色土がブロック状に混入、量的には少ない)		2	黄褐色土(黄色ロームに少量黒土がまじる)
NP-16	1	赤褐色土(焼土、ベンガラが少量粒状に混じる)	NP-42	1	黒色土
	2	暗赤褐色土(焼土、炭化物(ス)のまじりが多い)		2	黄褐色土(黄色ローム+黒色土)
	3	褐色土(黒色土にロームが若干まじる)	3	黒褐色土(黒色土に黄色ローム粒少量まじる)	
	4	暗黄褐色土(黒土にロームが多くまじる)	NP-43	1	黒色土
NP-17	1	黒褐色土(ロームと黒土のまじり、炭化物少量含む)		2	黄褐色土(黒色土+黄色ローム)
	2	黒色土(ロームを少量含む、黒色土、炭化物少量含む)	NP-44	1	黒褐色土(黄色ローム+黒色土(やわらかい))
	3	暗黄褐色土(ロームと黒土まじり、炭化物が粒状まじる)		2	黄褐色土(よごれた黄色ローム)
NP-20	1	黒褐色土(黒土にロームがまじる)	3	暗褐色土(黒色土+黄色ローム、黄色ロームが2～3cm未満のボール状に入りこんでいる)	
	2	茶褐色土(ロームと黒土のまじり)	NP-45	4	黄褐色土(黒色土が少量まじる)
NP-21	1	暗黄褐色土(ロームに褐色土がまじる(NP-26)と同じ)		1	黒褐色土
	2	暗黄褐色土(1層よりロームが若干多く入る)		2	暗褐色土(黒色土+黄色ローム粒)
NP-22	1	黒褐色土(粒の細かい、黄褐色土粒を含む)	3	黄褐色土(黒色土+黄色ローム)	
	2	黄褐色土(黒褐色土粒を若干含む)	NP-46	1	黒色土
NP-25	1	褐色土(黒土にロームが少しまじる、固くしめる(NP-26))		2	赤褐色土(焼土少しやわらかい、炭化物混入)
	2	暗黄褐色土(ロームが多くまじる褐色土)	3	黄褐色土(黄色ローム炭化物少量含む)	
NP-31	3	黄褐色土(ロームに黒土が若干まじる)	NP-47	1	黒褐色土
	1	黒色土		NP-52	1
	2	黄褐色土(黄色ローム+黒色土の流れこみ)	2		暗褐色土(黄褐色ローム粒子含む)
	3	黒色土	3	暗黄褐色土(よごれた黄色ローム)	
	5	黄褐色土(黄色ローム粒が均質にまじっている)	NP-53	1	黒色土
6	黄色ローム(壁際の崩落土)	2		暗黄褐色土(黒色+黄色ローム)	
NP-32	1	黒色土	3	黄色ローム	
	1'	黒色土(炭化物含む)	NP-54	1	黄褐色土(黄色ローム+黒色土黄色土ロームがブロック状に入る)
	2	黄褐色土(黄色ローム+黒色土がまじる)		2	暗褐色土(黄色ローム+黒色土黄色ローム粒子と黒色土が均質にまじる炭化物含む)
	3	暗褐色土(黄色ローム+黒色土)	NP-55	1	黒色土
4	黄褐色土(壁際黄色ローム)	2		黄褐色土(黒色土+黄色ローム)	
NP-33	1	褐色土		3	黒色土
	2	明褐色土(ローム粒、炭化物を含む)		4	黄褐色土(黒色土+黄色ローム)
NP-34	1	黒色土		5	暗褐色土
	2	黄褐色土(黄色ローム+黒色土)	NP-56	1	黒褐色土
	3	暗褐色土(黄色ローム+黒色土+灰白色ローム均質にまじっている)		NP-57	1
	4	暗褐色土(黄色ローム+黒色土+灰白色ロームブロック状にまじる)			

第3章 包含層出土の遺物

1 分布の傾向

出土した遺物は、土器片、石器、フレイク・チップなどあわせて108,000点余である。

土器片は、縄文時代中期末葉～後期初頭に属するもの、縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭に属するもの、続縄文時代中～後葉に属するものなどがある。

縄文時代中期末葉～後期初頭の土器片は、17～36ラインの間に分布するが、とくに29～35ラインの間に濃密である。これは焼土の分布とはほぼ一致する。

縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭の土器片は12～30ラインの間に濃密に分布しており、出土土器片総数の98%にあたる。これは遺構の分布と概ね一致するが、微視的にみると、土墳墓の配置とは必ずしも一致せず、むしろそれらが稀薄な部分に濃い。各種石器、フレイク・チップ、獣骨片、炭化物などの分布状態もほぼ同じである。

剥片石器は主に12～35ラインの間にあり、器種別にみると、石鏃は、有茎・無茎とも12～32ラインのD・E、ナイフは13～32ラインのD・E、スクレイパーは12～28ラインのD・Eに多く分布する。また、フレイク・チップは19～28ラインの間に濃密に分布する。

礫石器は主に16～48ラインの間にあり、器種別にみると、石斧は18～30ラインのD・E、砥石は14～31、41～48ラインのC・Dに多く分布する。

包含層出土の土器片総数は82757点で、そのうち79041点が胴部破片、口縁部・底部の破片は3716点である。口縁部の破片の内訳は、縄文だけのもの1760点、文様をもつもの829点、無文のもの115点で、底部の破片は1012点である。文様には、縄線文、変形工字文、平行線文、曲線文、刺突文などがあり、なかでも縄線文、平行線文、曲線文など3種の文様が多くを占める。器種は、壺形土器、小形深鉢形土器、浅鉢形土器、舟形土器、ミニチュア土器などで、このうち小形深鉢形土器が多く、浅鉢形土器はきわめて少ない。

2 土 器

中期の土器は、復元されたもの6個体、破片975点で、晩期末～続縄文初頭の土器片に比べわずかである。復元された6個体(図231、1～6)に共通することは、いずれも底部を欠き、残された部分は約1/2～1/3で、他の中期の土器片のなかにはこれら1～6の土器に接合できるものはなかった。本来の1/2以上が破損した状態にて使用されていた可能性がある。1の口縁部はわずかに外反する。口唇部には貼り付けによる突起が付される。口縁部には板状の工具による左から右への押し引きが2段に施され、その下位には棒状の工具による刺突が加えられる。体部には縄文を付す。内面には指頭による調整痕がみられる。2の口縁部はやや外反する。口縁部には板状の工具による左から右への押し引きが2段に施され、その下位には棒状の工具による刺突が加えられる。体部には縄文を付す。内面には指頭による調整痕がみられる。3はラッパ状

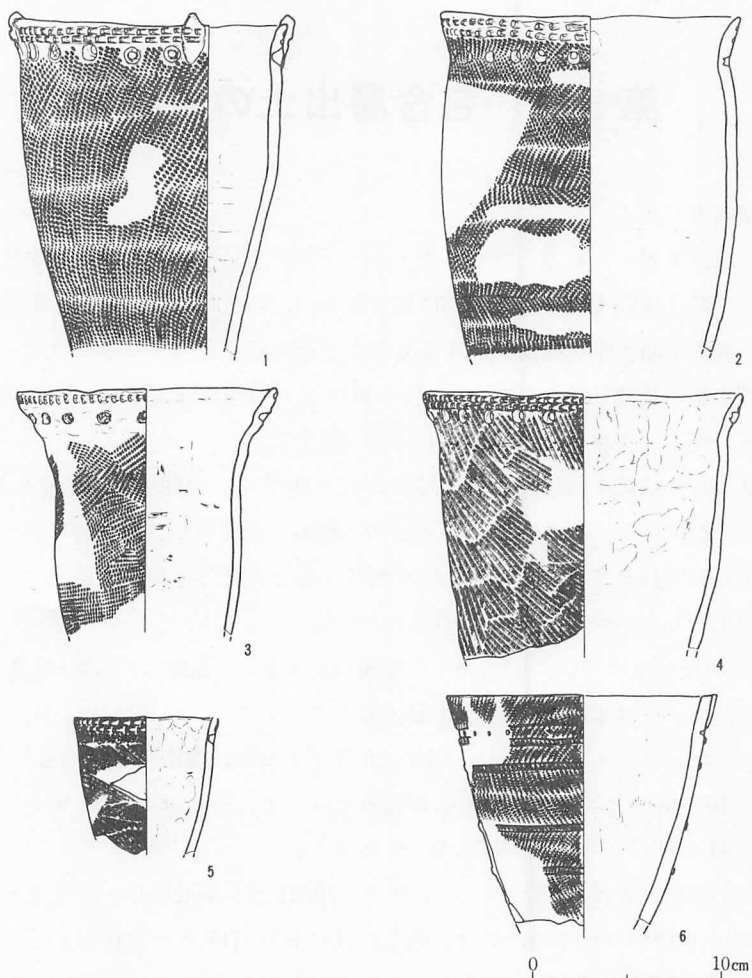


図231 包含層出土土器 1

に広がる口縁部をもつ。口縁部には板状の工具による押し引きが1段施され、その下位には棒状の工具による刺突が加えられる。体部には縄文を付す。4は外反する口縁をなし、体部は直線的である。口縁部には板状の工具による左から右への押し引きが2段に施され、その直下には棒状の工具による刺突が加えられる。体部には無節の縄文が付される。内面には指頭による調整痕がみられる。5は4の土器を小型にしたものである。6は体部から直線的に口縁部に至る。口唇部は平坦である。口縁部には幅の広い粘土帯を貼り付け、体部にも幅のせまい粘土帯を貼り付ける。口縁部の粘土帯の下端には刺突が加えられる。体部、粘土帯上に縄文を付す。1～5は北筒式土器、6は余市式土器でいずれも中期後葉（～後期初頭）のものである。

縄文時代晩期末から続縄文時代初頭の土器

曲線文をもつグループ(図233の1~24) 曲線文は、ほとんど2本の横走る平行沈線で区画を設け、その間に1~2条の連続する曲線の周曲部に短沈線あるいは弧線を描いたものである。文様帯は、口縁部に限られ、複段になる例はない。これらの沈線は、半截竹管状の施文具*でひかれたもので、ヘリに「まくれ」を残している。なお、曲線文のなかには、稀に、1のよう

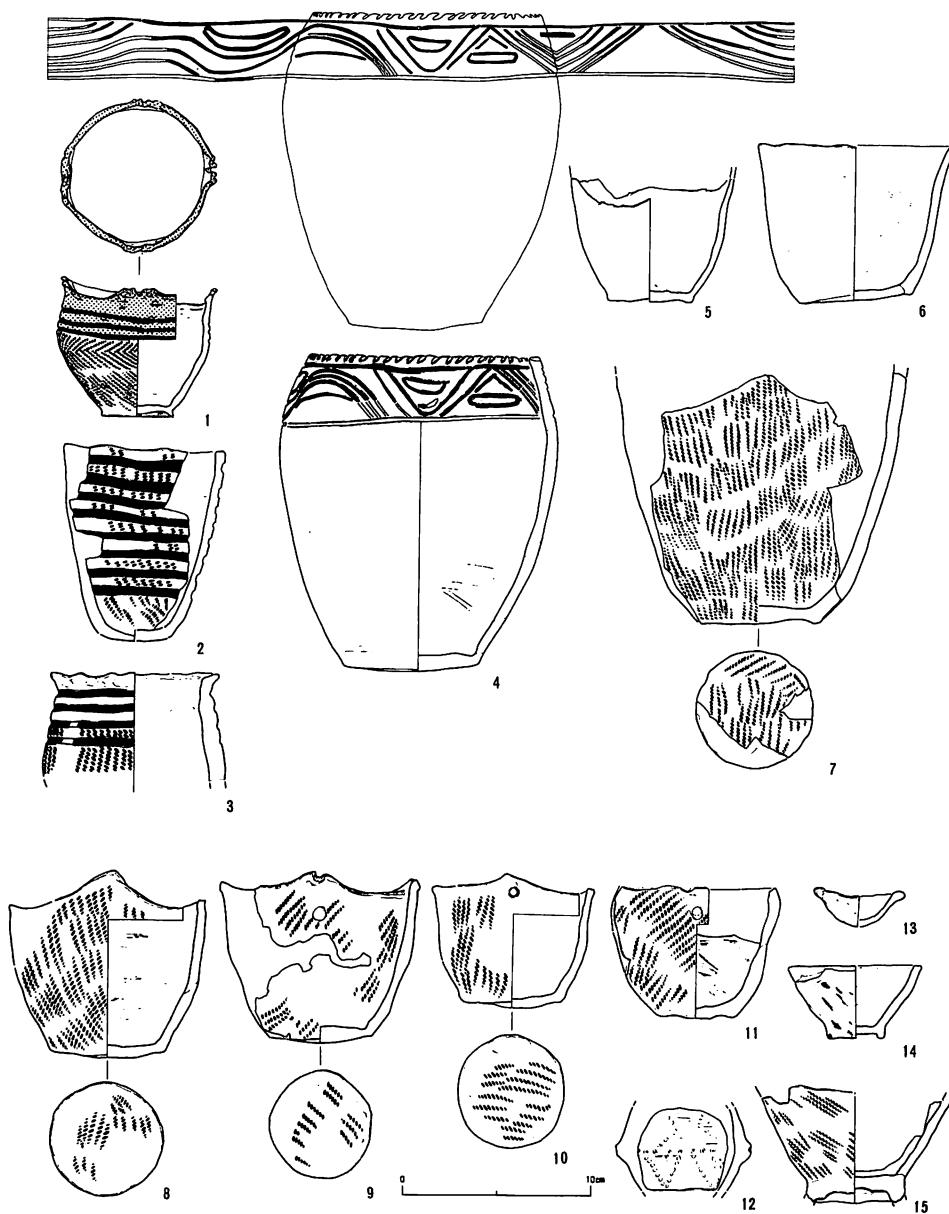


図232 包含層出土土器 2

に数条が一単位となった弧線が互いに向い合う例もある。また、13、15 は、曲線の屈曲部に描かれる弧線が、だ円状になった特殊な例である。19～21 は、口縁部に無文帯を残したもので、屈曲部に連続する刺突痕が見られる。この刺突痕は、無文帯をもつ土器に限られる。

器形は、大部分鉢である。1～4 は、小型深鉢、5 は台付浅鉢、それ以外は、鉢と思われる。鉢には、口縁部下半がくの字状に屈曲するもの（19～21）が少量見られる。鉢の口唇は、ほとんどが平形で切り出し形の例は稀である。口唇上には、刻みあるいは縄圧痕が必ず認められる。

やがすり状文（図 234 の 27～36） 横位に平行する 2 本の沈線の間矢がすり状の沈線の沈線文を連続させた文様である。なかには、31 のようにくの字状の文様を連続させている例もある。文様帯は、口縁部に限られ、複段化するものはない。また、口縁部に無文帯をもつ例はない。27、29 は、文様帯の下端に刺突痕がめぐる。

器形は、大半が鉢である。鉢は、口縁部が碗曲する例がほとんどであるが、32、34 のように口唇直下がくの字状に屈曲する例もある。鉢の口唇は、切り出し形と平形のものとがある。両者とも口唇上に刻みをもつ例はない。

やがすり状文は、青森県今別町浜名遺跡に類例を求めることができる。報告者は、その一群を大洞 A' 式以降のものとして位置づけている。ただ、浜名遺跡のそれは、矢がすり状の文様が扁平化する点、本例とやや異なっている。

変形工字文（図 234 の 37～53） 沈線によって、工字文風の文様を描いたグループである。磨消帯をもつ例（37～43、45、46）ともたない例とがある。前者の例は、口唇の形態が切り出し形になる例が多く、その口唇上に縄文を施しているのが特徴である。なお、本グループには、削り込みの際のまくれを利用した二個一対の粘土粒をもつ例はない。

器形は、すべて鉢で、口縁は波状口縁となる例はなく、平縁がほとんどである。

41 は、結節沈線をもち、口縁の内側に沈線がひかれる唯一の例である。43 は、細く鋭い沈線によって描かれた変形工字文をもつもので、山王Ⅲ層式にも比定できる資料かもしれない。口唇に縄文を施す点は、在地系土器のクセをもっているが、口縁部に磨消し、変形工字文が施文される点などは、非在地系土器の要素を色濃くもっている。

平行沈線文（図 235 の 54～72） 口縁部に数条の横走する沈線が施文されるものである。口縁部に、磨消帯あるいは無文帯を作り出している例は極めて稀である。

器形は、深鉢（54～65）、壺（66～68、71）、鉢（69）などがある。それらのうち、小型深鉢が圧倒的に多い。64、65、70 は、深鉢のなかでも特異な例で、大狩部式の小型深鉢に類似する。

縄線文（図 236 の 83～90、92～105、109～117） このグループは、口縁部に 2～3 条の縄線を横位に平行してめぐりした文様をもつものである。口縁部に無文帯を残す例がやや多い。深鉢が多く、鉢（103、104）、壺（105、114、116、117）は少ない。深鉢は、や内反するものと外反するもの（94、106、109、110）とがあるが、前者の例が多い。なお、後者の口唇直下の屈曲する部分は、指頭による磨消し痕が顕著に認められる。本グループの口唇の形態は、断面観が尖がる例が、平形のものより多い。

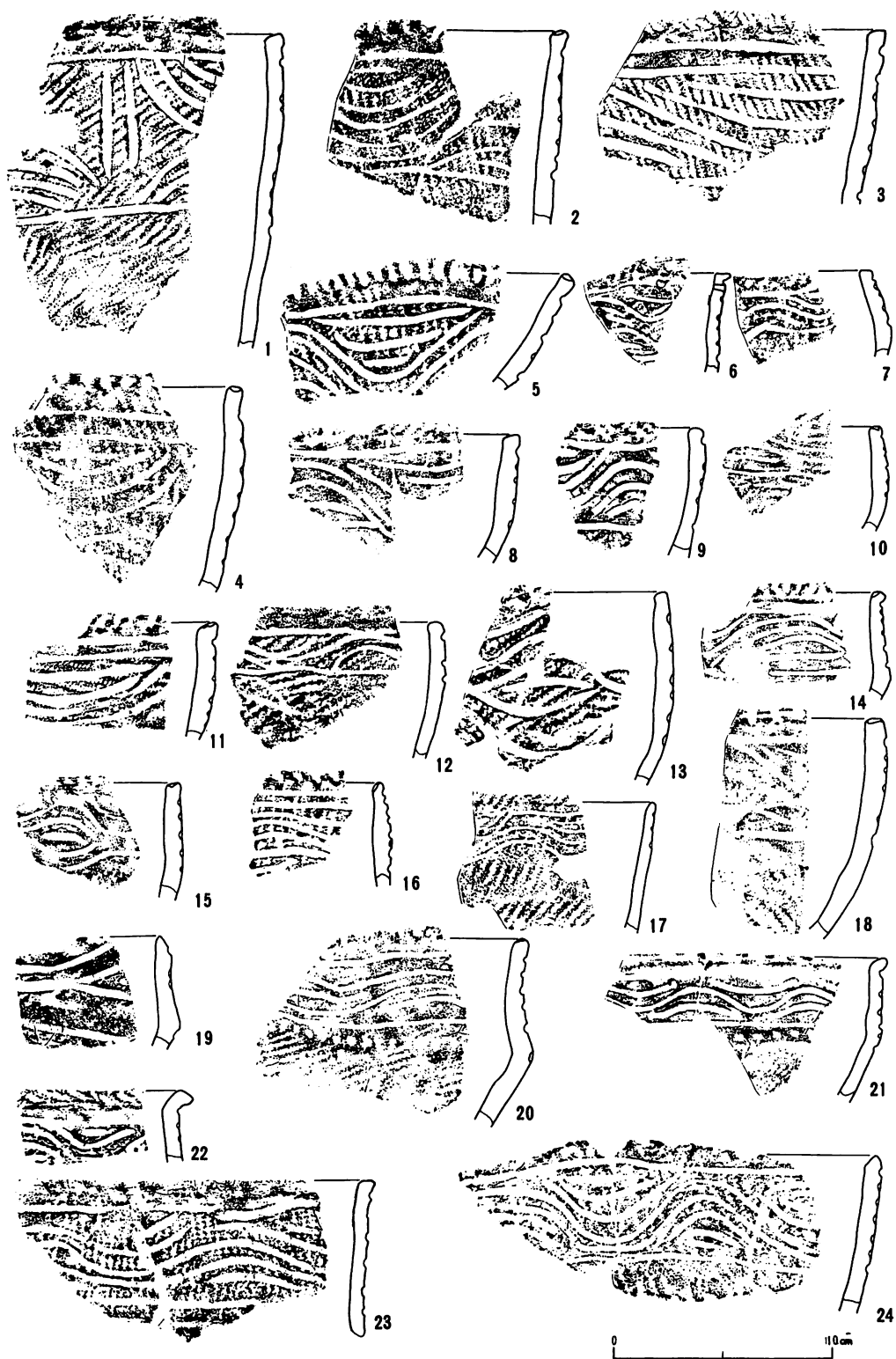


図233 包含層出土土器 3



图234 包含层出土土器 4

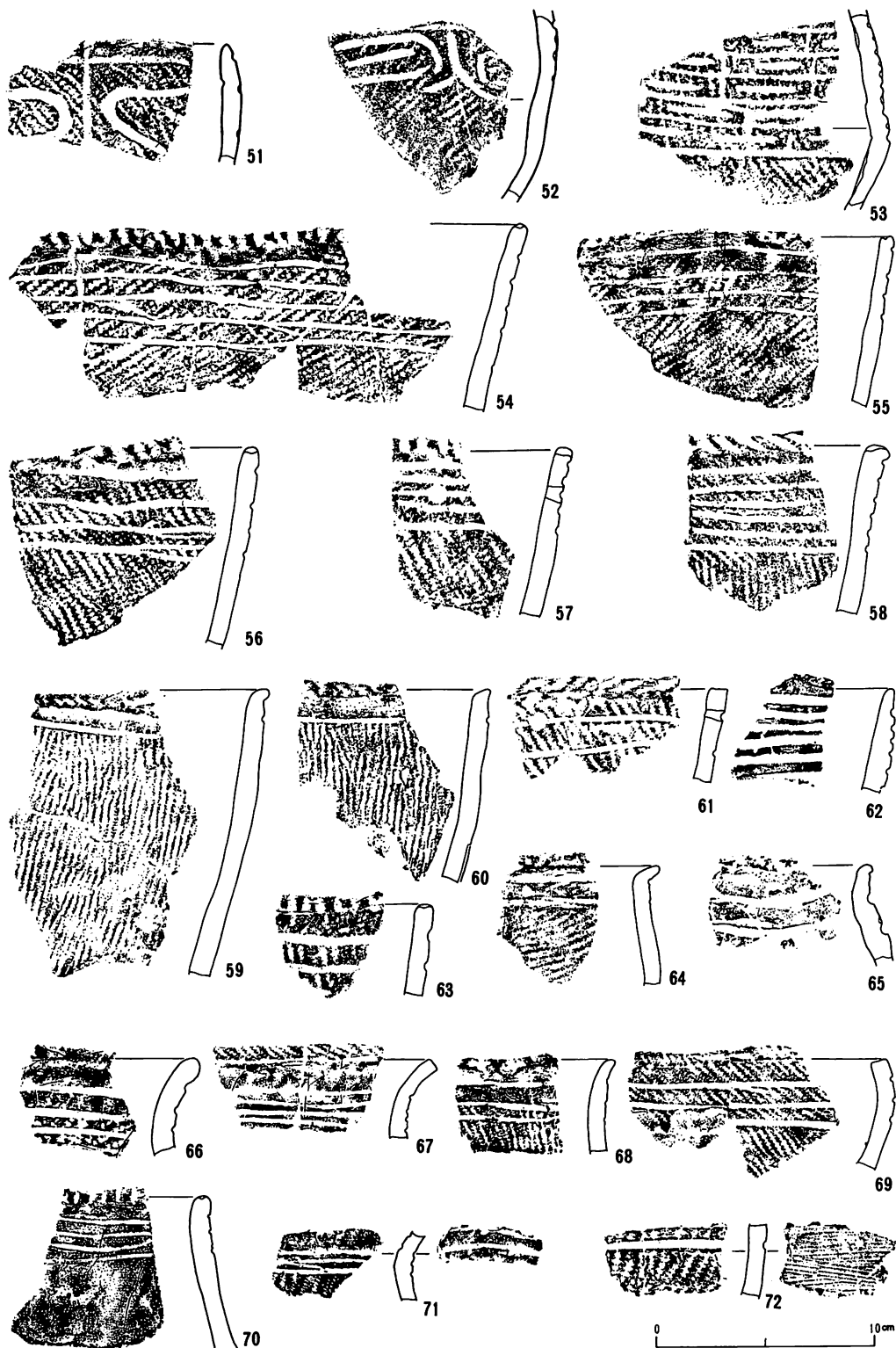


図235 包含層出土土器 5

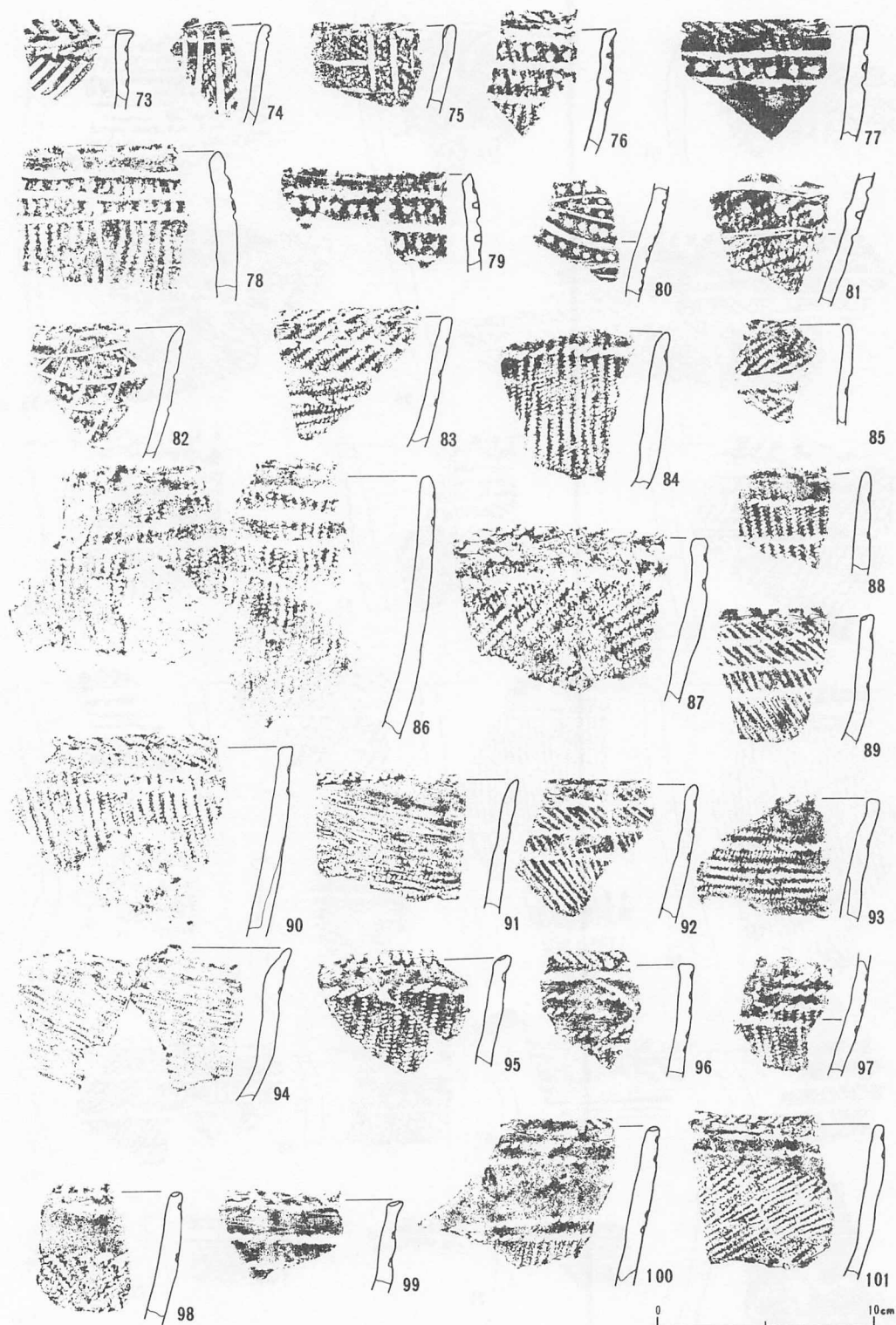


图236 包含層出土土器 6

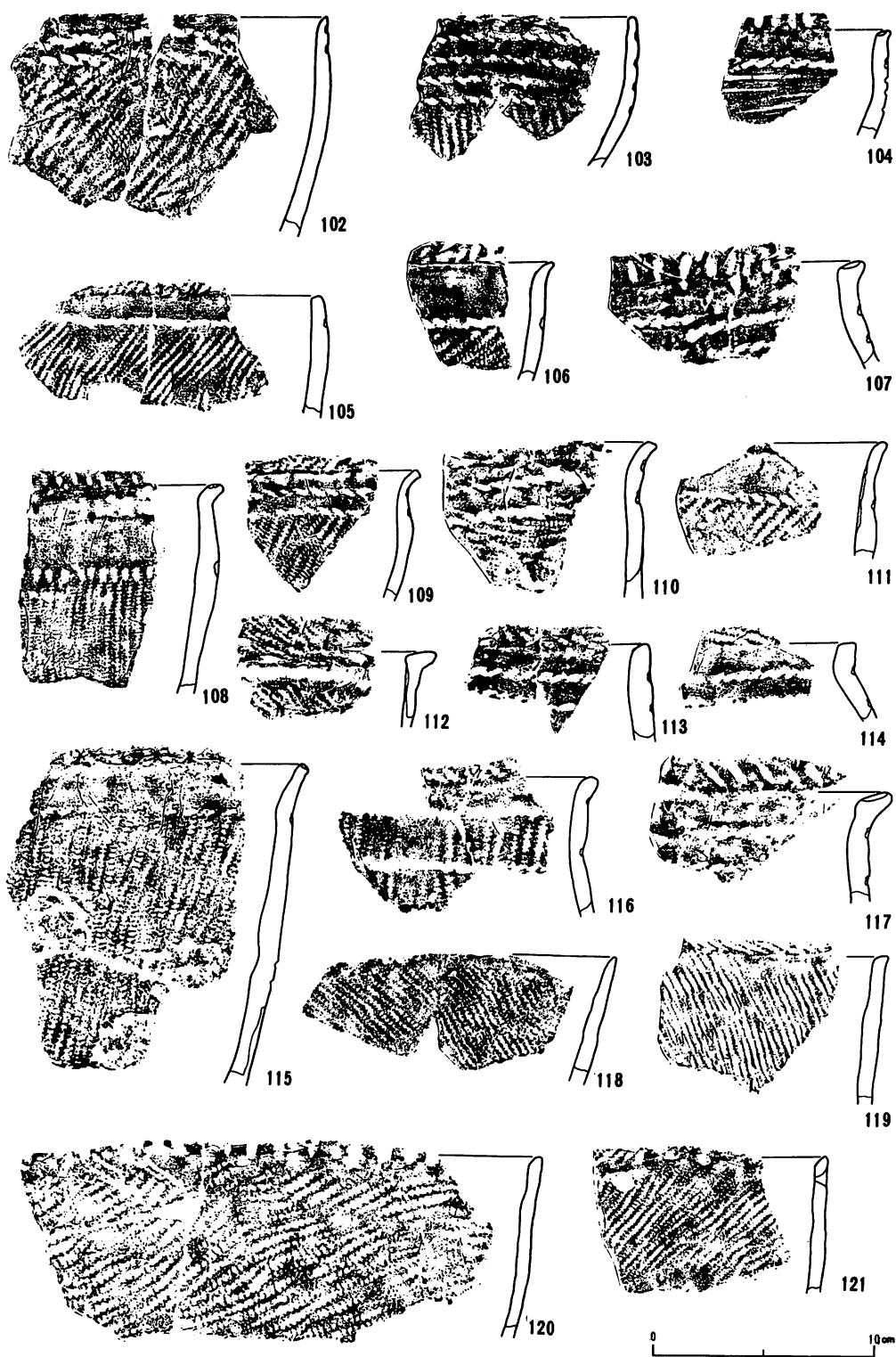


図237 包含層出土土器 7

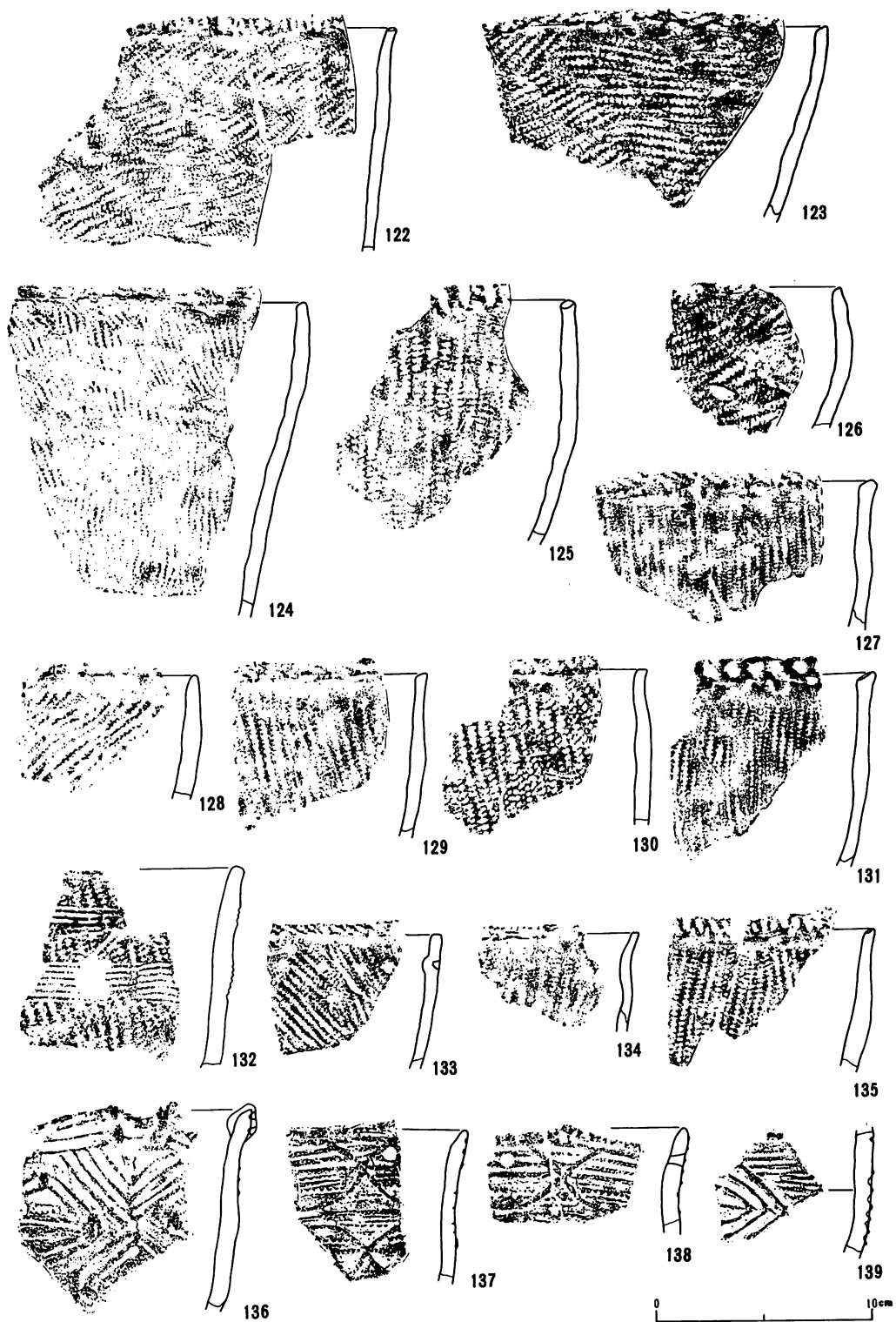


图238 包含層出土土器 8

3 剥片石器—図 239～図 242—

剥片石器には、石鏃、やり先、ナイフ、ドリル、スクレイパーなどがある。

石 鏃(図 239-1～74) 無茎鏃・有茎鏃・柳葉形鏃・五角形鏃の4タイプに分けられる。無茎鏃(7～41)は石鏃の約60%を占める。これは、基部の平らなもの(7～13、39～41)、基部が内湾するもの(14～38)に分かれる。量的には基部が内湾するものが多い。このことは遺構出土の石鏃についても同様である。有茎鏃(42～74)には、基部の作出が明瞭なもの(47～59、71～73)と不明瞭なもの(42～46、60～70、74)がある。柳葉形鏃(2～6)は、最大幅が上位にあるもので、両側縁の加工は丁寧である。2～3には一次剥離面が残る。五角形鏃(1)は1点だけである。表裏面とも剥離加工は丁寧である。有茎・無茎にかかわらず大型のものが多い。

やり先(75～82)の出土は少ない。76、78、80～82などは剥離加工の状態から、やり先よりもナイフとして機能が考えられる。

ナイフ(図 240～図 241) はその形状から5つのタイプに分けられる。1(図 240-83～96)：柄部と刃部は、緩やかに張り出した肩部によって区別される。刃部は木葉形をなし、一方の側縁が他方に比べ直線的になるものが多い。2(図 241-97)：幅広の柄部および刃部をもつ。刃部は丸味を帯び、尖頭部をもたない。3(図 241-98～105)：強く張り出した肩部をもつ。刃部両側縁は直線的で先端部で直線的に交わる。4(図 241-106～108)：片面加工で、長軸は左右どちらかに片寄る。5(図 241-109～113)：柄部の作出はない。4と同様、長軸は左右どちらかに片寄る。109～111は片面加工、112～113は両面加工である。ナイフの出土総数の約25%が完形品で、他はすべて柄部・刃部の破損品である。なかでも柄部の破損品が多い。柄部は、その調整剥離に特徴がある。柄部の頂部に鋭角な剥離が加えられる。その結果断面は薄く、急角度をなす。これは着装の仕方由来するものであろうか。

つまみ付ナイフ(図 241-119～122) 典型的なつまみ付ナイフはない。いずれもつまみ部の作出は顕著でない。また、刃部の作出は一方に片寄る。さらに、器面には一次剥離面を明瞭に残す。

ドリル(図 242-123～138)には、いわゆるハンドルをもつもの(123～129)、棒状のもの(130～135)、および刺突具(136～138)がある。123～135の先端には摩滅痕が認められる。

スクレイパー(図 242-139～164) 139、140はラウンドスクレイパー、141～146はエンドスクレイパーで、先端に入念な調整剥離がなされる。157～160はいずれも刃部に斜交する擦痕が認められる。164は一部に刃部が作出されたもので、縁辺はかなり摩滅している。これらスクレイパーは定形的なものは少なく、全体的に調整が粗雑なものが多い。

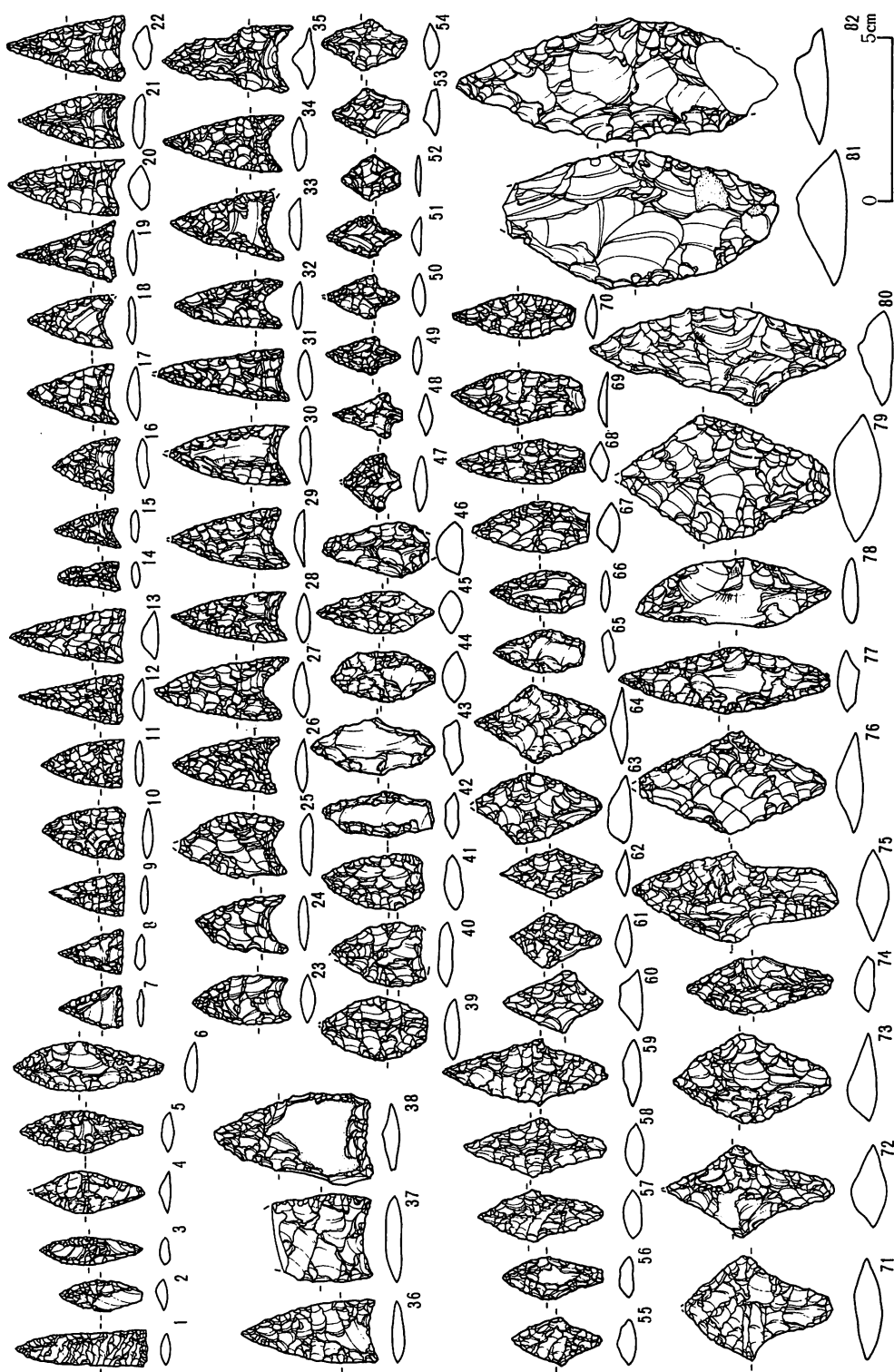


图239 包含层出土石器 1

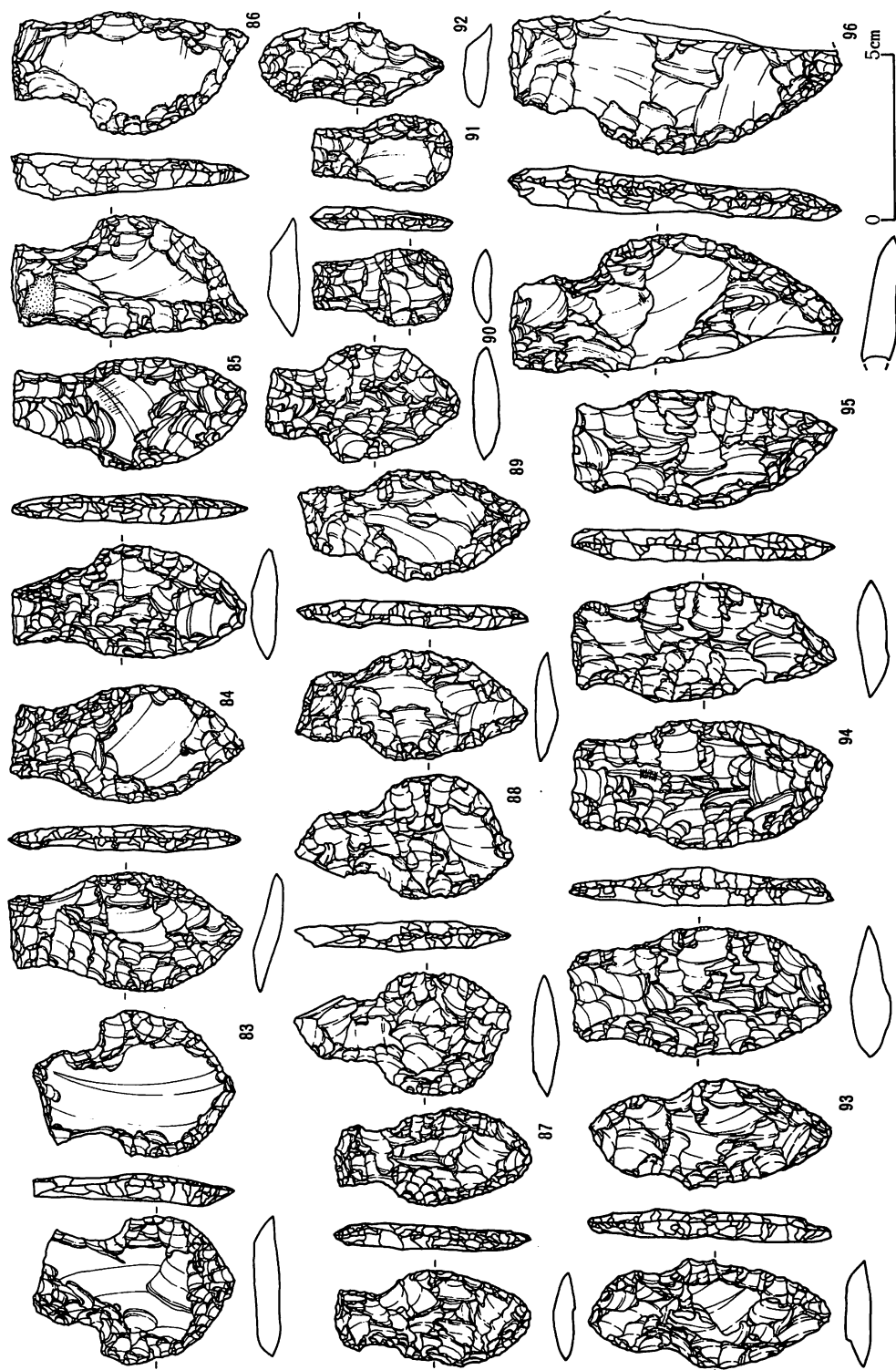


図240 包含層出土石器 2

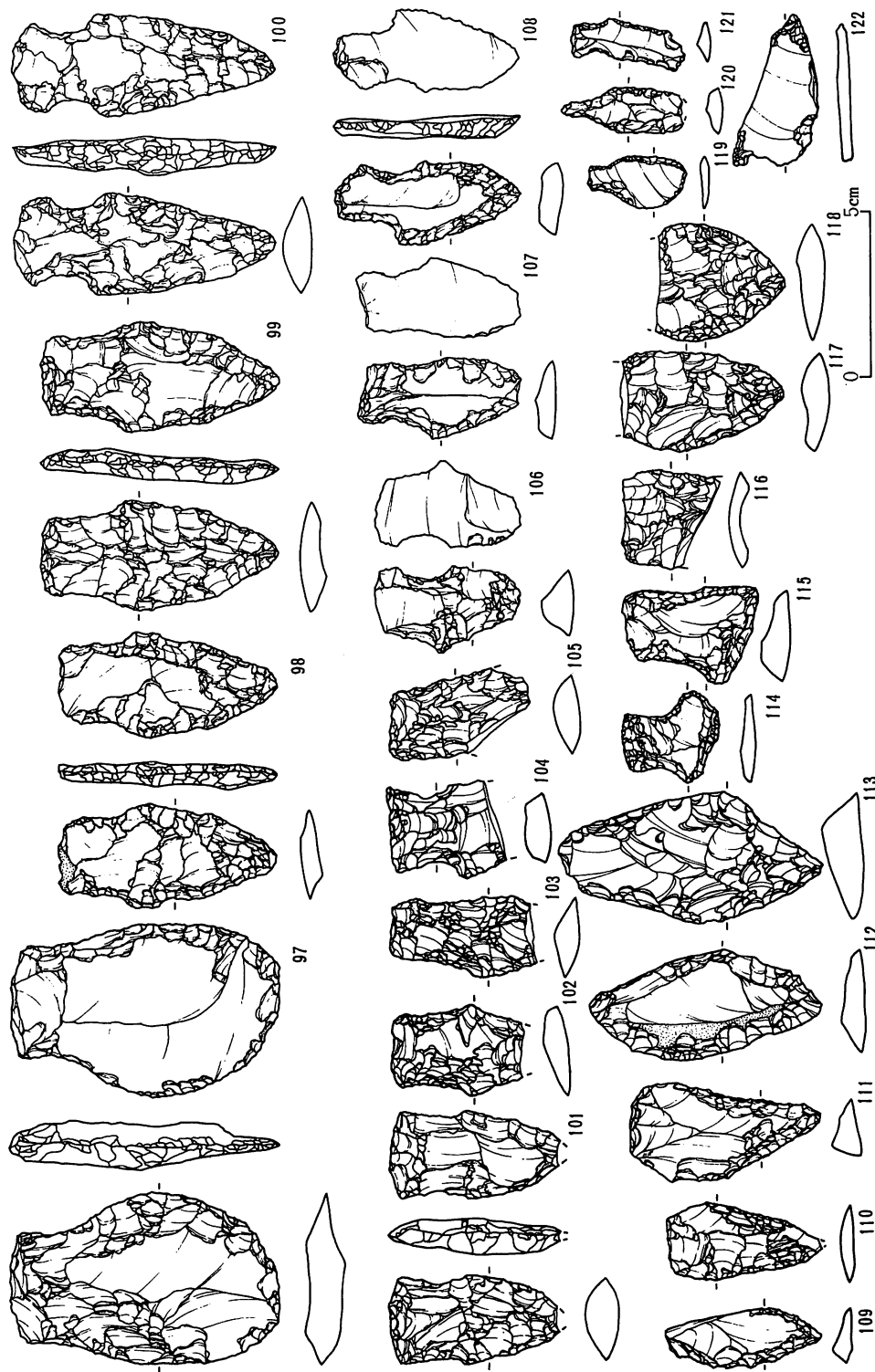


图241 包舍层出土石器 3

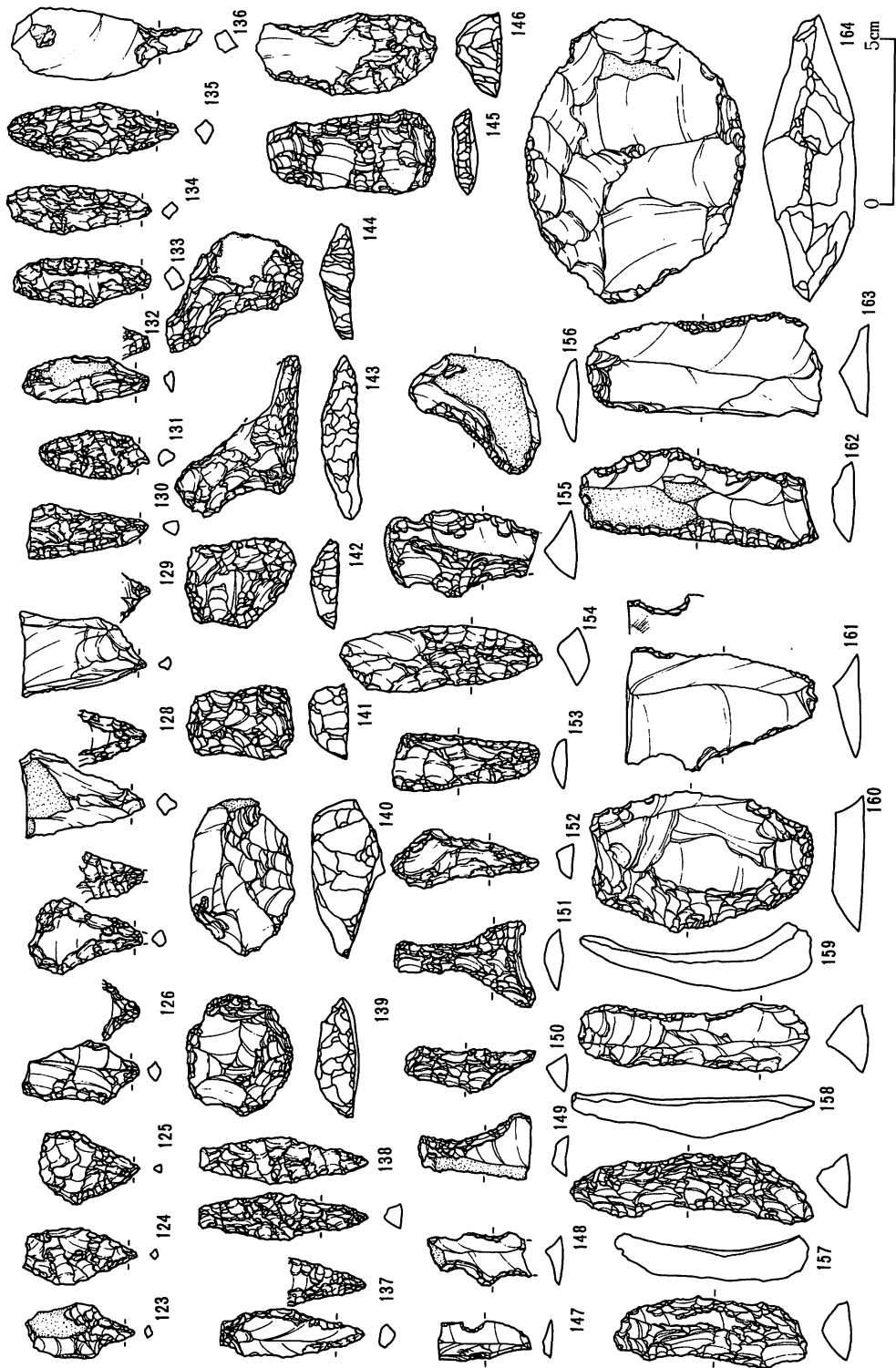


図242 包含層出土石器 4

4 礫石器—図 243、1～14、図 244、15～29—

礫石器は 1907 点出土した。分布は、縄文時代晩期末なら続縄文時代初頭の土器の分布とはほぼ一致する。それらは、15～27 ラインの間の低い部分に集中する。とくに SH-3 周辺の発掘区において濃密な分布を示す。礫石器の中で砥石が最も多く全体の 82% を占める。その分布は獣骨片の分布と一致する。砥石は自然をそのまま使用したものが多く、表裏面に使用痕が認められる。他に、石斧、たたき石、すり石、石皿、台石等がある。

石 斧(図 243-1～8) 磨製石斧が主体である。a：ペッキングで整形されたもの、b：打ち欠き整形したもの、c：磨きのみで製作したもの、d：石のみと称されるもの、に分類できる。

1、2 は a に分類され、縦断形が蛤刃状を呈する両刃である。3、4 は b に分類される。3 は縦長板状の原材を使用している。刃部の作出は顕著である。4 は、両面から磨かれた刃部をもつ。5、6 は c に分類される。5 は断面が一面だけ平らに磨かれた半円形を呈する。片刃である。6 は平面形が頭頂部から刃部にかけて大きく開く。片刃である。7、8 は d に分類される。平面形は頭頂部が細く、しゃもじ状である。刃部は両平刃である。8 は小型縦長の自然礫の刃部だけを鋭利に磨いたものである。片刃である。石質は、1 が安山岩、2・3・7 が泥岩、4 が玄武岩、8 が緑色泥岩。

たたき石(図 243-9～12) a：扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの、b：棒状の一端もしくは両端にたたき痕がみられるものに分類できる。

9、10 は a に分類される。9 は手持ちの部分のみ打撃痕がなく原石面をのこす。10 は円形礫の側縁をたたき痕が一周している。11、12 は b に分類される。12 はスタンプ状を呈する。11、12 ともたたき面は平らである。石質は、9 が緑色泥岩、10 が花崗岩、11 が珪岩、12 が橄欖岩。

くぼみ(図 243-13・14) 13・14 は自然礫の表・裏面に 1～2 カ所、打撃によるくぼみがあるものである。石質は、ともに安山岩

すり石(図 244-15・16・20・21) a：扁平礫を半円形に粗く打ち欠き、その周縁をすったもの、b：偏平礫の側縁をすったもの、c：北海道式石冠と称せられるもの、に分類できる。15、20 は a に分類される。15 のすり面の断面は三角形に近い。15・20 とともに表面に砥石様のすり面をもつ。16 は b に分類される。平面形は三角形を呈し、断面は三辺とも円形である。21 は c に分類される破損品である。石質は、15・16・20 は砂岩、21 は橄欖岩である。

砥 石(図 244-17～19、23～27) a：研磨面だけのもの、b：研磨面に溝のあるもの、c は扁平礫の表面をすったもの、に分類できる。

17～19、26 は a に分類、24 は b に分類、23・25・27 は c に分類される。23・25・27 は自然礫の表面に使用痕があるものである。石質は、24 が軽石、他は砂岩。

石 錘(図 244-28・29) 28・29 は長軸の両端に打欠きをもつものである。28 の表面には砥石様の使用痕がある。石質は、28 が橄欖岩、29 が安山岩。

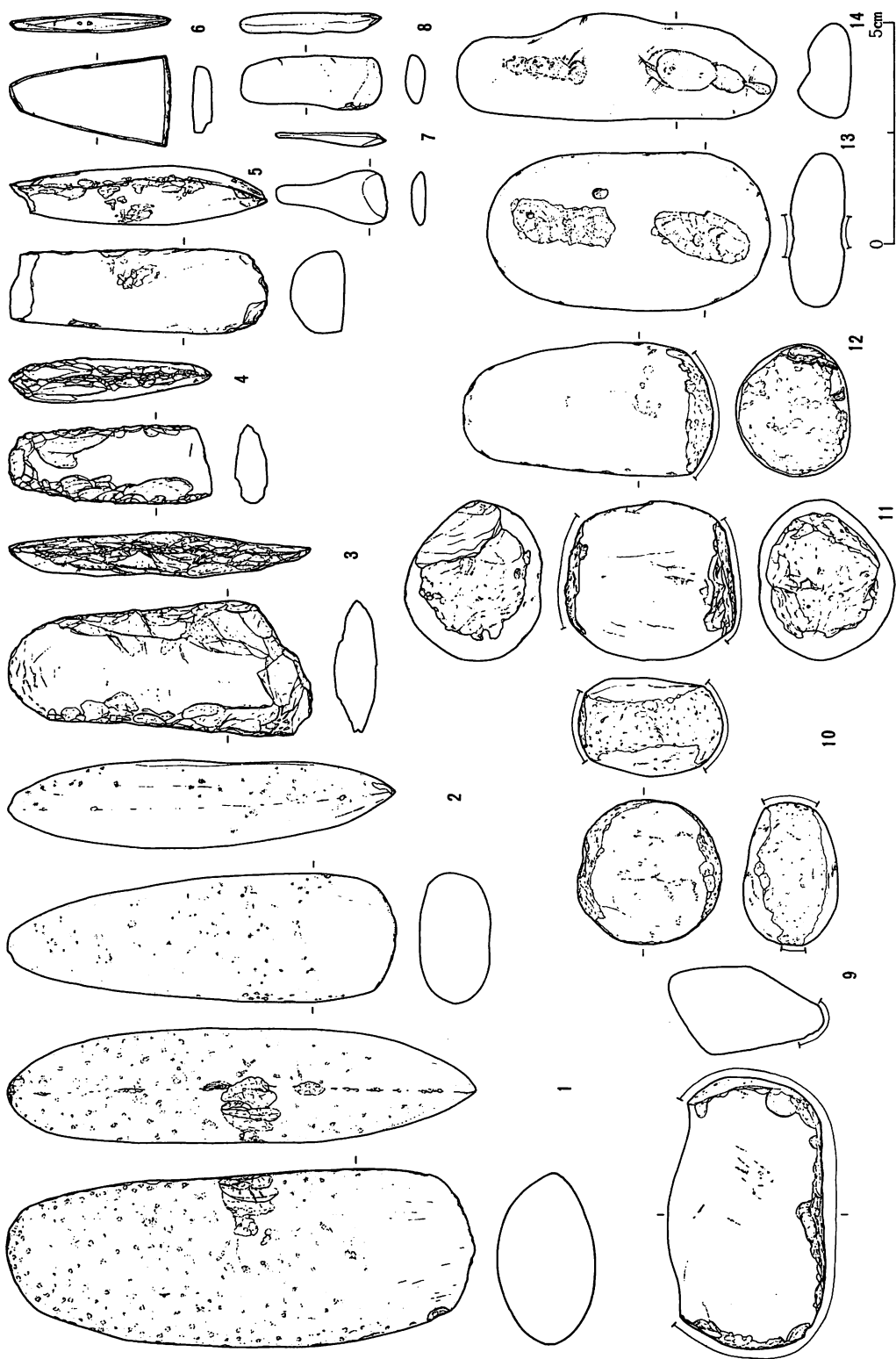


図243 包含層出土石器 5

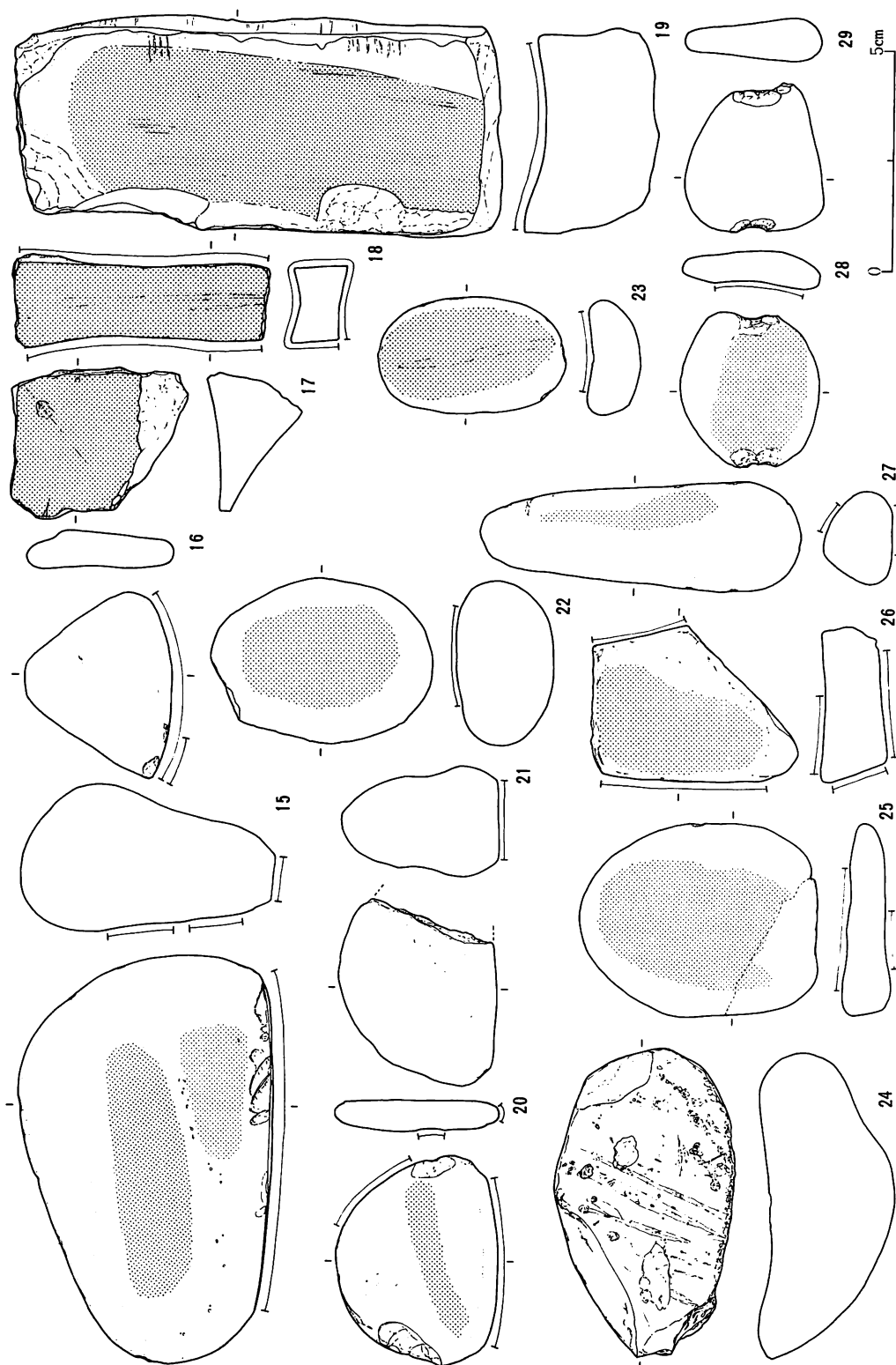


图244 包含层出土石器 6

表9 包含層石器一覧表1

石 鏃				番号	発掘区	重量(g)	材 質	番号	発掘区	重量(g)	材 質
番号	発掘区	重量(g)	材 質	34	C-16	1.4	Obs	68	D-25	2.5	Obs
1	C-20	1.2	Obs	35	A-23	2.5	"	69	C-28	2.0	"
2	A-24	0.5	"	36	B-22	3.3	"	70	C-22	1.5	"
3	D-24	0.7	"	37	C-18	(6.0)	"	71	C-42	(7.2)	"
4	D-24	1.0	Ha-sh	38	B-16	7.3	"	72	B-24	(8.2)	"
5	D-28	1.5	Obs	39	B-48	(2.7)	"	73	C-43	8.3	"
6	C-28	2.3	"	40	B-24	(2.8)	"	74	B-27	4.0	"
7	B-27	0.5	"	41	C-18	2.6	"	75	B-26	13.1	"
8	C-28	0.7	Ha-sh	42	D-25	2.6	Che	76	B-43	(8.4)	"
9	D-18	0.5	Obs	43	D-16	4.1	"	77	B-31	6.2	"
10	D-18	0.2	"	44	B-19	3.2	"	78	B-46	5.5	"
11	C-18	1.3	"	45	B-16	2.3	"	79	B-47	(26.0)	"
12	C-16	1.2	"	46	D-18	(4.6)	"	80	C-37	15.7	Sh
13	C-22	2.2	"	47	C-35	(1.0)	Obs	81	B-44	(46.0)	Obs
14	D-19	0.5	"	48	D-36	0.8	Che	82	C-36	34.4	"
15	D-22	0.5	"	49	C-15	0.6	Obs	ナ イ フ			
16	C-16	0.9	"	50	C-15	(0.8)	"	83	D-24	8.0	Obs
17	C-21	1.4	"	51	D-16	0.7	"	84	B-13	17.0	"
18	B-25	(0.9)	Ha-sh	52	B-33	0.5	"	85	B-19	18.1	"
19	D-21	1.6	Obs	53	C-32	1.5	"	86	D-26	28.8	Ha-sh
20	B-19	2.3	"	54	B-33	1.7	Che	87	D-18	11.8	"
21	C-21	(1.7)	"	55	D-26	1.4	Obs	88	D-23	17.4	"
22	D-23	2.8	"	56	D-23	1.5	"	89	D-22	16.4	"
23	B-21	2.6	"	57	C-35	2.5	"	90	D-26	15.8	Obs
24	C-22	2.0	"	58	C-34	3.3	"	91	B-24	6.4	Ha-sh
25	B-24	(3.6)	"	59	B-23	3.3	"	92	B-26	11.0	Obs
26	C-24	2.4	"	60	C-35	2.0	"	93	D-23	19.4	Ha-sh
27	D-21	3.3	"	61	C-28	1.2	"	94	C-23	14.0	Obs
28	C-24	2.8	Ha-sh	62	B-33	1.3	"	95	C-14	28.3	Ha-sh
29	C-24	(2.5)	"	63	A-23	4.1	"	96	D-26	(42.0)	"
30	D-21	(3.2)	"	64	B-30	3.5	"	97	D-21	54.2	粘板岩
31	D-15	(3.0)	Obs	65	D-23	1.5	Ha-sh	98	D-21	14.2	Ha-sh
32	B-24	1.1	"	66	B-24	1.2	Obs	99	D-26	17.5	"
33	D-25	(1.6)	"	67	C-20	3.2	"	100	C-20	11.8	"

表10 包含層石器一覧表 2

ナ イ フ				番号	発掘区	重量(g)	材 質	番号	発掘区	重量(g)	材 質
番号	発掘区	重量(g)	材 質	133	C-21	4.6	Ha-sh	1	C-27	1,300	And
101	C-23	(14.8)	Che	134	C-21	4.7	〃	2	C-28	680	Mud
102	C-15	(9.2)	Obs	135	C-24	7.8	Che	3	C-23	200	Mud
103	D-27	(8.3)	〃	136	D-22	8.3	Ha-sh	4	C-29	80	玄武岩
104	C-22	(9.2)	〃	137	D-23	3.8	〃	5	C-36	200	Gr-Mud
105	D-27	(8.9)	〃	138	B-27	3.8	Obs	6	C-36	35	〃
106	C-28	11.6	Che	スクレイパー				7	B-25	6.3	Mud
107	D-23	9.4	Ha-sh	139	C-24	13.2	Obs	8	B-24	25	Gr Mud
108	C-25	9.8	〃	140	D-23	23.4	〃	たたき石			
109	D-23	5.4	〃	141	B-28	8.5	Ha-sh	9	C-23	570	Gr-Mud
110	D-26	(4.8)	〃	142	C-27	7.6	Obs	10	D-24	287	Gran
111	D-26	16.4	〃	143	C-27	12.8	Che	11	C-28	695	Sa
112	C-36	(15.6)	Obs	144	C-16	10.0	Obs	12	D-23	510	Per
113	B-43	31.6	〃	145	B-26	12.8	〃	凹 石			
114	C-27	3.4	〃	146	B-24	13.7	Ha-sh	13	C-36	400	And
115	D-22	10.7	Che	147	D-19	1.2	Obs	14	C-23	250	〃
116	C-24	(3.8)	Obs	148	B-27	2.1	〃	すり石			
117	C-17	(11.0)	〃	149	C-29	3.3	〃	15	B-32	1,720	Sa
118	B-30	(10.8)	〃	150	B-43	3.4	〃	16	C-36	115	〃
119	B-26	1.1	〃	151	B-43	4.0	〃	20	D-23	145	〃
120	C-18	(2.2)	Ha-sh	152	D-19	4.2	Che	21	D-30	410	Per
121	B-49	1.7	Obs	153	D-23	4.1	Ha-sh	砥石・矢柄研磨器			
122	C-26	4.2	〃	154	B-13	13.8	〃	17	D-29	215	Sa
ド リ ル				155	B-27	11.0	Obs	18	B-21	210	〃
123	C-36	2.0	Obs	156	C-27	8.2	Che	19	B-42	1,800	〃
124	C-20	2.2	〃	157	B-43	11.8	Obs	22	C-19	440	〃
125	B-43	4.8	〃	158	C-36	12.2	〃	23	D-23	150	〃
126	B-16	4.0	Ha-sh	159	C-32	14.4	〃	24	C-28	260	Pum
127	B-16	(4.7)	〃	160	C-30	29.2	〃	25	C-25	295	Sa
128	D-22	5.4	〃	161	D-15	15.2	〃	26	C-36	215	〃
129	B-12	10.7	Che	162	B-20	15.0	〃	27	C-28	300	〃
130	C-28	5.2	〃	163	C-46	19.6	〃	石 錘			
131	C-22	3.9	Ha-sh	164	B-26	127.7	Ha-sh	28	56年A1包	100	Per
132	D-25	4.8	〃	石斧・石のみ				29	56年A1包	110	And

5 自然遺物

自然遺物には、動物遺存体、植物遺存体等がある。なかでも、動物遺存体が圧倒的に多く、21,162点得られた。動物遺存体は長さ1~2cmの小片で大半が焼骨である。植物遺存体にはクルミ、ミズナラ等の炭化果実の細片がある。

採集した土壌サンプルは整理期間中に水洗、選別を行った。なお、検出された遺物遺存体の鑑定については、札幌医科大学第2解剖学教室西本豊弘氏による。

遺構から検出された動物遺存体は2,114点で、大半がエゾシカの四肢骨である。植物遺存体については細片であるため同定は出来なかった。以下に各遺構別の動物遺存体について記す。

住居跡、SH-3に伴う小ピットから陸獣骨片14点、海獣骨片1点が検出された。いずれも細片であるため種類の同定は出来なかった。

土壌墓。SP-44、118、120、142、143、146から人骨(歯)が、SP-178からは、エゾシカの末節骨、サケの歯、種別不明の獣骨片、炭化物などが検出された。他の土壌墓についてもエゾシカを主とした獣骨片が多数検出された。

埋壺、各埋壺から獣骨片(焼骨)が検出されているが、ほとんどが細片であるため同定は不可能であった。獣骨片以外に、SP-41、145、168から0.3~1kgの小砂利が、さらにSP-45、126からは、1.5~2kgの粘土が検出された。

その他の遺構、SP-50からエゾシカ中手骨近位端と中手中足骨遠位端が、SP-95からエゾシカ末節骨が、NP-49からはエゾシカとイノシシの末節骨が検出された。さらにSF-6からはエゾシカの骨片とサケ椎骨が検出された。

包含層から検出された動物遺存体は大半がエゾシカである。他にイノシシ、海獣、鳥類、貝類などがみられ、これら動物遺存体の分布は礫石器および焼土の分布とおおむね一致する。鑑定が可能であった動物遺存体の内訳は、エゾシカ中手・中足骨片6点、基節骨12点、中節骨24点、末節骨17点、手根骨・足根骨20点、下顎骨左第2後臼歯1点、膝蓋骨1点、イノシシ中手・中足骨2点、基節骨2点、中節骨1点、末節骨3点、貝類破片ではヒメゾブラ、ウバガイ、二枚貝、巻貝など、海獣指骨1点、小鳥尺骨1点、フクロウ中足骨1点などとなる。

上記の動物遺存体以外に、骨角器の破片や出土しているが、形状は不明である。

小 括

最大幅が20m ならずの細長い帯状の発掘区から種々の遺構が多数発見された。それと相まって遺物は10万点を越えている。特徴的な遺構として埋壺―埋設壺―がある。それと同じく発見された、土墳墓あるいは一部の円形土墳とはいくつかの共通点が見い出され、これが無関係なものではないと考えられる。以下、これら遺構について考えてみたい。

土墳墓について、調査地区が帯状であるため、土墳墓の分布、配列などを論ずるには無理がある。ここでは、土墳墓の形態、埋土などから遺体のあり方を推定し、さらに土墳墓からの出土遺物について考えてみたい。

土墳墓には小円形、卵形、類隅丸方形の三つの形がある。小円形、卵形のは径が0.9～1.5m で、主として22～33 ラインの間に分布する。類隅丸方形のものは径(長径)が、1.5～1.7m で、分布は25～29 ラインの間に限られる。埋土についてみると、大きく二つに分かれる。ひとつは、墓墳の中心へむかって断層状に落ち込むもので、発見された土墳墓の多くにみられる。もうひとつは、壁のどちらか一方へ傾くもので、SP-139、140、143、146 などで観察される。これら埋土の状態は、遺体の埋葬方法に由来するものでなかろうか。土墳墓の形態、規模そして埋土の状態から次のようなことが考えられる。

① 形は卵形、類隅丸方形を問わず、規模(墳底径)が1～1.5m のものは屈葬と考えられる。そしてまた、埋土が中心へむかって断層状に落ち込む場合の埋葬方法として伸展葬と屈葬が考えられる。これは、遺体の骨格のない、腐植が最初に始まると思われる腹部付近へむかって土砂が流れ込むからと考えられる。本遺跡の場合、規模が1～1.5m で埋土が中心へむかう状態の土墳墓では屈葬と考えられる。

② どちらか一方へ土砂が傾むく場合の埋葬方法として座葬が考えられる。座葬の場合、壁のどちらか一方に空間が出来、そこへ土砂を圧しながら埋め戻したとしても、遺体の腐植が始まり、白骨化そして土化する過程で、その土砂は遺体を置いた方へ傾斜するものと考えられる。それと相まって土墳墓の径が1m 以下であった場合、座葬であった公算が強くなってくる。

埋土はすべて、墓墳を掘った際の揚げ土によって成る。墳底はローム(黄褐色土)中にあり、埋土の中位以上にはこのロームが径2～3cm の小ブロックとして混入されており、上層になるにしたがってローム小ブロックの含有量が多くなる。逆に下層ではロームは細粒となり、含有量も少なくなってくる(下層ではもともとローム粒は混入されておらず、長い間、上層におかれたロームが浸透したとも考えられる。)いわば、土層が逆転した状態である。このことから次のようなことが考えられる。

① ロームを混入することによって土砂がしまり、かつ最上層をロームで被覆することによって土層を密封状態にする。これによって死者の再生を妨げようとしたのではないか。

② 当時の地表面(黒色土系の色調であったと思われる)に異質な色調(ローム―黄褐色土)

の部分を作り出すことによって日常生活面あるいは日常生活域との区別を意図したものか。また、多くの場合、埋土へのローム小ブロックやローム粒の混入の他に、埋土の中位から最上層にかけて、あるいは土壌墓の周囲に、焼獣骨細片、黒曜石のチップ、稀に土器細片、小砂利などを混入、散布している。そして、土壌墓の最上層や周囲には焼土粒や炭化粒なども見られ、

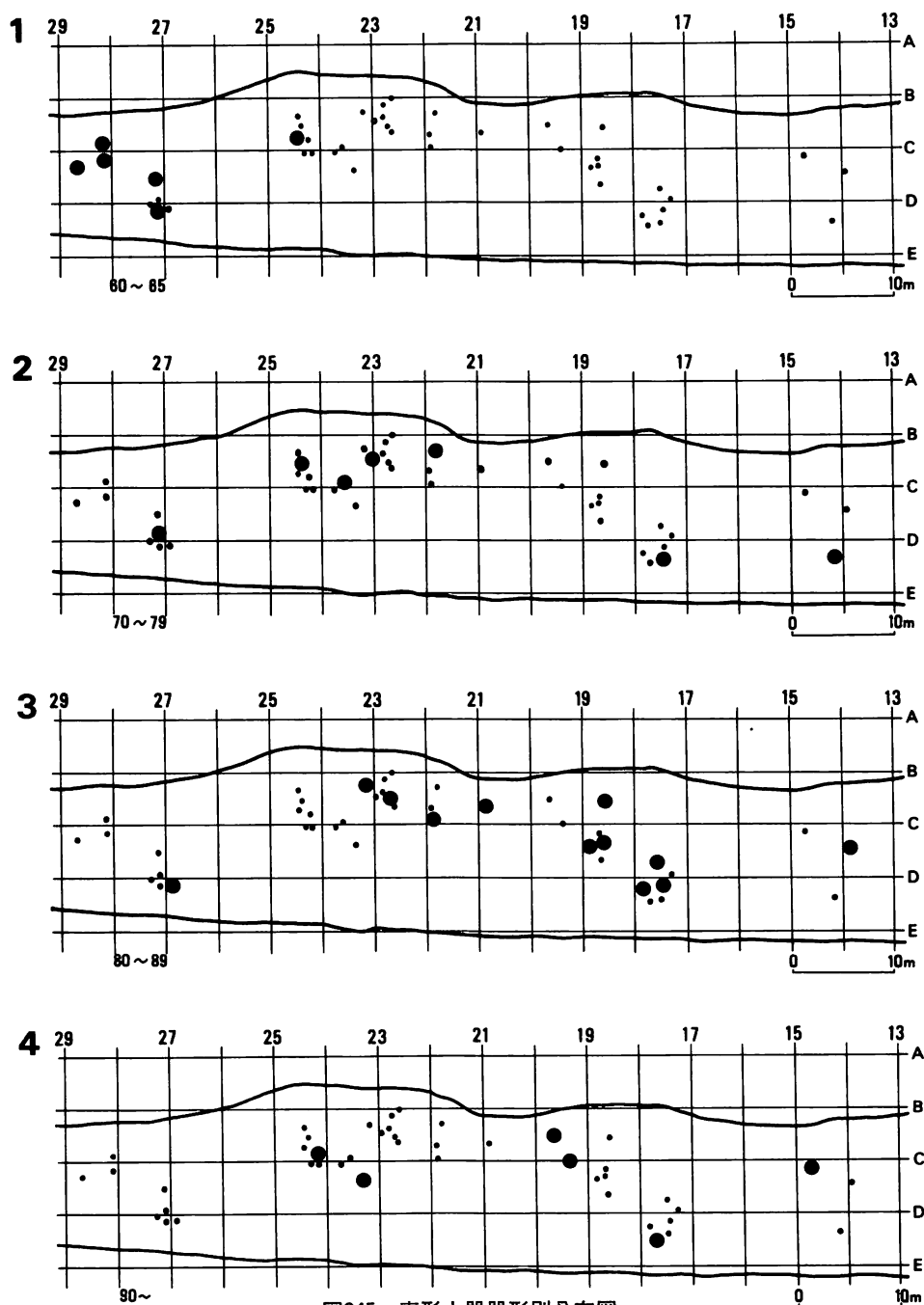


図245 壺形土器器形別分布図

墓前で焚火が行なわれたものと考えられる。これらのことから、

① 死者の「送り」の儀式にかかわるもの。

② 被葬者が生前使用していたもの、あるいは日常生活に直接的・間接的（例えば、食料としての魚貝、獣類、道具としての石器、骨角器など、土器）にかかわっていたものをこなごなに打ち砕くことによる機能の停止、つまり、「この世」と「あの世」を絶ち切ることを意図したものであるか。

ということが考えられる。

伴出遺物には土器、石器、コハク玉がある。遺物を伴出した土墳墓の大半では、土器は、埋土の中位以上に、石器は墳底面あるいはそれに近い位置から出土している。土器は、恒常的に使用するとしても、常に身に付けていたものではなく、直接的に「生業」につながるものではないと思われる。一方、石器は、常に身に付け（あるいは身近におき）、狩猟採集、解体、処理あるいは土木・建築などには欠かせない重要な道具であり、直接的に「生業」につながるものと考えられる。石器を被葬者の身に付けて副葬することによって「別の世界」での生活が保証される、ということを計ったものではなかろうか。なかには、この石器を、副葬するために製作した例もある。SP-39、119、190 などで見られる。土器の場合、砕いて土砂とともに混入されたり、あるいは散布されるということには、呪術的な意味が強く、また、墓前での焚火と相まって「送り」の儀式の道具として使用されたものと思われる。

土墳墓の付属施設（内部施設）についてみると、土墳内に小ピットを1～数個もつものがある。SP-44、45、108、115、117～120、129、140、185、187～190 である。とくに SP-115 では杭跡のようなものが開口部付近まで延びているのが観察された。この小ピットが墓標式のようなものを建てた跡なのか、上屋をもつ墓の柱穴のようなものなのかは不明である。

埋壺について、13～29 ラインの間に 47 個が分布する。埋壺はいくつかのまとまりをもって分布するが、壺に表現された文様（曲線文を基本とする）には大差なく、文様の相違による壺の分布についてはとらえられない。そこで、壺の器形からその分布状態を示したのが図 245 である。比較的小形の壺の一群が土墳墓に囲まれるように分布しており、他は土墳墓の分布域とは一致しない。比較的小形の壺（最大幅/器高の 100 分比が 60～69）を除いた、他の壺は、12～29 ラインの間で、弓状の分布状態を示す。

埋壺の用途として次のようなことが考えられる。

① 蔵骨容器－「再葬墓」－

② 祭葬用容器－祭祀遺構－

③ 日常容器－貯蔵用－

壺内には、あらかじめ土砂が封入されている。その土砂には焼獣骨細片、土器細片、黒曜石チップ、小砂利、粘土、炭化粒などが混入している。器形は、胴上部あるいは肩部が張り出し底部はすばまり、底面は丸底に近く、安定性のないものである。当初から土墳に埋納して使用

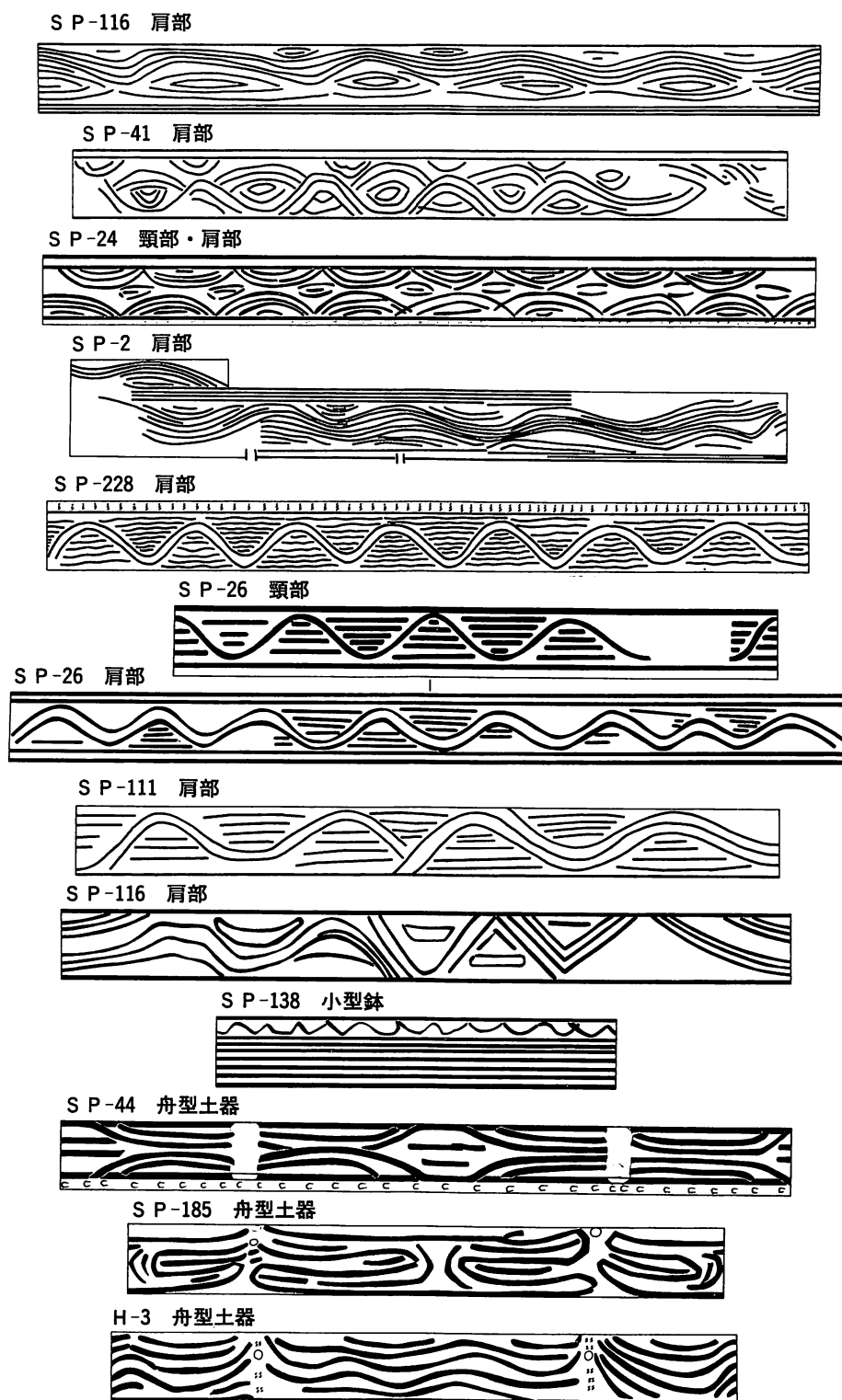


图246 土器文様集成(模式図)

することを目的として製作されたものであろう。胎土には小豆大の砂粒が多く含まれ、概して脆い。これらのことから③の日常容器として使用したとは考えられない。①の蔵骨容器―「再葬墓」―として使用であるが、壺内の封入土を水洗した結果、人骨は検出されず、これも否定された。封入土が、前述した土壌墓の埋土の最上層あるいは周囲に散布していた土と同様な状態であることから、②の祭儀用容器―祭祀遺構―と考えられる。しかし、土壌墓と埋壺のあり方を考えてみた場合、一部を除いてその分布は重複せず、封入土、埋土の類似などから、葬送儀礼に関して、両者は密接な関連をもつものと思われるが、土壌墓を「身墓」とした場合、埋壺を「空墓」としてとらえ、埋壺そのものを墓標式（埋壺は肩部以上が地上に露出した状態にあったものと考えられる）と考えられないだろうか。今後、検討を要するところである。

円形土壌のなかには、埋土の性質が埋壺の封入土と同じ性質をもつものがある。これら土壌の規模は埋壺の土壌とほぼ一致する。このようなことから、この円形土壌は、埋壺が出現する直前のものか、あるいは、埋壺が消滅していく過程のものどちらかのことが考えられる。いずれにしろ、祭儀に関係する遺構と考えられる。

大型の壺が多量に出土した例は当該期あるいはその前後の時期にも見られない。一見して、弥生式土器を想起させるものも見うけられる。これら大型の壺がその伝統的な社会の中で生みだされたものか、あるいは、急進的な社会の中で伝播し、定着していったものなのかは他に良好な類例がなく不明といわざるを得ない。今後の検討を要する。

土器について

旭町1遺跡出土の土器群のうち、本稿では、主に曲線文・縄線文を主体とする土器群を取り上げることにする。

当遺跡出土の縄線文には、口縁に磨消帯をもち、平行する数条の縄線がめぐらされる例が圧倒的に多く、幾何学文様が施文される例はない。曲線文をもつ例は、2～3条の連続する曲線の周曲部に短沈線あるいは弧線を描くものが圧倒的に多く、主に壺・鉢に限られる。これらの文様の他に、変形工字文風の文様、矢ばね状の文様などの在地系の土器とは異なったモチーフをもつものがある。これらの文様は、ほとんど鉢に限られ、壺にはすくない。稀に、舟形土器に変形工字文風の文様が施文される。

ところで、当遺跡出土の土器群は、同じ太平洋岸に分布する氷川遺跡出土の土器群に類似する特徴をもっている。ただ、氷川遺跡では、大型の壺はなく、ほとんど鉢によって占められるが、文様構成においては、両者は大きな差は認められない。氷川遺跡出土の在地系に、大洞A'式あるいは砂沢式土器が伴出するといわれているが、本遺跡では、砂沢式相当の土器はあるが、大洞A'式に比定される資料は出土していない。

道央部のママチ遺跡でも、大洞A'式併行の弧線文・曲線文をもつ土器群が出土する。前二者には、尾白内I式土器が伴出せず、後者では、尾白内I式土器が伴出しているが大洞A'式に比定される資料はないという関係にある。両者の関係は、文様構成・器種構成などから考えると後者のほうが古く位置づけられるが、大洞A'式の細分とも関連して、今後の課題としたい。

索引

遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁
H - 1	B-1 C-1	6	13	P - 23	D-5	219	142	S P- 15	D-15	210	134
2	C-1・2	9	14	24	C-4・5 D-4・5	219	142	16	D-14	221	114
3	D-8・9 E-8・9	10	15	25	C-5	219	142	17	D-16	221	114
SH- 1	B-32・33	14	17	26	B-5	219	142	18	C-19 D-19	204	128
2	A-22・23 B-22・23	16	18	27	C-5・6	201	125	19	D-14	221	144
3	C-22 D-22・23・24	18	20	28	B-6 C-6	201	125	20	D-15	221	144
NH- 1	a-46・47・48 A-46・47・48	21	22	29	D-7 E-7・8	201	125	21	D-15 E-15	221	144
2	a-47・48 A-47・48	21	22	30	D-8 E-8	201	125	22	D-17	113	79
3	A-40・41	23	24	31	D-8	201	125	23	D-17	115	80
P - 1	C-2・3 D-3	200	124	33	B-9 C-9	201	125	24	D-17	117	81
2	C-3 D-2・3	200	124	34	C-10	201	125	25	D-17	120	82
3	C-3 D-3	200	124	35	C-10・11 D-10	201	125	26	C-17	122	83
4	C-3・4	200	124	36	C-11 D-11	201	125	27	C-17	125	85
5	B-3 C-3	200	124	37	C-11 D-11・12	202	126	28	D-13・14	202	126
6	C-4 D-4	200	124	38	C-12 D-12	202	126	29	C-14・15	206	130
7	C-4 D-4	200	124	39	C-12 D-12	202	126	30	D-14・15	203	127
8	D-3	219	142	40	C-11・12	202	126	31	C-15 D-15	203	127
9	D-4 E-4	219	142	S P- 1	C-13	105	75	32	B-15 C-15	203	127
10	C-4	219	142	2	D-14	107	76	33	D-27	222	145
11	C-4	219	142	3	C-14	110	78	34	D-27	222	145
12	D-4	219	142	4	C-13	202	126	35	D-27	222	145
13	C-4・5	200	124	5	C-14 D-14	202	126	36	C-15	203	127
14	B-5 C-5	200	124	6	C-14	221	144	37	D-14	221	144
15	B-5 C-5	219	142	7	D-14・15	221	144	38	D-24	222	145
16	C-6 D-5・6	219	142	8	D-13 E-13	202	126	39	C-30	92	62
17	C-5・6	219	142	9	D-12・13 E-12・13	202	126	40	B-28	188	115
18	C-5	219	142	10	D-18	221	144	41	C-28	190	116
19	C-5	219	142	11	C-16 D-16	221	144	42	C-28	193	118
20	C-5	219	142	12	D-16	221	144	43	C-16	221	144
21	C-5	219	142	13	D-16	221	144	44	C-32	95	64
22	C-5	219	142	14	D-16	221	144	45	D-27	178	110

遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁
S P- 46	D-20・21	221	144	S P- 77	B-35	209	133	S P-108	C-27・28 D-27・28	77	57
47	D-21	221	144	78	B-34・35	220	143	109	C-30 D-30	207	131
48	D-20 E-20	204	128	79	B-34・35	209	133	110	C-26	220	143
49	D-19・20	204	128	80	B-35 C-35	220	143	111	B-20	145	94
50	C-21 D-21	205	129	81	A-34・35 B-34・35	220	143	112	B-24	163	103
51	C-18	128	88	82	C-27	181	111	113	B-24	168	104
52	C-19 D-19	204	128	83	C-27 D-27	182	111	114	D-24	222	145
53	D-18・19	204	128	84	D-26	185	113	115	C-25	53	45
54	D-27	65	51	85	C-30	100	67	116	C-26	210	134
55	C-31 D-31	102	68	86	B-32	210	134	117	C-26	74	56
56	C-29 D-29	210	134	87	B-32 C-32	208	132	118	C-26・27	79	58
57	C-28 D-28	210	134	88	B-31	208	132	119	C-26	64	54
58	D-29・30	207	131	89	B-31	209	133	120	C-25・26 D-25・26	86	60
59	D-30	207	131	90	B-32	220	143	121	C-24 D-24	206	130
60	D-30	207	131	91	B-32	210	134	122	C-24	206	130
61	C-32・33 D-32・33	208	132	92	D-31	103	68	123	C-24	166	103
62	C-33 D-33	208	132	93	C-30	220	143	124	C-23	166	103
63	C-32	208	132	94	B-30	209	133	125	C-23	171	106
64	C-32	208	132	95	C-20 D-20	222	145	126	B-23	172	107
65	C-28	80	58	96	C-20 D-20	203	127	127	B-22	222	145
66	C-28・29	220	143	97	C-20 D-20	205	129	128	C-27 D-27	187	114
67	C-29	220	143	98	C-21	205	129	129	C-27	81	59
68	D-30・31	207	131	99	C-23 D-23	222	145	130	D-23	210	134
69	B-30 C-30	208	132	100	C-21	222	145	131	D-23・24	210	134
70	B-29 C-29	98	66	101	B-21 C-21	206	130	132	B-24	175	108
71	C-32	208	132	102	B-20・21	206	130	133	B-22	154	99
72	C-34 D-34	209	133	103	B-20	206	130	134	B-24	177	109
73	C-34 D-34	220	143	104	B-20 C-20	206	130	135	B-22	150	97
74	C-35 D-35	209	133	105	C-19・20	222	145	136	B-22	160	102
75	C-35・36	209	133	106	C-19	205	129	137	B-22	156	99
76	C-36・37	209	133	107	C-18・19	205	129	138	D-25	48	42

遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁
S P-140	B-26	69	54	S P-171	D-26・27	220	143	S P-202	D-17	215	139
141	B-26	73	56	172	C-18 D-18	204	128	203	D-17	215	139
142	D-24	44	40	173	C-18	222	145	204	B-23	206	130
143	D-25	47	41	174	C-17・18	204	128	205	B-23・24	222	145
144	B-19 C-19	136	90	175	B-17 C-17	205	129	206	A-23 B-23	207	131
145	不明	194	119	176	A-17 B-17	205	129	207	C-18	129	88
146	B-24・25	55	46	177	D-18	221	144	208	B-27・28	207	131
147	不明	196	119	178	B-23	39	38	209	B-27・28	207	131
148	B-18	133	89	179	B-23	222	145	210	B-27・28	207	131
149	C-18	22	145	180	B-23	152	93	211	B-28	220	143
150	C-21	222	145	181	B-23	222	145	212	D-26	61	48
151	C-22 D-22	222	145	182	B-21	143	93	213	D-25	84	59
152	B-24	220	143	183	B-21	147	96	214	C-26	220	143
153	B-27	216	140	184	B-21	148	96	216	D-16	221	144
154	B-27	216	140	185	B-14	27	30	217	B-22	222	145
155	B-27	216	140	186	B-13	221	144	218	B-22	222	145
156	B-27・28	216	140	187	B-13	29	32	219	A-22 B-22	162	102
157	B-27・28	216	140	188	B-13 C-13	31	34	220	B-24	89	61
158	B-28	216	140	189	B-12	32	34	221	D-25	90	61
159	C-23	222	145	190	B-13・14 C-13・14	35	35	222	D-25・26	91	61
160	B-28	216	140	191	B-28	216	140	223	D-26	88	60
161	B-27	216	140	192	B-27・28	216	140	224	D-27	220	143
162	B-22	222	145	193	D-22・23	222	145	225	C-27	220	143
163	B-22	222	145	194	D-17	215	139	226	C-27	220	143
164	B-19	222	145	195	D-17	215	139	227	B-13 C-13	203	127
165	B-19	222	145	196	D-17	215	139	228	B-22	158	100
166	C-18	126	86	197	C-17 D-17	215	139	229	D-17	221	144
167	B-19	222	145	198	A-24・25 B-24・25	207	131	230	C-17	221	144
168	C-18	128	88	199	D-17	215	139	231	C-18	204	128
169	B-27	207	131	200	B-17	205	129	232	B-19	222	145
170	B-29・30 C-30	208	132	201	D-17	215	139	233	D-18 E-18	203	127

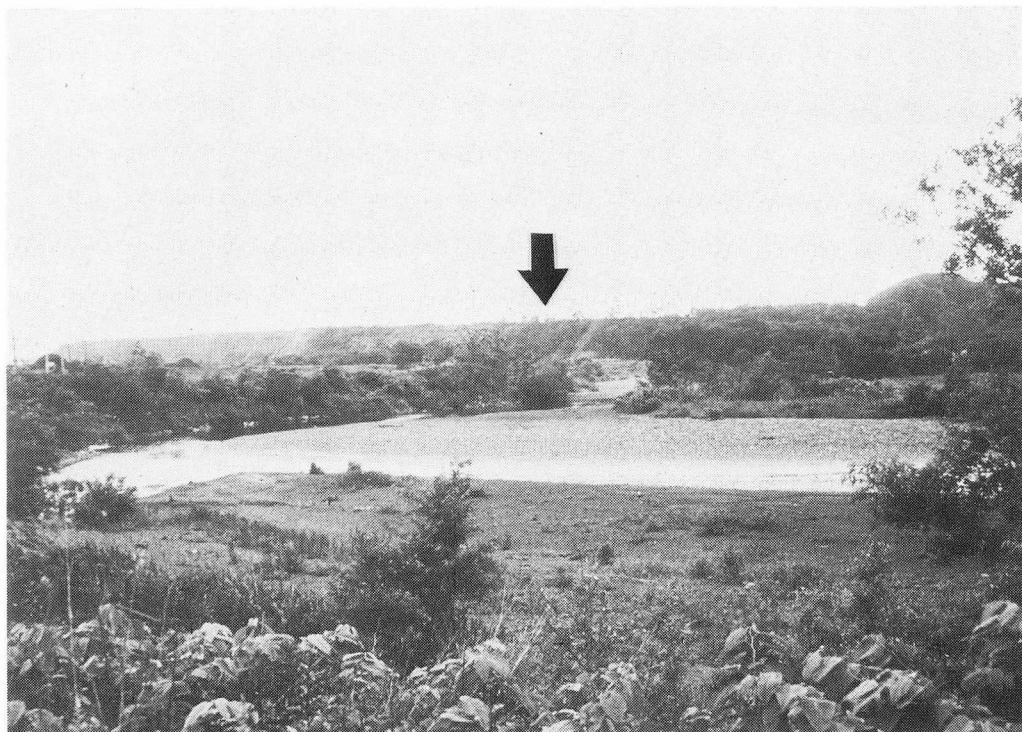
遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁	遺構番号	発掘区	図番号	頁
S P-234	D-18	221	144	N P- 4	B-48・49	211	135	N P- 35	A-43・44	212	136
235	D-17・18 E-18	203	127	5	B-50	223	146	36	A-44	212	136
236	C-16・17 D-17	221	144	6	B-49	223	146	37	A-45	212	136
237	C-17 D-17	221	144	7	B-48	223	146	38	A-48	224	147
238	C-18	221	144	8	B-47	223	146	39	A-48	224	147
239	D-16・17	221	144	9	B-47	223	146	40	A-48	224	147
240	B-20	206	130	10	B-46・47	223	146	41	A-48	224	147
241	B-18・19 C-18・19	221	144	11	B-45・46	223	146	42	A-45・46	224	147
242	B-17・18	205	129	12	B-46	223	146	43	A-45	224	147
243	B-18	222	145	13	B-46	223	146	44	a-46 A-46	224	147
244	A-18 B-18	206	130	14	B-46	223	146	45	a-44 A-44	224	147
245	B-25	220	143	15	B-45	223	146	46	A-43	224	147
246	B-21	222	145	16	A-45 B-45	223	146	47	A-42	224	147
247	D-17	221	144	17	B-45 C-45	223	146	48	A-39・40 B-39・40	212	136
248	C-17	221	144	18	B-44・45	223	146	49	B-41	212	136
249	A-24	207	131	19	B-44・45 C-44・45	211	135	50	B-41	212	136
250	A-23	220	143	20	B-44	223	146	51	A-42・43	212	136
251	B-19	222	145	21	B-44 C-44	224	147	52	A-42	224	147
252	C-17	204	128	22	B-43	224	147	53	A-45	224	147
253	B-19	138	91	23	A-43 B-43	211	135	54	A-45	225	148
254	B-18	140	92	24	B-43 C-43	211	135	55	a-45 A-45	225	148
255	C-17	215	139	25	C-44	224	147	56	A-46	225	148
256	D-24	222	145	26	C-44	211	135	57	A-48	225	148
257	B-29	220	143	27	A-45 B-45	211	135	58	A-47	212	136
258	B-29	220	143	28	a-47 A-47	211	135	59	C-38	212	136
259	B-29	220	143	29	a-48 A-48・49	211	135	60	C-41	212	136
260	B-19	222	145	30	A-48・49	212	136	61	A-47	212	136
261	C-19	222	145	31	A-49	224	147				
N P- 1	A-49 B-49	223	146	32	A-48・49	224	147				
2	B-48・49	223	146	33	A-48・49	224	147				
3	A-49 B-49	211	135	34	A-49	224	147				

写真図版

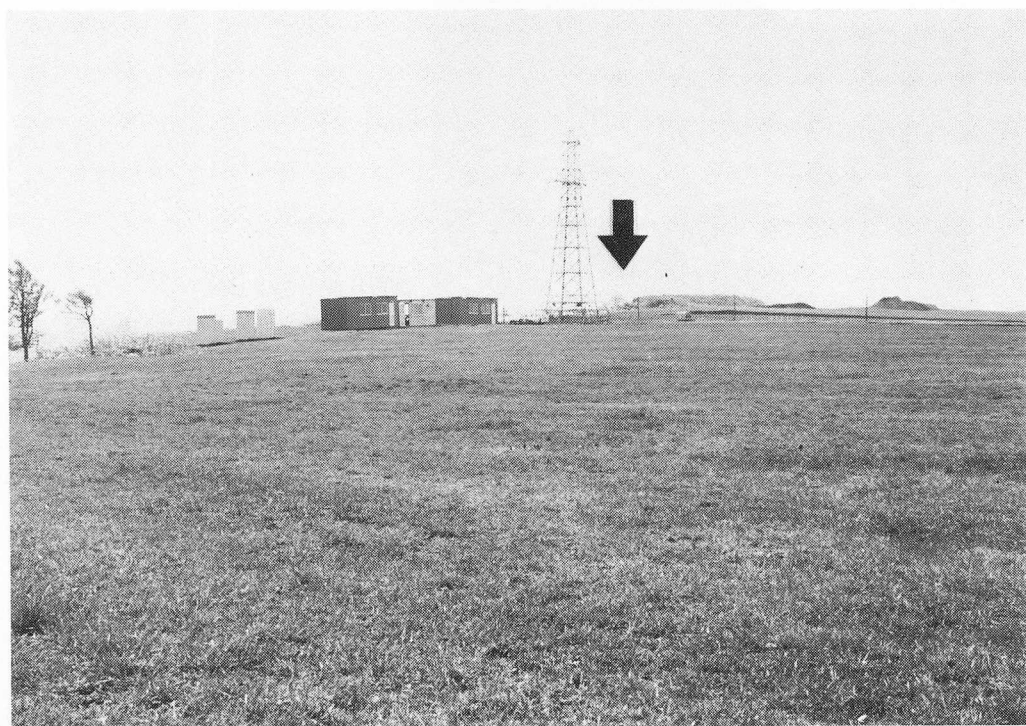


S P 113 出土状況

S .57.6.25撮影



遠 景 (矢印)



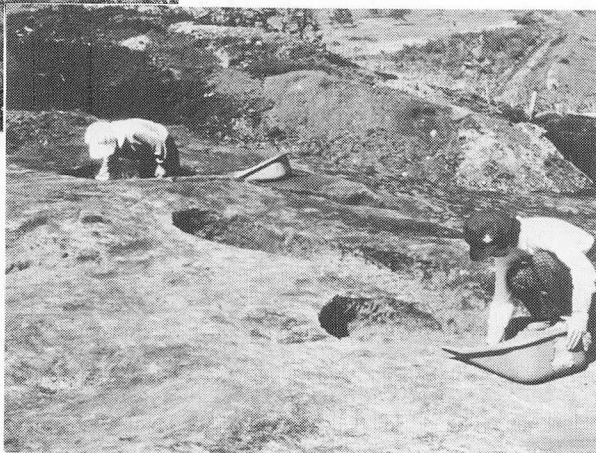
近 景 (矢印)



調査状況 (S→N)



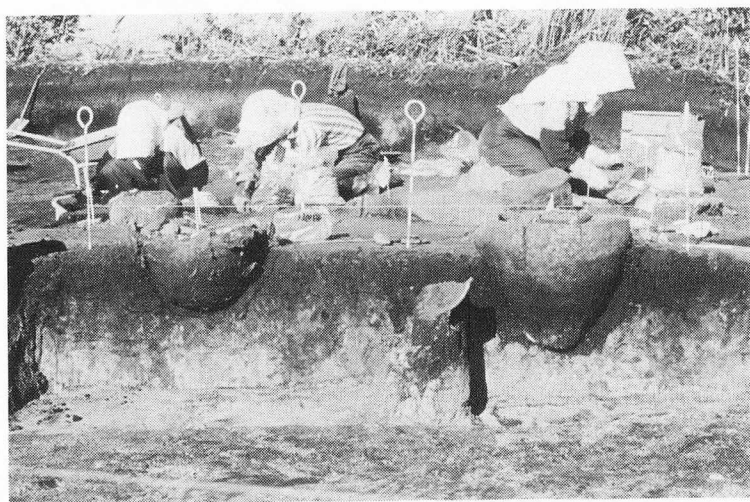
調査状況 (SW→NE)



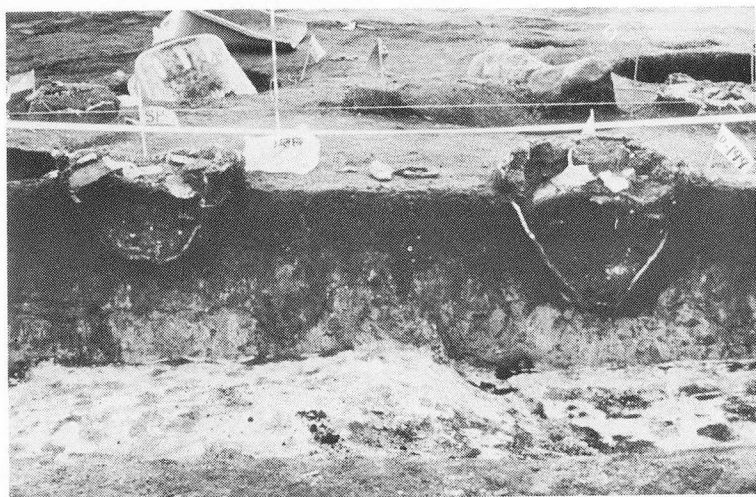
調査状況 (N→S)



埋 壺 (SP-24～SP-27)



埋壺出土状況
(SP-22、SP-24)



埋壺土層
(SP-22、SP-24)



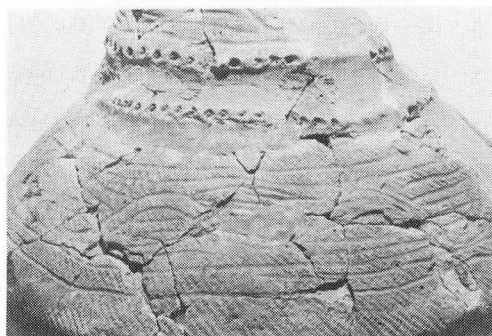
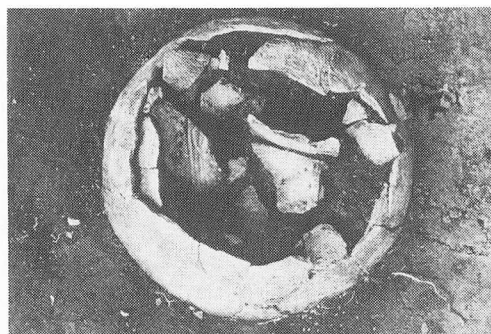
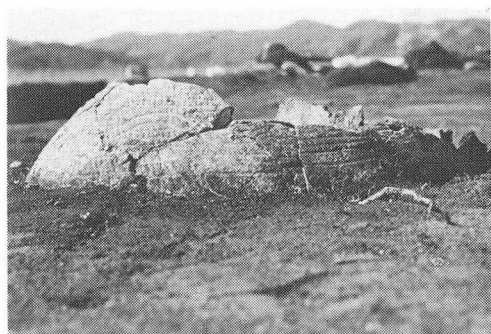
SP-126 出土状况



SP-126 土层



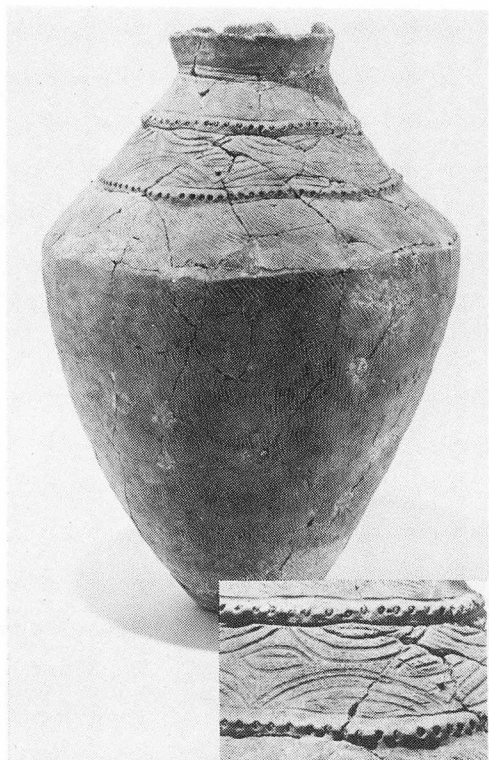
SP-126



出土状況	真上から
土 層	拡 大



SP-26



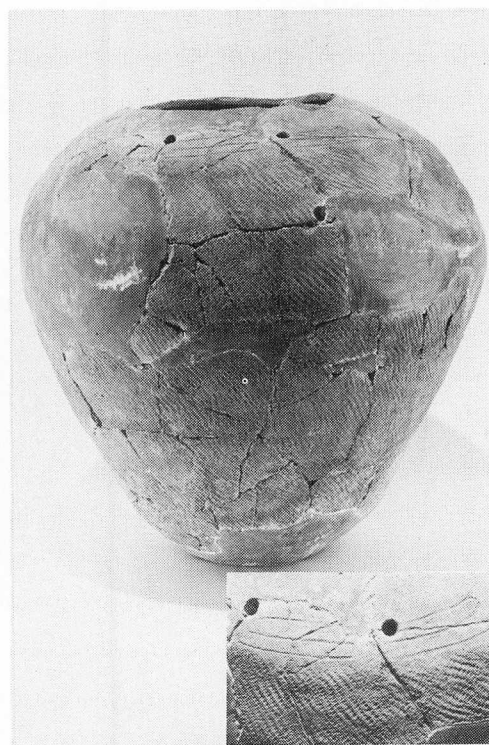
SP-24



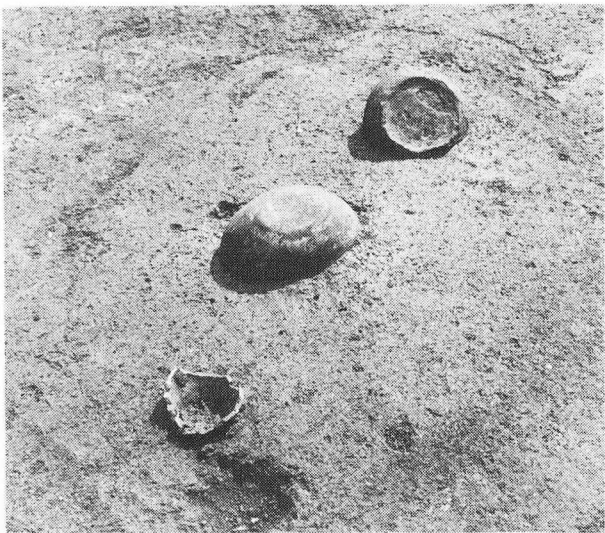
SP-41



SP-125



SP-22



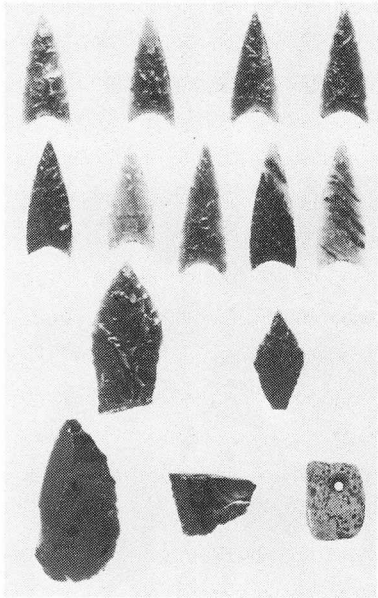
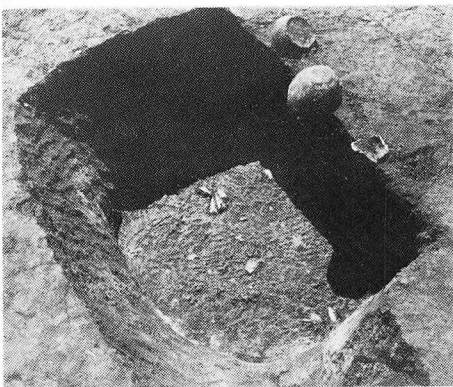
S P -39

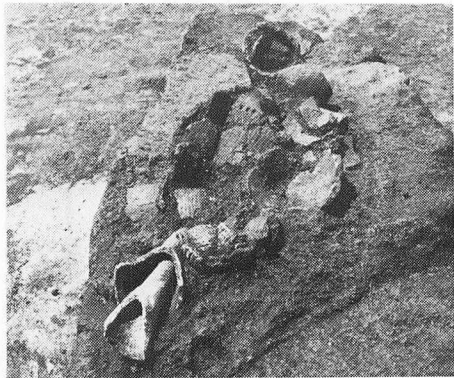
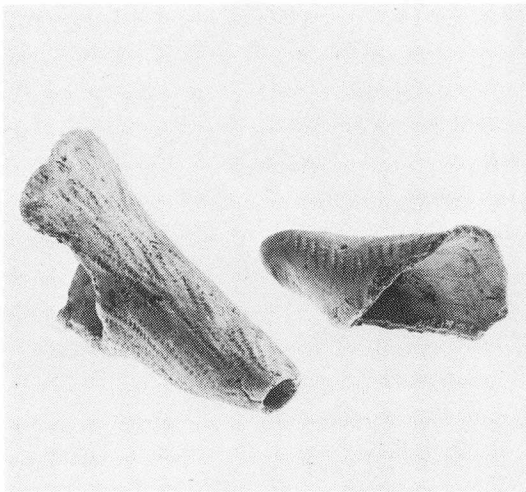
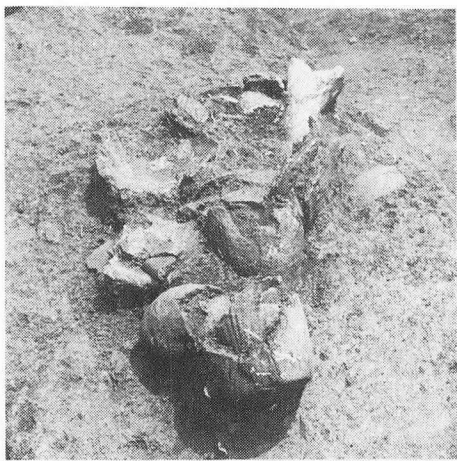
遺物出土状況

石器出土状況

S P -39土器

S P -39石器





S P-139

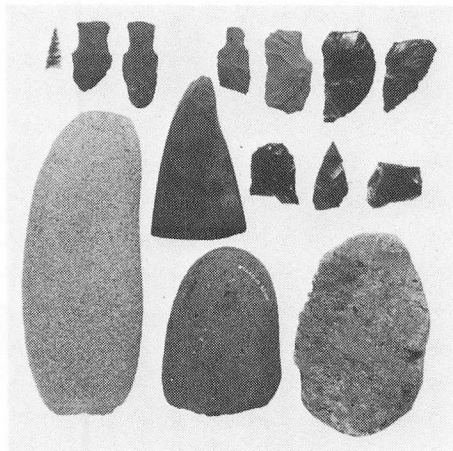
S P-139遺物出土状況

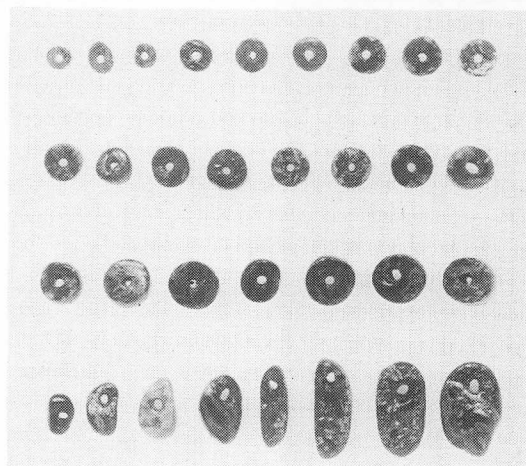
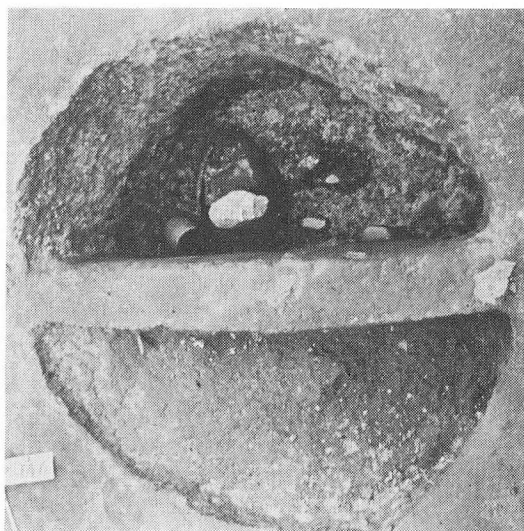
S P-139土製品

S P-139土製品出土状況

S P-139土器

S P-139石 器





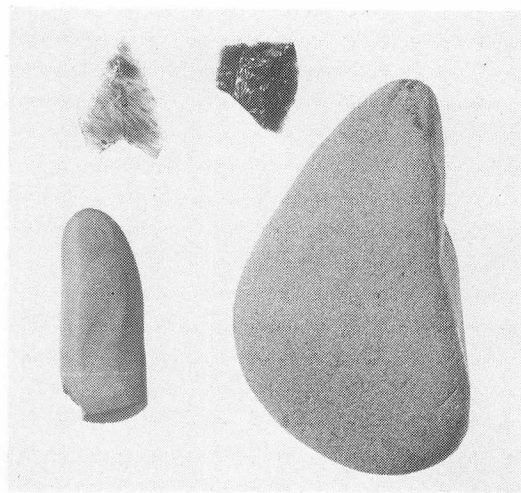
S P-146

S P-146コハク玉出土状況

コハク玉

S P-146土 器

S P-146石器





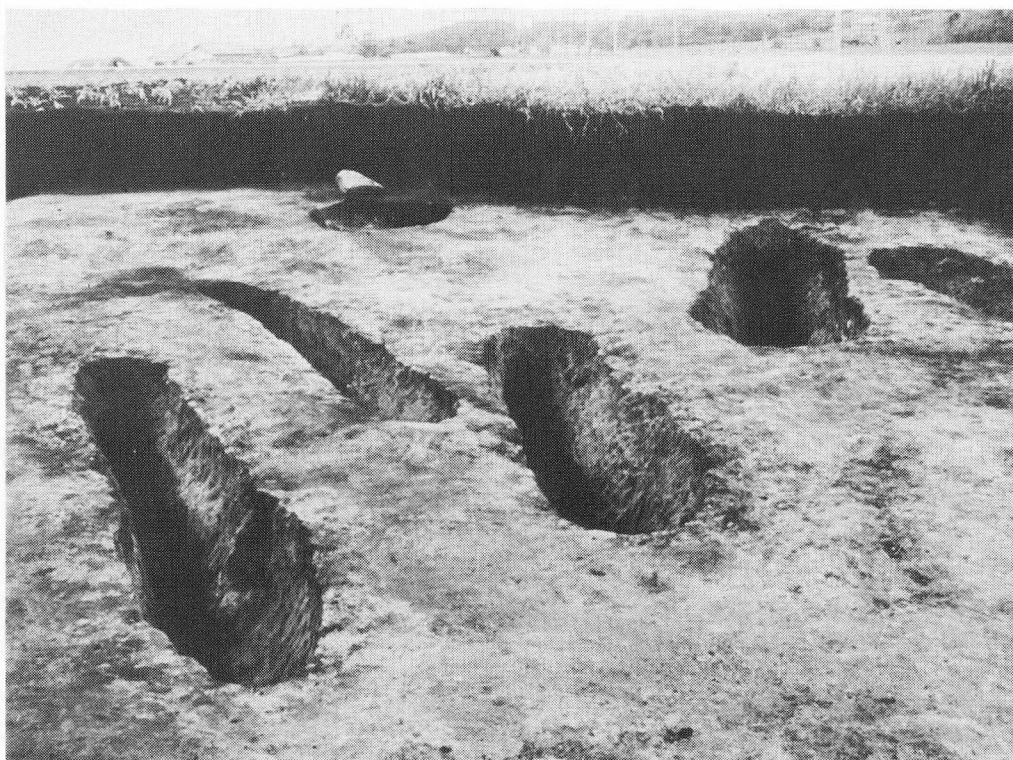
円形土壇群
(昭56年度)



円形土壇群
(B-27、B-28)



N地区円形土壇



Tピット(SP-61~71)



Tピット調査風景



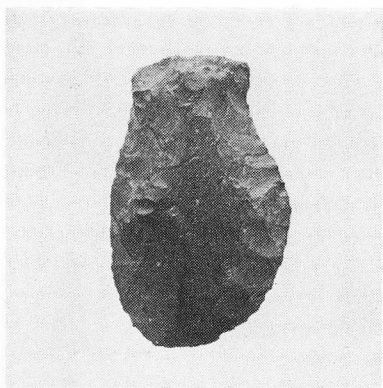
Tピット土層



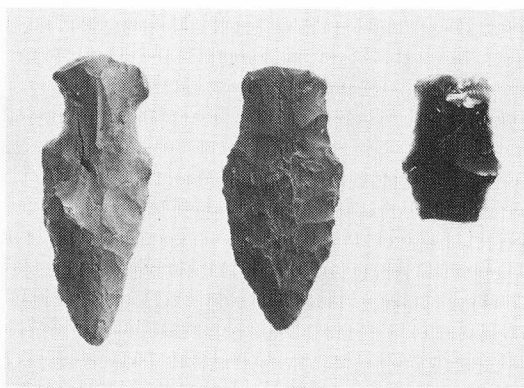
壺形土器(埋壺)

土器

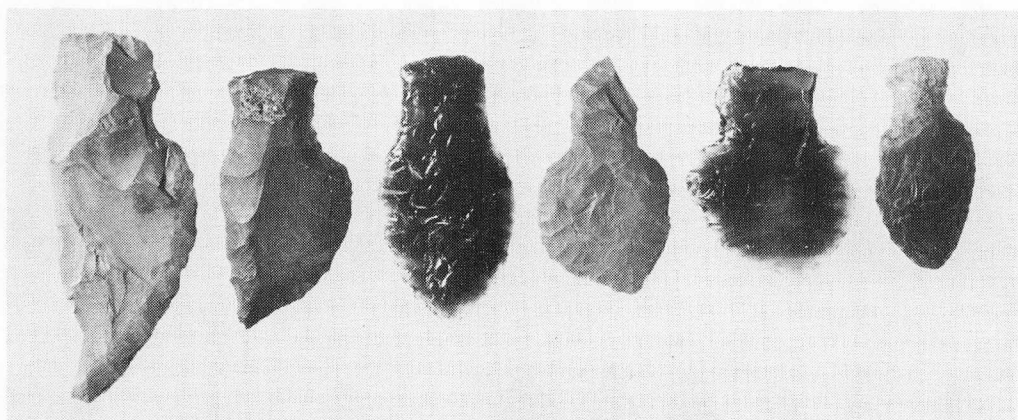




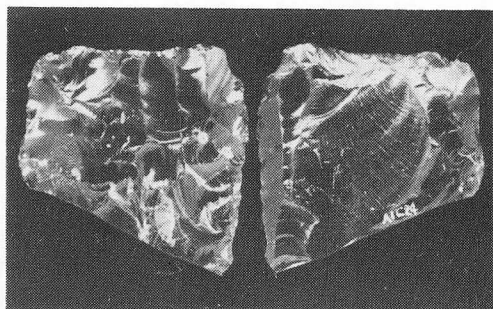
ナイフ 1



ナイフ 2



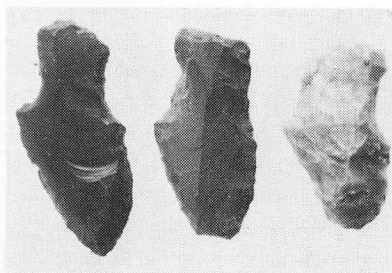
ナイフ 3



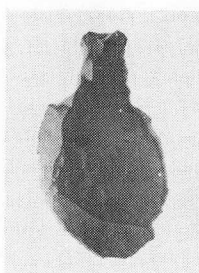
ナイフ 4



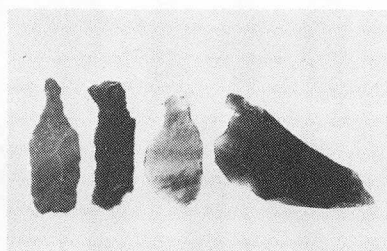
ナイフ 5



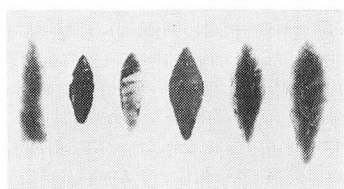
ナイフ 6



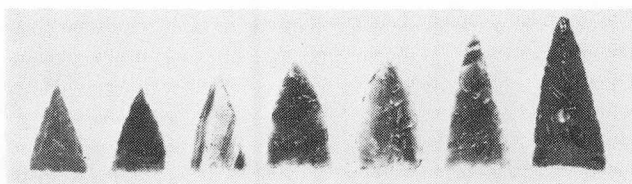
ナイフ 7
石 器 ①



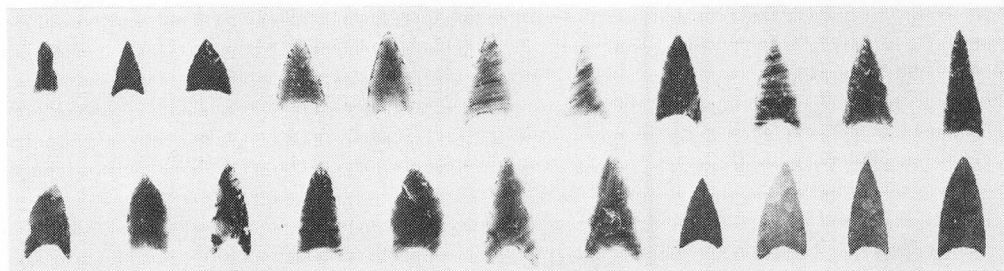
ナイフ 8



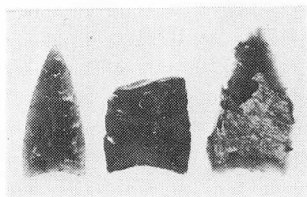
やじり 1



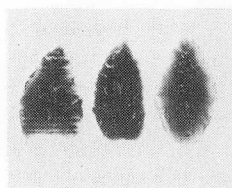
やじり 2



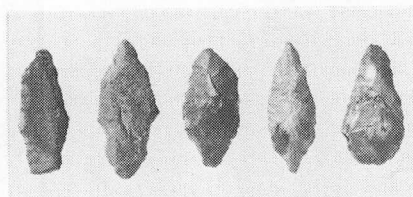
やじり 3



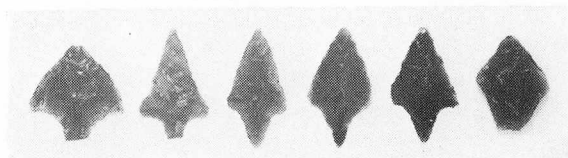
やじり 4



やじり 5



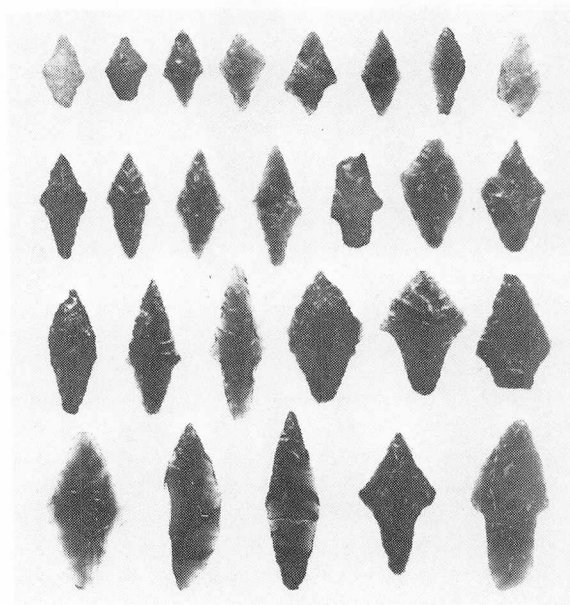
やじり 6



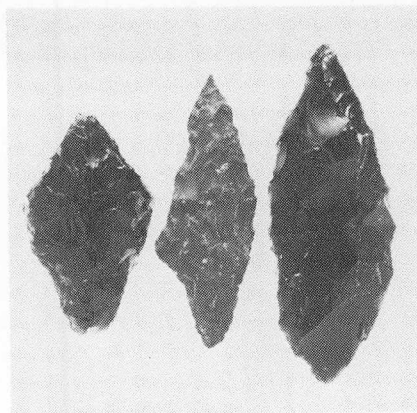
やじり 7



やじり 8

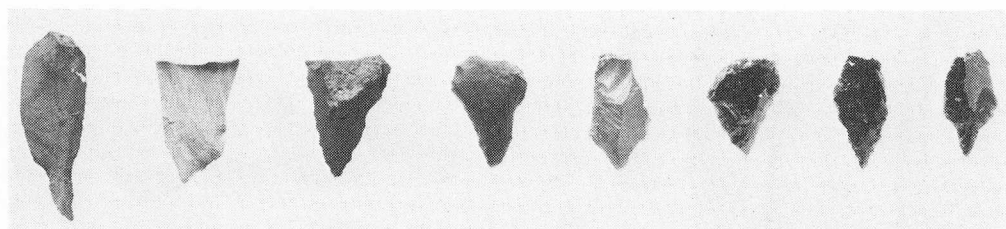


やじり 9

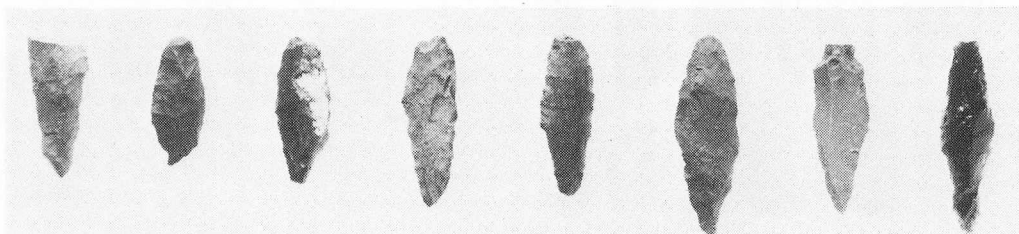


やり先10

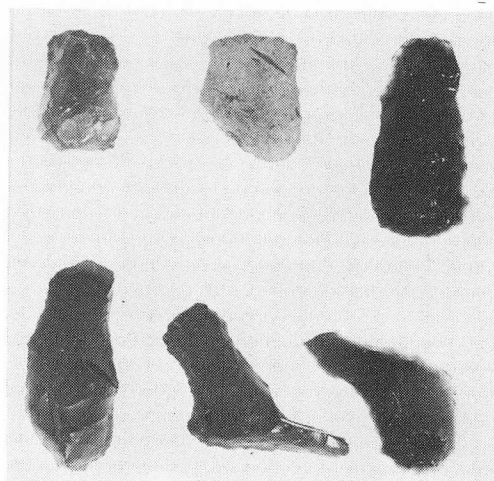
石 器 ②



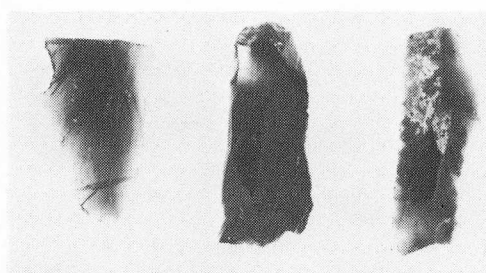
ドリル 1



ドリル 2



スクレイパー 1



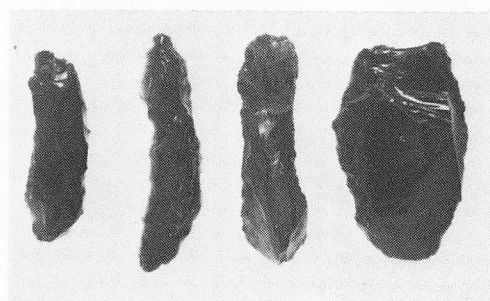
スクレイパー 2



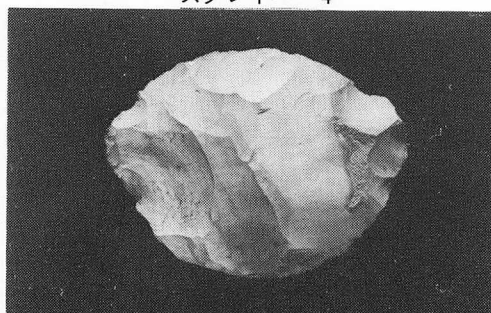
スクレイパー 3



スクレイパー 4

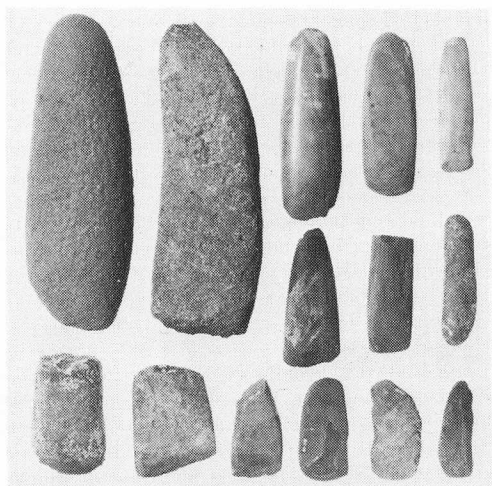


スクレイパー 5

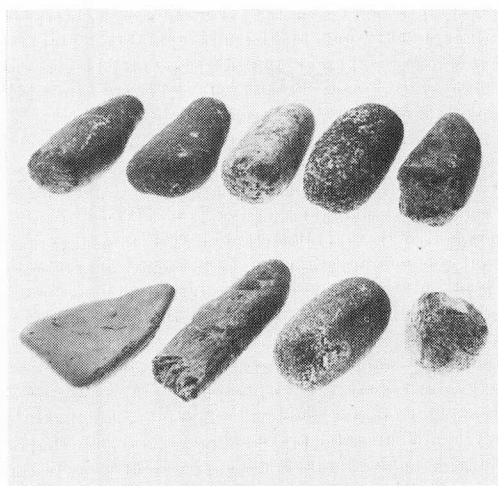


スクレイパー 6

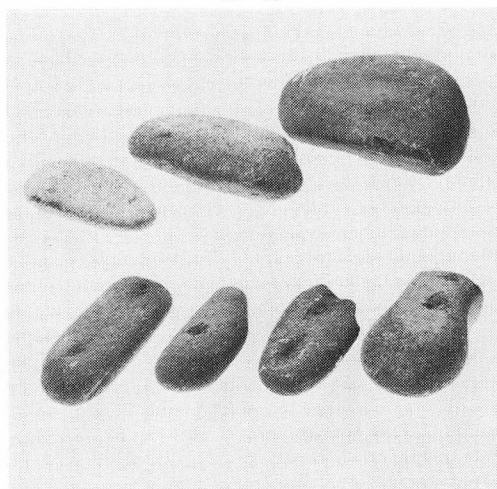
石 器 ③



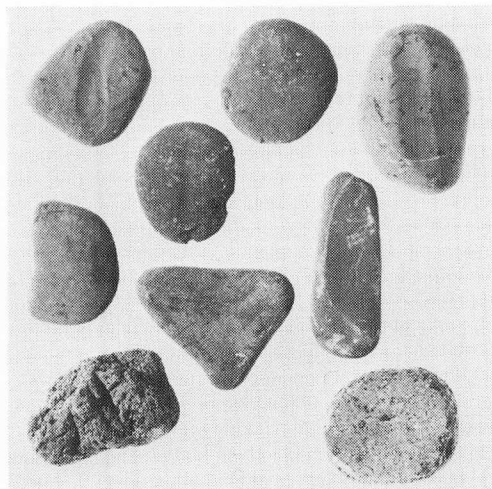
石 斧



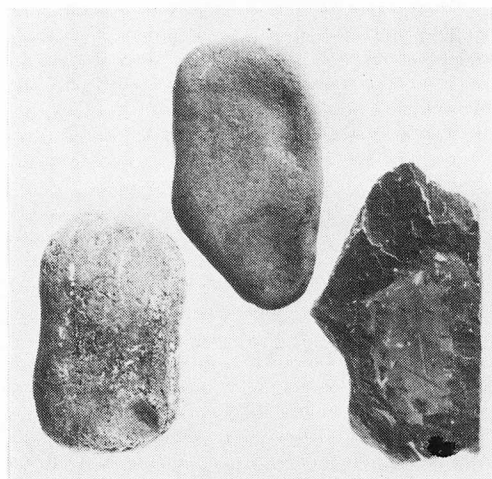
たたき石



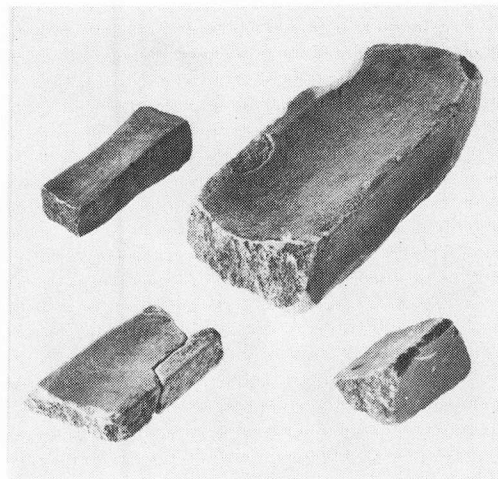
すり石・くぼみ石



砥 石



石皿・台石



砥 石

石 器 ④

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第10集

旭 町 1 遺 跡

―道々富沢・日高三石(停)線特改第一種工事
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

昭和58年3月26日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南15条西17丁目

TEL. (011)561-0067

印 刷 興 国 印 刷 株 式 会 社

札幌市西区手稲東3南1 TEL. (011)661-2221
